特設展

# 福岡平野の歴史
# 緊急発掘された遺跡と遺物
## 原始時代～江戸時代

会期　1977.7.19～8.31(月曜休館)

会場　福岡市立歴史資料館
福岡市中央区天神1－15－30
ＴＥＬ741－5488

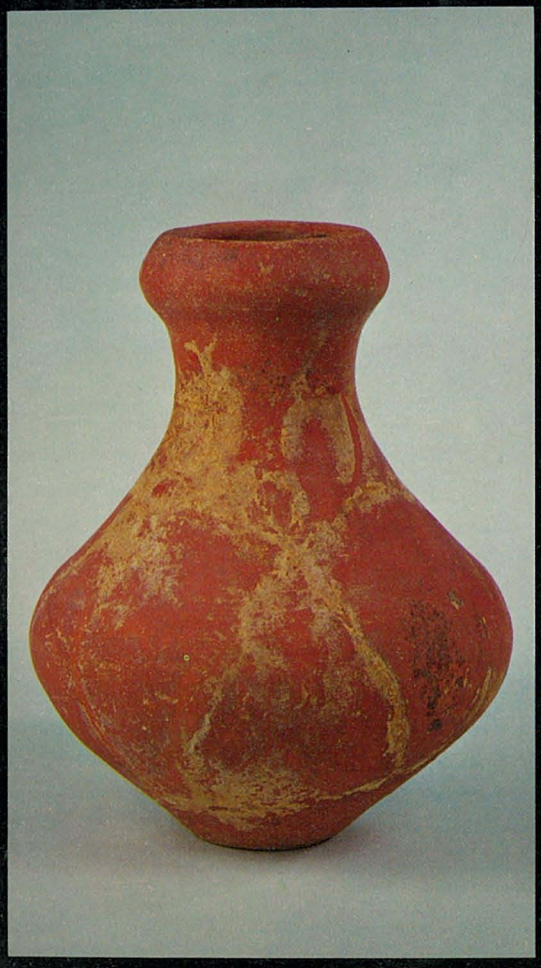
特設展
福岡平野の歴史　緊急発掘された遺跡と遺物　原始時代～江戸時代
福岡市立歴史資

内田文
C219
40-13

福岡平野の歴史　原始時代～江戸時代

# 緊急発掘された遺跡と遺物

盤龍鏡（天神森古墳）



丹塗磨研壺（有田遺跡）

縄文土器（四箇遺跡）

**1977.7.19→8.31** 特設展

福岡市立歴史資料館

内田義真氏寄贈

# 福岡平野の歴史

# 緊急発掘された遺跡と遺物

## 原始時代～江戸時代

1977年7月19日～8月31日

福岡市立歴史資料館

## 特設展開催にあたって

本市を中心とする福岡平野は、埋蔵文化財の宝庫であると言われています。それは、この平野が古くからわが国の歴史の上で大きな役割を果たしており、それにともなう祖先の貴重な遺産が多く残されているからです。

私たちは、これらの歴史的遺産保存の重要性にかんがみて、その調査・研究・整理を行うため、あまたの困難を克服して調査体制を整備し、緊急発掘を行っています。

このたび、県・市教育委員会が10ヵ年余の間に緊急発掘した市域内の80あまりの遺跡の調査成果とその出土品を福岡市立歴史資料館において展示公開いたすことになりました。

これらの遺跡の多くは、諸般のやむをえない事情によって消滅し、少数が保存措置を講じられております。今回の特設展の企画開催に当っては、幸いにも、調査関係者の不断の努力により保管している遺跡調査記録とその出土品があり、広く市民に公開の機会をもつことができましたことは、ご同慶のきわみであります。

この特設展示が、市民各位の埋蔵文化財保護に対するなおいっそうのご理解に資することがあれば幸いです。

昭和52年7月19日

福岡市教育委員会　教育長　戸田　成一

## 図録刊行にあたって

福岡平野は、一衣帯水の玄界灘を隔てて朝鮮半島、中国大陸と接しており、古代以降中近世にいたるまで相互に交渉が行われてきました。

ことに、奴国とよばれた弥生時代のわが郷土・福岡平野は、高度な外来文化摂取の門戸としてその後の日本文化生成の歴史に大きな役割をはたしてきたことが、各種遺跡とその出土品、その他の文物によって明らかにされたことは周知のとおりであります。

このたび、当館において開催の特設展「福岡平野の歴史」の展示品図録を刊行しました。この図録は、10ヵ年余にわたって市域内で緊急発掘された原始時代より近世におよぶ遺跡とその遺物を、主として写真により個々に紹介するとともに、各遺跡の概説と関連の図面によって各時代の人々の生活・文化を理解し、福岡平野が包蔵する歴史的特色の把握を可能ならしむるように意図したものであります。

本書が、市民各位の郷土における歴史的遺産保護の理解にこたえ、かつ、専門的研究の一助ともなれば、刊行の主旨がむくわれ望外のよろこびに存じます。

特設展開催にあたりまして、展示品の収集、展示品図録の作成に寄せられた関係各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

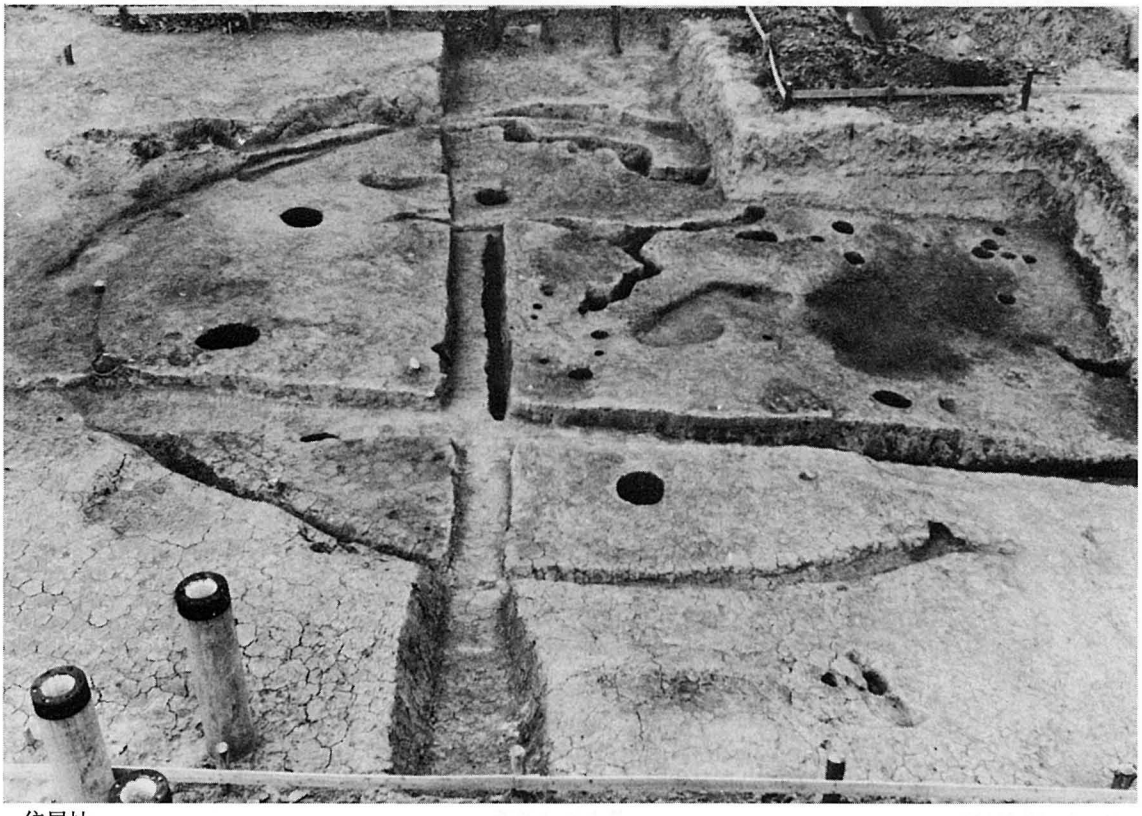
昭和52年7月19日

福岡市立歴史資料館　館長　石橋　博

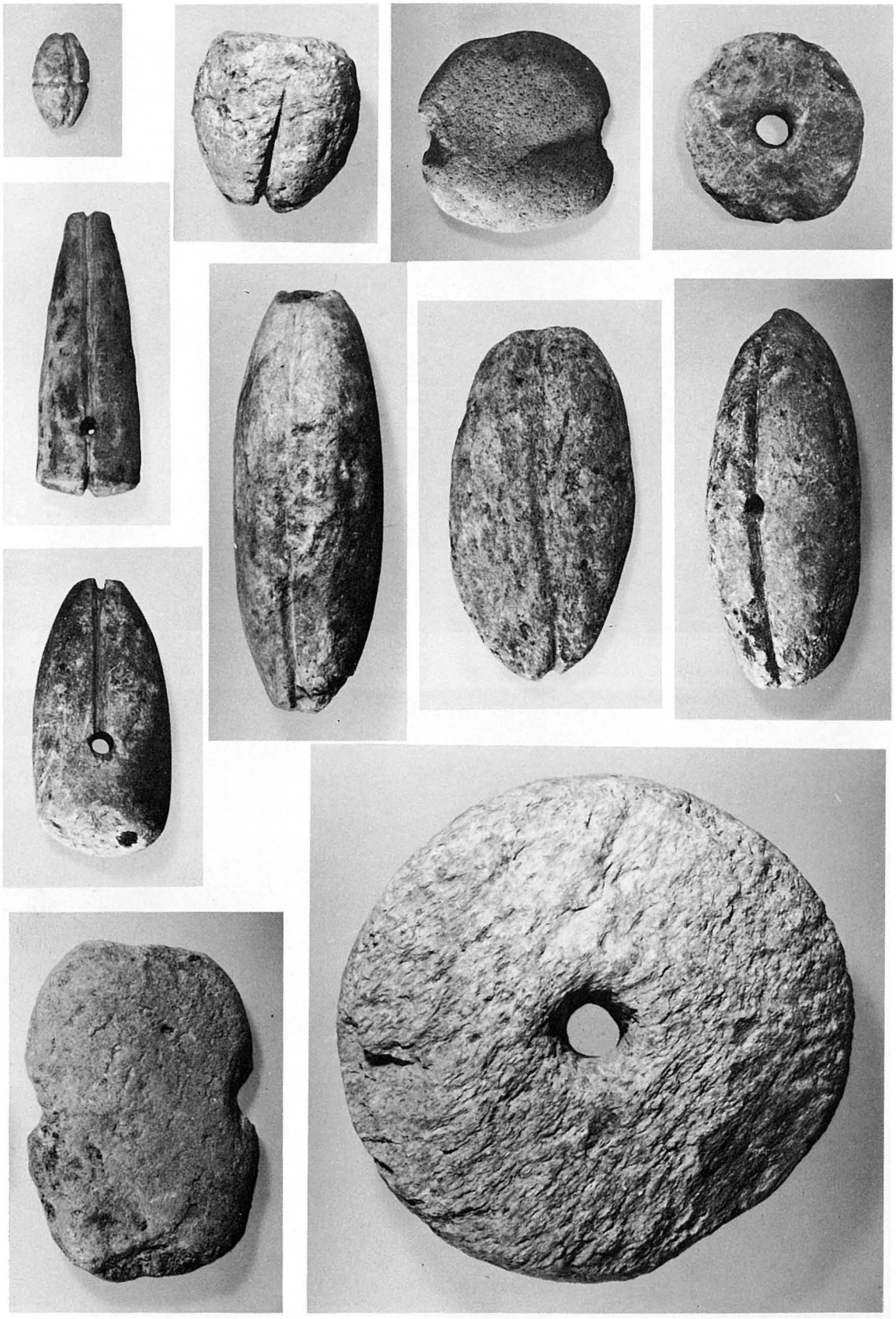
# 目　次


| | 写真 | 遺跡概要 |
|---|---|---|
| 1．小葎（こもぐら）遺跡 | 1～3 | 81 |
| 2．元寇防塁 | 3 | 82 |
| 3．今山遺跡 | 4 | 84 |
| 4．今宿横浜遺跡 | 5 | 85 |
| 5．今宿松原遺跡 | 6 | 85 |
| 6．飯氏鏡原遺跡 | | 85 |
| 7．飯氏馬場遺跡 | 6 | 85 |
| 8．丸隈山古墳 | 7 | 87 |
| 9．若八幡宮古墳 | 8～9 | 87 |
| 10．今宿大塚古墳 | 10～11 | 88 |
| 11．徳永古墳群 | | 90 |
| 12．今宿古墳群 | | 90 |
| 13．相原古墳群 | 12 | 91 |
| 14．今宿小塚、今宿大塚南、今宿高田遺跡 | | 91 |
| 15．草場古墳群 | | 91 |
| 16．斜ヶ浦瓦窯址 | | 92 |
| 17．大又遺跡 | 13 | 92 |
| 18．高崎古墳群 | 13～14 | 92 |
| 19．宮の前遺跡 | 15～16 | 93 |
| 20．湯納遺跡 | 17 | 94 |
| 21．広石古墳群 | 18～21 | 97 |
| 22　コノリ古墳群 | | 97 |
| 23．下山門遺跡 | 22～23 | 98 |
| 24．下山門敷町遺跡 | 24 | 98 |
| 25．下山門南・石丸古川遺跡 | | 100 |
| 26．牟多田遺跡 | | 100 |
| 27．野方中原遺跡 | 25～27 | 101 |
| 28．小松ヶ丘古墳群 | | 102 |
| 29．野方塚原遺跡 | 28 | 102 |
| 30．戸切中原遺跡 | | 103 |
| 31．戸切遺跡 | | 103 |
| 32．金武古墳群 | 29 | 103 |
| 33．姪浜新町遺跡 | 29 | 104 |
| 34．有田遺跡 | 29～31 | 104 |
| 35．原談儀遺跡 | 32 | 106 |
| 36．鶴町遺跡 | 32～33 | 107 |
| 37．四箇（しか）遺跡 | 34～39 | 108 |
| 38．山崎古墳群 | | 109 |
| 39．影塚第1号墳 | | 110 |
| 40．大谷古墳群 | | 110 |
| 41．七隈古墳群 | 40 | 111 |
| 42．倉瀬戸古墳群 | | 111 |
| 43．片江古墳群 | 40～41 | 113 |
| 44．瀬戸口古墳群 | 42 | 114 |
| 45．京ノ隈遺跡 | 42～43 | 114 |
| 46．浄泉寺遺跡 | 44～45 | 116 |
| 47．カルメル修道院内遺跡 | 45 | 116 |
| 48．片江辻遺跡 | 46 | 117 |
| 49．小笹遺跡 | 47 | 118 |
| 50．宝台遺跡 | 46～47 | 119 |
| 51．丸尾台遺跡 | 48 | 119 |
| 52．笹栗遺跡 | 48 | 120 |
| 53．地下鉄路線内遺跡 | 49～51 | 120 |
| 54．大牟田古墳群 | 48 | 122 |
| 55．老司古墳 | 52～53 | 123 |
| 56．弥永原遺跡 | 54 | 124 |
| 57．山陽新幹線路線内遺跡 | 54～58 | 125 |
| 58．福岡城跡 | | 127 |
| 59．菰牟田（こもむた）遺跡 | | 127 |
| 60．板付遺跡 | 59～64 | 127 |
| 61．諸岡遺跡 | 65～66 | 131 |
| 62．持田ヶ浦古墳群 | | 133 |
| 63．金隈遺跡 | 67～68 | 133 |
| 64．宝満尾遺跡 | 69～70 | 135 |
| 65．席田（むしろだ）遺跡群 | 71 | 136 |
| 66．多々良遺跡 | 76 | 137 |
| 67．蒲田遺跡 | 72～74 | 137 |
| 68．蒲田水ヶ元遺跡 | 75～76 | 139 |
| 69．和田部木原遺跡 | 77 | 139 |
| 70．名子道遺跡 | | 140 |
| 71．天神森古墳 | 77 | 141 |
| 72．湯ヶ浦古墳群 | | 141 |
| 73．和白遺跡 | 78～79 | 141 |
| 74．金印公園 | | 143 |
| 緊急調査遺跡一覧 | | 144 |
| 展示品一覧 | | 149 |
| 緊急調査された遺跡分布図 | | 巻末 |

第Ⅰ層遺物出土状況

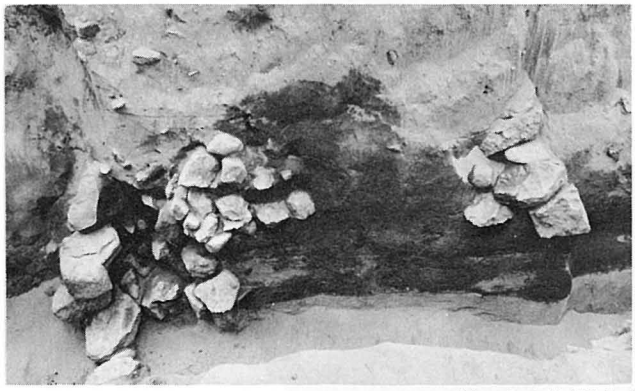


住居址



1 - 2 石 錘(約½)

1 - 1 線刻画のある弥生土器



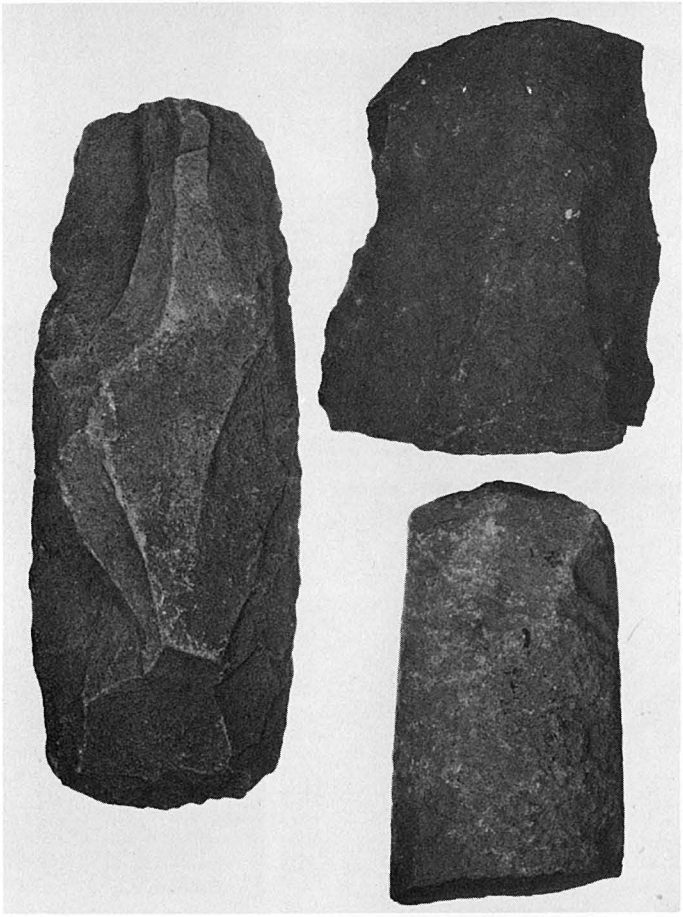
西新元寇防塁横断面

西新元寇防塁

今津元寇防塁

## 3 今山遺跡(1)

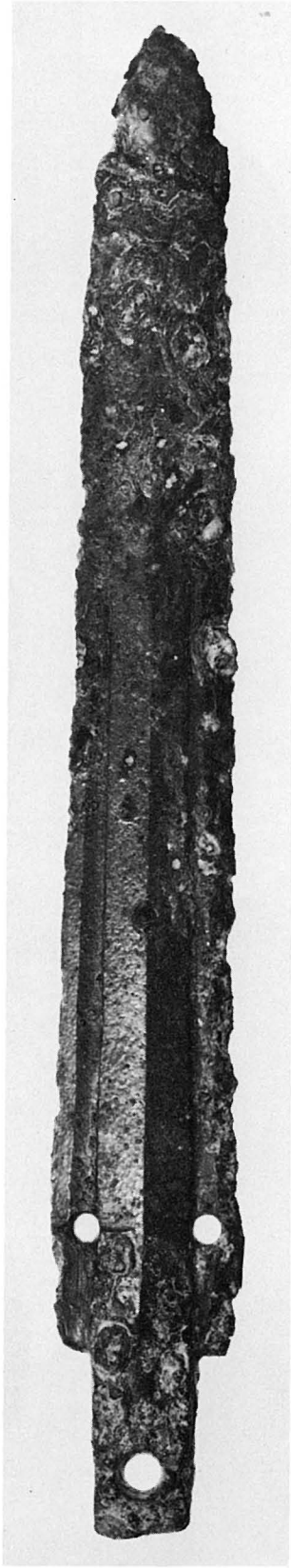
今山遠景



3－1 石斧未成品

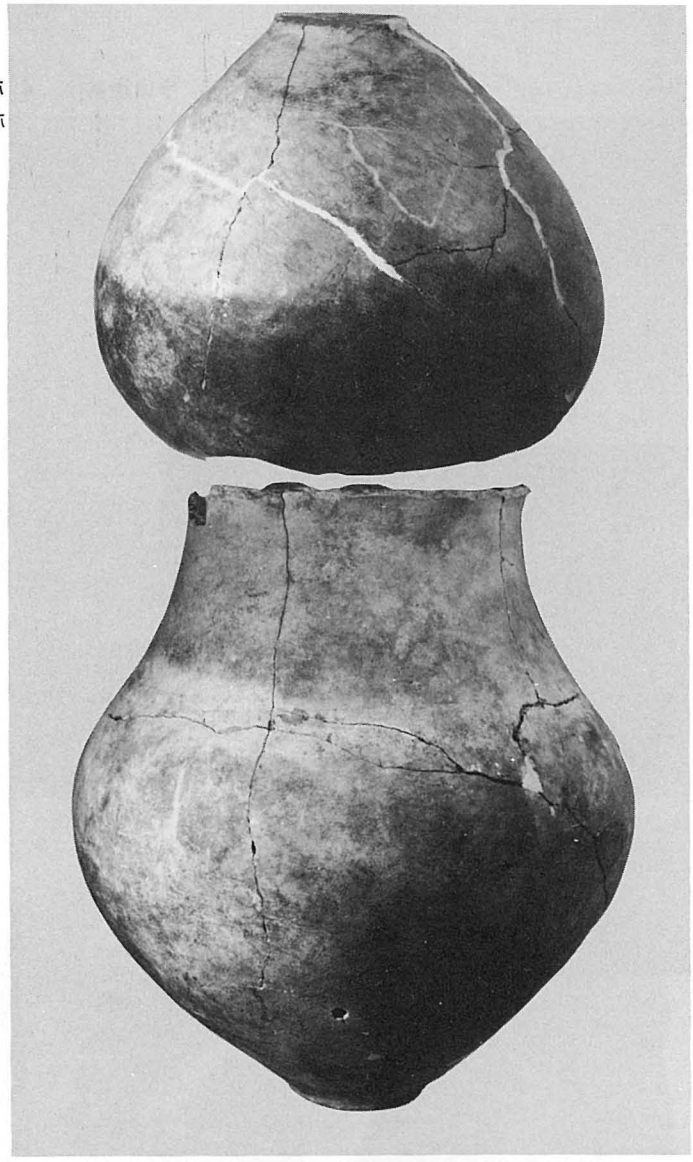
石斧未成品と板付II式土器の共伴

4 - 2 勾玉(約1/1)



4 - 1 細形銅剣 (約1/1)

5 今宿松原遺跡
7 飯氏馬場遺跡

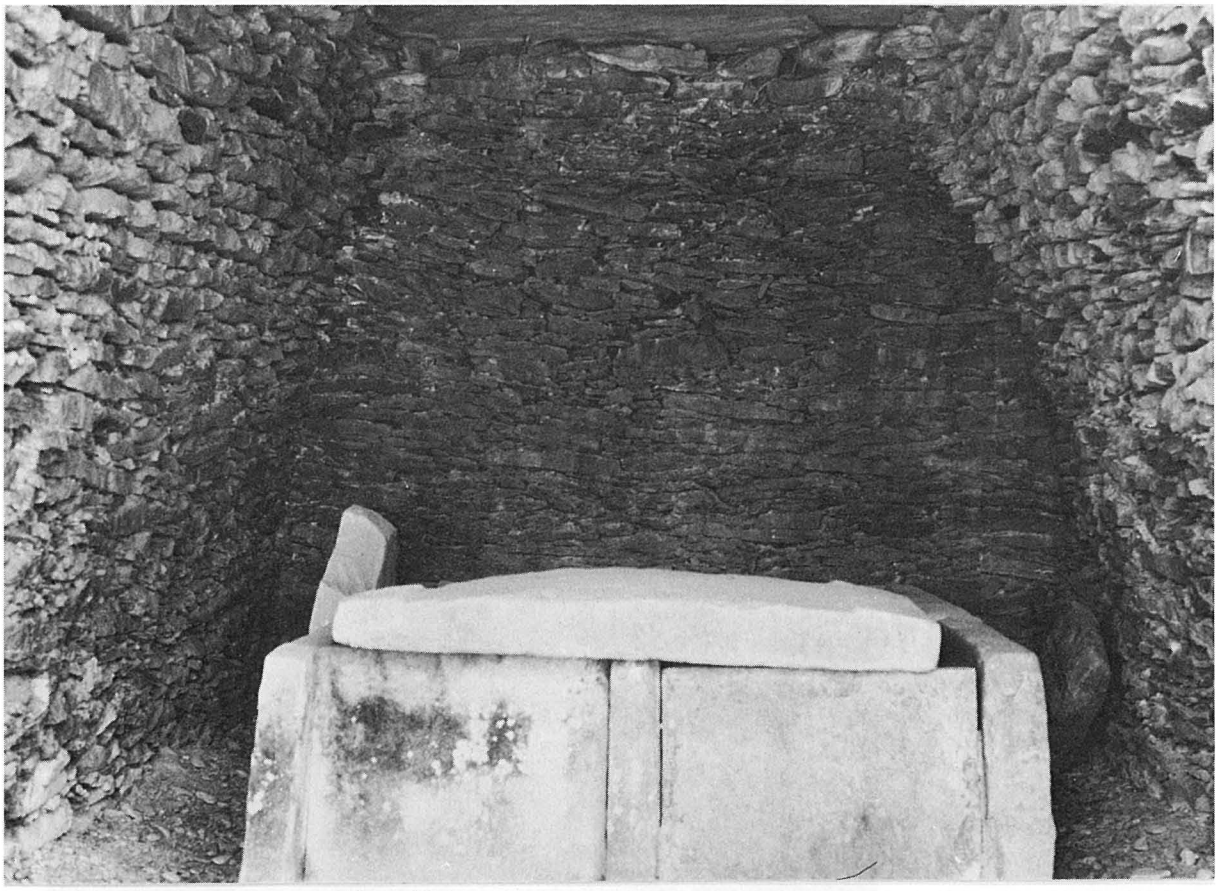


5 - 1 甕棺（伯玄式）

7 - 1 内行花文仿製鏡（約1/1）

8 - 2　仿製六獣鏡

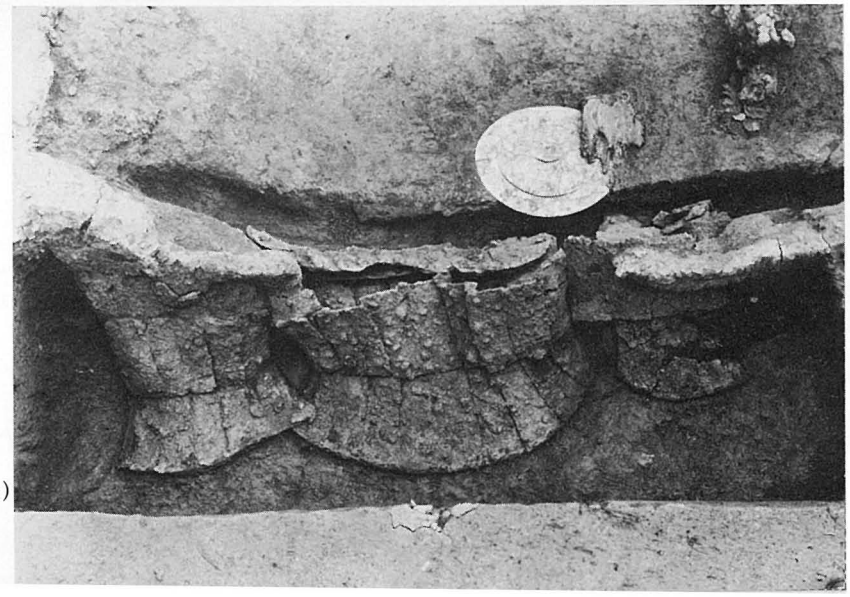
8 - 3　仿製二神二獣鏡



石室と石棺

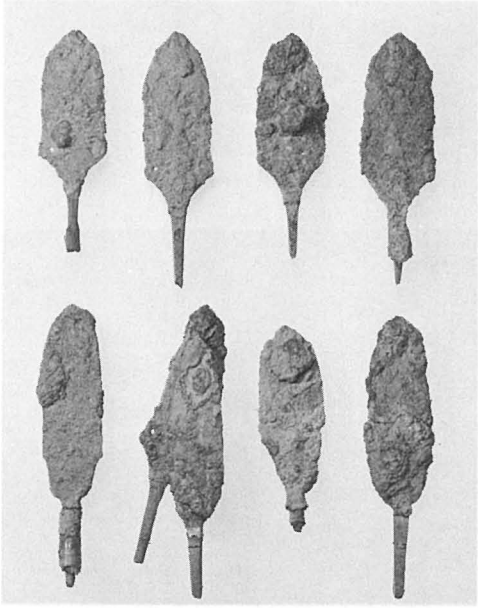
若八幡宮古墳　前方部全景（後円部から）

若八幡宮古墳主体部全景

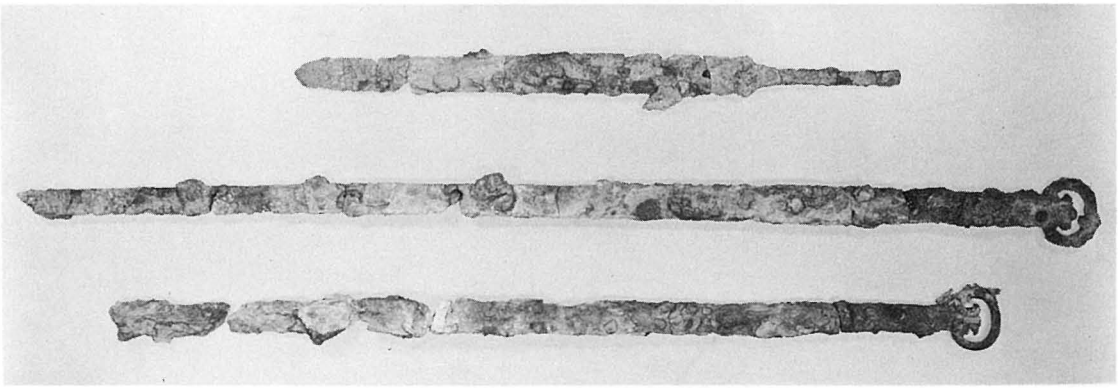


棺外西側出土短甲（西から）

9 - 1 二神二獣鏡

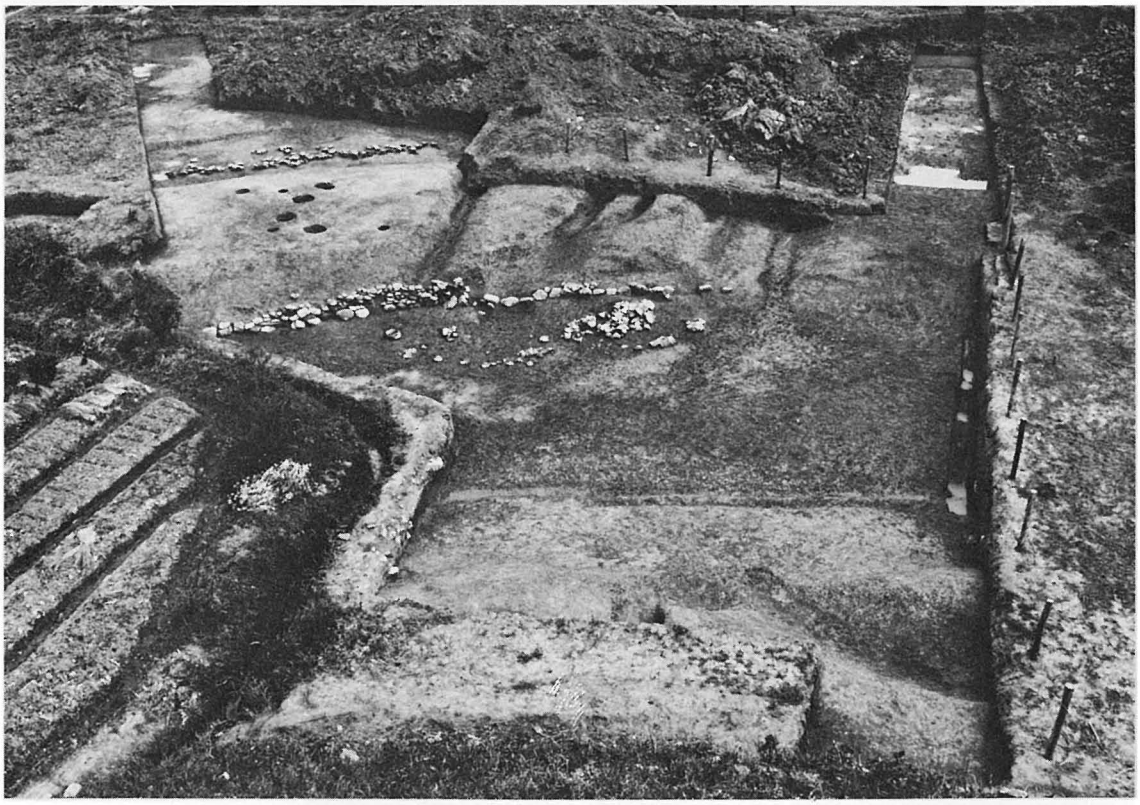


9 - 5 鉄鏃



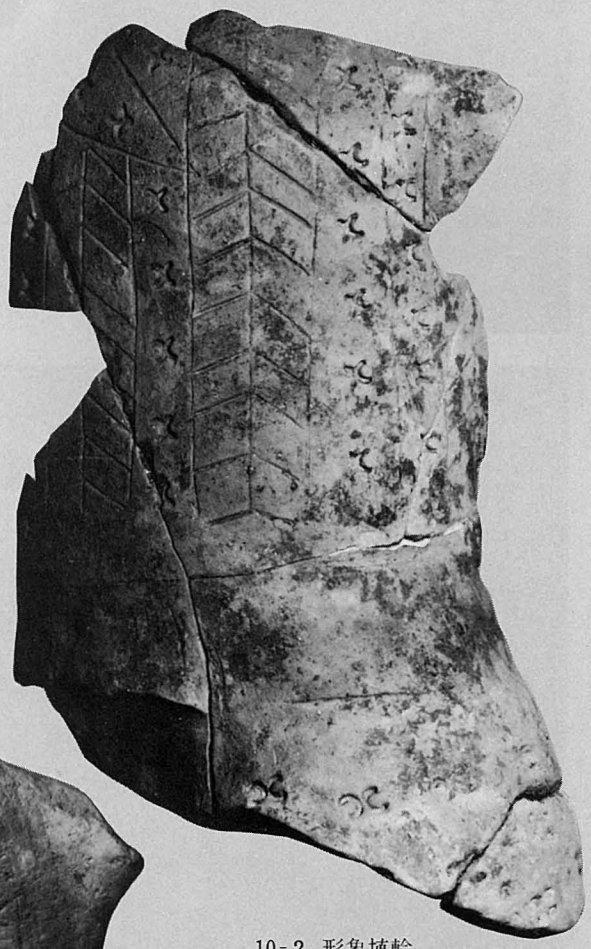
9 -2 環頭大刀、9 - 3 鉄剣

今宿大塚古墳　南側くびれ部



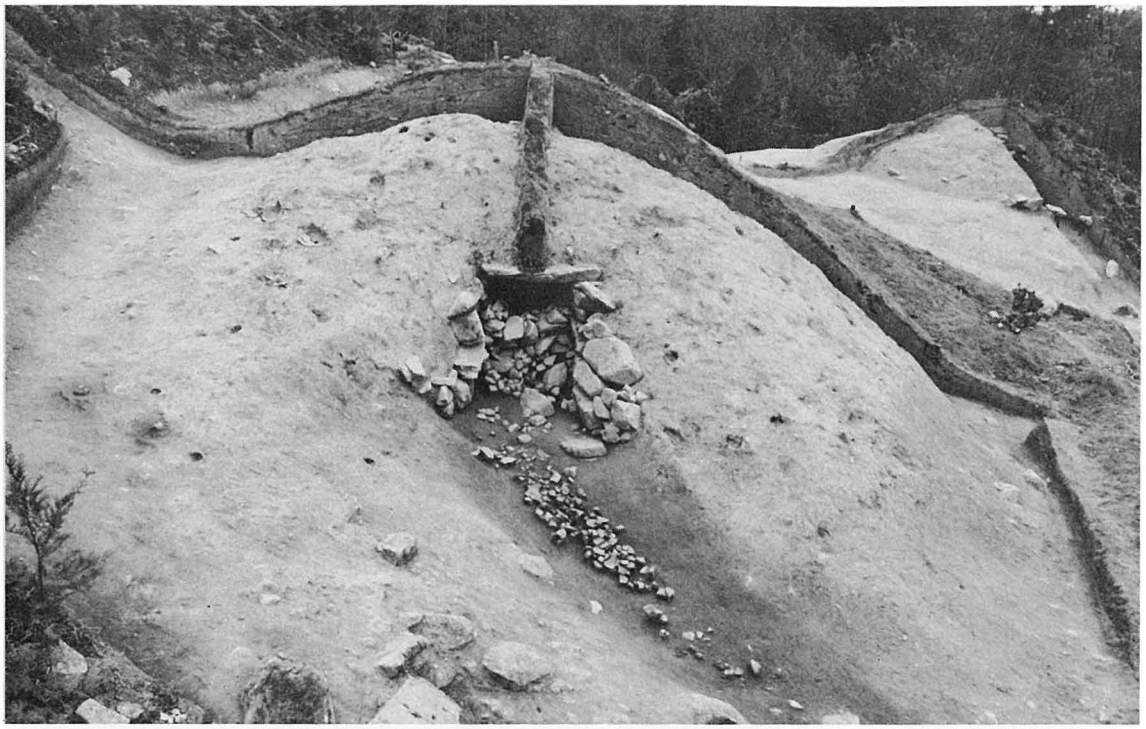
今宿大塚古墳　後円部周溝

10-1 円筒埴輪



10-2 形象埴輪

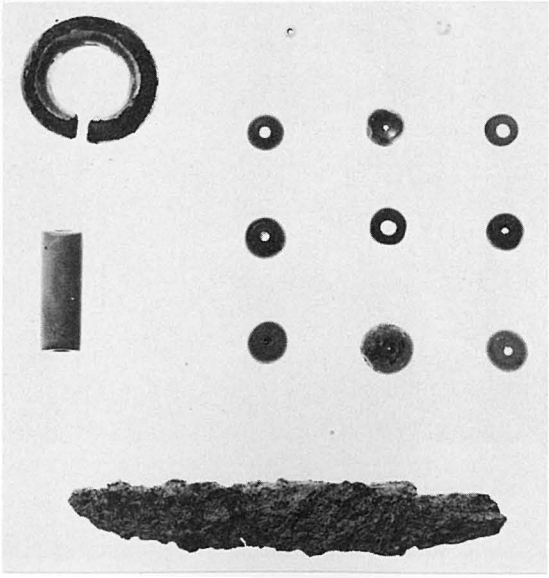
10-3 形象埴輪



相原古墳群　第３号墳

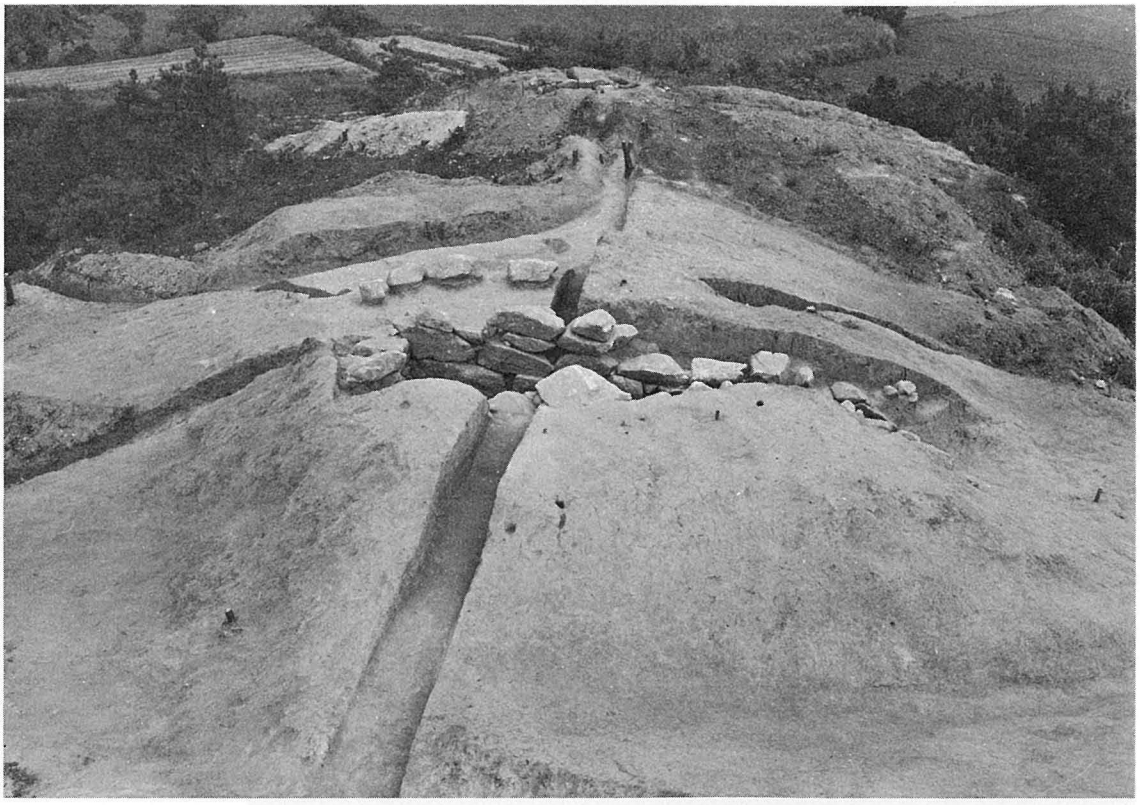
13-４、13-５ 須恵器、土師器

13-６ 器台



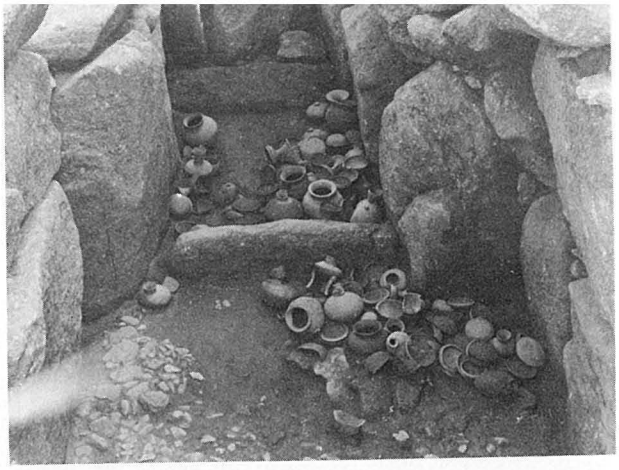
13-１ 装身具、13-２ 鉄刀子

大又遺跡　遺構

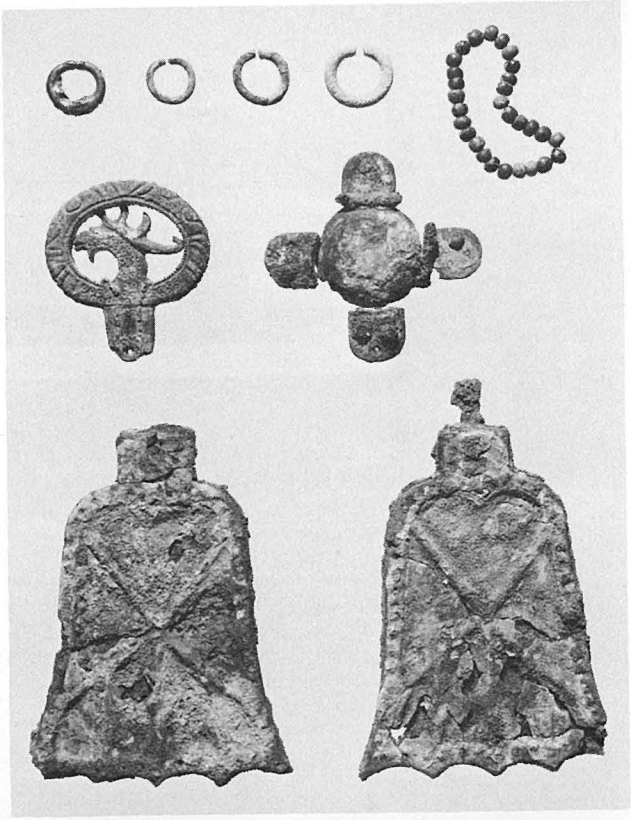


高崎２号墳

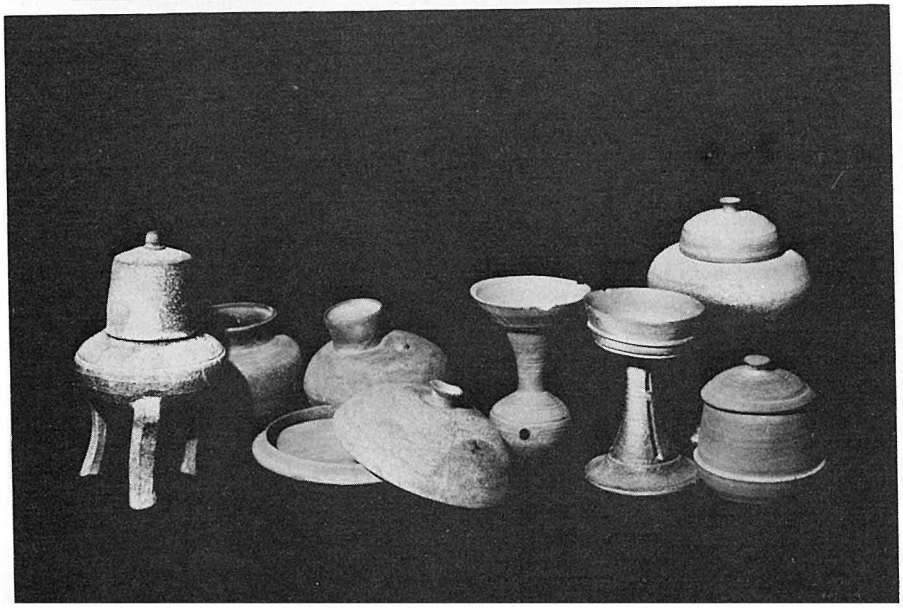
## 18 高崎古墳群(2)



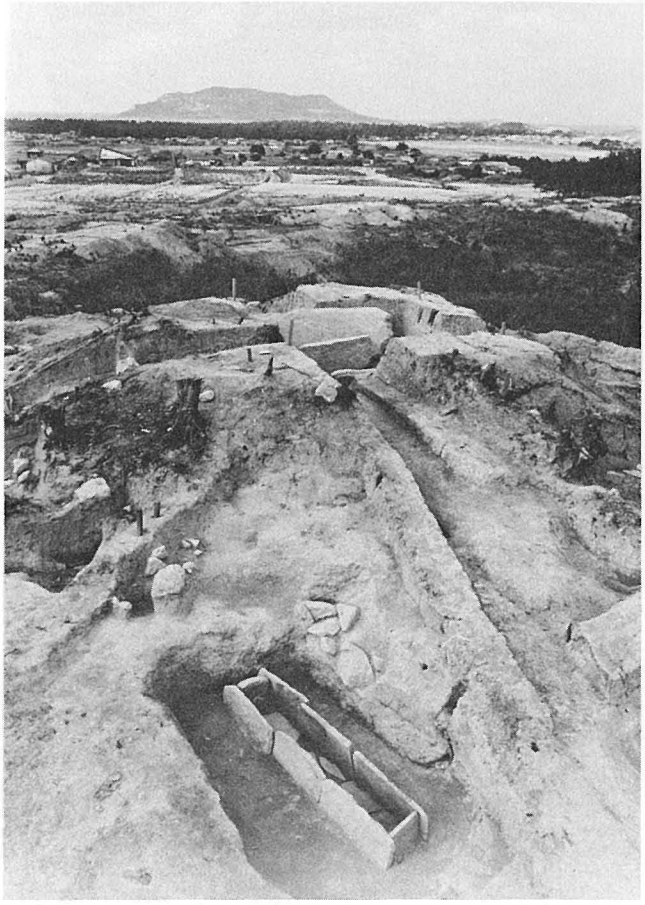
高崎２号墳　遺物出土状態（奥壁側より）



18-７　杏葉・辻金具、
18-９　金銅張環頭、18-10 装身具

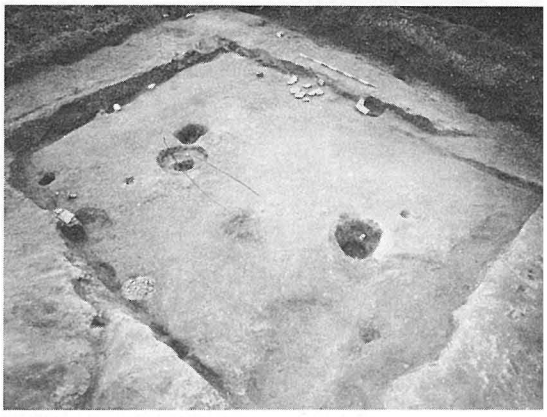


18-１～６　須恵器



宮の前遺跡　C地点墳墓（中央1号石棺、手前3号石棺）

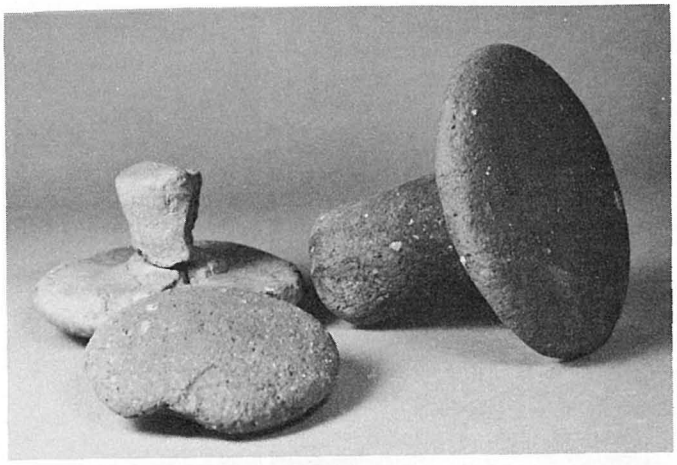
宮の前遺跡　C地点1号石棺



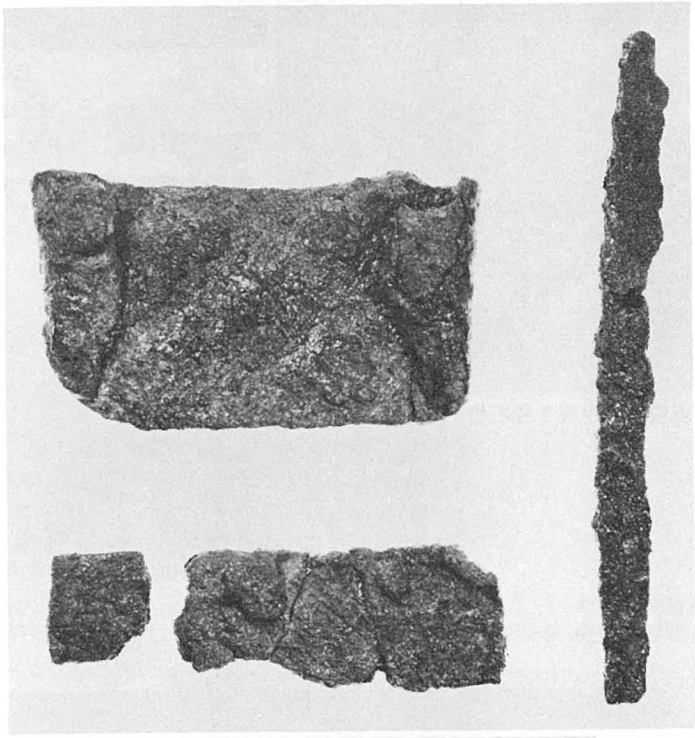
宮の前遺跡　B地点1号竪穴

19-7　土師器（宮の前Ⅲ式）

19-5　弥生土器



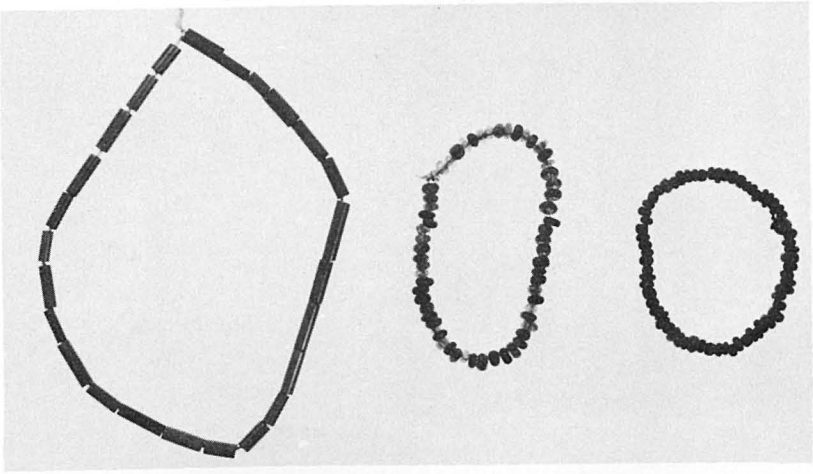
19-6 異形土製品



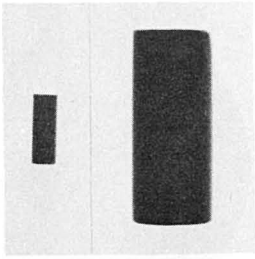
19-3 鍬先（約1/2）

19-1 鉾（やりがんな）（約1/2）

19-2 鉄鎌（約1/2）

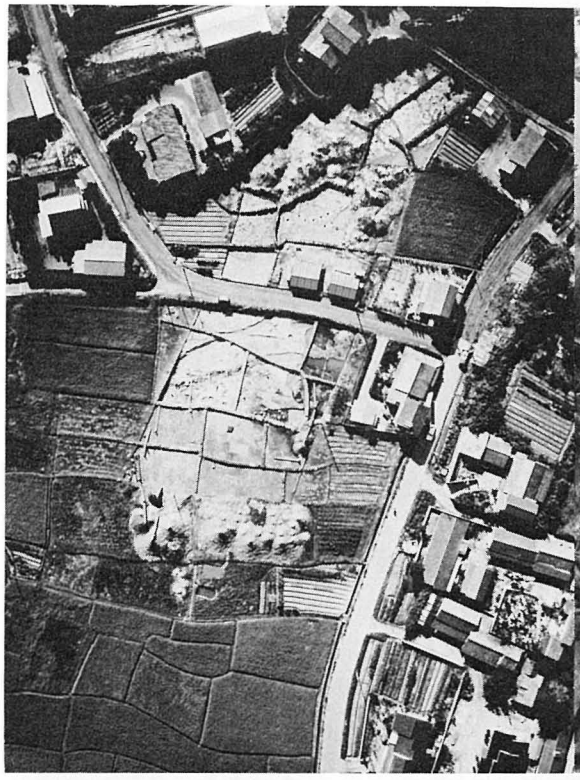


2号墳　1号墳



19-8 管玉（約1/1）

19-9 玉（約1/1）



湯納遺跡全景

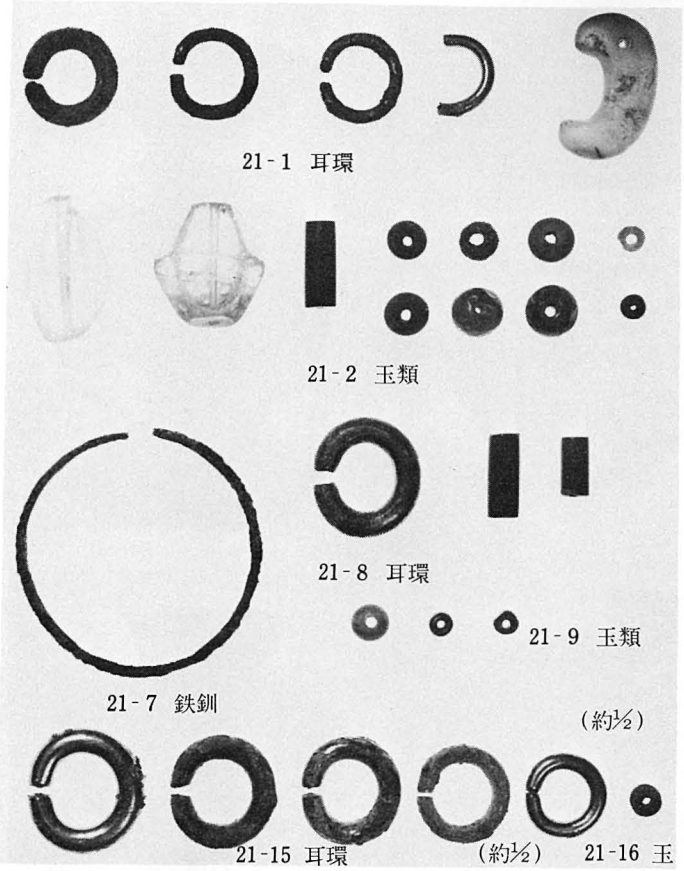
湯納遺跡　杭列（Ⅰ-U・V）

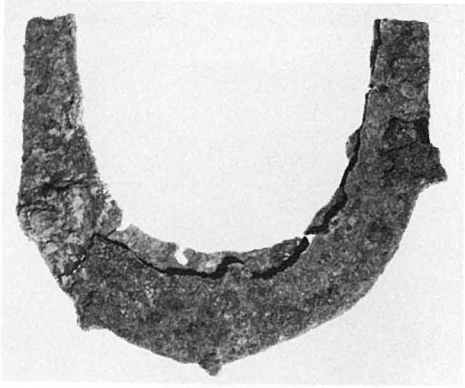
湯納遺跡　建築部材出土状況

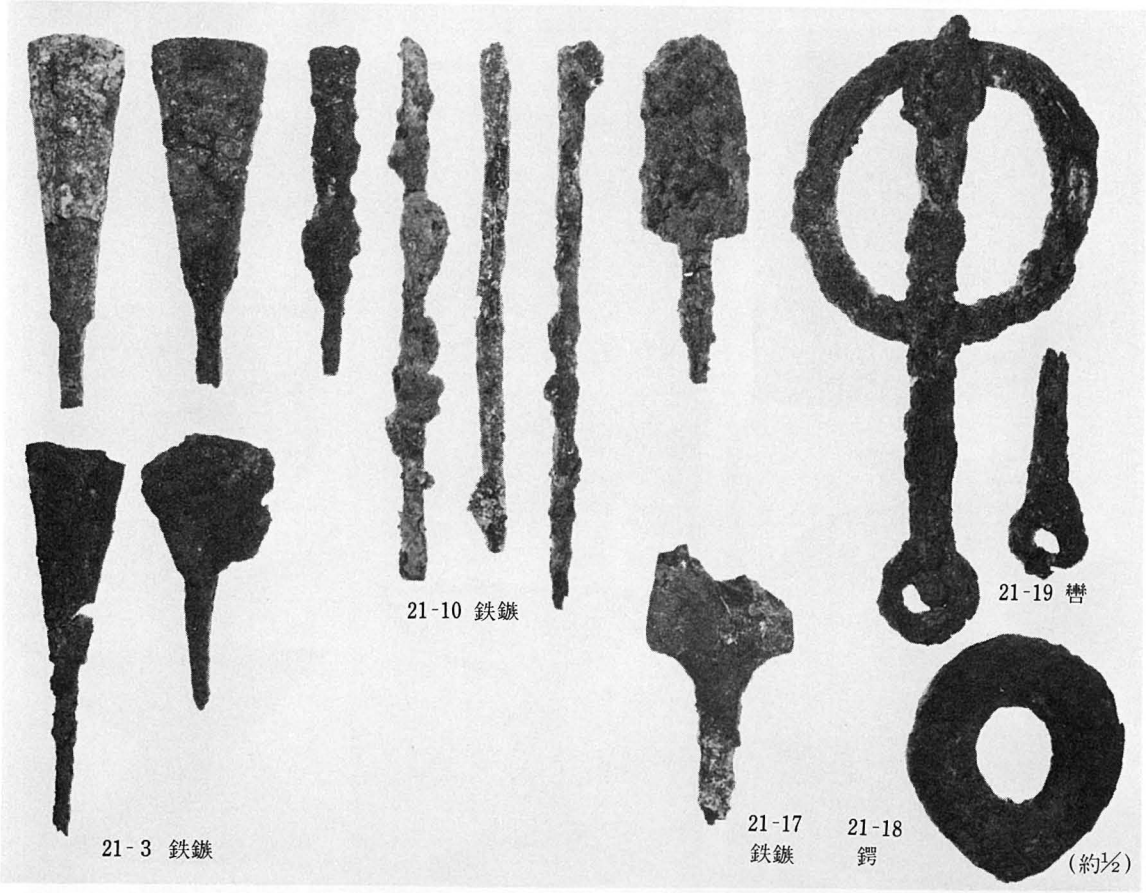
湯納遺跡　建築部材と臼の出土状態

広石古墳群II群全景

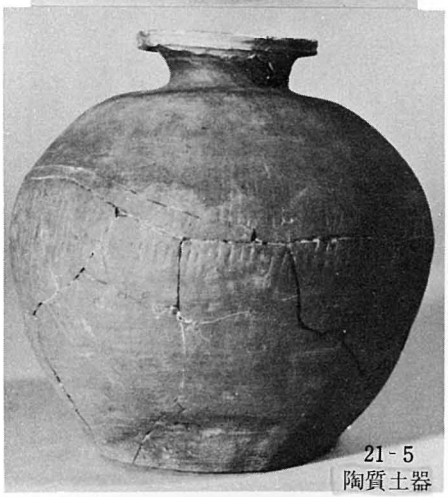
広石古墳群III群全景


21-1 耳環
21-2 玉類
21-8 耳環
21-9 玉類
21-7 鉄釧
(約½)
21-15 耳環
(約½)
21-16 玉

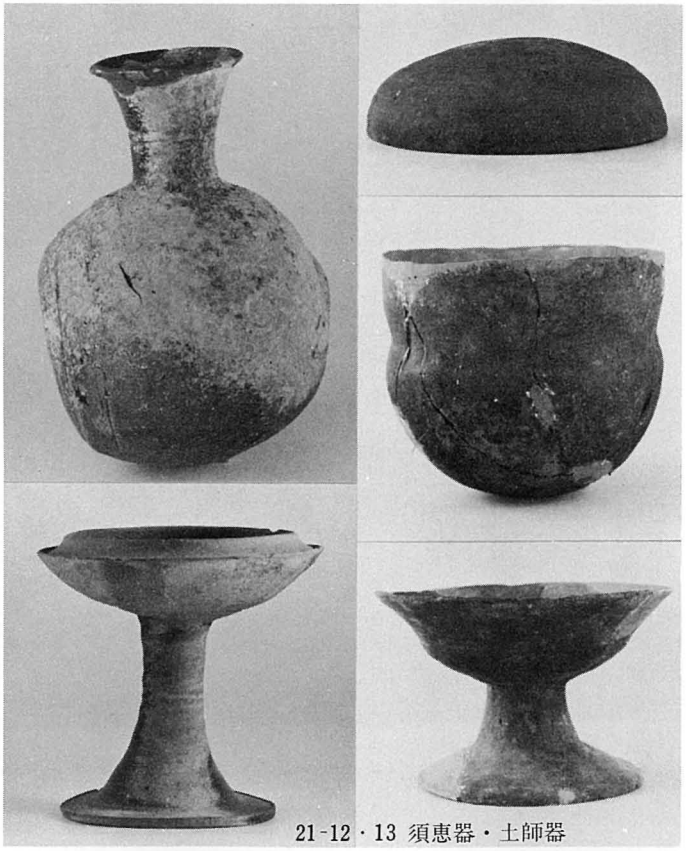

21-11 鋤先（約¼）


21-10 鉄鏃
21-19 轡
21-3 鉄鏃
21-17
鉄鏃
21-18
鍔
(約½)

21-4 須恵器



21-5
陶質土器



21-12・13 須恵器・土師器

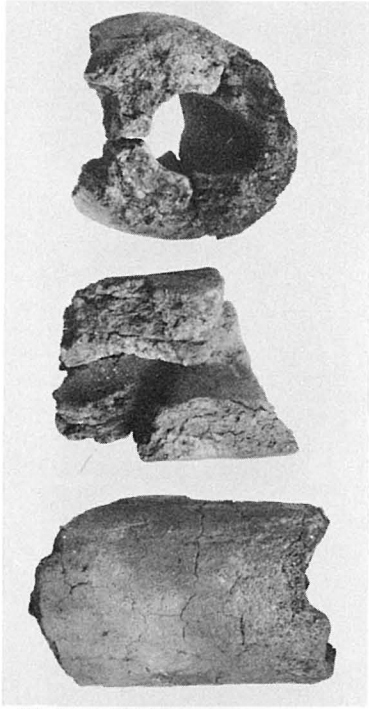
21-6　須恵器

21-14　須恵器

21-20　須恵器

下山門遺跡 B地点 抗列

下山門遺跡 B地点 第1号製鉄炉



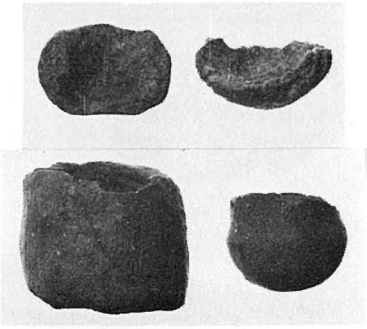
23-11 ふいご

下山門遺跡 C地点 沼汀線での木材出土状態

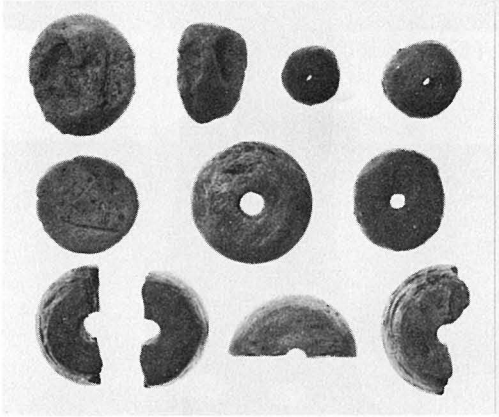
23-10 蓆編具出土状態

23-8 木製容器出土状態

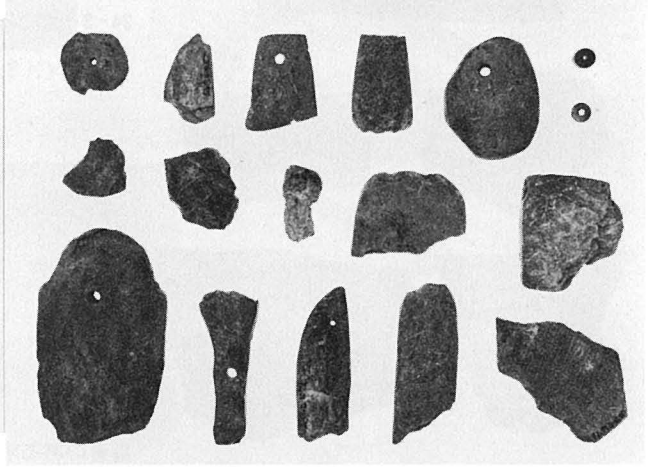
23-2 青磁、白磁



23-3 ミニチュア土器

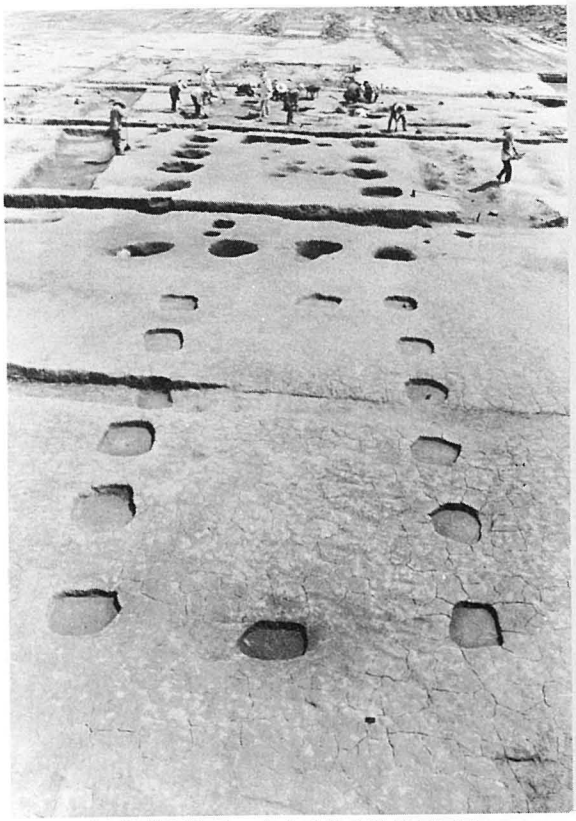


23-4 土製模造鏡、23-5 紡錘車

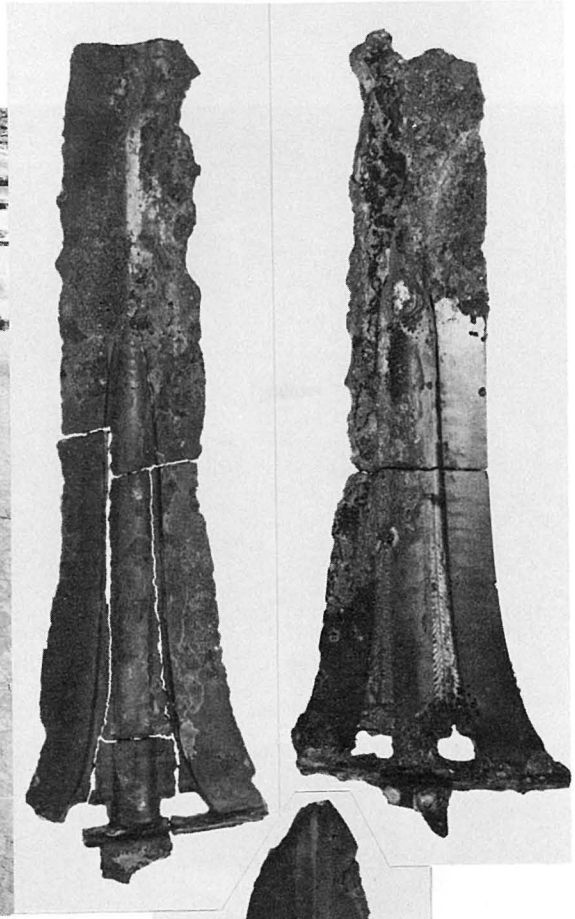


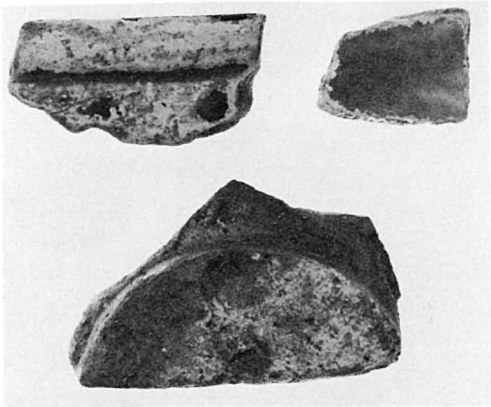
23-6 滑石製模造品

# 24 下山門敷町遺跡

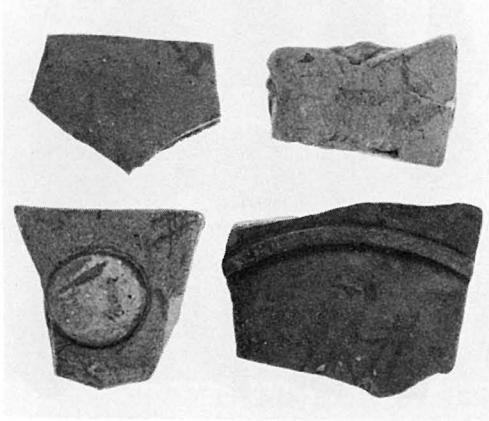


下山門敷町遺跡　奈良時代建物址(柱穴)

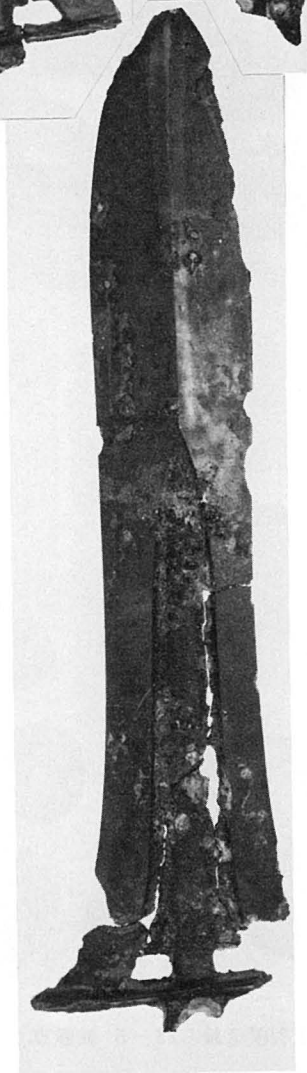




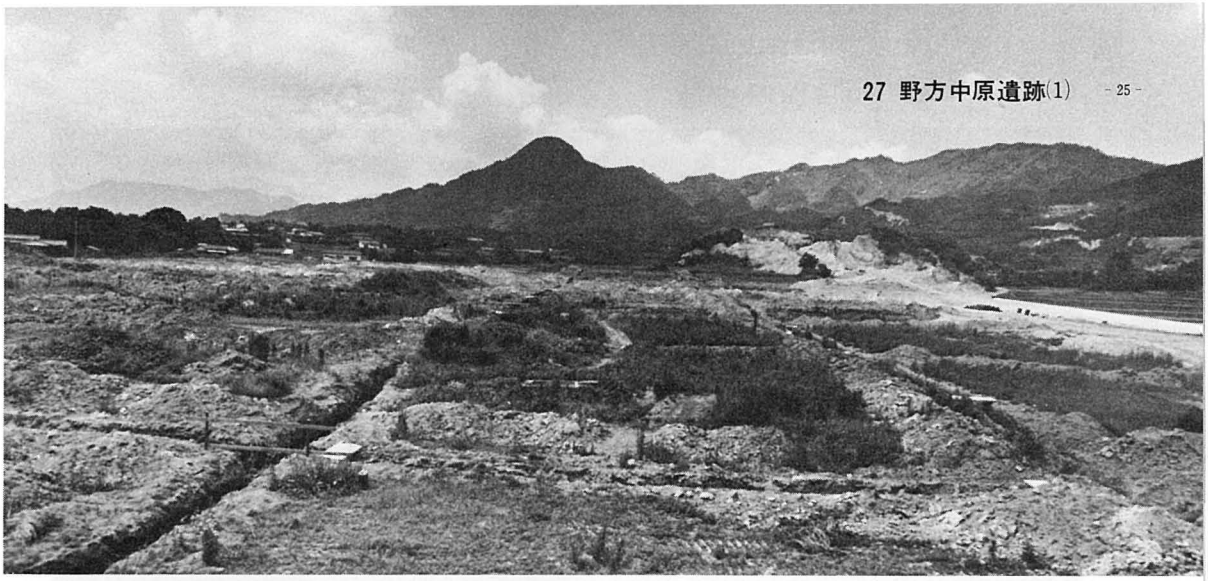
24-2 緑釉陶器



24-3
墨書のある須恵器

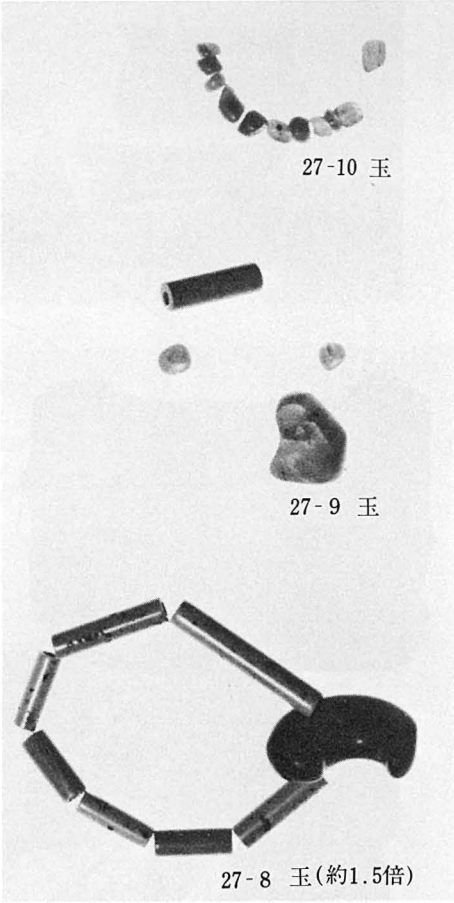


24-1 銅戈（約½）



野方中原遺跡全景（1973年）

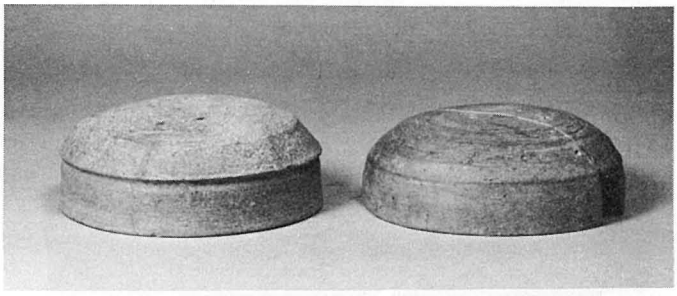
A溝の発掘（1973年８月）



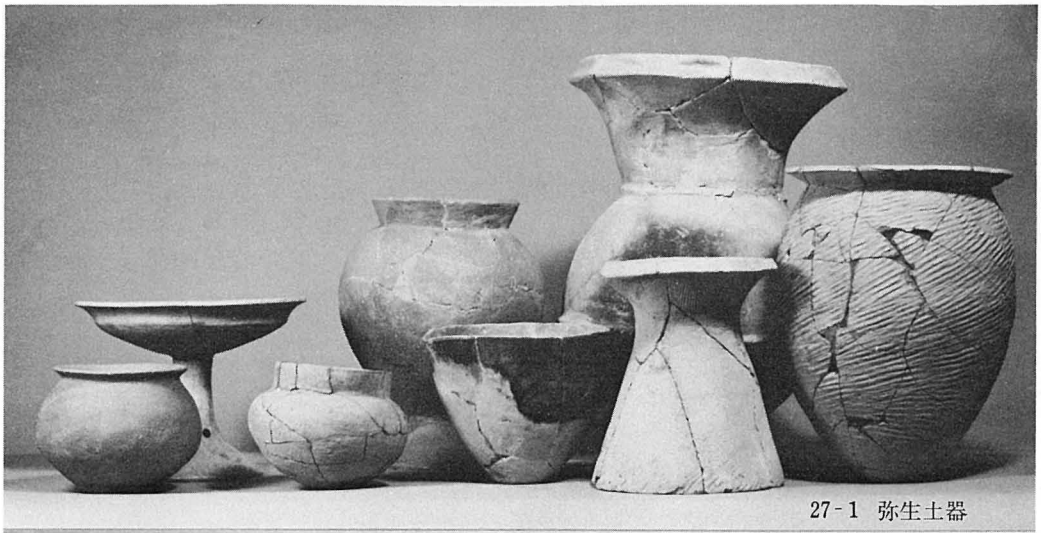
27-10 玉

27-9 玉

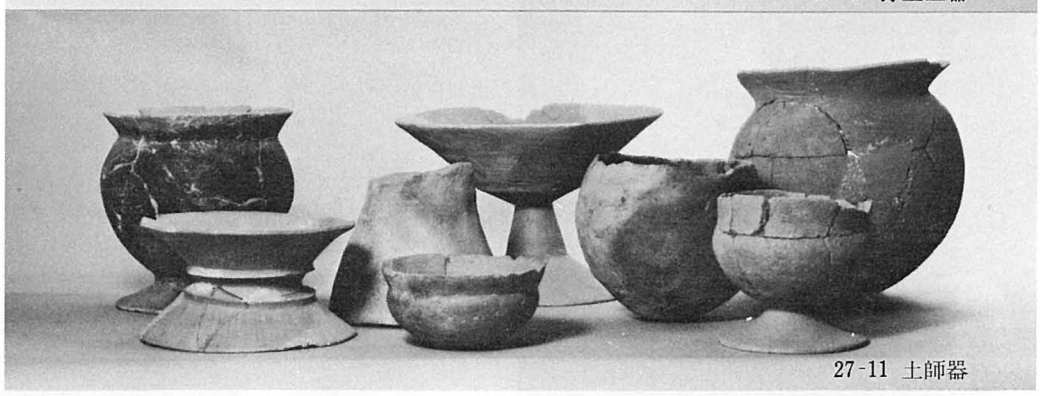
27-8 玉(約1.5倍)



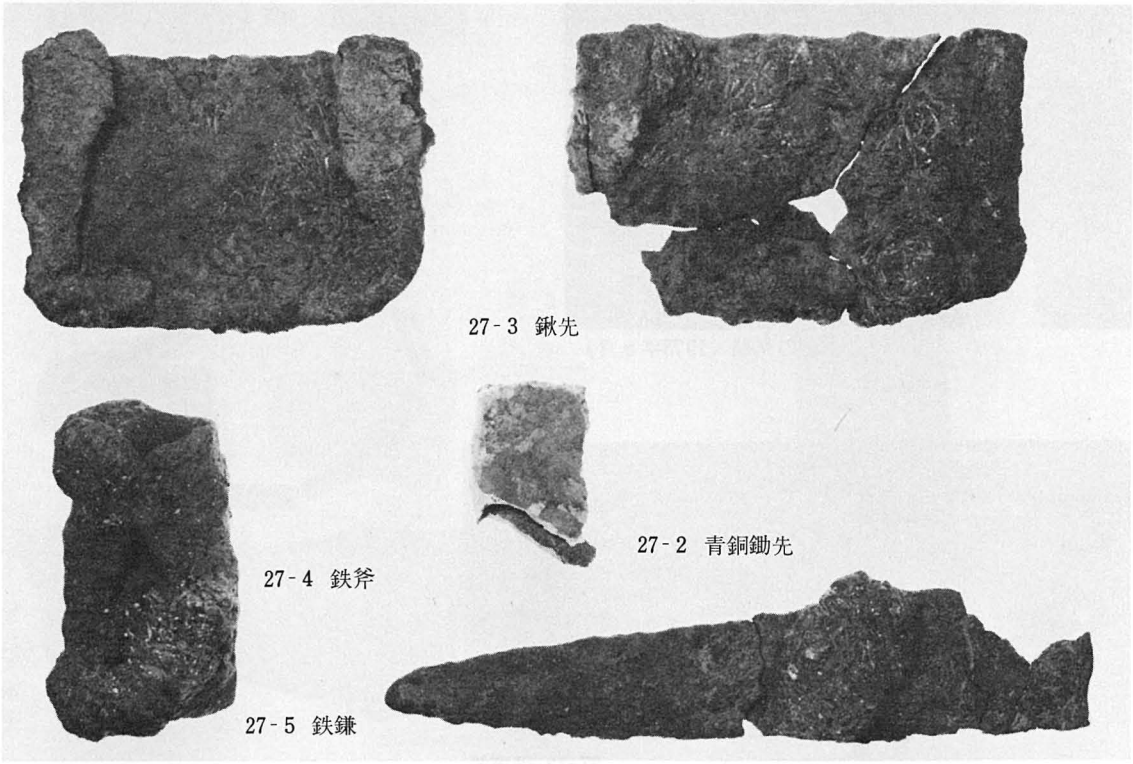
27-12 須恵器



27-1 弥生土器



27-11 土師器

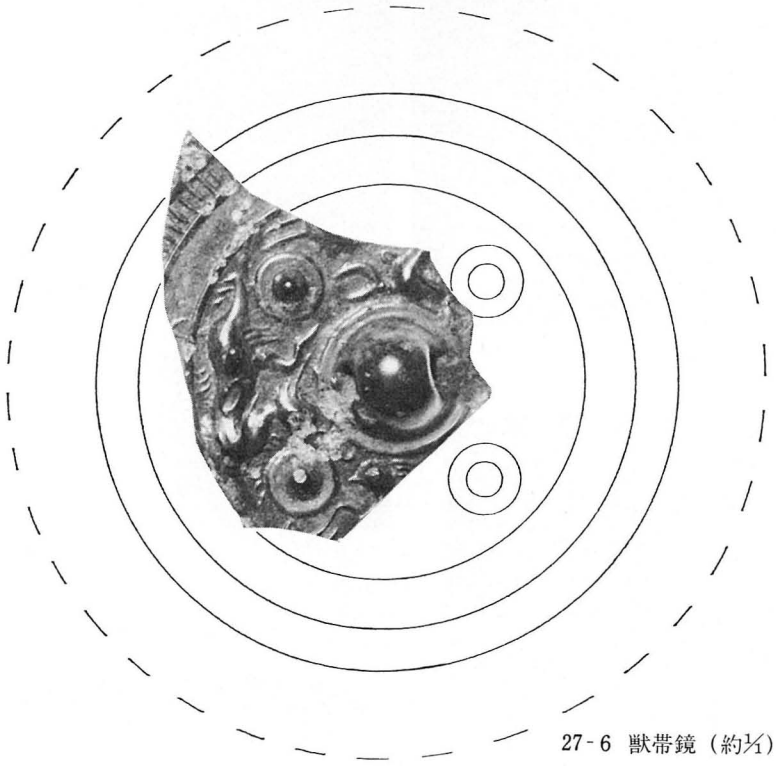


27-3 鍬先

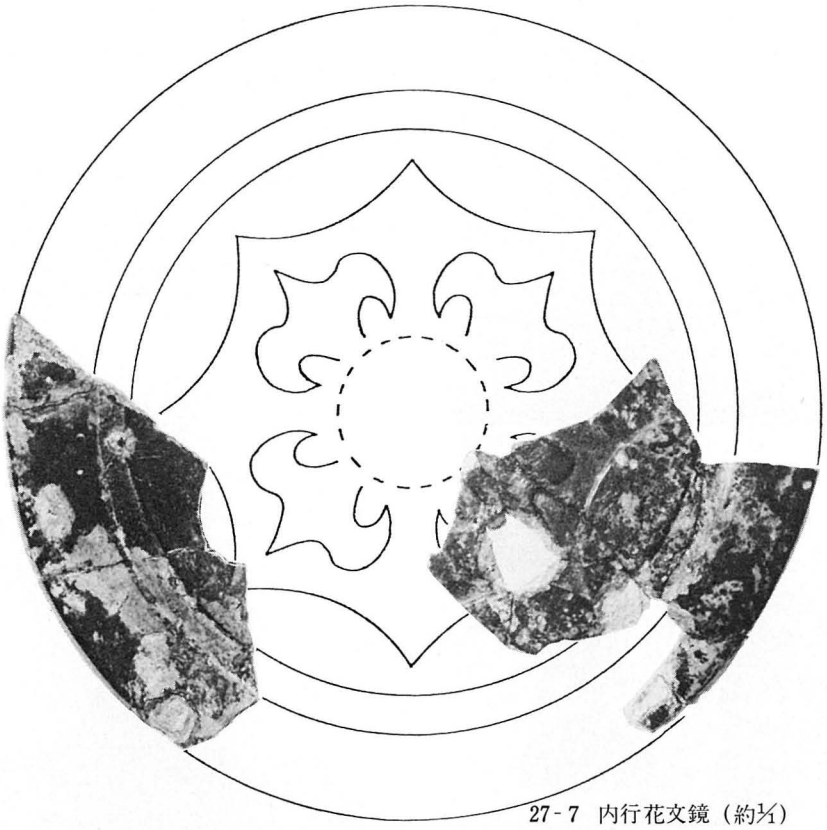
27-2 青銅鋤先

27-4 鉄斧

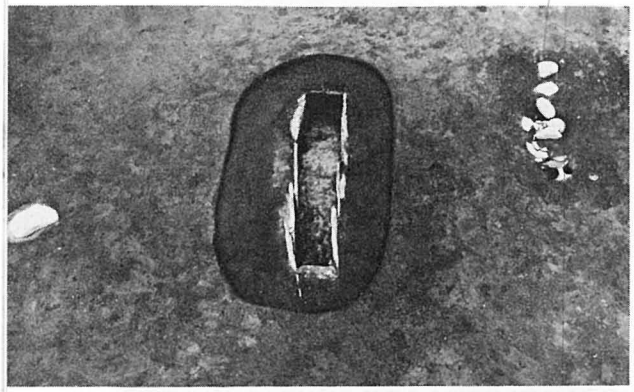
27-5 鉄鎌



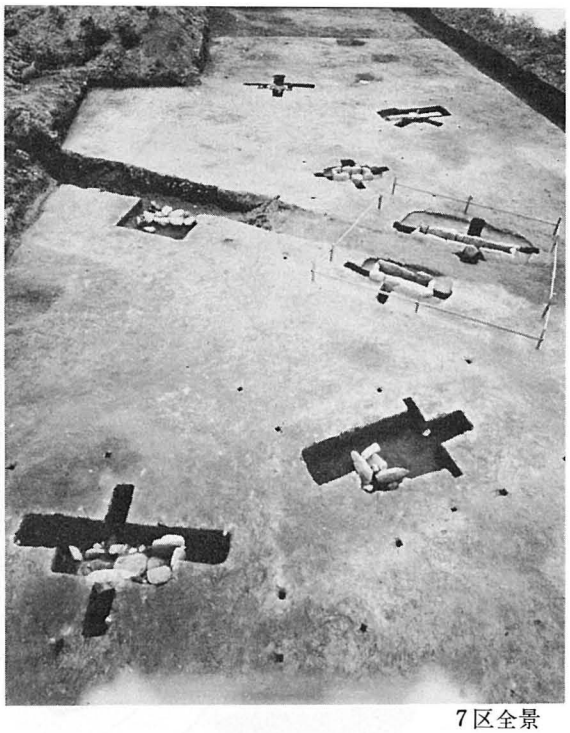
27-6 獣帯鏡（約1/1）



27-7 内行花文鏡（約1/1）

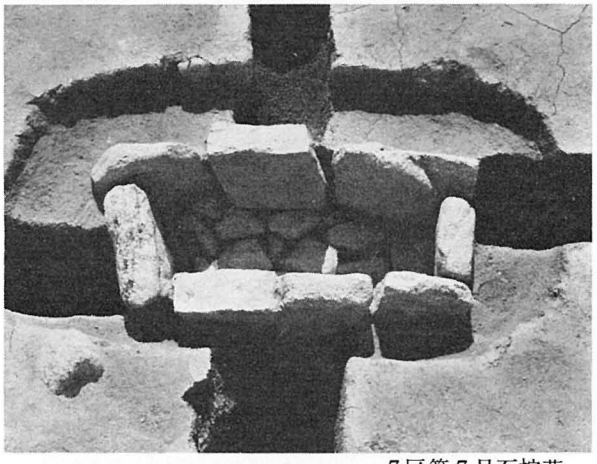


第５区４号石棺墓と供献土器

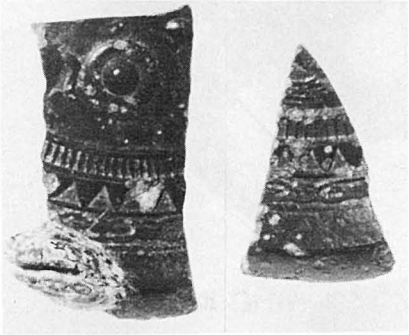


７区全景

５区高坏群

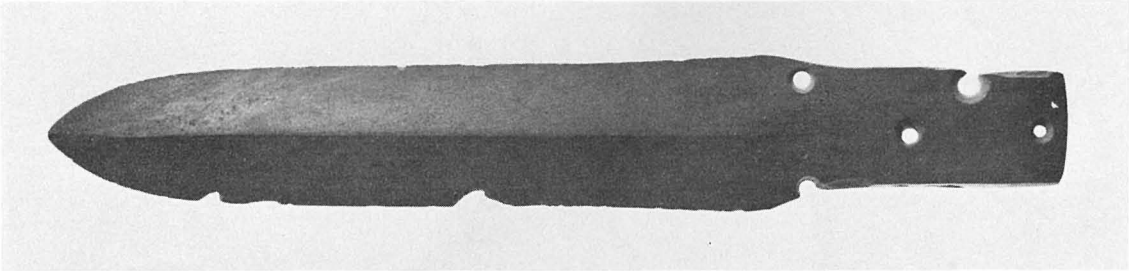


７区第７号石棺墓



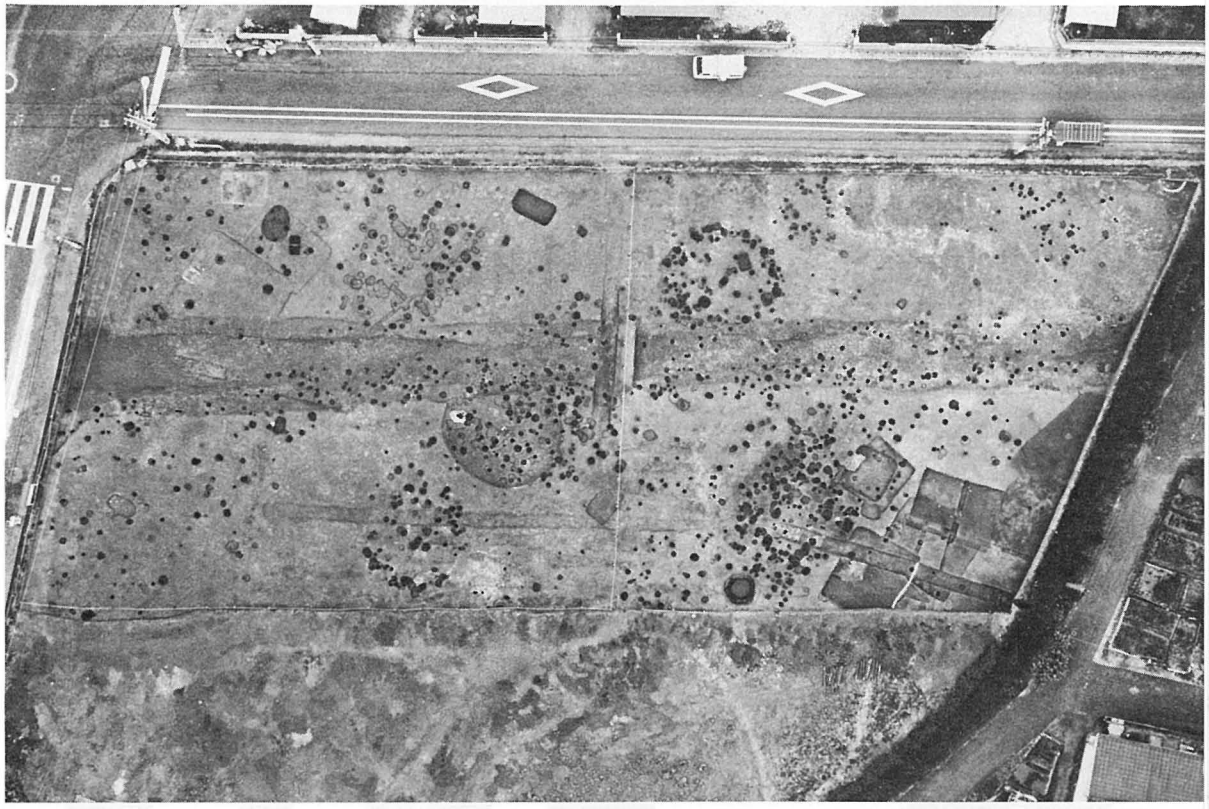
29-1　舶載鏡（約1/1）

29-2　弥生土器



33-1 石剣（約½）

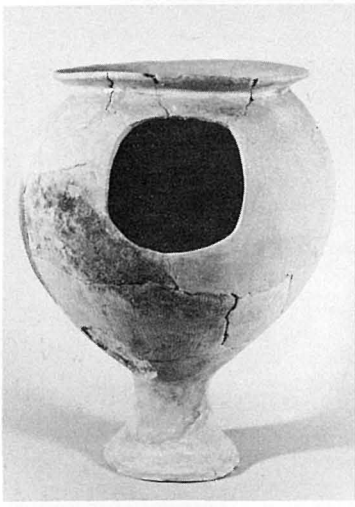
32-1 青磁碗

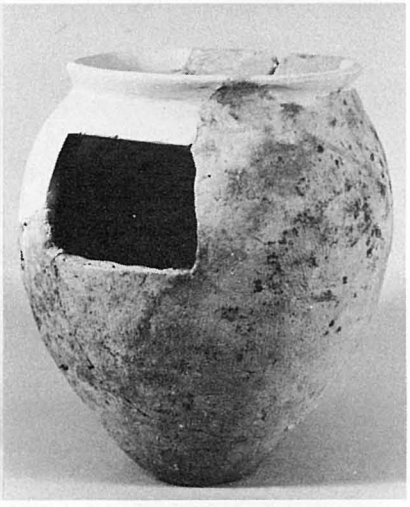


有田遺跡全景(第3次調査)

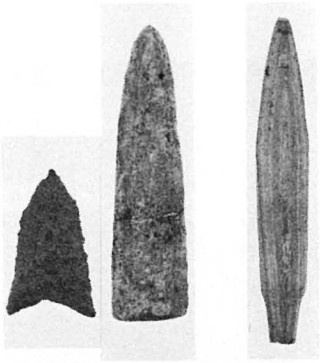
34-1 夜臼式土器

34-13 弥生式土器



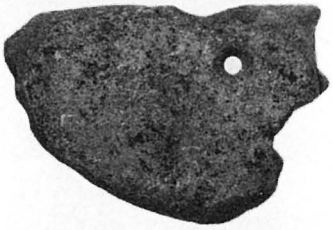


34-12 弥生土器



34-2・3 石鏃（約½）

34-9 石鎌



34-8 石庖丁

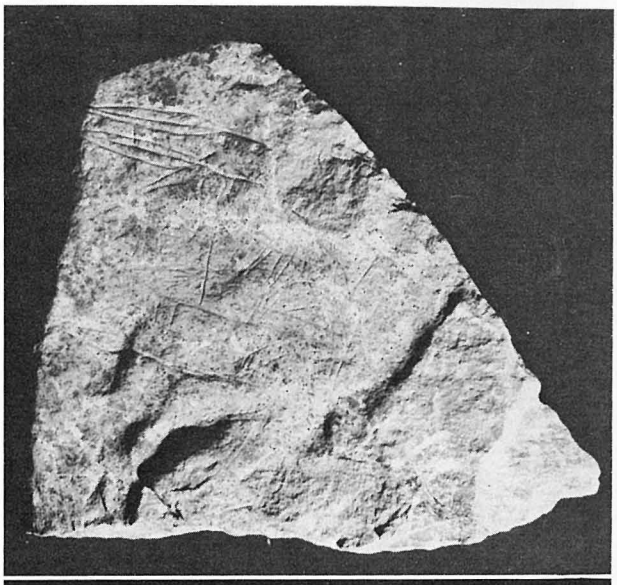
34-11 鋳型

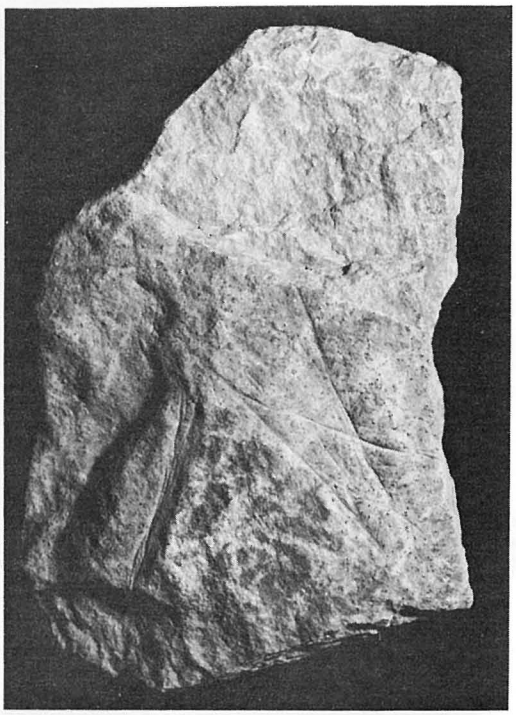
34-7 扁平石斧

34-6 柱状片刃石斧未成品

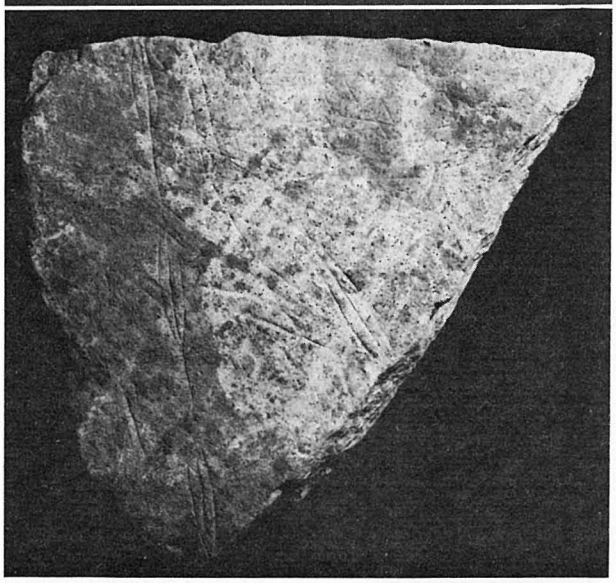
34-5 柱状片刃石斧

34-10 石錘

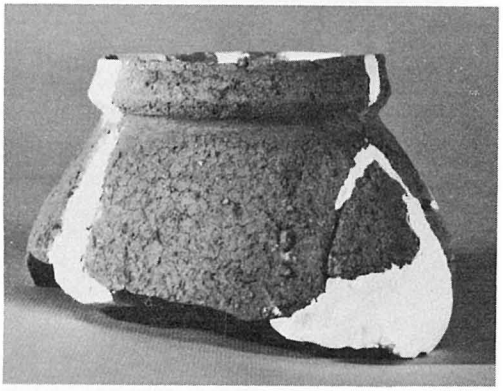




34-14 線刻礫



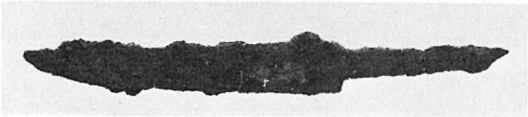
34-14 線刻礫



34-16 土師器

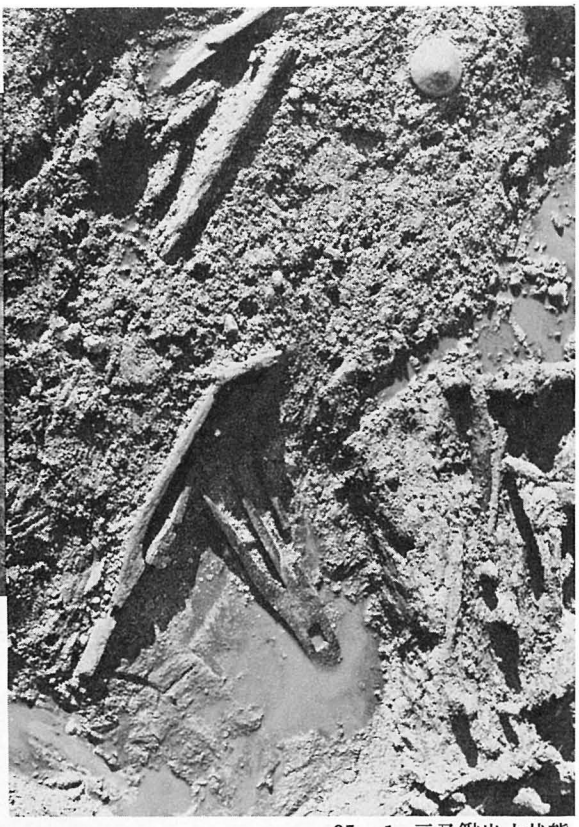
34-19 貨幣

34-17 白磁碗

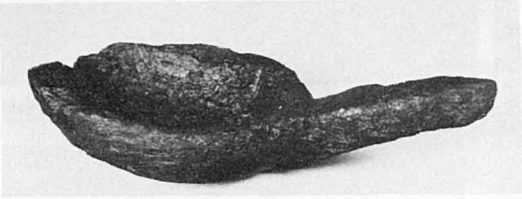


34-18 刀　子

原談儀遺跡 杭列と井戸(中央の水たまり)



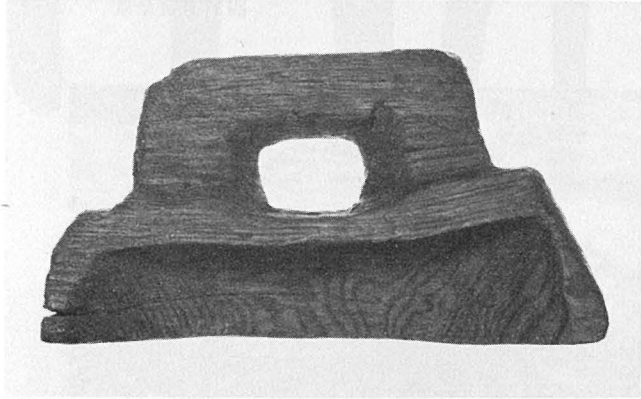
35 - 1　三又鍬出土状態



35-2　ひしゃく

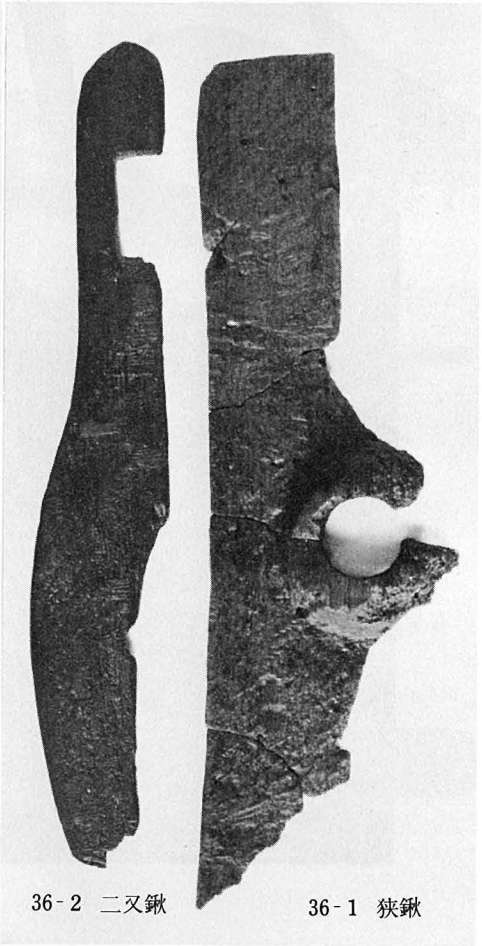
鶴町遺跡

鶴町遺跡 堤防状遺構

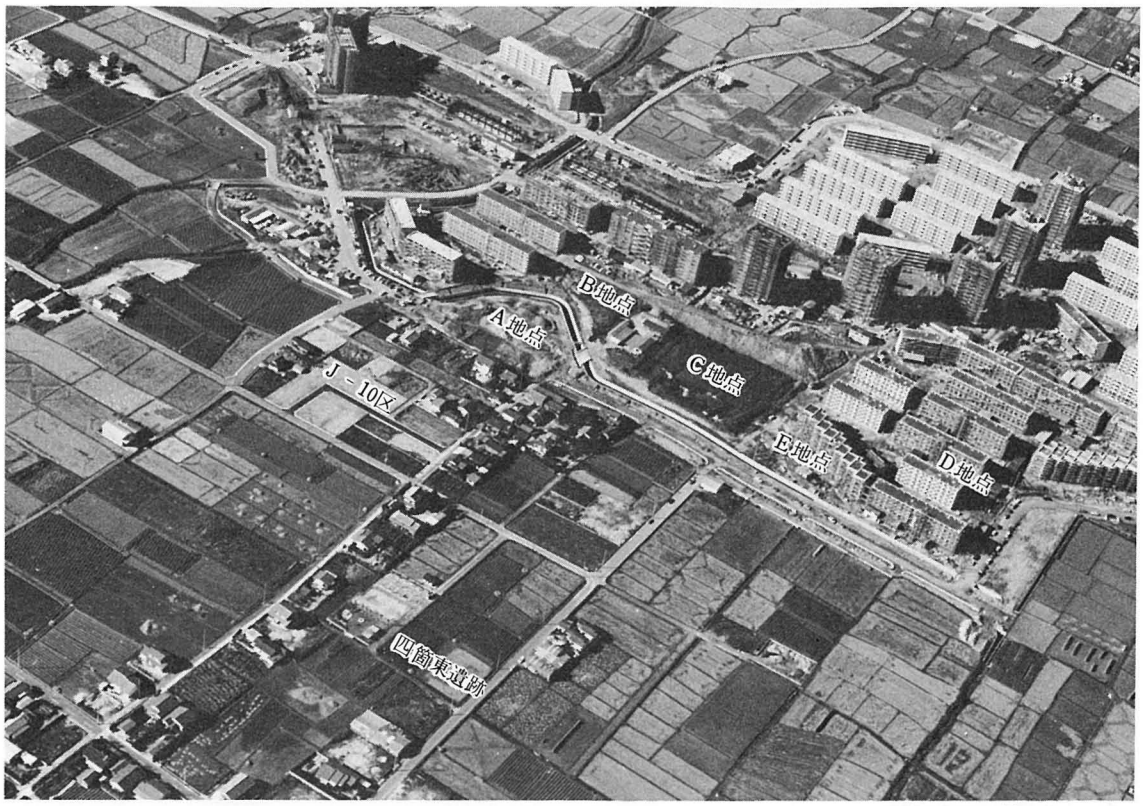


36-3 容器

36-4 斧柄

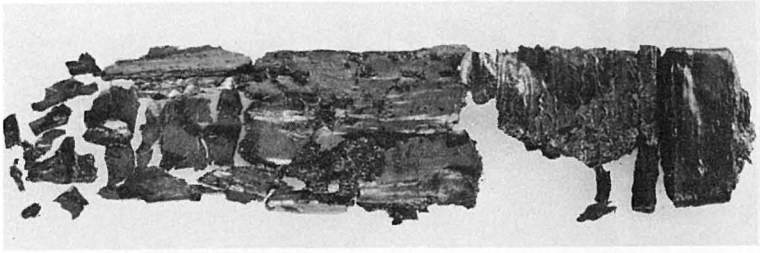


36-2 二又鍬　36-1 狭鍬



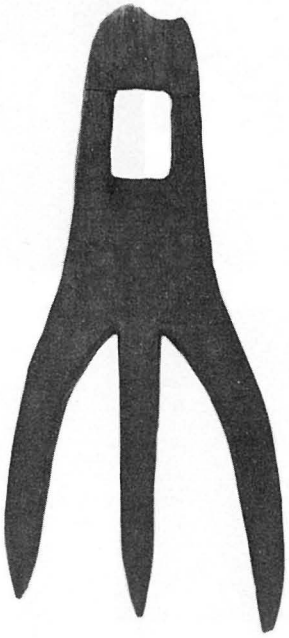

四箇遺跡全景

四箇遺跡　D地点　木器、建築材出土状態

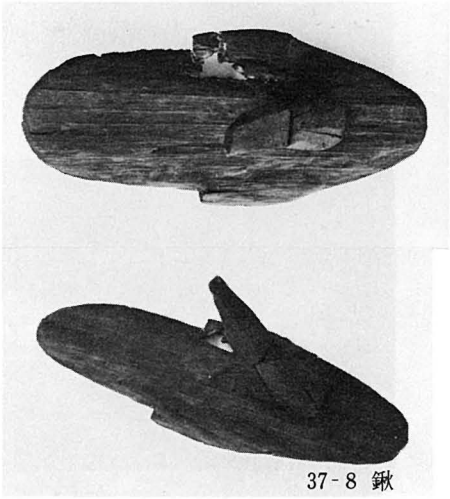


37-1 漆器

37-2 斧柄



37-6 三又鍬
37-7 三又鍬

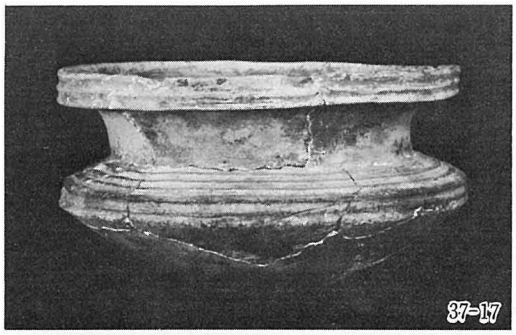


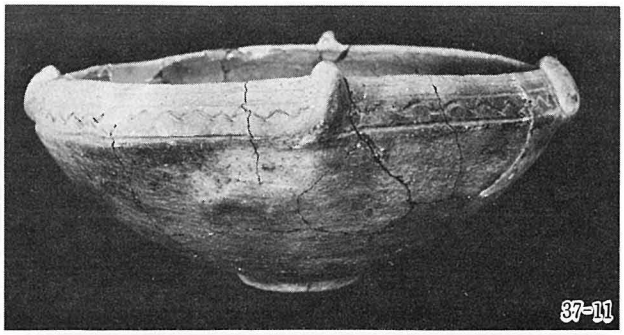
37-8 鍬

37-3 弓

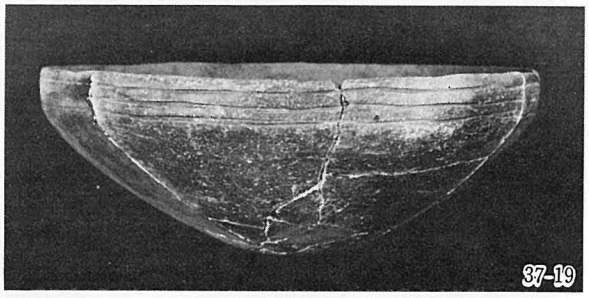
37-4 槍状木製品

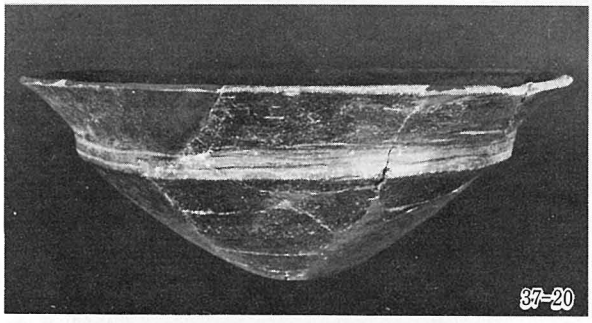
37-5 杵


37-17


37-11

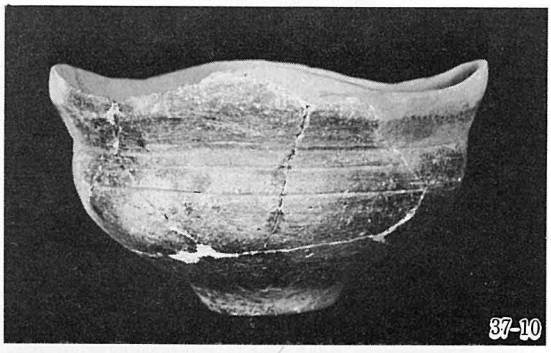
37-18


37-19

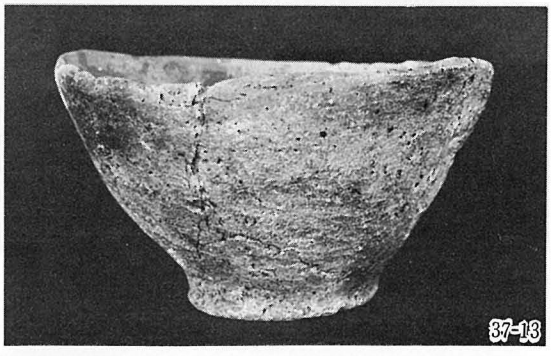

37-20

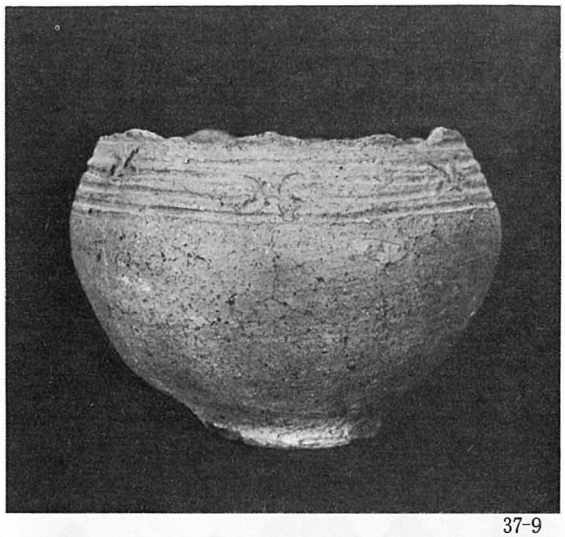
37-21

37-22


37-10

37-12


37-13



37-9

37-14

37-15

37-16

37-35 十字形石器(約½)

37-36 磨製石器(約½)

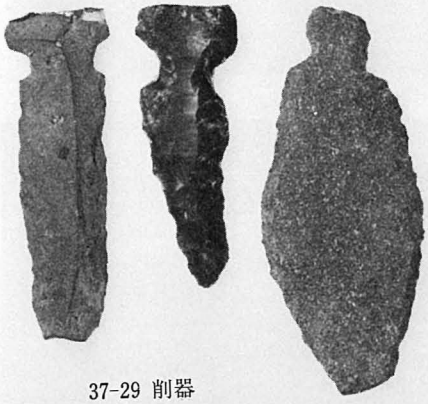
37-40 玉(約1/1)

37-26 打製石鏃

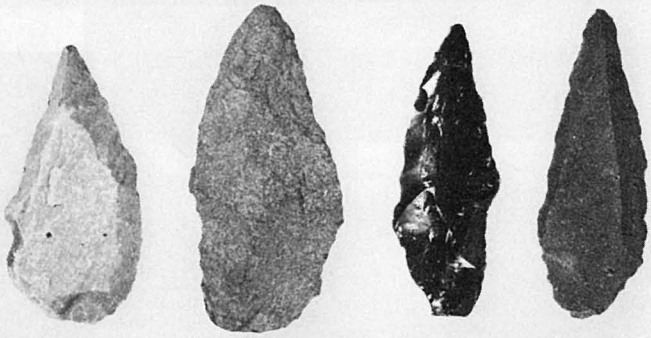
37-27 つまみ形石器

37-28 彫器

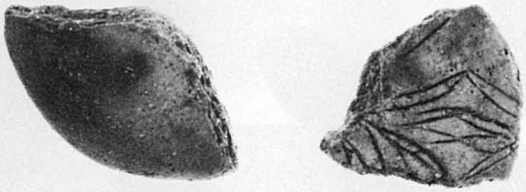
37-31 錐

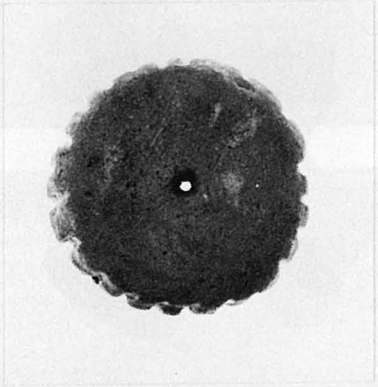


37-29 削器



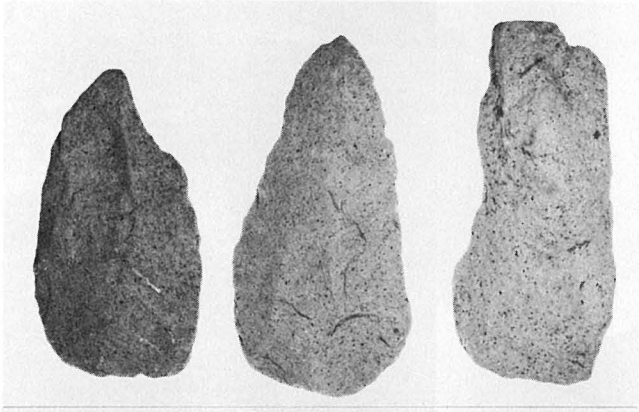
37-30 尖頭状石器



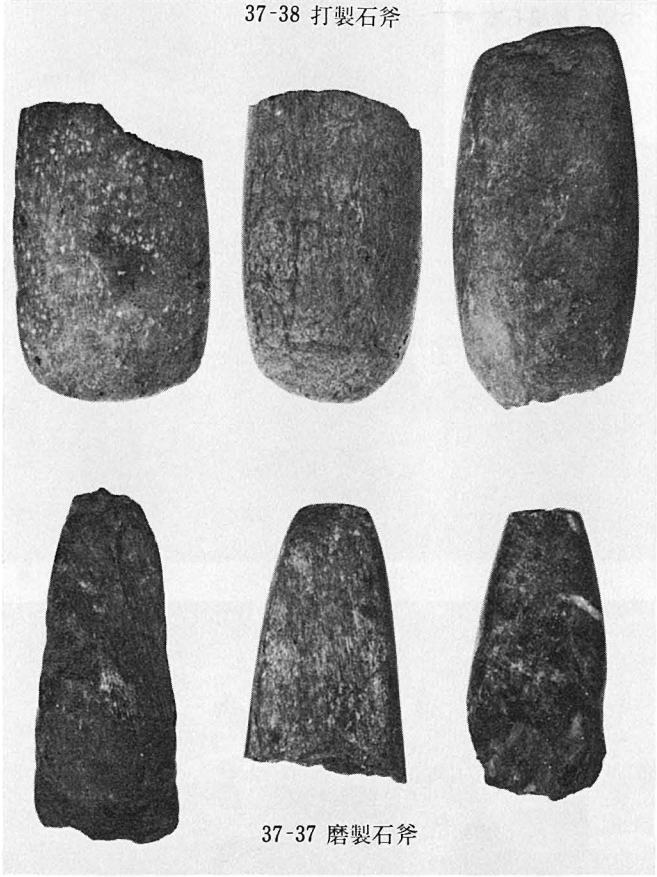


37-39 有孔円盤

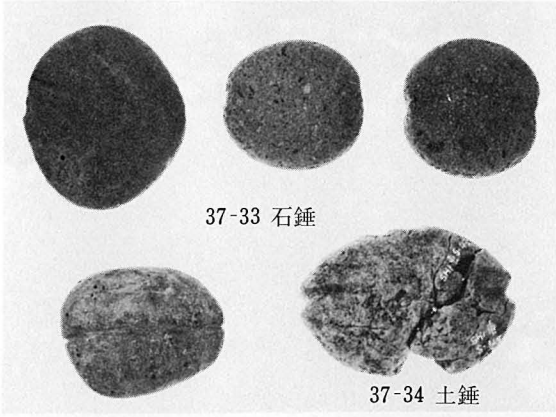
37-41 土偶



37-38 打製石斧

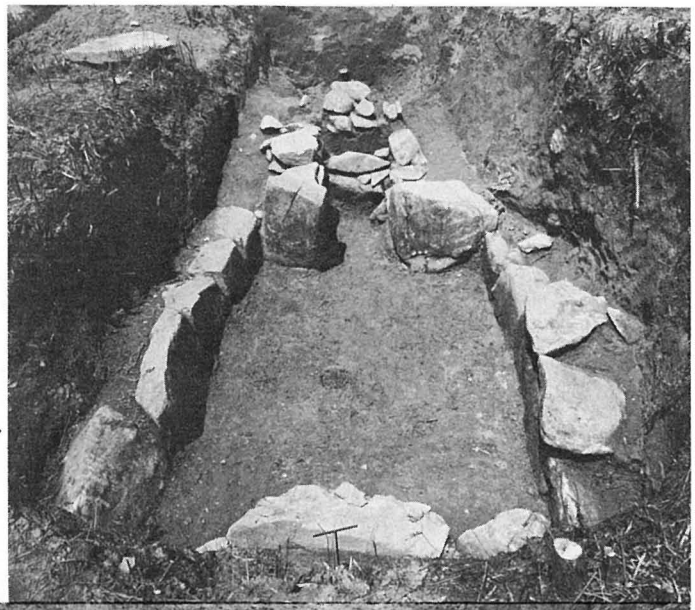


37-37 磨製石斧



37-33 石錘

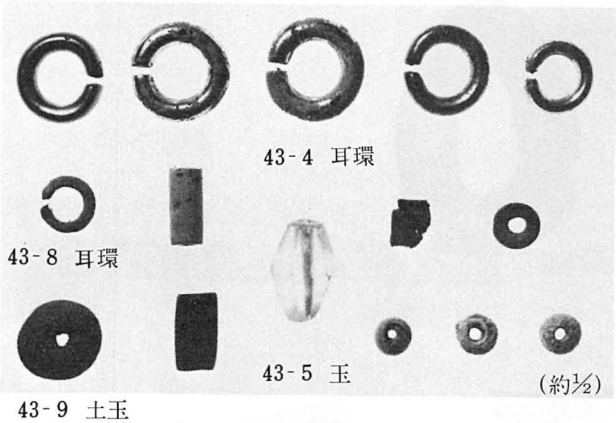
37-34 土錘



七隈6号墳石室 ➡

七隈5号墳遺物出土状態 ⬇

片江古墳群6～8号墳



43-4 耳環

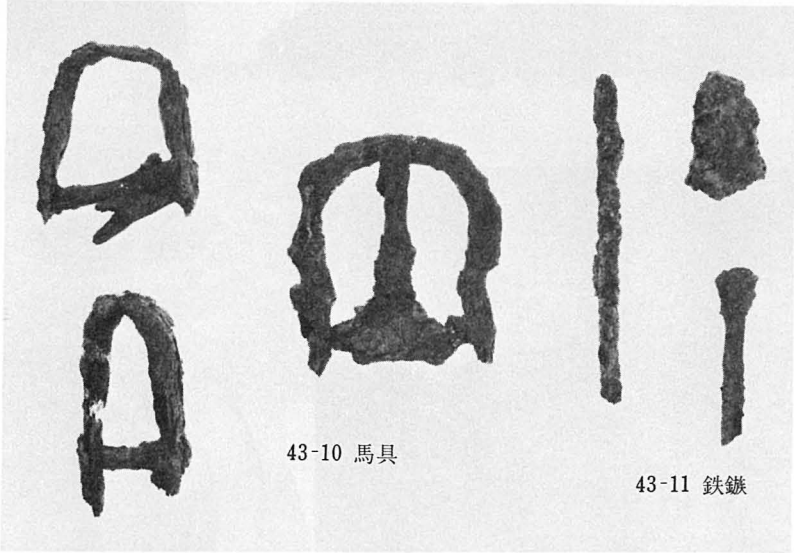
43-8 耳環

43-5 玉

(約½)

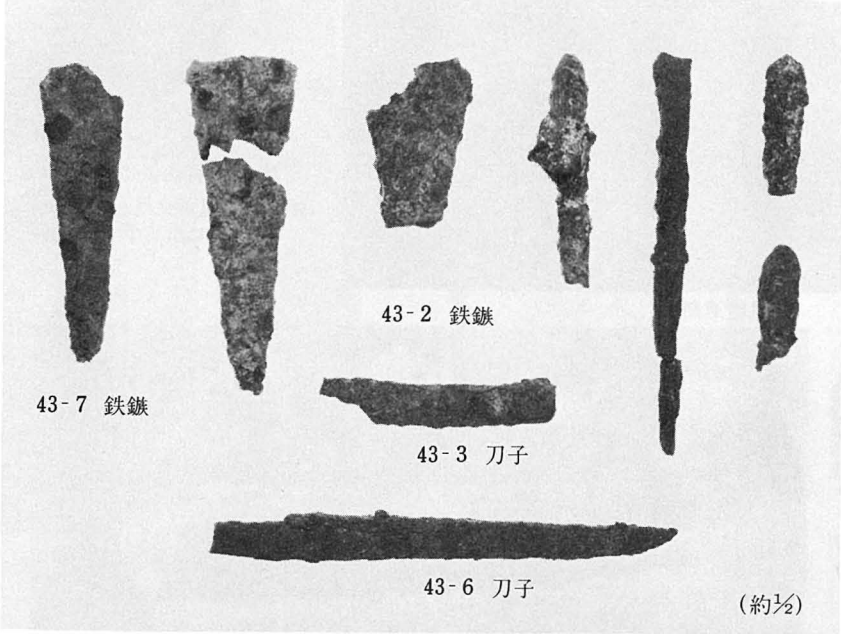
43-9 土玉

43-12 鋤先 (約¼)



43-10 馬具

43-11 鉄鏃



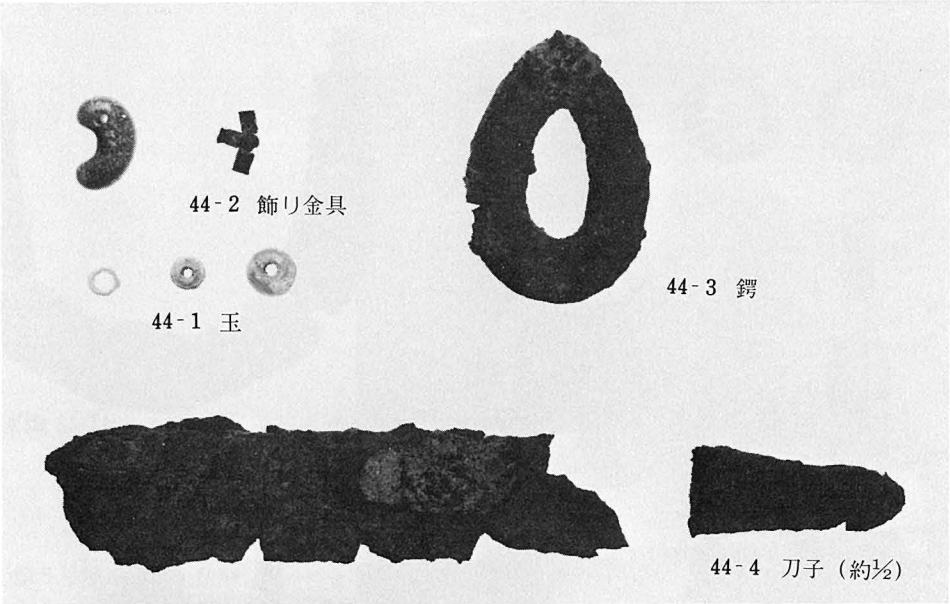
43-2 鉄鏃

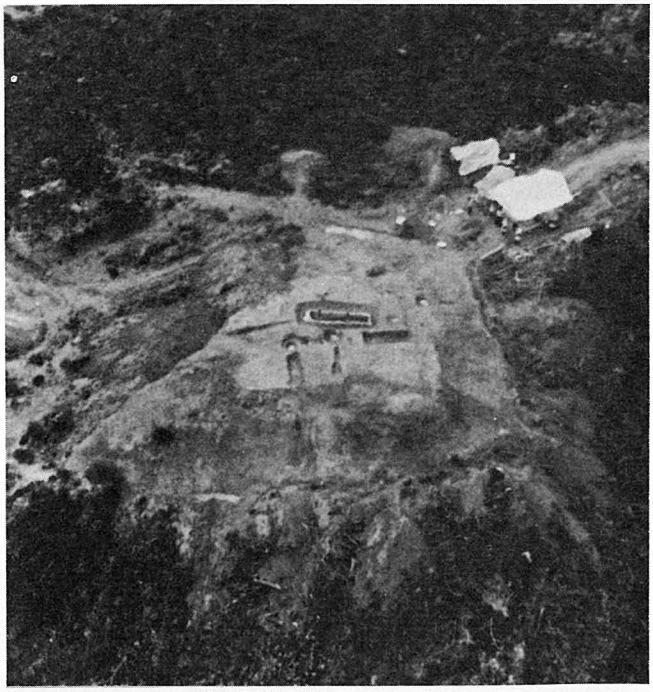
43-7 鉄鏃

43-3 刀子

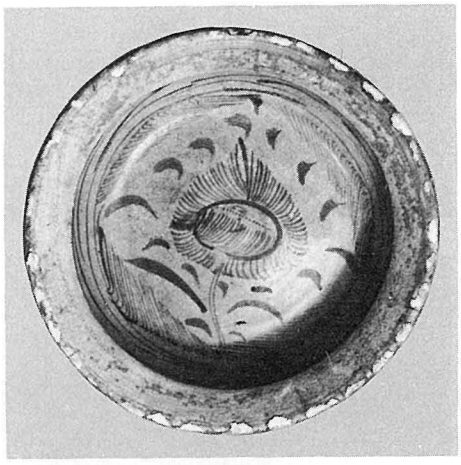
43-6 刀子

(約½)

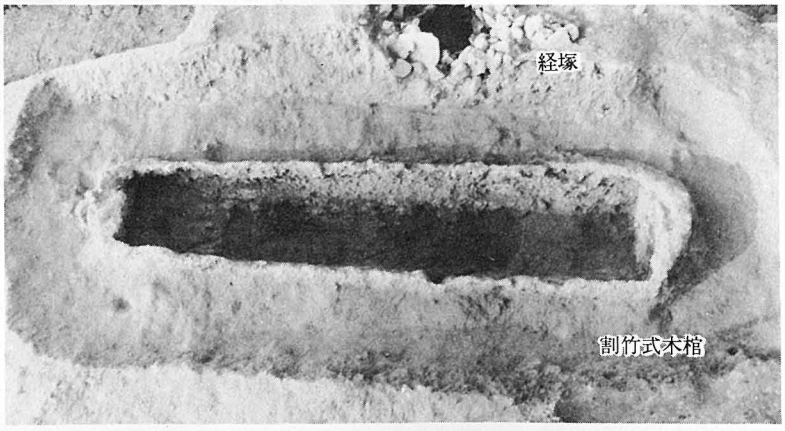


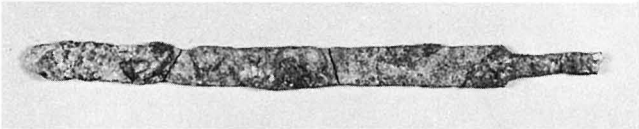



京ノ隈遺跡



黄釉鉄絵蓮華文洗　経塚１号主体部
（今回は他に出品中につき展示せず）

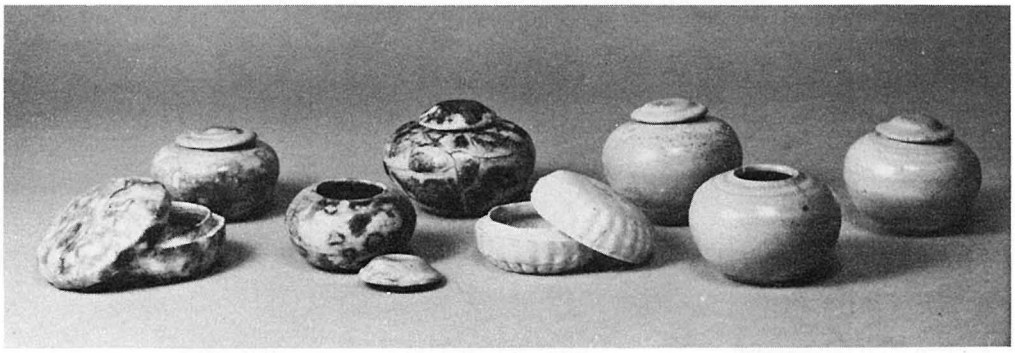




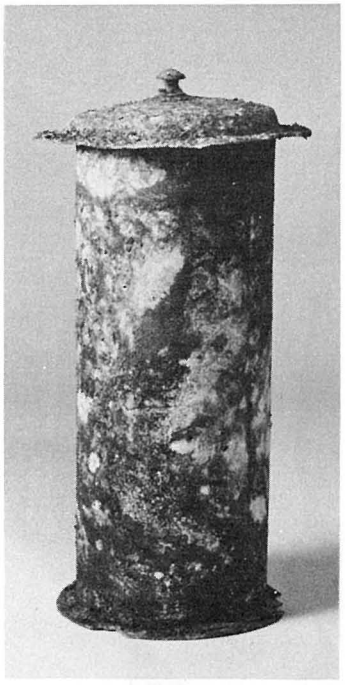
45-1 直刀

45-3 鋤先

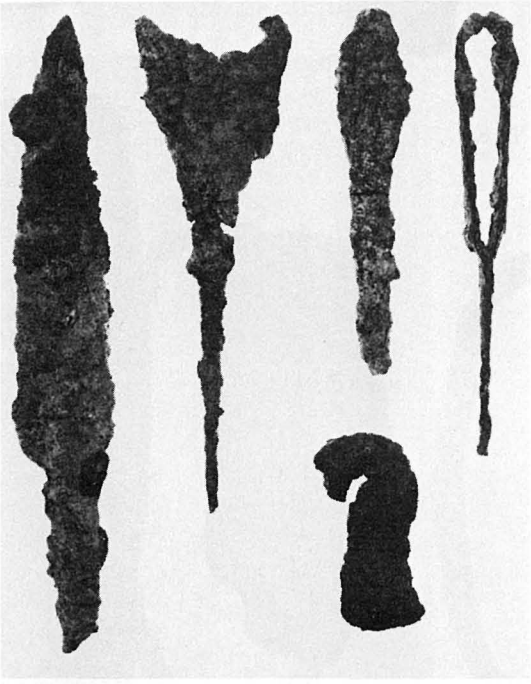
45-2 鉈 (約½)



45-6、7、13、14 合子

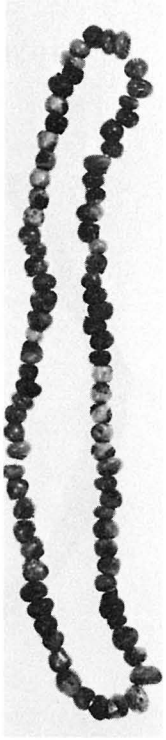


45-5 経筒



45-8 刀子 45-9 鏃 45-10 毛抜

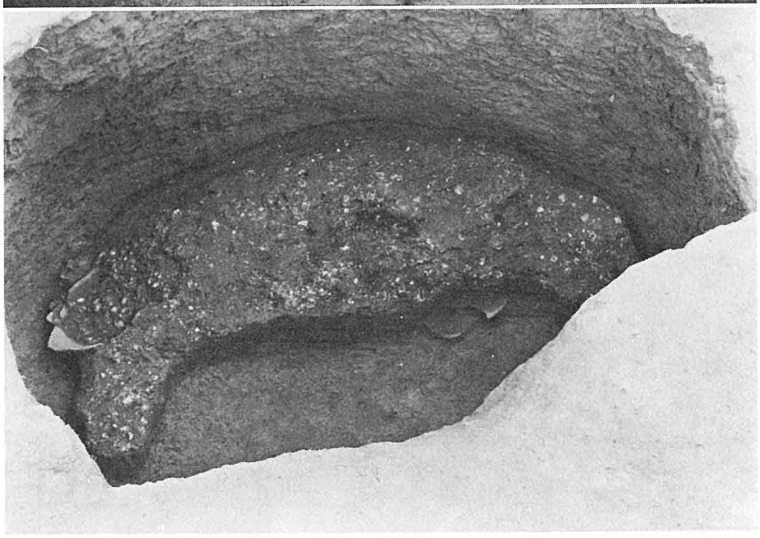
45-11 鉄器



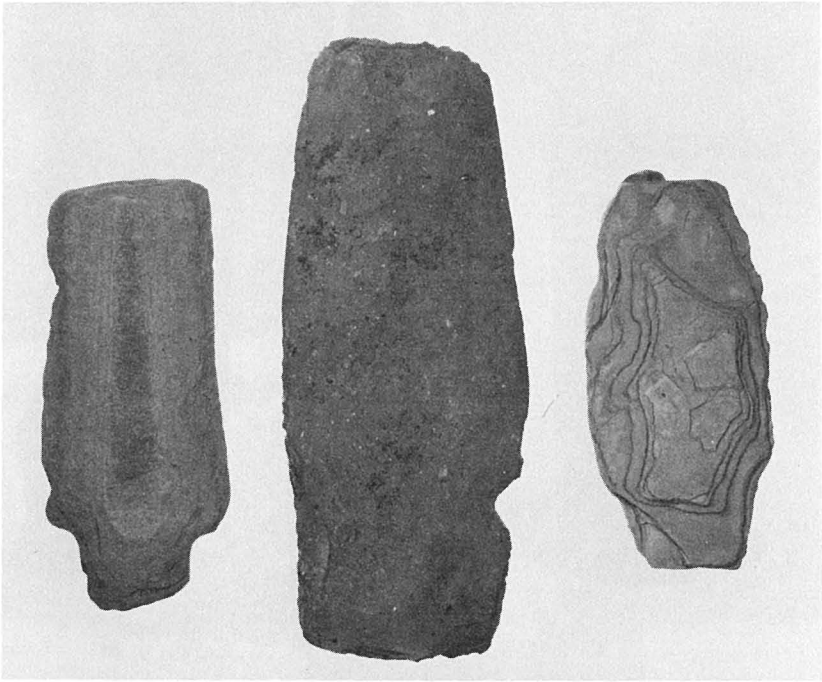
45-16 数珠 (約½)

## 46 浄泉寺遺跡(1)

1号住居址（古墳時代）



40号袋状竪穴内の貝殻

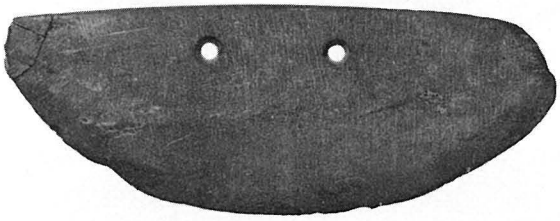


46-8 石剣　　46-9 石剣未成品（約½）

46-3 抉入片刃石斧

46-4 抉入片刃石斧(未成品)

46-6 蛤刃石斧(約½)



46-1 石庖丁

46-5 扁平片刃石斧

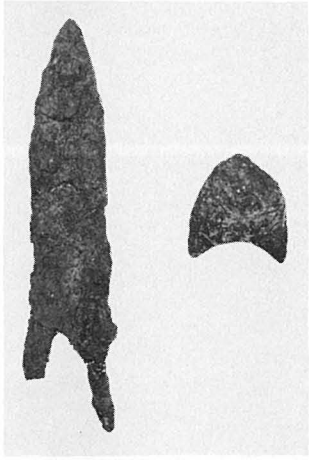
47-1 銅釧(約¼)

片江辻遺跡　第1・2号住居址

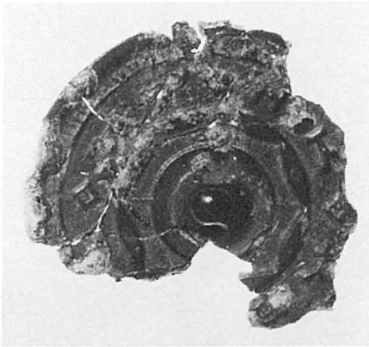
宝台遺跡　C区第5号住居址

50－3 弥生土器（宝台Ⅰ式）

宝台遺跡　B区第14号甕棺墓

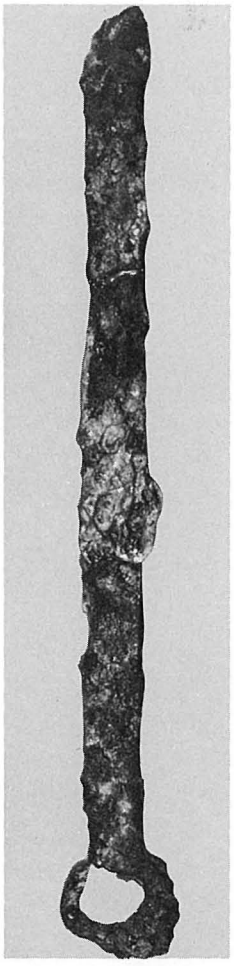


49－1 鉄鏃



51-1　日光鏡(約1/1)

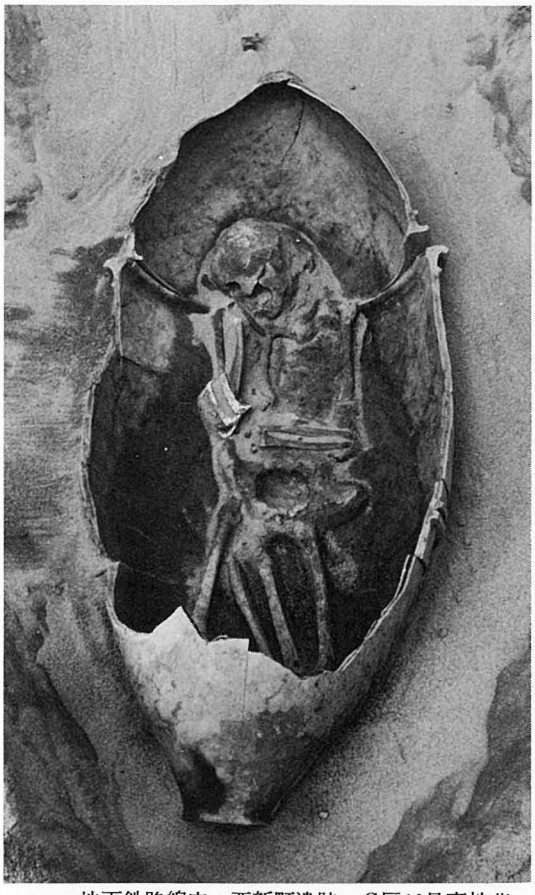
笹栗遺跡　第1号製鉄炉址



51-3　素環頭大刀

大牟田古墳群

地下鉄路線内　福岡城石垣

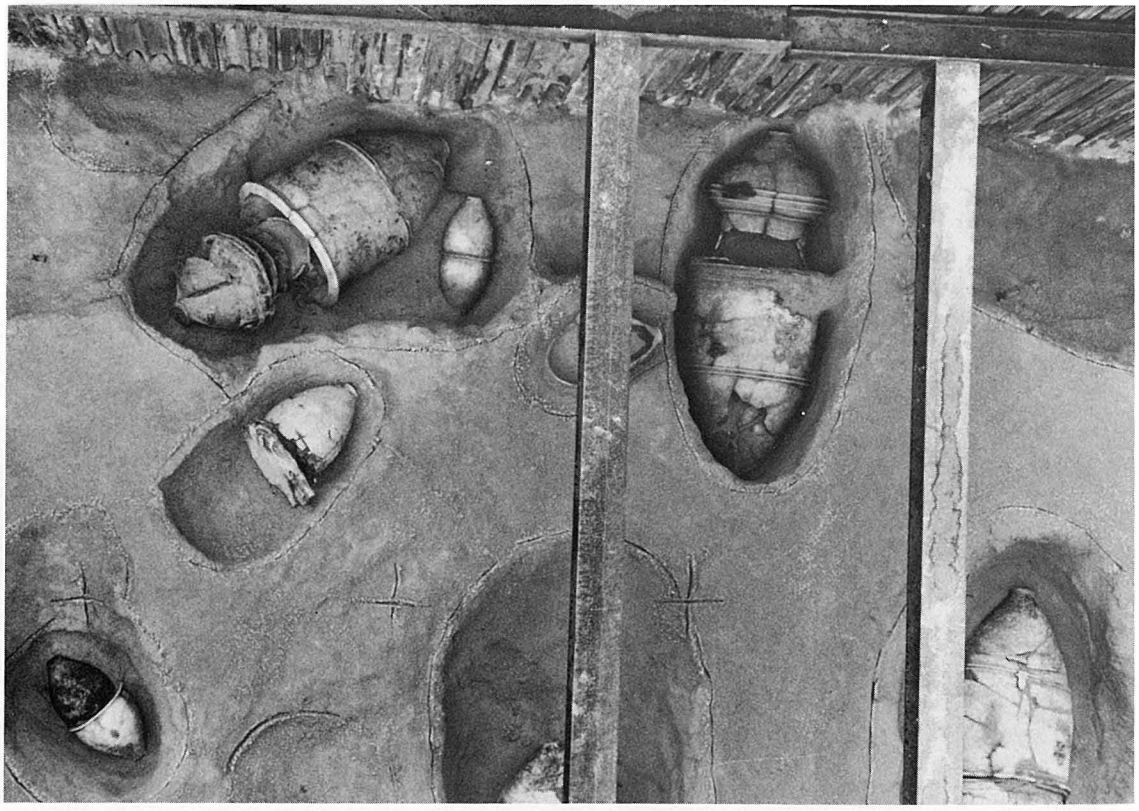


地下鉄路線内　西新町遺跡　C区10号甕棺墓

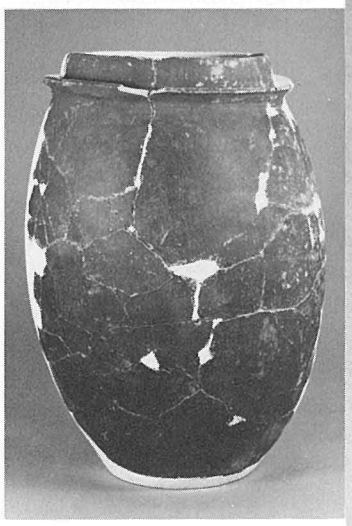
地下鉄路線内　福岡城石垣

地下鉄路線内　西新町遺跡　A地点3号土壙

地下鉄路線内西新町遺跡D地点4号住居址

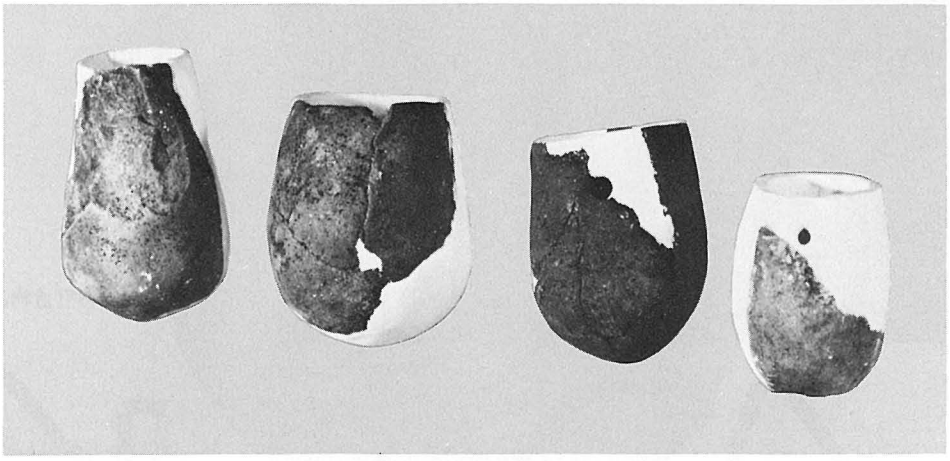


地下鉄路線内　西新町遺跡　C区甕棺墓地

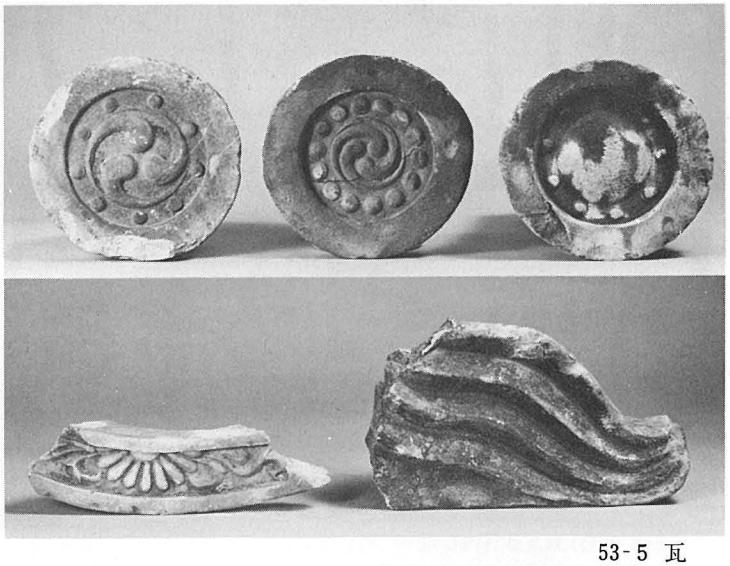


53-3 弥生土器

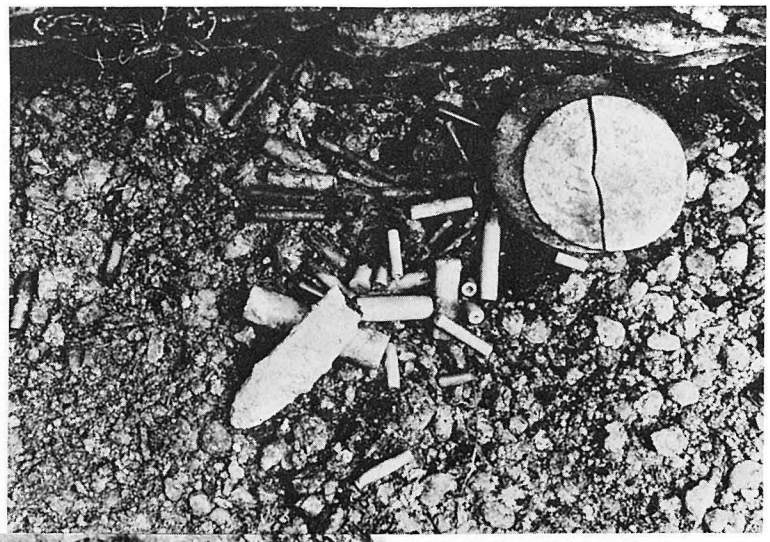
53-1 貝輪



53-4 タコ壺

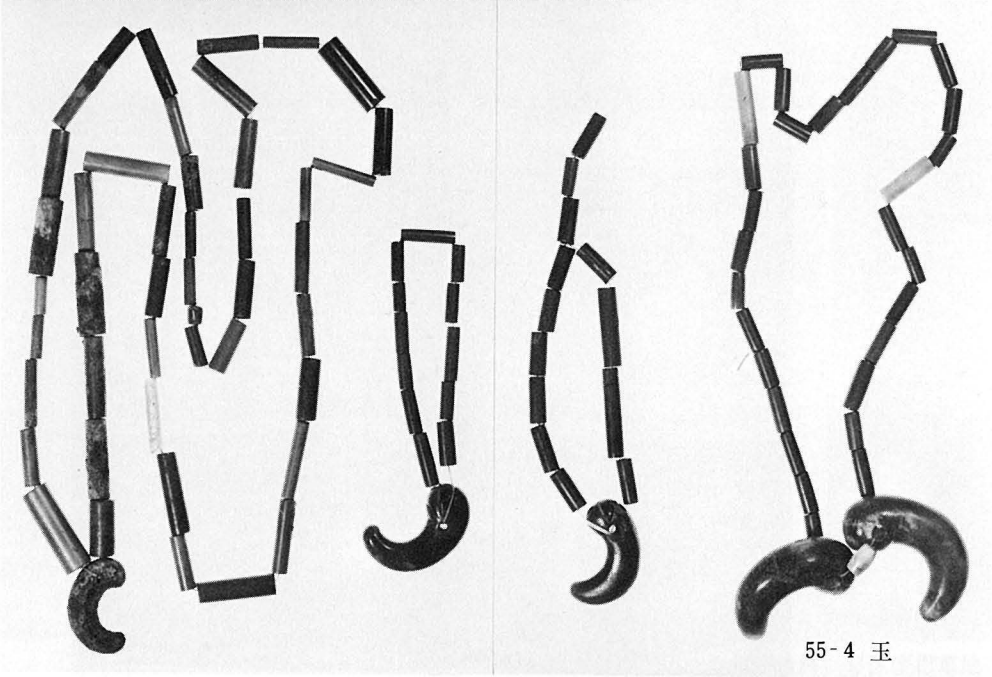


53-5 瓦



老司古墳　3号石室遺物出土状態

老司古墳　3号石室遺物出土状態



55-4 玉

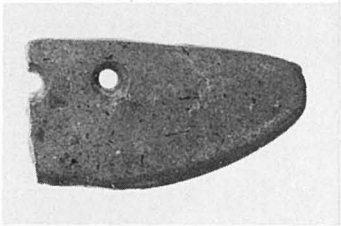
55-1 方格規矩鏡(径12.5cm)

55-2 「君宜高官」内行花文鏡
(径12.8cm)

55-3 内行花文鏡(径 9.3cm)

## 56 弥永原遺跡　57 山陽新幹線路線内遺跡(1)

56-1 仿製内行花文鏡（約1/1）

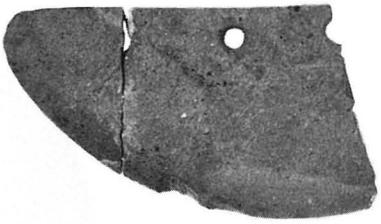


56-3 石庖丁（約1/2）

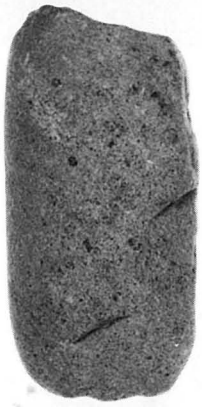
56-2 太形蛤刃石斧（約1/4）

### 山陽新幹線路線内遺跡　弥永遺跡

57-3 石鎌



57-2 石庖丁

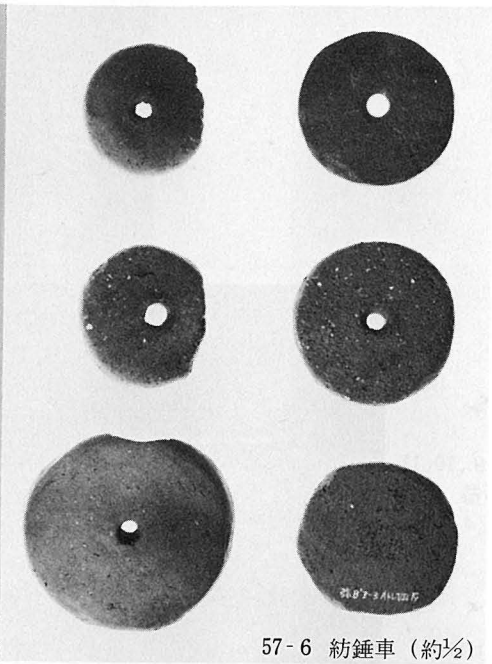


57-4 蛤刃石斧

57-5、8 柱状片刃石斧

57-7 石剣（約1/2）

57-1　弥生土器



57-6　紡錘車（約1/2）

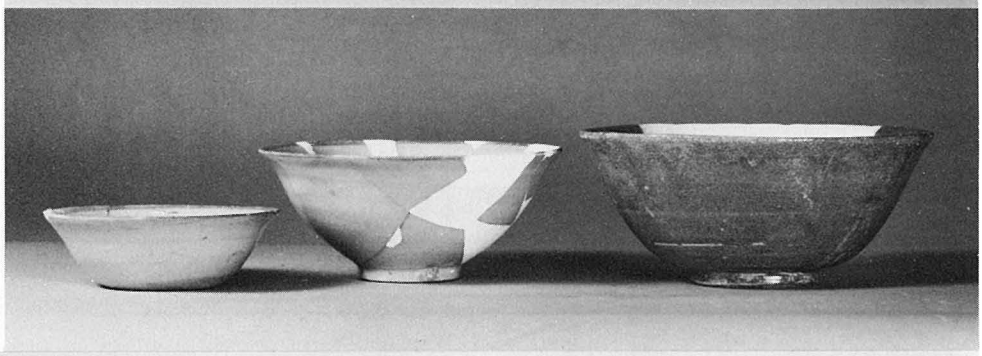
五十川高木遺跡　A地点　井戸

五十川高木遺跡　A地点

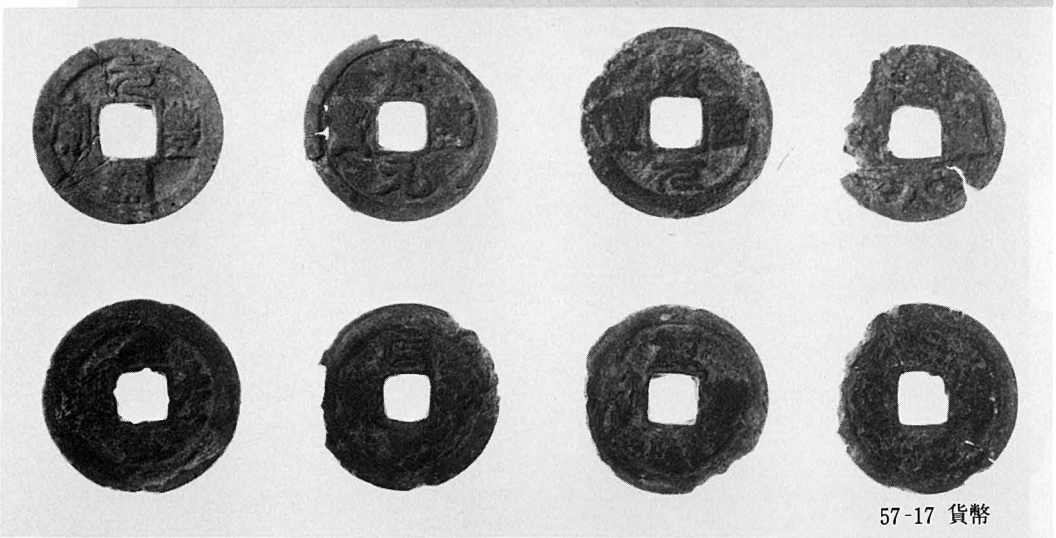
57-14 石鍋

57-9、10、11
土師器
(皿、坏)

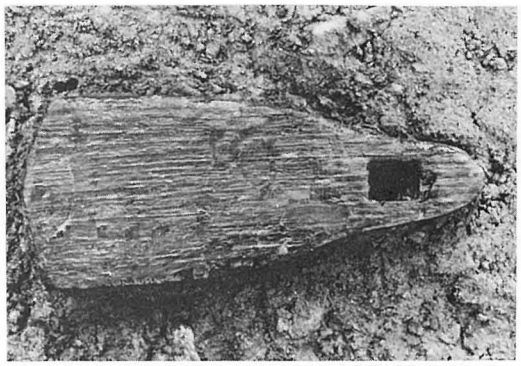
左より
57-9
土師器
57-13
黒色土器
57-12
陶質土器



左より
57-16
白磁碗
57-15
青磁碗

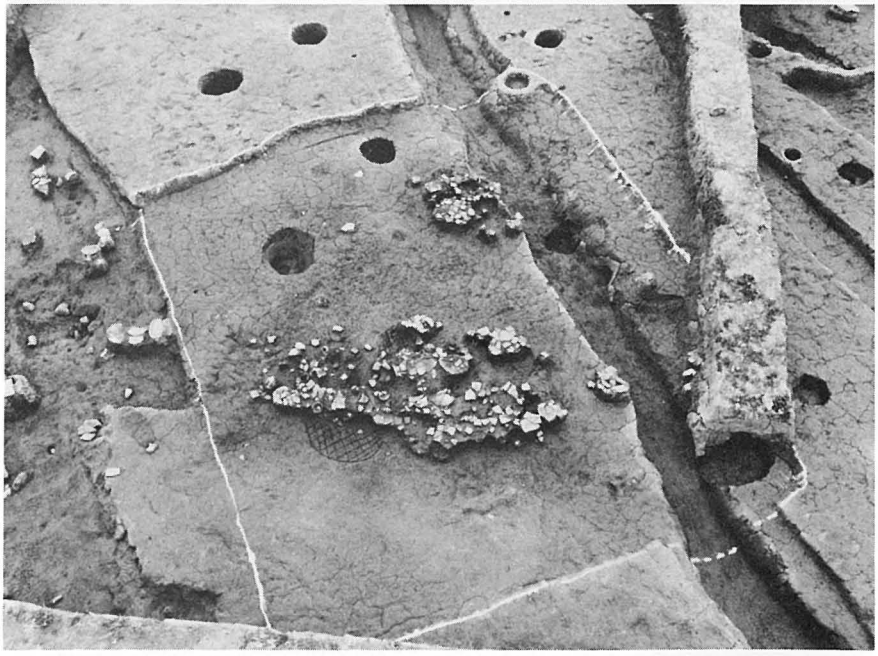


57-17 貨幣



57-18 木製鍬出土状態

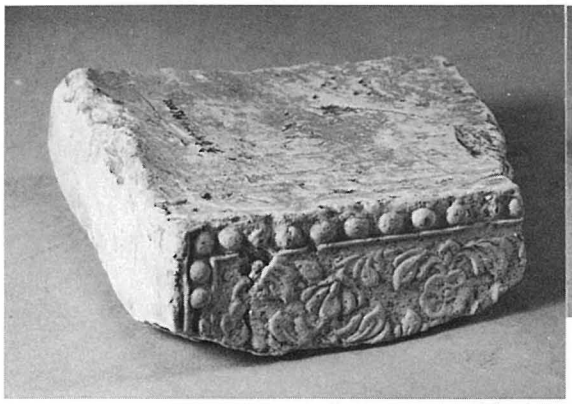
多々良込田遺跡
全景



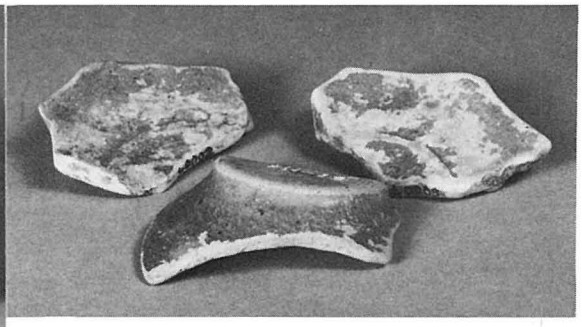
多々良込田遺跡
第4号住居址

57-20・21 土師器、須恵器

57-22 瓦

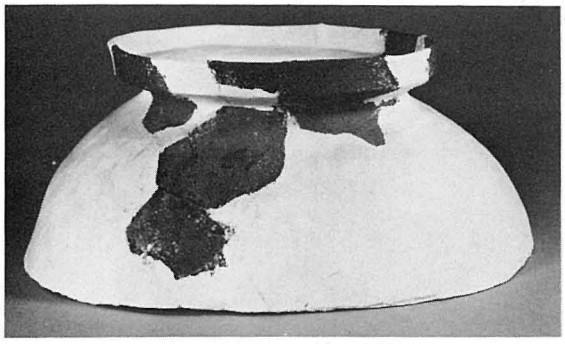


57-23 塼



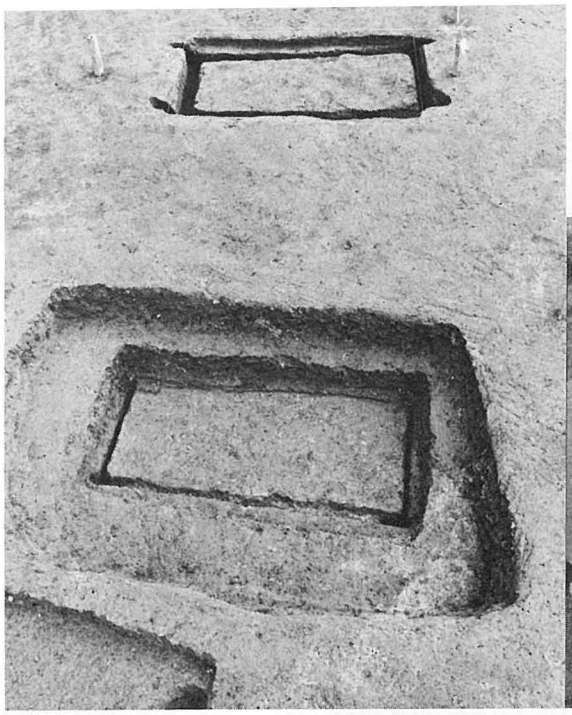
57-24 緑釉陶器

## 多々良蔵ノ元遺跡



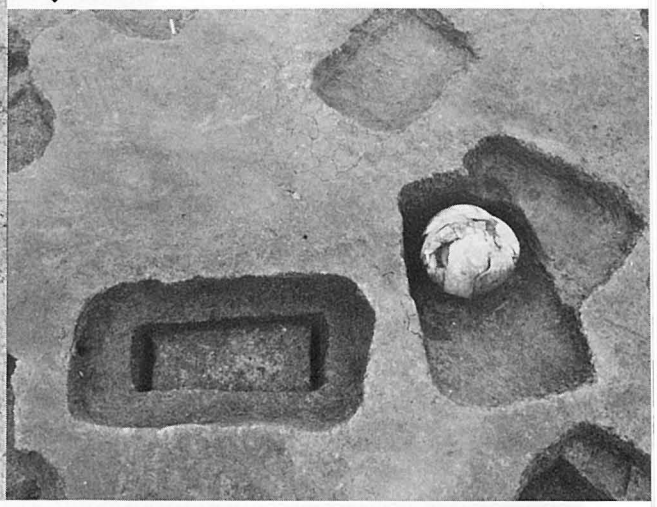
57-19 土師器

57-25 土師器　　57-26 タコ壺

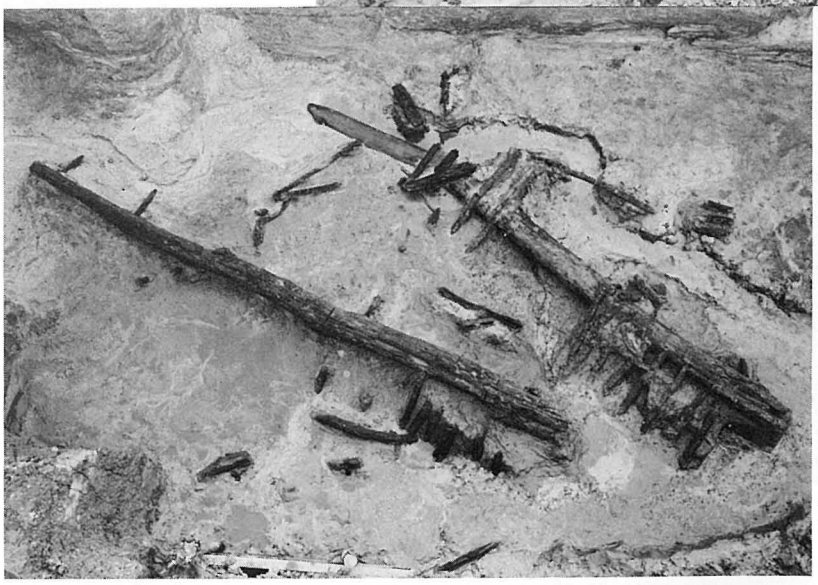


← 板付遺跡　第1区　土壙木棺墓

↓ 板付遺跡　第1区　甕棺墓、土壙木棺墓



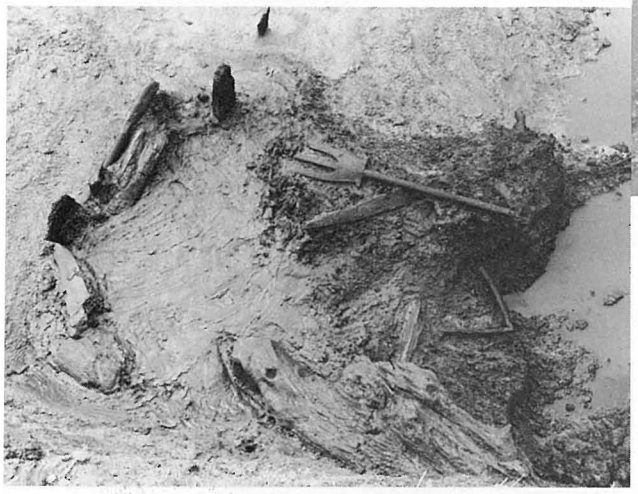
板付遺跡　第2区　矢板列
(弥生時代前期)



板付遺跡　第3区　堰状遺構
(弥生時代中期)

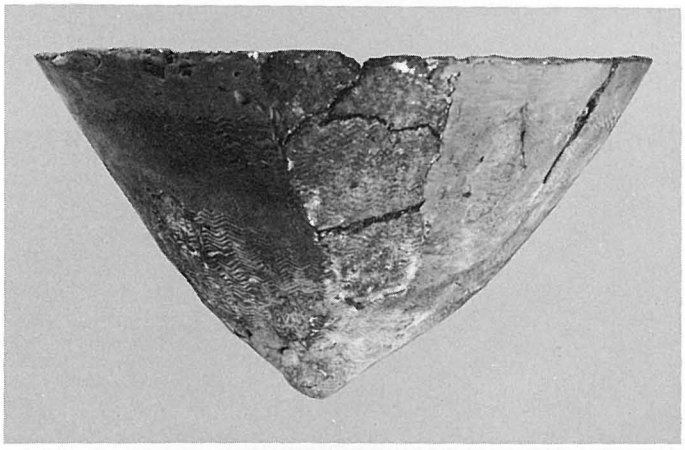
板付遺跡　第３区　杭列(弥生時代中期)

板付遺跡　第２区　旧河岸での土器出土状態
(弥生時代中期)

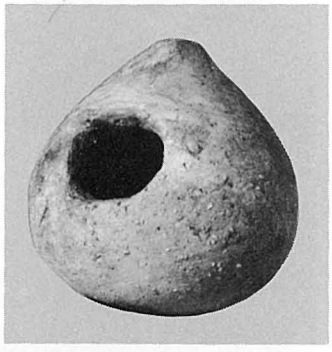


60-32 三又鋤、60-35 網枠の出土状態(第２区、弥生時代中期)

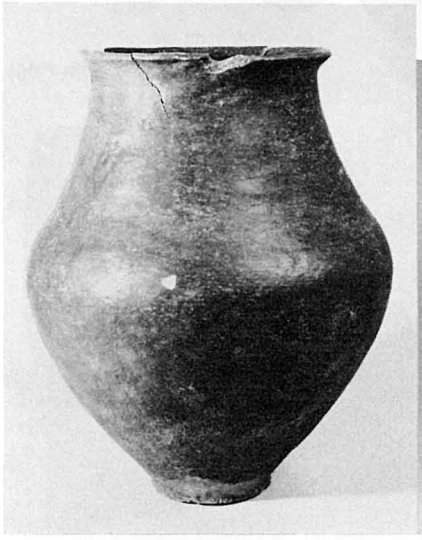
60-2 夜臼式土器



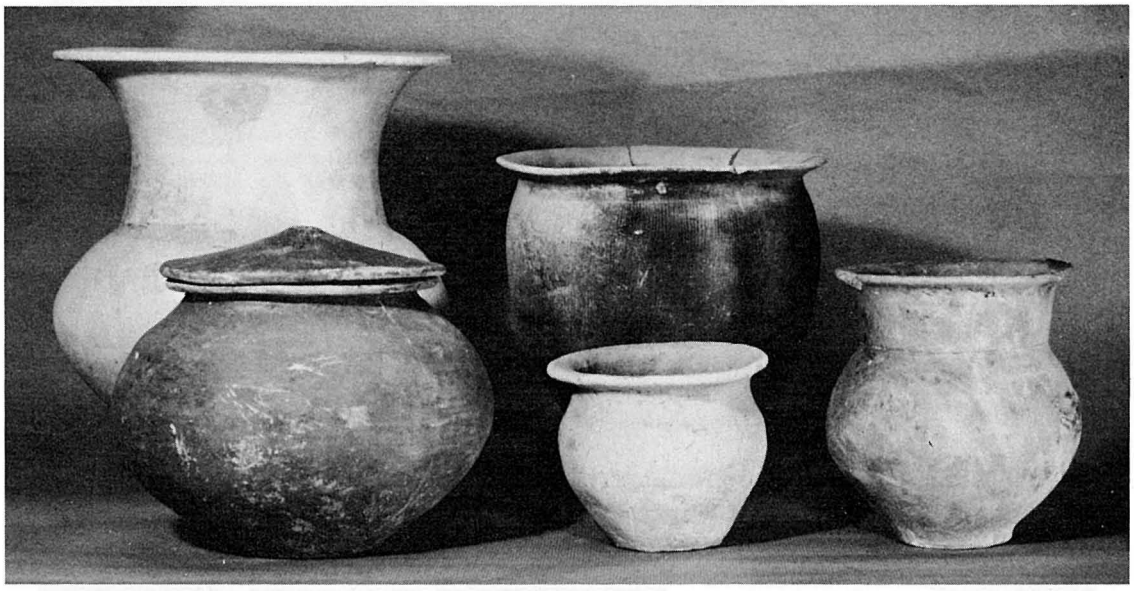
60-1 縄文土器



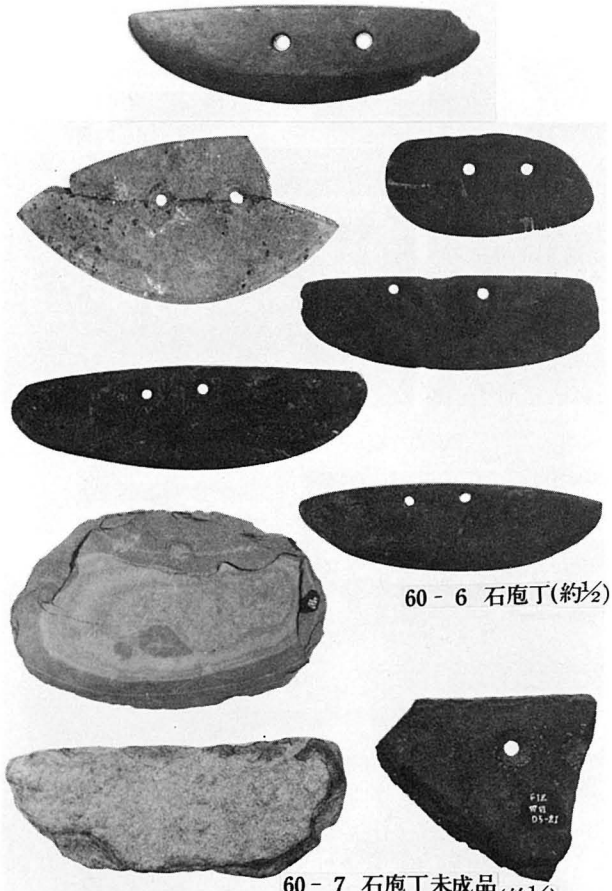
60-29 弥生土器



60-3　弥生土器(前期)

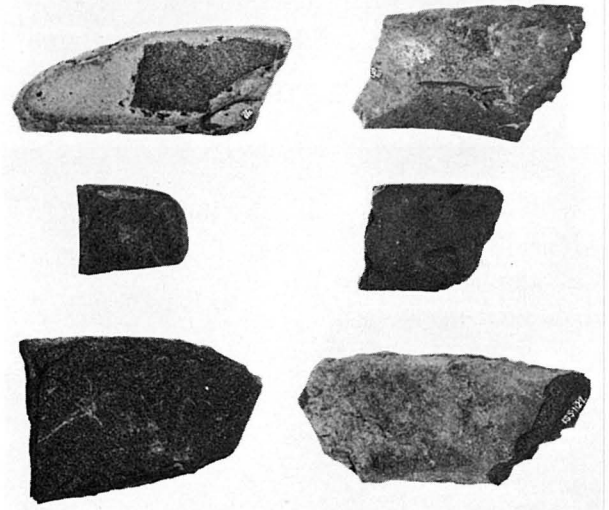


60-4　弥生土器(中期、宝台II式)



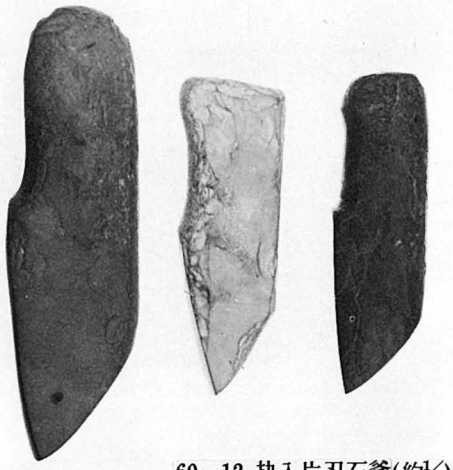
60 - 6 石庖丁(約1/2)

60 - 7 石庖丁未成品(約1/2)

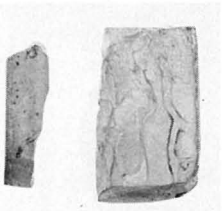


60 - 8 石鎌(約1/2)

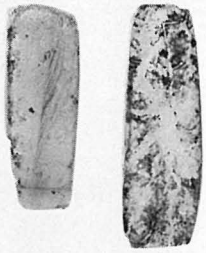
60 - 9 太形蛤刃石斧(約1/2)



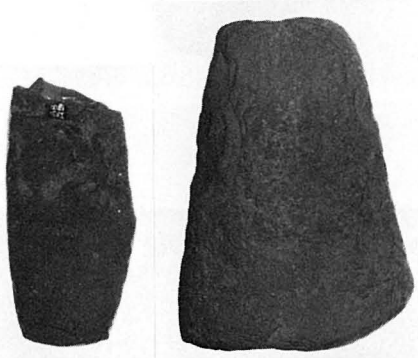
60 - 12 抉入片刃石斧(約1/2)



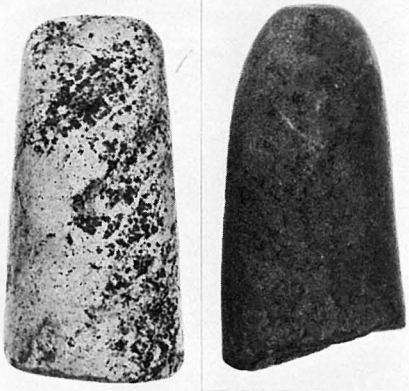
60 - 11 扁平片刃石斧(約1/3)

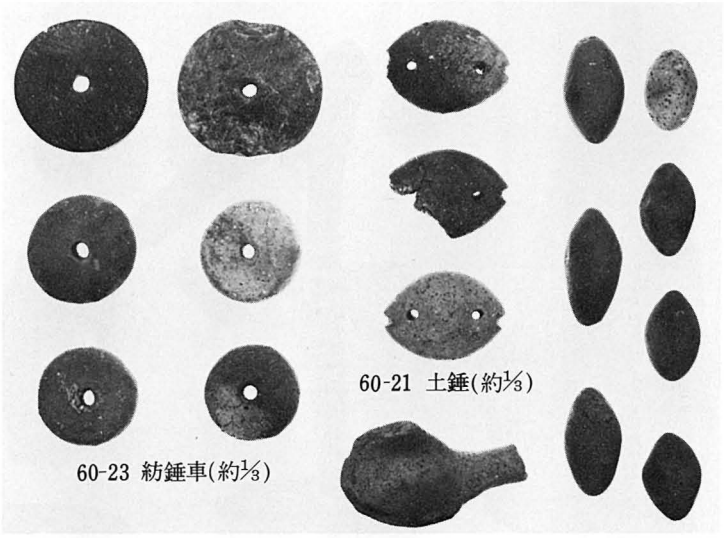


60 - 13 柱状片刃石斧(約1/3)



60 - 10 石斧(約1/2)





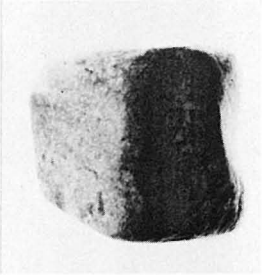
60-21 土錘(約1/3)

60-23 紡錘車(約1/3)

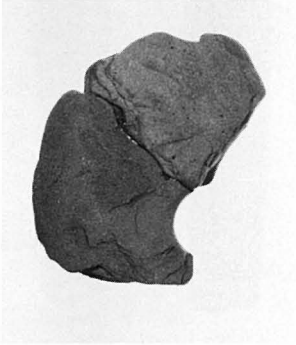
60-23' 土製さじ　60-22 投弾(約1/3)

60-20 石錘(約1/3)

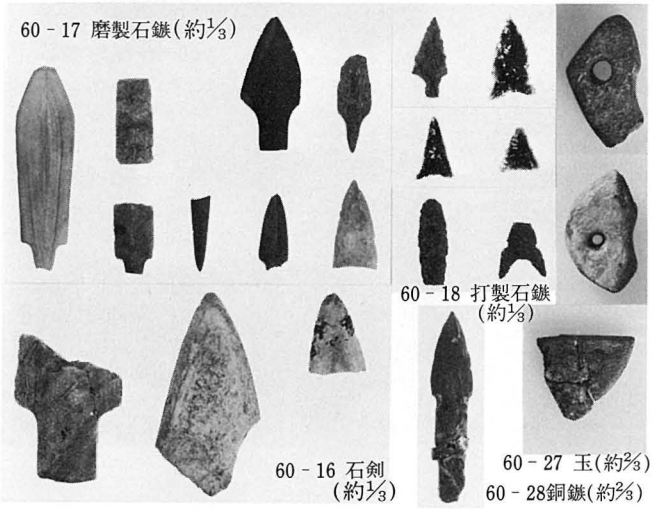
60-15 穿孔用石器(約1/3)



60-25 鋳型(約2/3)



60-14 環状石斧(約1/3)



60 - 17 磨製石鏃(約1/3)

60 - 18 打製石鏃(約1/3)

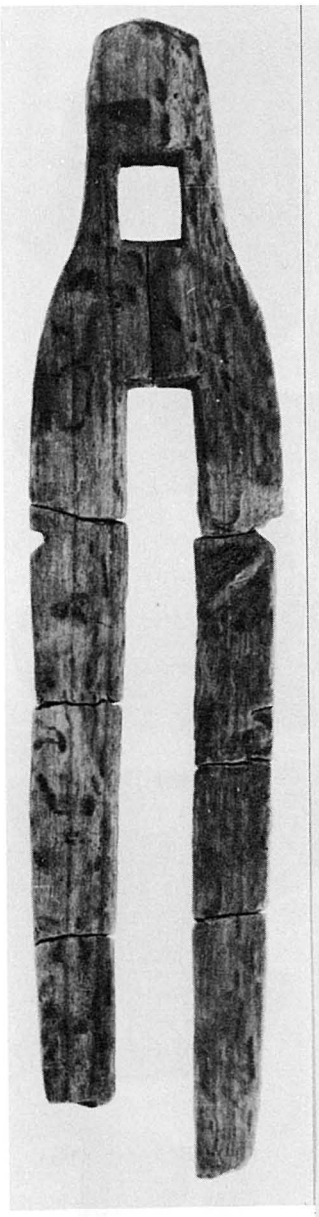
60 - 16 石剣(約1/3)

60 - 27 玉(約2/3)

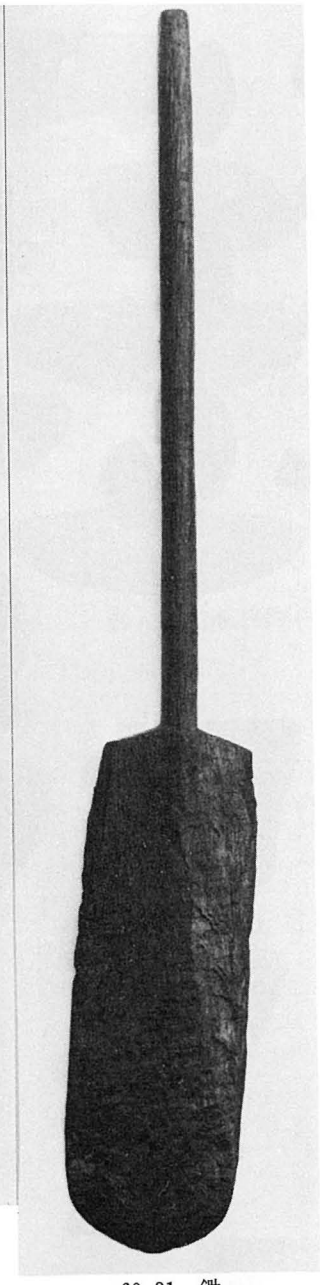
60 - 28銅鏃(約2/3)

60-38 刀子柄

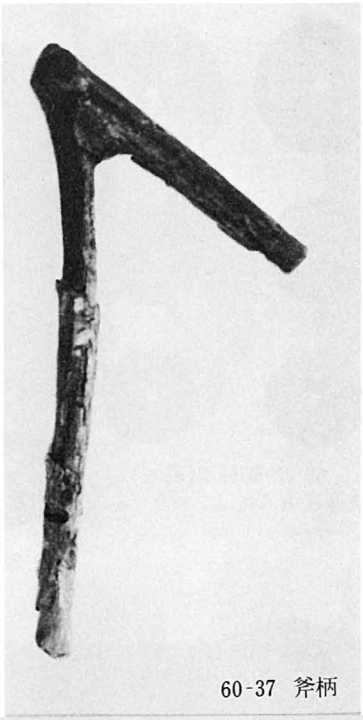
60-26 鉄斧



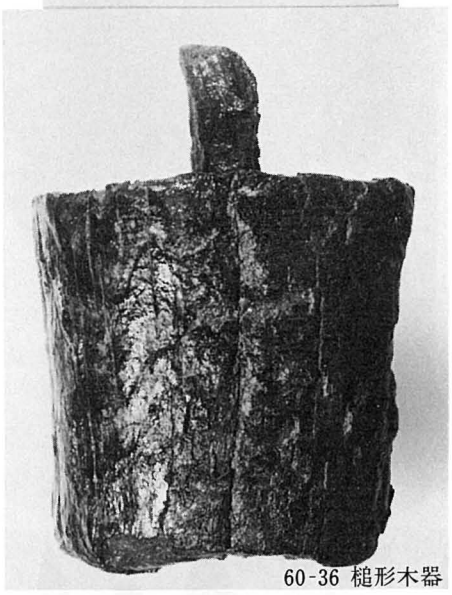
60-33 二又鋤



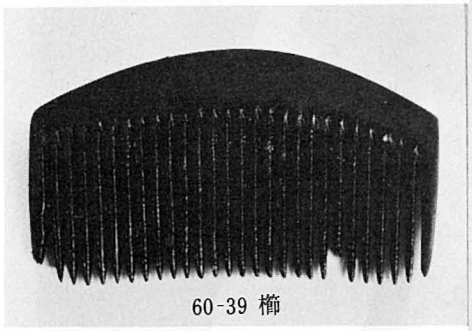
60-31 鋤



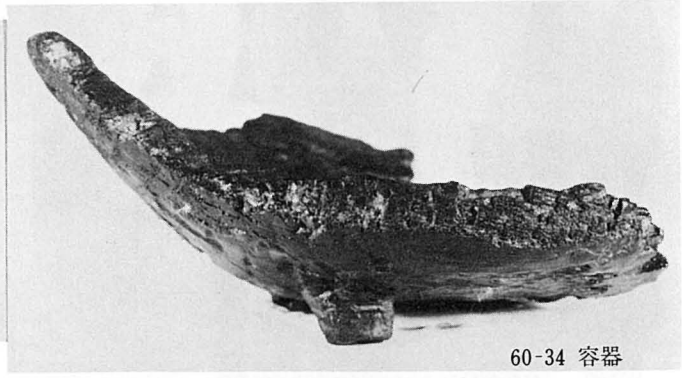
60-37 斧柄



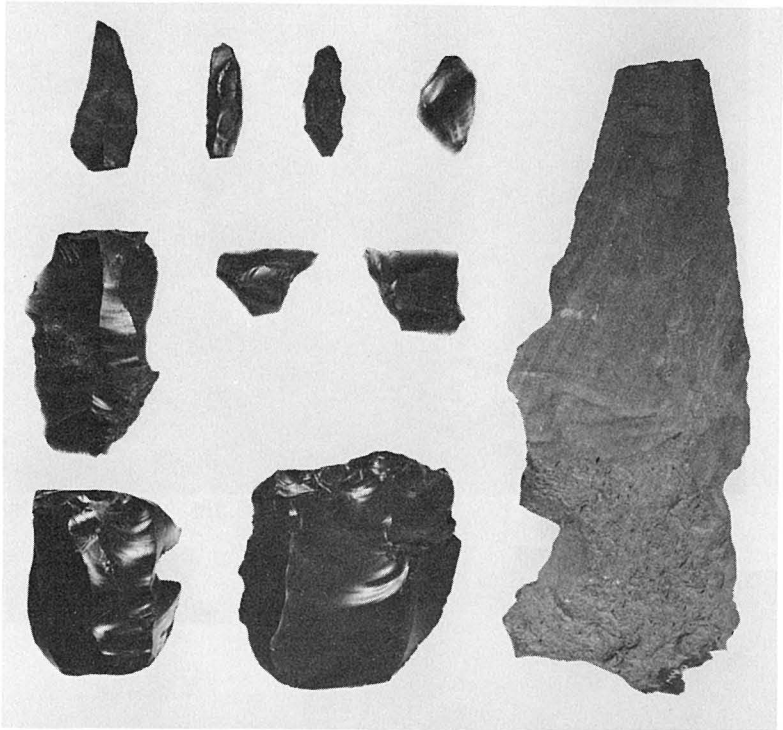
60-36 槌形木器



60-39 櫛

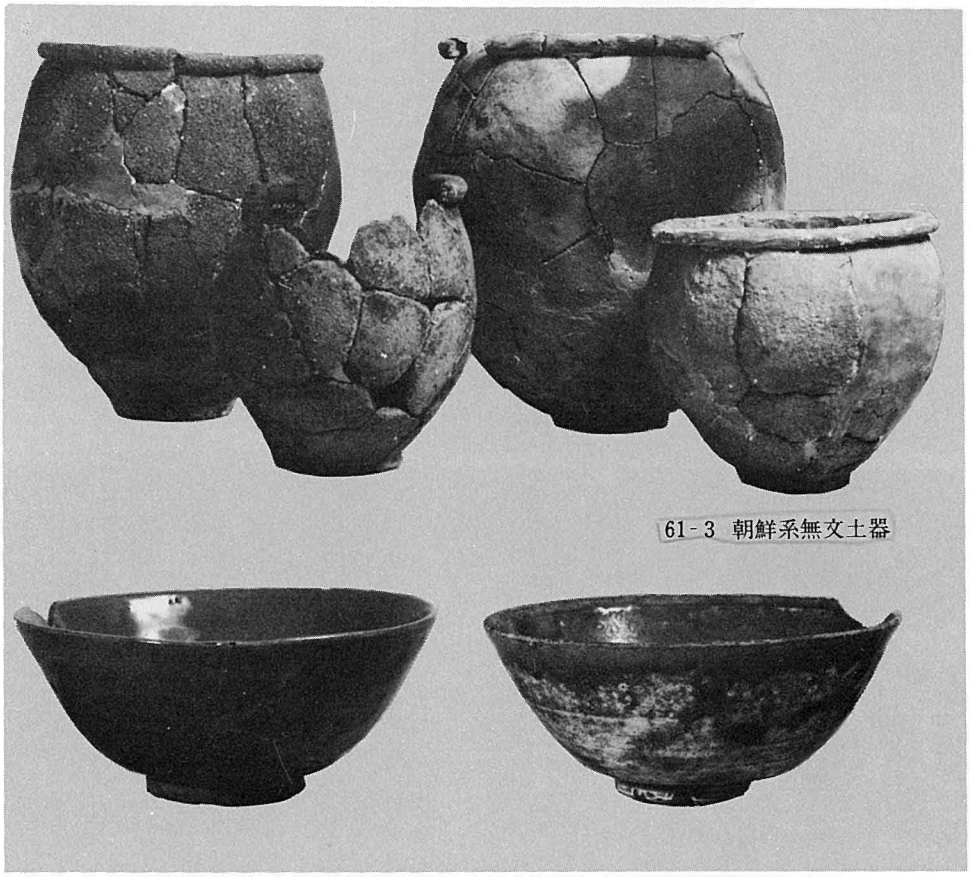


60-34 容器



61-1 石器(先土器時代)

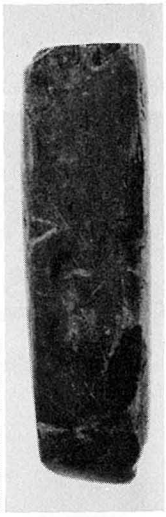
61-2 夜臼式土器



61-3 朝鮮系無文土器

61-9 青磁碗

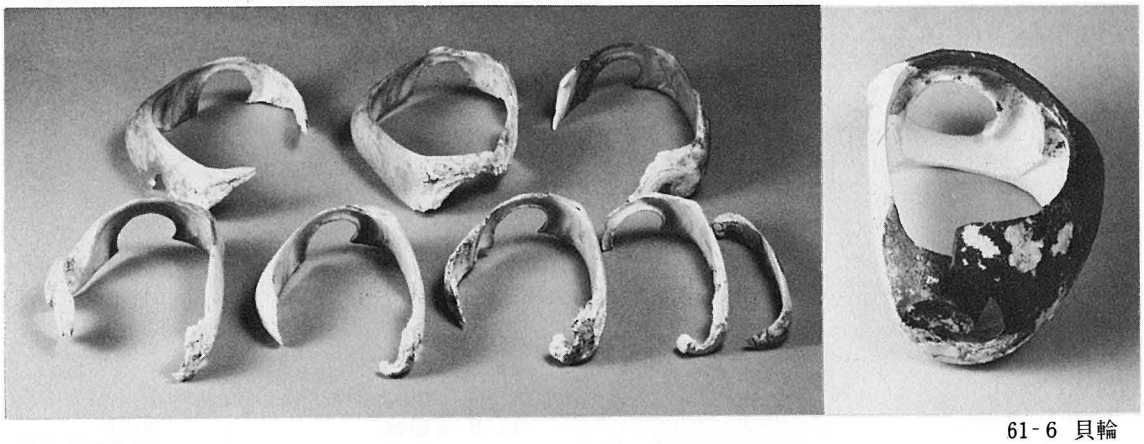
61-4 玉(約½)



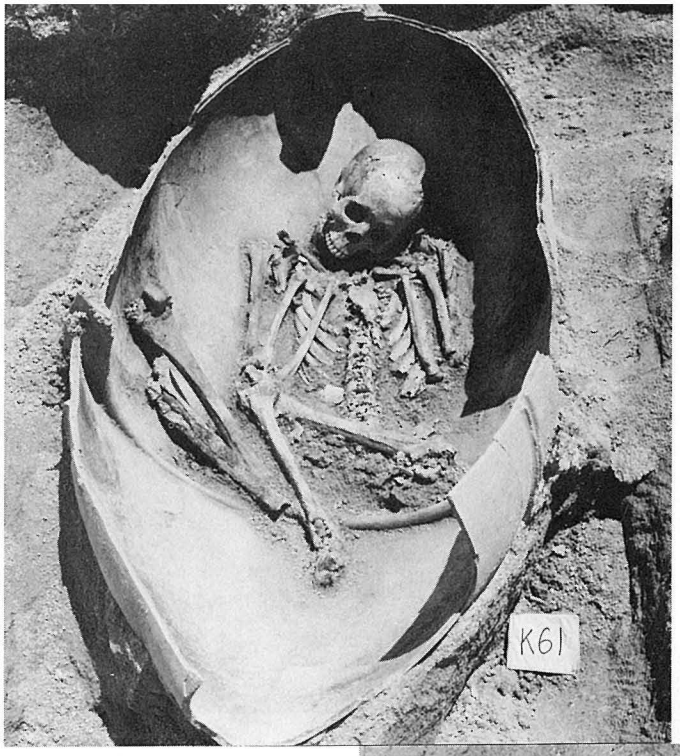
61-5
扁平片刃石斧

諸岡遺跡　A区　甕棺墓地

諸岡遺跡　B区　2号甕棺墓

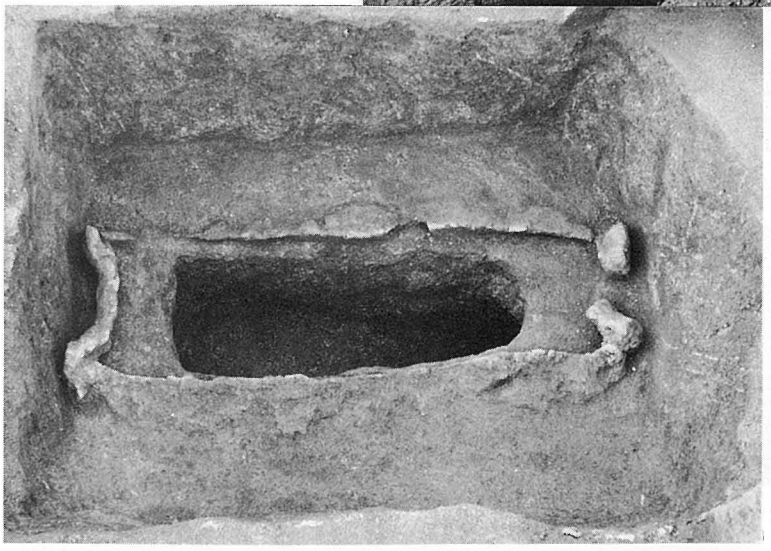


61-6 貝輪

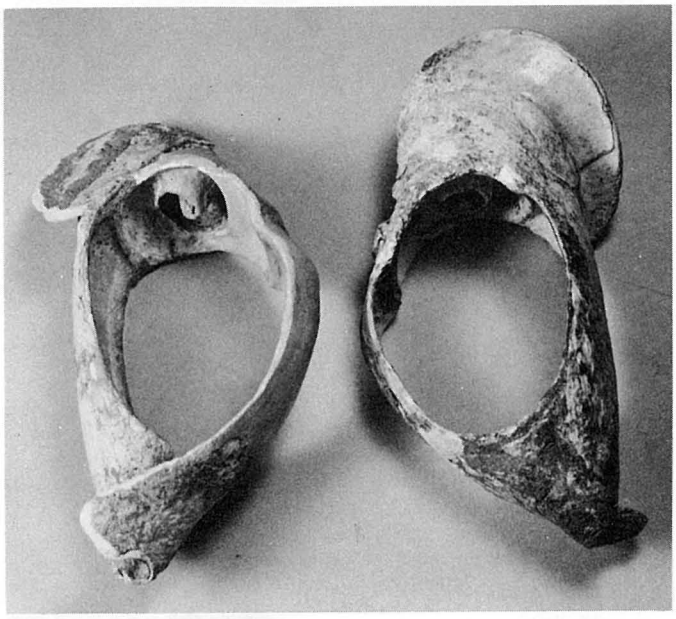



金隈遺跡　第61号甕棺墓

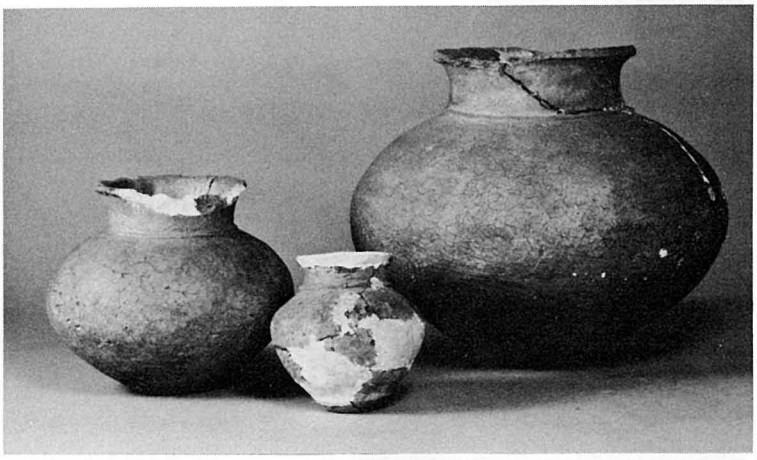
金隈遺跡　貝輪を着装する人骨
(第103号甕棺墓)



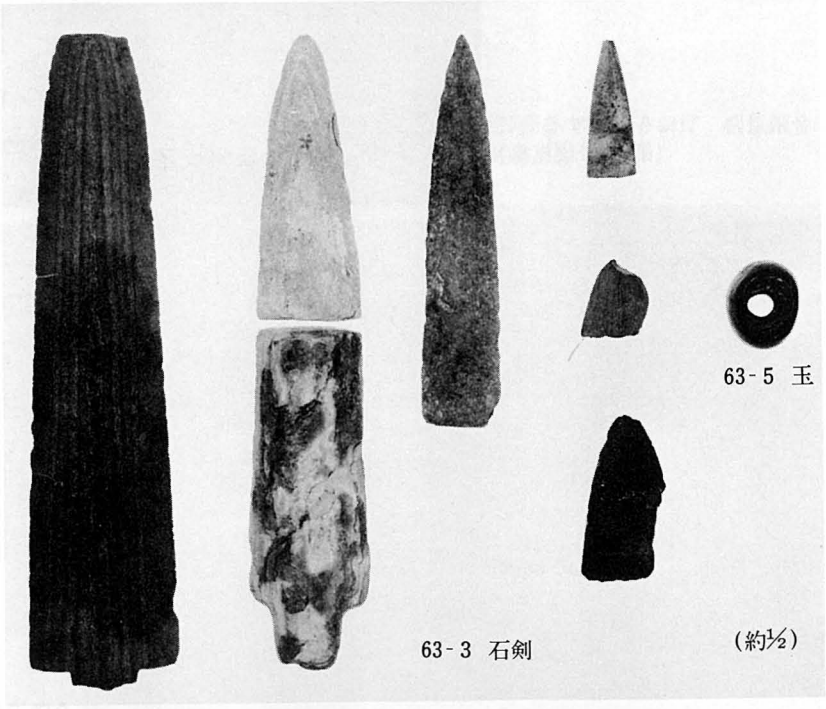
金隈遺跡　第3号土壙墓



63-4 貝輪



63-2 弥生土器

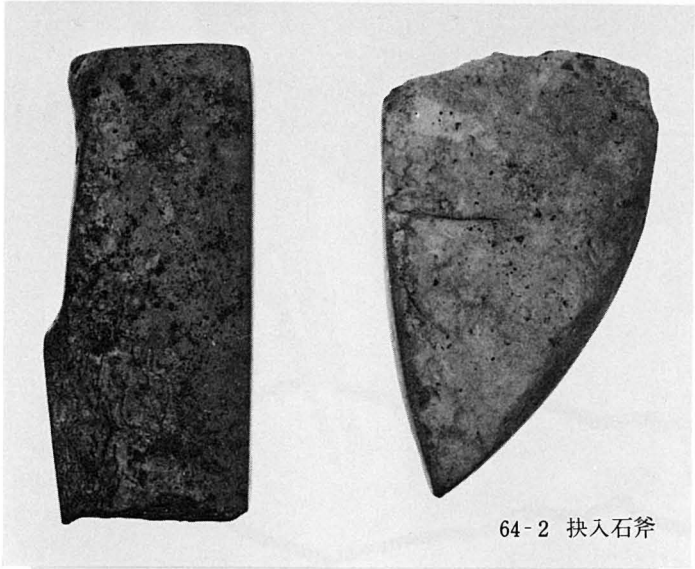


63-5 玉

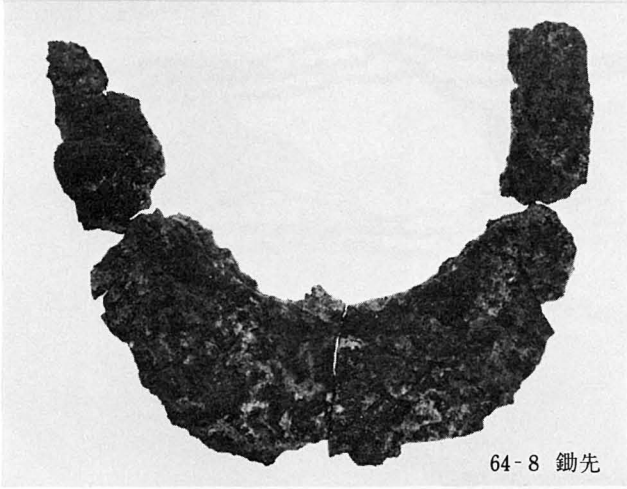
63-3 石剣

(約½)

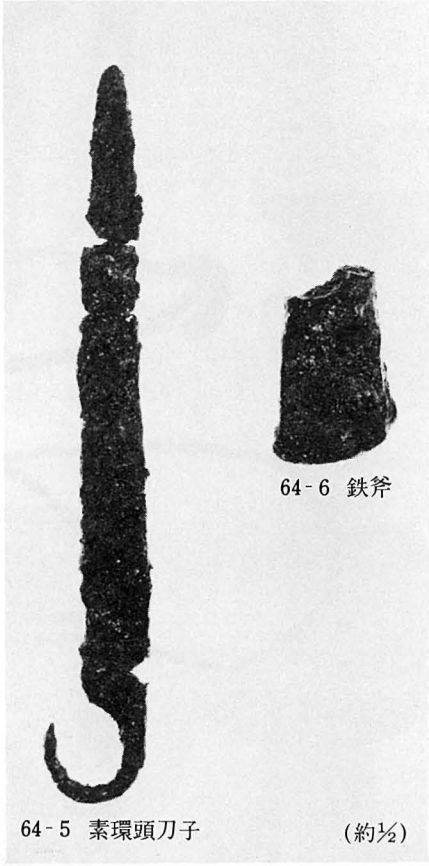
宝満尾古墳石室



64-2　抉入石斧



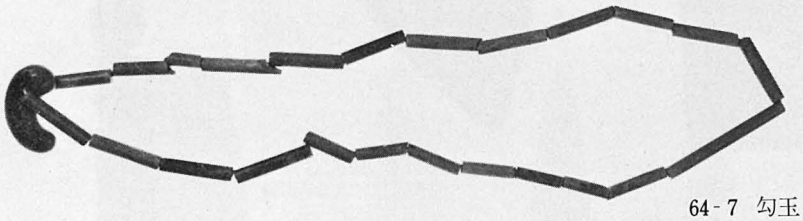
64-8　鋤先



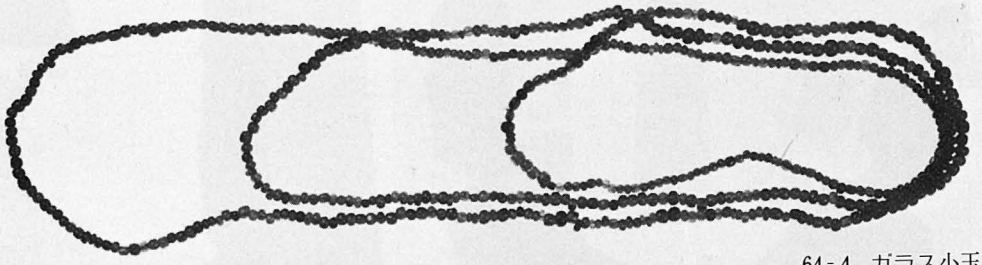
64-6　鉄斧

64-5　素環頭刀子　(約½)

64-3 内行花文明光鏡（約1/1）



64-7 勾玉、管玉

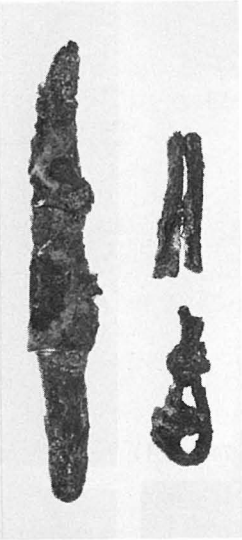


64-4 ガラス小玉

64-9 勾玉、小玉 （約1/2）

65-1 須恵器

65-2 土師器

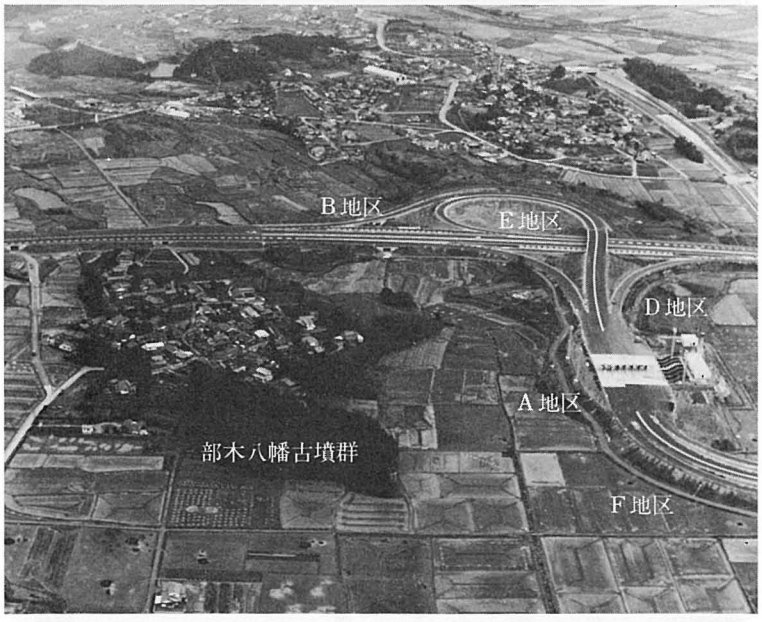


65-3 直刀　65-5 鉄鏃　65-4 刀子　65-6 毛抜

65-7 須恵器

# 67 蒲田遺跡(1)

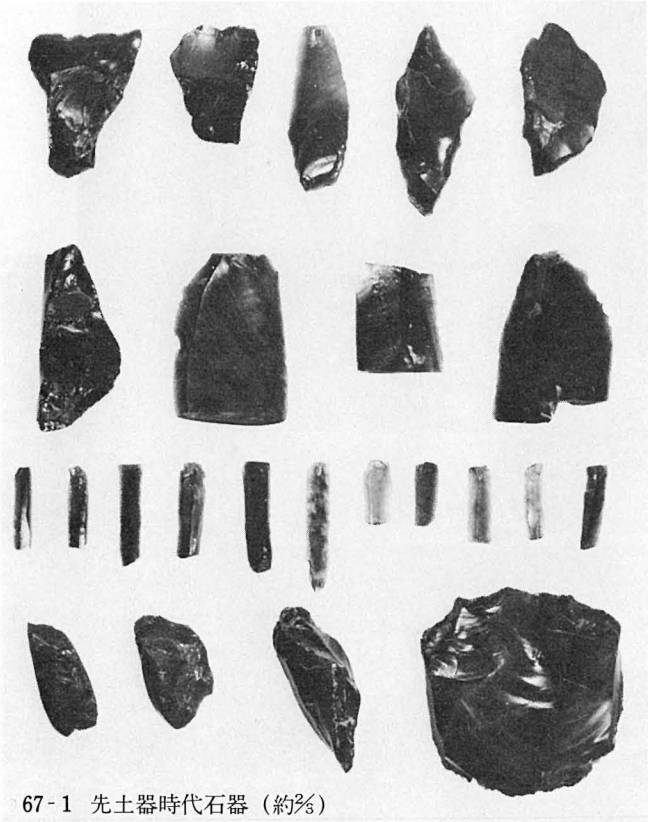
蒲田遺跡（1972年８月）




蒲田遺跡（調査後1974年11月）

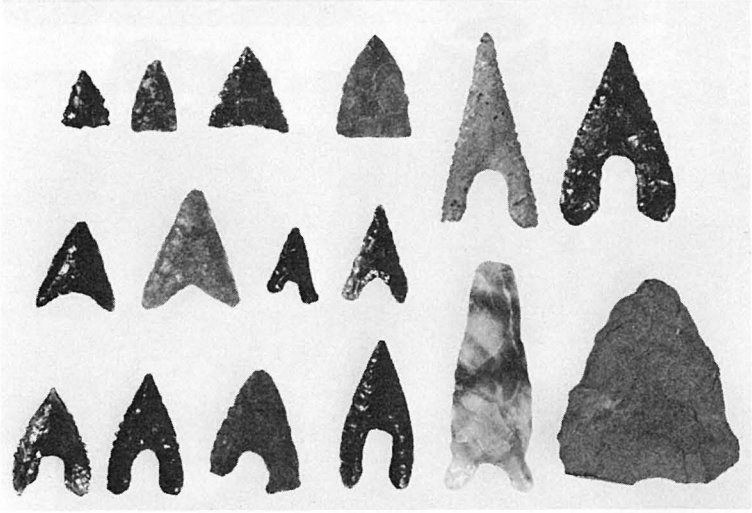
蒲田遺跡　Ｄ地区　敷石遺構

蒲田遺跡　Ｄ地区　住居址全景

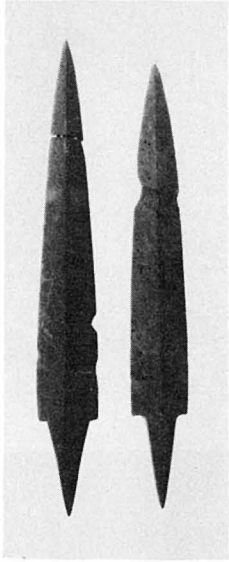


67-1 先土器時代石器（約2/3）

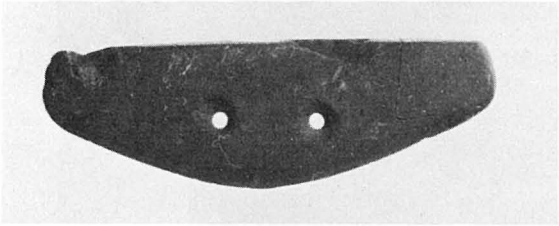
67-8 筒形器台



67-2 打製石鏃（約2/3）

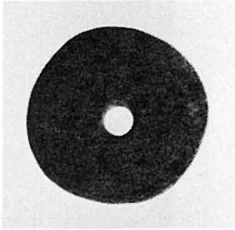


67-6 磨製石鏃

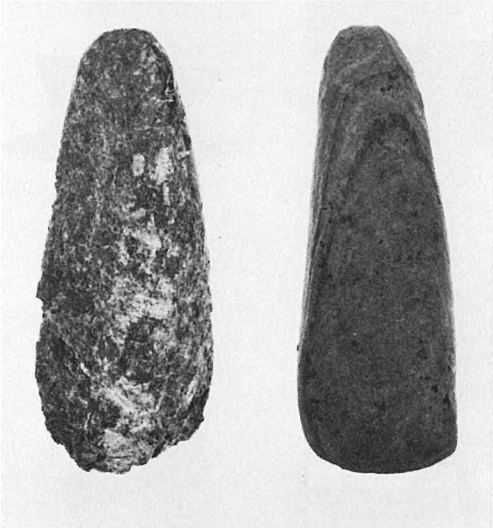


67-5 石庖丁

67-4 扁平片刃石斧



67-7 紡錘車



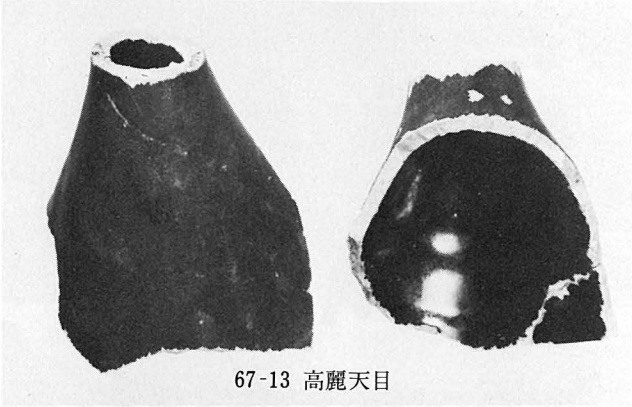
67-3 石斧

67－12 こしき

67-9 須恵器

67-10 土師器

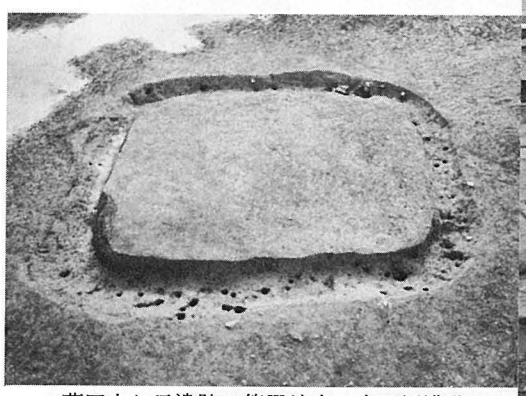
67-11 ミニチュア土器



67-13 高麗天目

66-1 青磁・白磁

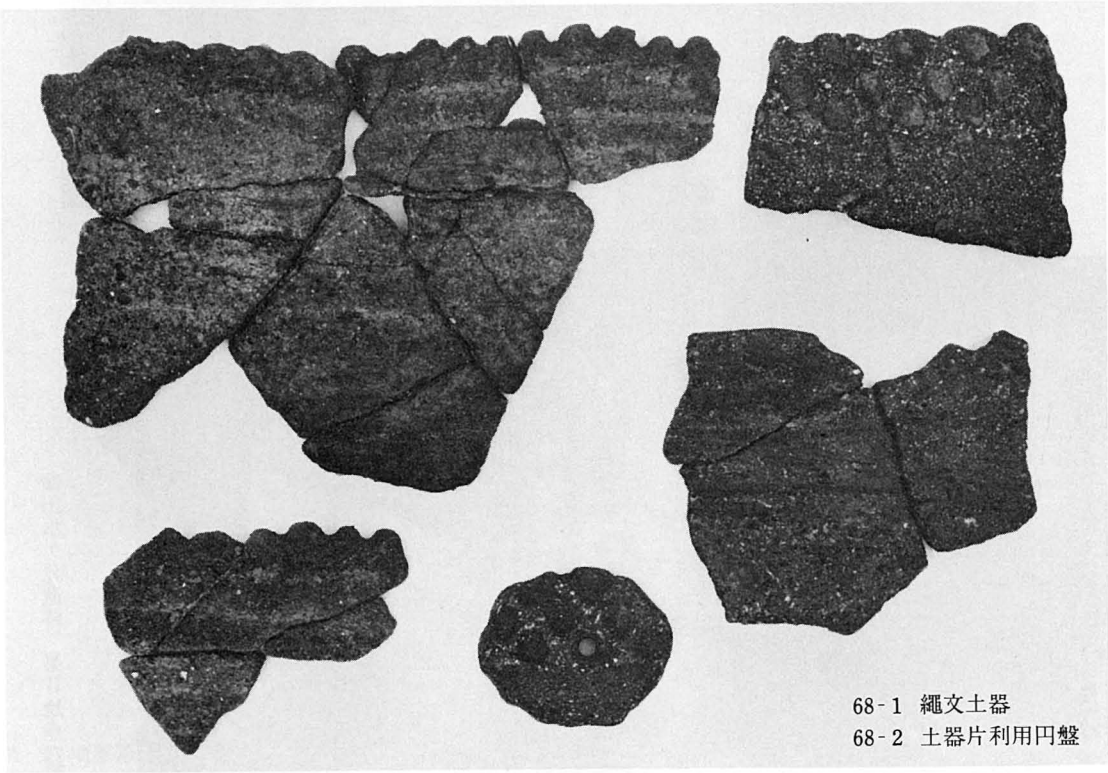
蒲田水ケ元遺跡　第II地点(航空写真)



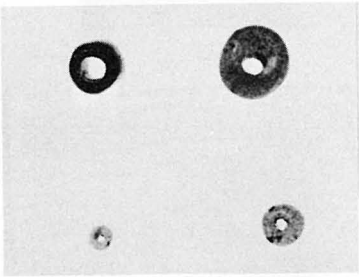
蒲田水ケ元遺跡　第III地点　方形周溝墓

蒲田水ケ元遺跡　第II地点

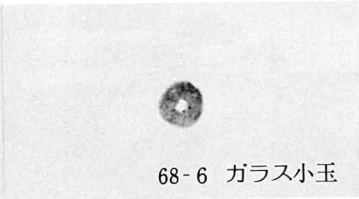
蒲田水ケ元遺跡　第II地点　環溝をともなう高床倉庫址



68-1　縄文土器
68-2　土器片利用円盤



68-5　ガラス小玉



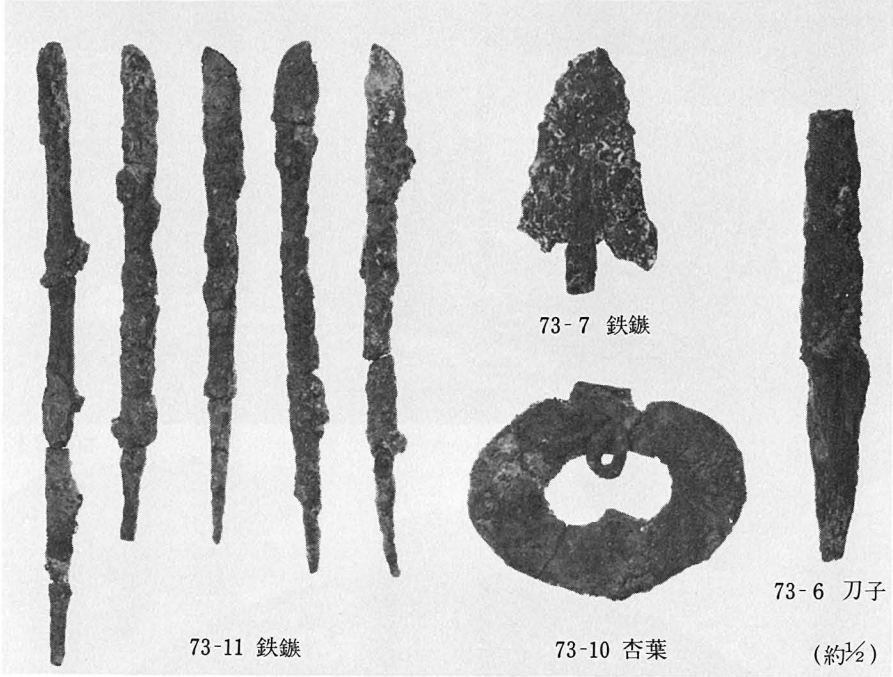
68-6　ガラス小玉

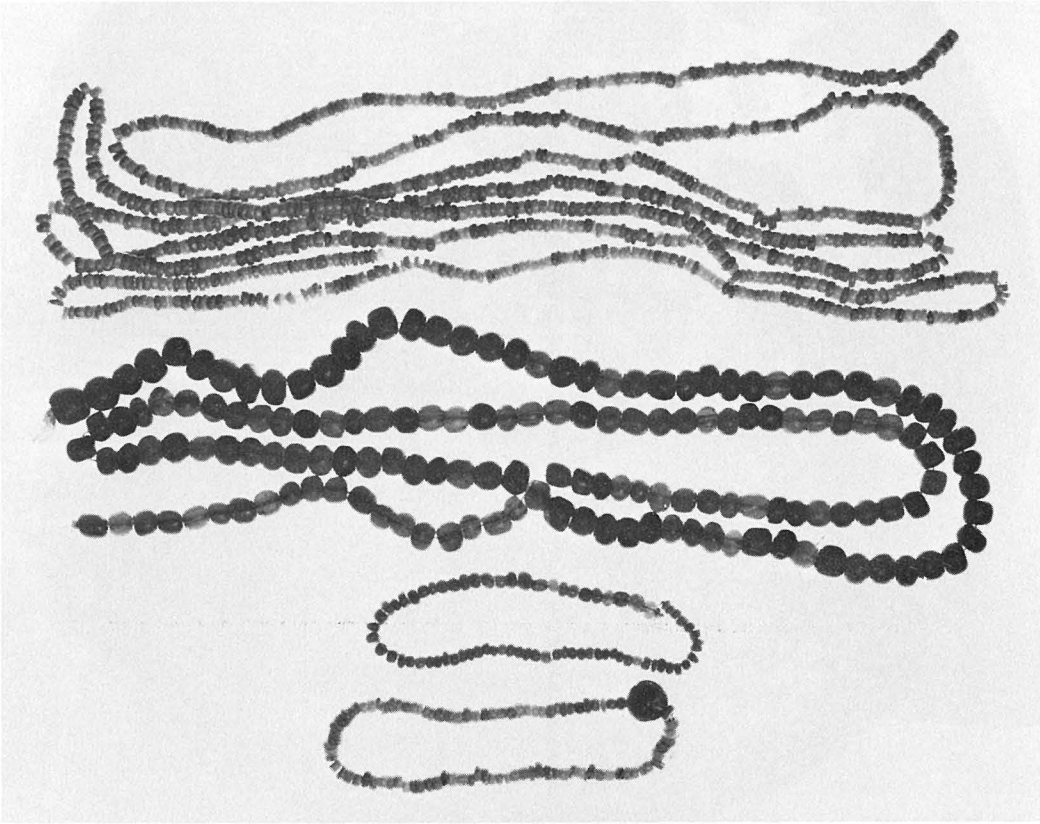
69-1　磨製石剣

68-4　弥生土器（器台）

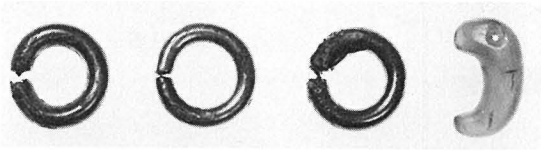
和田部木原遺跡全景

71-1　三角縁神獣鏡(面径22.6cm)

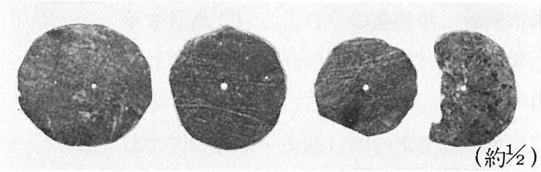


73-4 玉(約½)



73-12 金環　73-9 勾玉



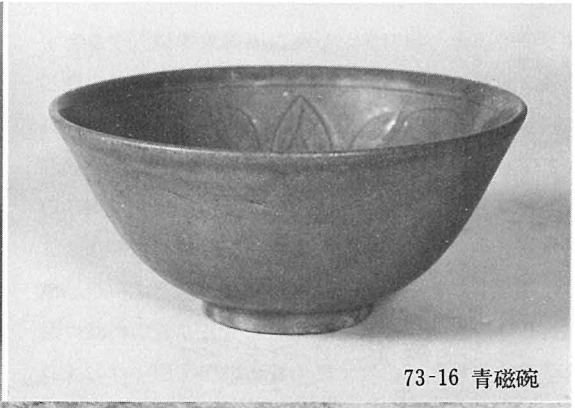
(約½)

73-5 滑石製模造品

73-8 須恵器

73-14 青磁碗

73-15 青磁碗



73-16 青磁碗

上和白　第7号遺構

# 遺 跡 の 概 要

ここに、この10余年の間に福岡市内で緊急調査された各遺跡の概要をおさめます（1977年３月まで）。これらの遺跡は、福岡市教育委員会文化課、福岡県教育委員会文化課あるいは市教育委員会の委託を受けた大学等が、宅地造成・道路建設などさまざまな開発に先立って緊急調査したものです。そのうち保存されることになったのはごく少数で、大部分はすでに破壊・消滅しています。なお、保存整備を目的として範囲確認等のために調査された遺跡も少数あります。それらについても以下に収録しました。また、調査されることなく破壊された遺跡のうち、２遺跡もおさめました。

遺跡名の前の番号は遺跡番号で、巻末の遺跡分布図の番号と同じです。遺跡の地名は、福岡市を省いて区名からはじめます。地名のあとの〈 〉内数字は、その遺跡と出土品（今回の展示品）の写真を掲載した図録ページです。各遺跡末尾の文献は原則として発掘調査報告書のみをかかげます。文献のないものは発掘報告書が未刊行です。各遺跡末に執筆者名を記します。執筆者名のないものは、報告書等から歴史資料館がまとめたもので、文責は歴史資料館（後藤直）にあります。付図は報告書から転載しましたが、転載にあたって報告書の図より縮少し、それにともない多少改変したものがあります。

## 1　小葎（こもぐら）遺跡（西区今津大字大原）〈1～3〉

急激に進む開発に対して、どのように自然や文化財を守っていくかは行政の急務である。文化財に関しては、都市計画法による事前審査に際して、1000m²以上の開発行為に対し、事前に文化財の有無についての審査をしているが、都市計画法の対象とならない病院、駅舎などの建設、農地転用および1000m²以下の小規模開発については、まったくチェックできず、いたずらに遺跡がこわされていくのを見すごさざるをえないのが現状である。

本遺跡は、以前、畑耕作中に土器や石器が出土し、これらは今津小学校に保管展示されており、本市西端部における弥生時代の状況、特に糸島平野との関係など地理的に重要な位置にあり注目されていた。この地に病院建設の計画が立てられ、1976年夏より工事が開始された。この時点では、先のように都市計画法の対象とならないためにブルドーザーによる整地が行なわれ、遺跡の大部分は完全に姿を変えつつあったが、偶然にも本市文化課技師が発見するところとなり、本調査するまで工事を中断することになった。

本遺跡は、元寇防塁の西端部が接する柑子岳より派生する小丘陵の東斜面にあり、北には、大原集落ごしに能古島・志賀島をのぞみ、まさに絶好の環境に恵まれている。本調査に先立ち、遺跡の残存状況と範囲確認のため試掘調査を実施した結果、斜面に直径約６m程の窪地があり、ここに弥生時代中期から後期終末までの遺物が堆積していることが判明した。遺物はおびただしい土器類の他に石錘・砥石・紡錘車などの石器類や動物の骨などがあり、なかでも酒器と思われる注口土器や小形手捏（てづく）ね土器の出土から、本遺跡が単なる土器すて場、あるいは自然に堆積した遺物の包含層ではなく、ある種の特別な行為の結果であろうと予想された。

本調査は、試掘調査の結果にもとづき、1972年２月～４月実施した。土層の堆積は３層に分けられ、土器の形態的変化も層位別に把握できる可能性があったために、１層ごとに撮影・実測・遺物の取りあげをくりかえすことにした。すでにブルドーザーによって露出している層をⅠ層とし、その下をⅡ層・Ⅲ層と呼んだ。

Ⅰ層の厚さは約20cmあり、最も遺物が多く、土器のほとんどは原形を保ってはいないが、接合復原できる。

石錘の量も多くかつ形もバラェティに富み、特にガラス小玉の出土は試掘の予想を裏付けた。II層の厚さは約15cmで、遺物の出土はやや少なくなり、I層が弥生時代後期終末の土器が主であったのに対し、II層は弥生時代後期前半が主となり、わずかに弥生時代中期後半をも含む。石錘などの石器類の出土量は変化なく、獣骨の出土が多くなる。最下層のIII層は極端に遺物の出土量が少なくなり、土器は弥生時代中期中頃のみとなる。石器は石錘・石鏃・石庖丁などである。

これら遺物包含層を取りのぞくと、直径約11mの円形竪穴住居跡が現われた。この住居跡は地山を深さ約40cmに掘りこんで水平な床をつくり、壁には深さ約10cmの溝を全周させている。主柱穴は7個あり、ふつう中央に見られる炉跡は壁に片寄ってあり、床面に密着している土器からこの住居跡は弥生時代中期中頃に作られたことが判明した。この住居跡は、当時の他の遺跡例と比較するとかなり大きい。

この住居跡が廃絶された後、窪地になっている所に少なくとも 200年以上の長期にわたって遺物が堆積したことになる。周辺部がすでに削平されているために、他にも住居跡があるかどうかは不明であるが、出土した遺物量からは、その堆積期間を考慮してもかなり大きな集落が付近にあり、意識的に場所を設定して遺物を投置したことを感ぜしめる。

さらに土器・石器の器種・種類の豊富なこと、獣骨・ガラス小玉などの出土は、単に本遺跡の性格を追究するうえで重要な資料であるばかりでなく、弥生時代の生活を究明するうえでも有効な資料である。たとえば石錘だけを取りあげると、その使用方法は多くの民俗例を参考にするなどこれからの研究に負わねばならないが、網漁具の一部として用いられていたとすれば、網の設置や引きあげには、共同体的な集中労働を必要としたことであろうし、魚の習性を利用した網であったはずで、当然魚種も限られてくる。とすれば当時の今津湾の魚類や村落、さらには食生活までも明らかになるわけである。このように本遺跡の調査成果は、弥生時代の社会を知りうるばかりでなく、自然的な環境をも知ることができ、出土遺物の量ばかりでなく、種々の面から見て全国でも有数な遺跡として位置づけることができよう。 （力武卓治）

〈文献〉柳田純孝「今津の歴史」今津小学校創立百周年記念『今津』所収 1975

## 2 元寇防塁 〈3〉

元寇防塁は今津から香椎までの約20kmの間にあり、生の松原、今津、西新のほか姪浜の向浜・脇、地行など9カ所が史跡に指定されている。これらは鎌倉時代の1276年（建治2年）に築かれた。元寇防塁は古く石築地とよばれ、各地区で規模・構築法・石材の種類などがことなる。調査されたのは次の3カ所である。

生の松原（1968年3月）

今津（1968年8月～9月）

西新（1970年1月～3月）

a 今津地区

毘沙門山麓から柑子岳までの3kmの地区で、おおむね下面幅3m、上面幅2.5m、高さ3mの台形状に積み上げられている。石材は西側⅓は花崗岩、東側⅓は玄武岩、中央部は花崗岩と玄武岩を一定の長さごとに交互に構築している。石材がことなる各々の長さが、各分担工事区の長さをしめすものと考えられる。石材の相違に対応して防塁の構築法・断面構造がことなっている点も注目される。花崗岩で構築された部分は前後を大きな礫で積み上げ、中には砂を入れ上面を小礫でおおっているのに対し、玄武岩の工事区は中まですべて石材で構築されている。今津地区では粘土は使用されていない。

b 生の松原地区

小戸岬から長垂山の 2.5kmで、かつての九大分院裏（現在九大宿舎裏）の地点から西側は花崗岩で構築されているのに対し、東側は砂岩で構築されている。前面は大きな礫をがっちりと積み上げ、背後の1～2mは小礫を裏込めし、更に粘土で補強している。前面から3～7mの間はゆるい傾斜面に15cm内外の円礫が点々と配されていて、のべにつくられている。しかし東側の砂岩側には背後の傾斜面の配石はみられない。防塁の高さは最も残りのよいところで6～7段、1.8mほ

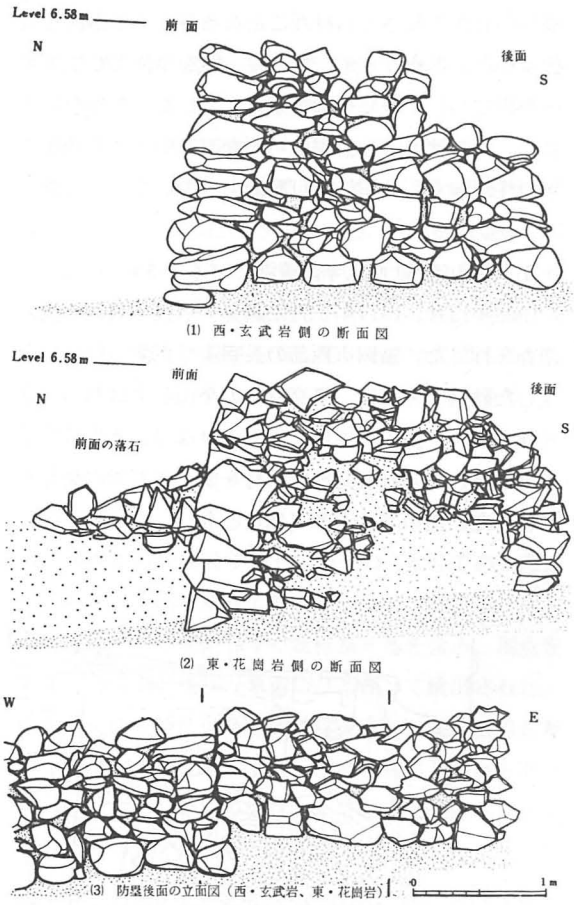
どである。西側にいくほど花崗岩は大きくなり、前後ともがっちりした石積みがみられる。B地点防塁（花崗岩）の前面には玄武岩の石積みがあり、防塁構築後の補修工事を行なったことがわかった。

c　西新地区

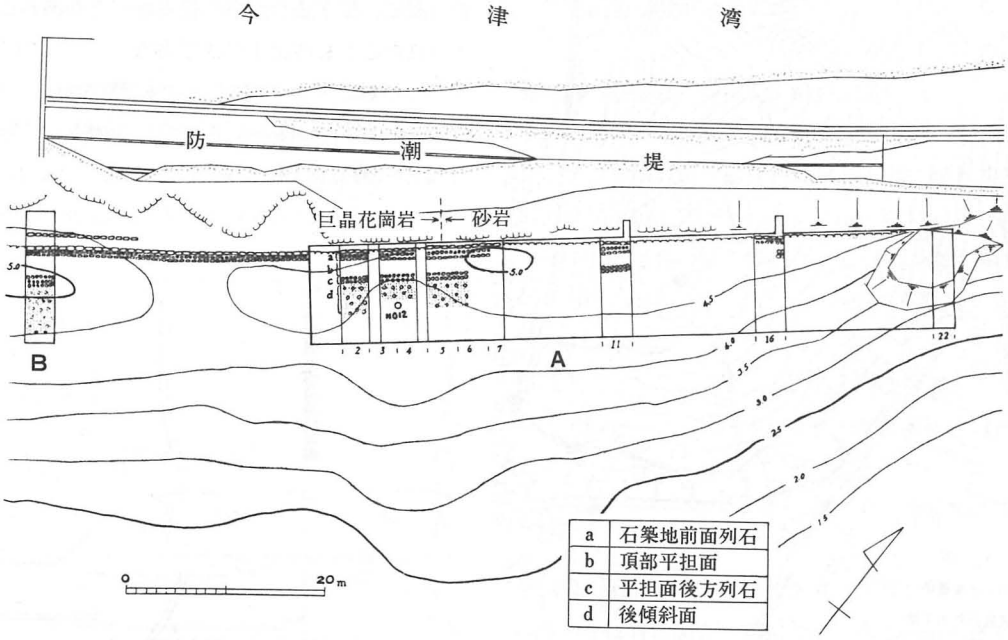
西新地区は、前面から幅１ｍは大きな礫で積み上げ、背後は粘土と砂の互層で補強し、基底部の幅が 3.4ｍと特に幅広いのが特徴である。後面の石積みの下には厚さ20cmの粘土をしき、基盤の役割を果している。このように粘土による基盤工事を行ない、前面と後面の間を粘土と砂の互層で補強する構築法は生の松原や今津とはことなっている。

以上の３ヵ所では、防塁の築造工事に関連するような遺物は発見されていないが、今津地区では、防塁から 500ｍ南にはなれた砂丘上の亘過（たんが）遺跡で中世の土製の鼎（かなえ）・摺鉢（すりばち）などが出土しており、防塁築造工事と関連する遺跡として注目される。

調査の結果、上にのべたように各地区ごとに防塁の築造法・石材がことなることが明らかにされた。生の松原地区は肥後が分担したところで、東側はのちに肥前国が警固にあたっている。今津地区は日向・大隅両国の分担地区で、分担工事の実態を明らかにすることはできないが、「大隅国石築地役配布案」の郡・院・




今津・長浜の防塁実測図（II区－３）




生の松原地区　A・B付近の地形と防塁出土状態

郷別の負担の長さと石材がことなる各々の工事区を対比すると、あらかじめ、郡・院・郷を単位として工事区を設定し、一斉に築造工事に着手したことが想定される。西新地区の分担国は明らかでないが、筑後国の可能性が強く、各国により築造工事の内容がことなっている。 (柳田純孝)

〈参考文献〉福岡市教育委員会「生の松原元寇防塁発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第3集 1968，同「今津元寇防塁発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第4集 1969，同「西新元寇防塁発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第5集 1970

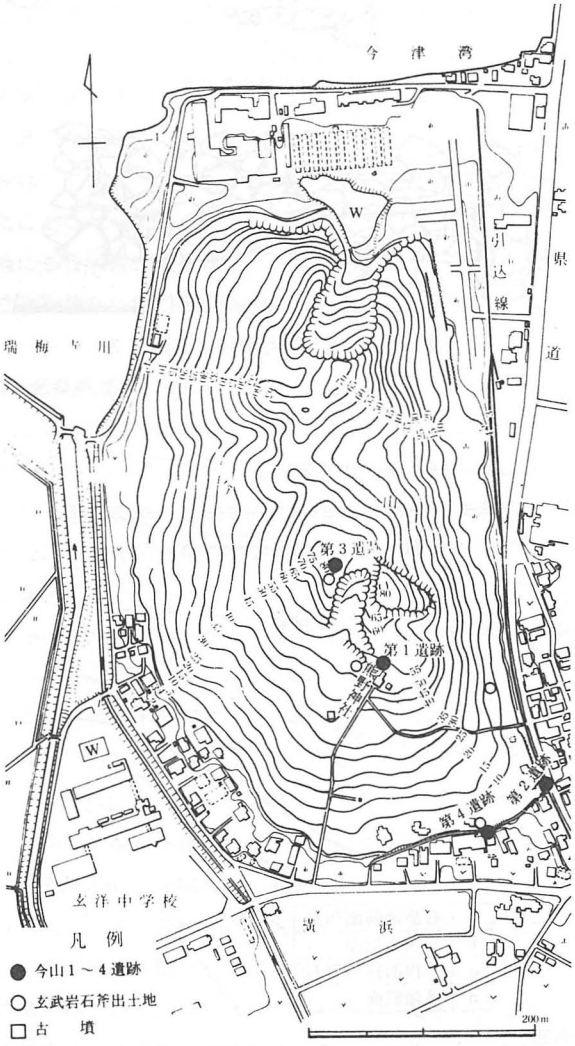
### 3　今山遺跡(西区今宿横浜)〈4～5〉

1968年12月、1974年3月に調査。前後に数回の遺跡踏査を行った。福岡市西部の長垂より西北へ弓状に発達した砂嘴の先端に、標高82mの今山とよばれる独立丘陵がある。山の南半は玄武岩よりなり、弥生時代前期末以降、この硬質堅緻な石材を使って石斧の製作が行われた。山の北は志摩（島）となり、端梅寺川の河口にさえぎられている。東は早良・福岡に、西は糸島平野につながる。南には青木の小平野がひらけ、周囲には稲作農耕に適した平野地帯がひかえている。

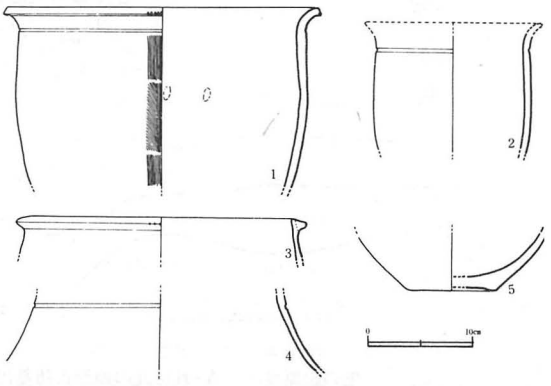
今山の中腹の熊野神社には石材の粗(あら)ごなしを行った一種の工房がかっては存在したが、今はとりつくされて痕跡的にしか残っていない。調査箇所は南側の山麓で、廃棄された玄武岩塊・石屑片・土器・石斧未成品が包含層中に残っている。工房址と想定される部分は削平された可能性が強いが、小範囲の調査のため断定はできない。出土遺物は弥生時代前期終末期の土器片、打裂(だれつ)・敲打(こうだ)段階の未成品、成品破片などである。

調査によって今山石斧の製作開始期が前期終末期にさかのぼることを確認し、打裂以後の製作が主に南麓の平担面から砂丘地帯で行われたことなどが判明した。同時に行われた周辺の踏査によって、海をへだてた志摩側の呑山(のみやま)にも同時期の工房のあることがわかり、両者の間に、製作法や性格の相当な相違があることが考えられたことも特記すべきである。 (下條信行)

〈参考文献〉中山平次郎「今山の石斧製造所址」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』6 1931，下條信行「今山遺跡(1)」福岡市立歴史資料館調査研究報告第1集 1973，同「北九州における弥生時代の石器生産」『考古学研究』22－1 1975




今山遺跡の地形と遺跡分布図




黒褐色粘質土層（下層―遺物包含層）出土土器実測図

### 4 今宿横浜遺跡(西区今宿横浜) 〈5〉

1976年7～8月に今宿サイクリング道路建設に伴って調査。調査協力－熊本大学、立正大学、桐朋女子短期大学、日本大学学生有志十数名。

この遺跡は弥生時代前期～中期にかけての共同墓地である。遺跡は博多湾の西端の早良平野から半島状に突出した砂丘上にあり、南に今宿・松原遺跡、北に今山遺跡がある。出土した遺構は土壙墓(どこうぼ)数基と壺棺墓2基。1つの土壙墓でヒスイ製勾玉(まがたま)1、また1つの土壙墓で細形銅剣1本が出土。他に袋状長頸壺形土器1、壺棺を形成する壺形土器3個がある。

本遺跡は今山遺跡（石斧製造跡）と弥生時代前期後半の甕棺墓をもつ生の松原遺跡の間にある。土壙墓から出土した舶載(はくさい)細形銅剣や勾玉から、本遺跡は石斧製造によって社会的評価を受けた今山石斧製造技術人の墓と考えられないだろうか。また、今宿松原遺跡では墓地が多少存在しながらも集落に伴う遺物を大量に検出しており、これらの遺物は石斧生産の場・墓地・集落という一貫した関係を有しているように思える。

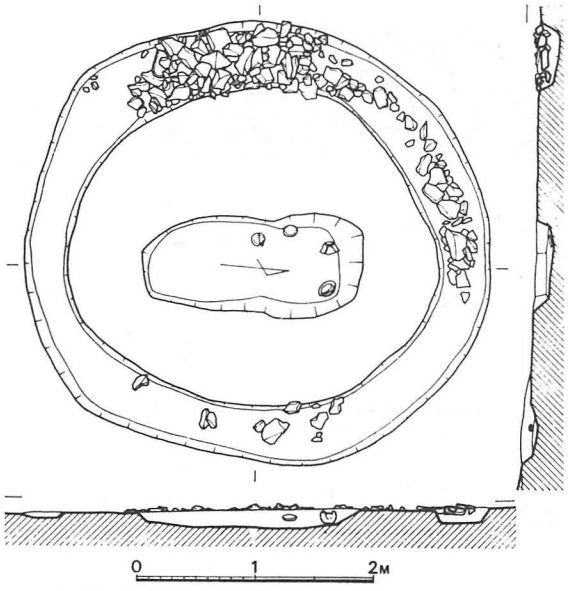
(折尾　学)

### 5 今宿松原遺跡(西区今宿東松原、西松原) 〈6〉

本遺跡は長垂山から今山にかけて形成されている海岸砂洲上に立地する。1969年春、この今宿を通る旧唐津街道に水道管埋設工事が行なわれ、多量の遺物が出土していることが故深江嘉和氏によって発見された。同氏の通報により福岡市教育委員会の職員が現地に赴き、5月4日～7日まで水道管埋設工事に立会い、出土する遺物の採集を行なった。

遺物の出土は、東西が旧唐津街道ほぼ全域の延長約700 mの範囲におよび、弥生時代前期後半から古墳時代中期までの時期の各種の遺物が豊富に出土した。水道管埋設のための溝は幅が0.8m、深さが1.8mで、それ自体が遺跡を縦貫するトレンチのごとくであった。そのため、遺構を確認できなかったが、弥生時代前期の板付Ⅱ式の壺を副葬する壺棺墓8基を含み、地点を変えて各時期の遺物が東西にひろがって検出された。弥生時代の遺物には今山の石材を用いた太形蛤刃石斧の未製品が豊富に検出され、注目される。また古墳時代前期土器の包含層中には、多量の管状土錘が1カ所にまとまって出土し、当時の漁業の実態を知る上で貴重である。なお、本遺跡の大部分が、今宿旧街道を中心として連らなる町並の地下に今なお包蔵されており、今後の保存措置が望まれる。

(塩屋勝利)




飯氏鏡原遺跡　円形周溝墓実測図

### 6 飯氏鏡原遺跡(西区大字飯氏字鏡原)

牟田坂池西側丘陵の西斜面にある。1971年2～3月に調査。遺構は縄文時代後期あるいは晩期とみられる鉢が出土する土壙墓（0.9×0.5m、深さ12～13cm)1、須恵器Ⅳの時期の堀立柱群（2軒分の建物が確認できる)、平安末期の円形周溝墓。円形周溝墓は径3.95×3.65m、幅38～65cmの円形周溝内に1.85×0.85mの土壙墓1基があり、副葬品とみられる土師器4、瓦器1が出土した。平安時代末頃の円形周溝墓の例は他にない。

〈文献〉福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集 1971

### 7 飯氏馬場遺跡(西区大字飯氏字馬場) 〈6〉

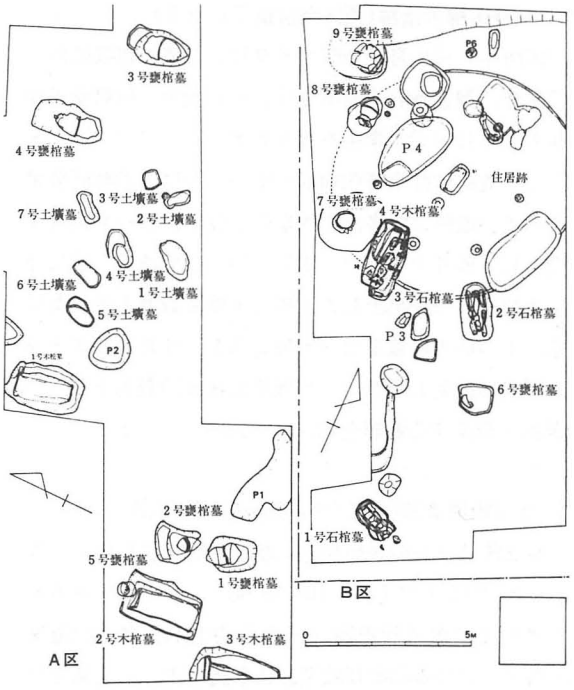
1970年12月に調査。周船寺駅の南300mの標高16m前後の台地にある。遺跡は台地全域に及ぶとみられる

が、調査したのはその一部290m²にすぎない。遺跡の時代は弥生時代から中世に及ぶ。発見された遺構は住居址1、木棺墓4、甕棺墓9、石棺墓3、土壙墓7である。

住居址は径7mの円形竪穴で、柱穴7がある。磨製石斧、砥石、磨石、弥生時代中期初頭の甕・壺が出土。木棺墓のうち完掘した3基は主軸がほぼ南北である。長さ2.1～2.6m、幅1～1.4m、深さ30～40cmの墓壙を掘り、その中に木棺を組む。住居址に先行し、弥生時代前期末とみられる。

甕棺墓は弥生時代前期末から後期前半までのものである。石棺墓は長さ1.3～2m、幅70～95cm、深さ20～30cmの墓壙内に石で棺を組む。第3号石棺墓の石材の多くは抜き去られており、抜き跡から副葬品とみられる内行花文小形仿製鏡、鉄刀子各1点が出土した。石棺墓の時代は弥生時代後期であろう。

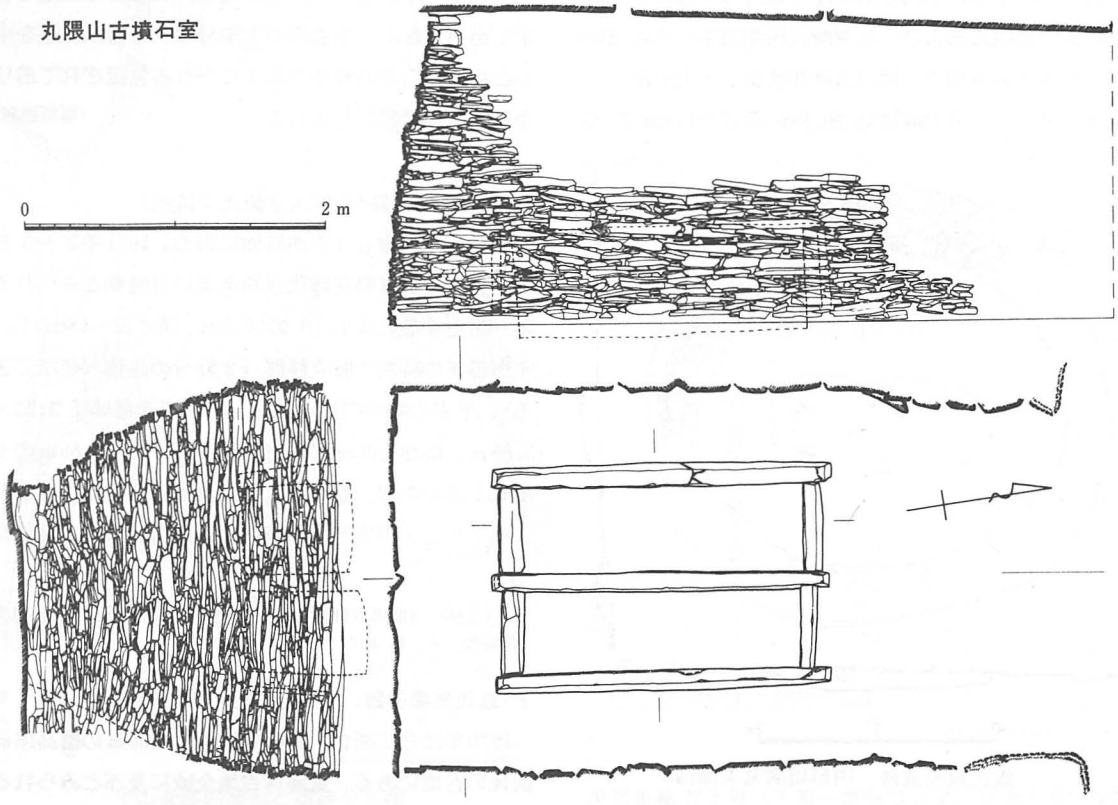
土壙墓は隅丸長方形と不整円形で、長さ45～125cmである。5基には人骨片が残り、1基には火葬骨が収められていた。1号土壙墓には龍泉窯系の青磁が副葬されている。これらは中世のものである。




飯氏馬場遺跡　遺構配置図

〈文献〉福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集　1971

丸隈山古墳石室



### 8 丸隈山古墳(西区周船寺)　〈7〉

江戸時代寛永年間、在所の村人によって発掘され、以後崩壊した石室の補修などを経て今日にいたる。

1968年、石室・遺物の実測調査を行った。古墳時代中期の古墳で、高祖山から北にのびた丘陵の先端に位置する。北にひらける平野を望む位置にある南北主軸の前方後円墳。今宿鋤先から周船寺にかけて、山麓に帯状にならぶ前方後円墳11基のうち、最西端に位置する。すぐ西には怡土の平野がひらけている。眼前の平地は今は田畑であるが、往時は糸島水道が湾入し、海岸地帯となっていたので、それに関連した被葬者かとも考えられる。

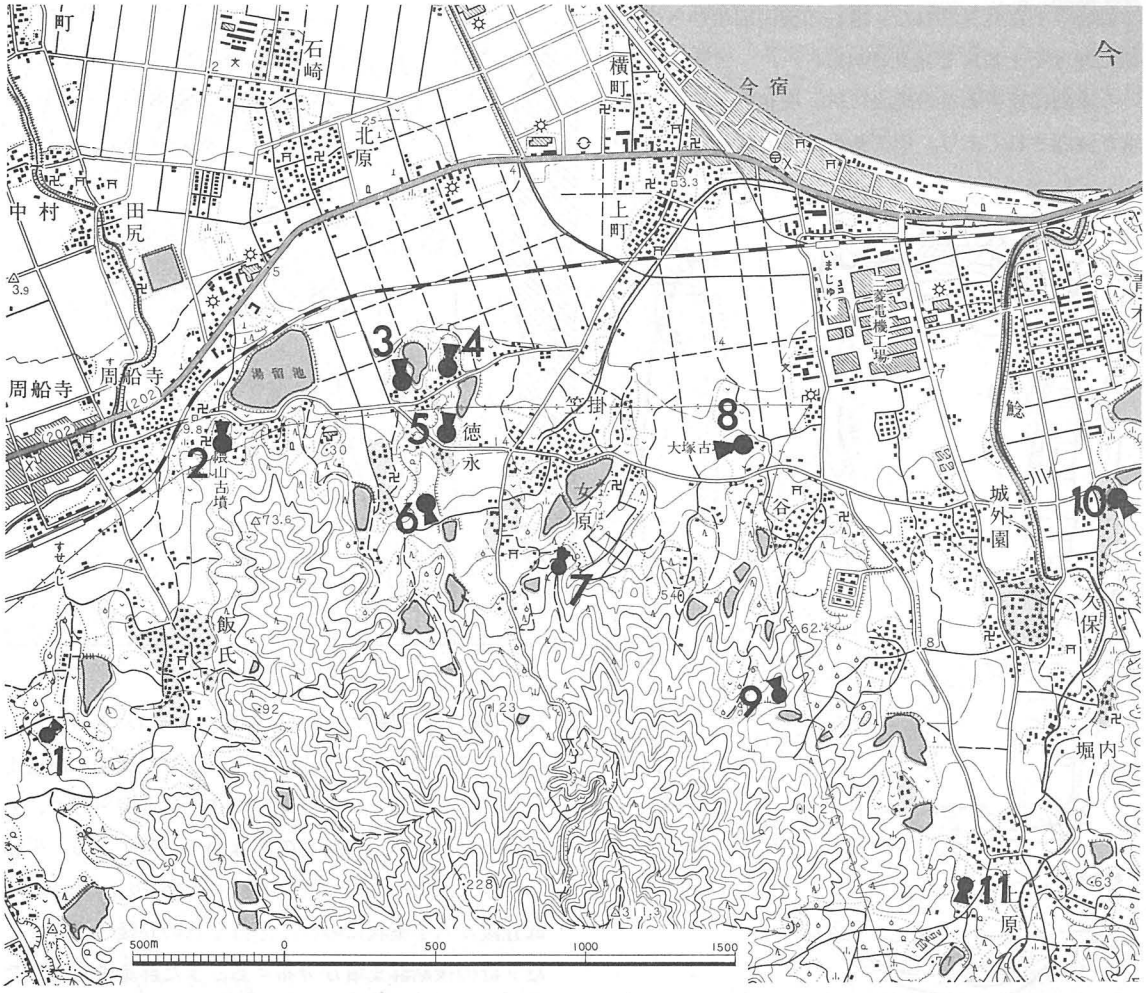
石室は入口はなくなっているが、竪穴式石室風に小口積みをした横穴式石室で、中には一側を共有する二基の箱式石棺が中軸上に据えられている。出土遺物は、仿製六獣鏡・神獣鏡、巴型銅器、ガラス小玉、管玉など。初期の横穴式石室の構造と遺物を記録することができた。

(下條信行)

〈文献〉福岡市教育委員会「福岡市丸隈山古墳」福岡市埋蔵文化調査報告書第10集 1970

### 9 若八幡宮古墳(西区大字徳永字下引地)　〈8～9〉

1970年10月～12月に調査した古墳時代前期(4世紀後半)の前方後円墳。この古墳は、今津湾に面する高祖山から派生する舌状の丘陵上に位置する。水田面との比高差が約18mあり、博多湾やさらに玄海灘を望むことができる。




今宿、周船寺地区の前方後円墳

1．子捨塚古墳　2．丸隈山古墳　3．山ノ鼻2号墳
4．山ノ鼻1号墳　5．若八幡宮古墳　6．下谷古墳
7．小松原1号墳　8．今宿大塚古墳　9．谷上古墳
10．鋤先古墳　11．本村古墳

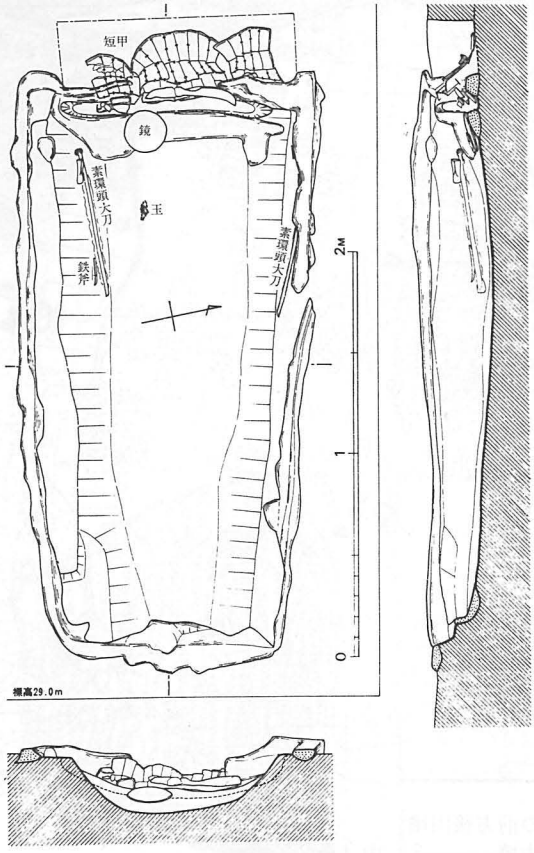
全長約48.5mの北向きの前方後円墳である。後円部径25.4m、前方部先端幅約20m、くびれ部幅13m、後円部高さ3.5m、前方部高さ2.2mで、後円部が3段、前方部が2段に築造されている。墳丘には葺石(ふきいし)があり、くびれ部を中心によく残り、段築のあとが顕著である。主体部は舟形木棺直葬で、木棺蓋の目張りの粘土帯が検出された。木棺は墳丘主軸と直交する方向に埋蔵されていた。棺底全面に赤色顔料が検出され、その形状から木棺外形は長さ2.75m、西幅1.2m、東幅0.85mの大きさの刳貫(くりぬき)式木棺と判明した。

出土遺物は、棺内に三角縁二神二獣鏡1、碧玉製管玉14、ガラス製小玉2、環頭大刀1、刀子1、鉄斧1、革製盾(推定)1があり、棺外北側に環頭大刀1、鉄剣1、鉄鉾(やりがんな)1、鉄鏃19、頭部と思われる西側に竪矧板(たてはぎいた)革綴短甲(かわとじたんこう)1が発見された。墳丘の後円部頂からくびれ部にかけて土器片も発見された。

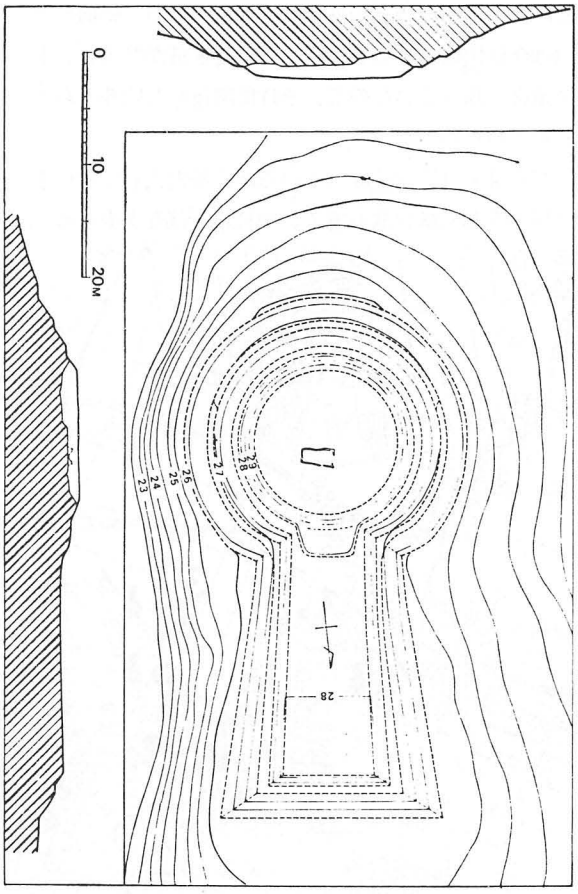
今津湾に面するこの地域には、現在11基の前方後円墳が確認されており、中でも古式横穴式石室の丸隈山古墳は有名であるが、これより古いものは発見されていなかった。若八幡宮古墳は、舶載の三角縁神獣鏡を有する4世紀代の古墳として、地域性から考えて重要である。小形古墳であるが、調査の結果、残りのよい葺石が確認され、出土した土器によって年代も決定できる。

(柳田康雄)

〈文献〉柳田康雄「若八幡宮古墳」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』2所収。1971




若八幡宮古墳主体部




若八幡宮古墳復元図

## 10 今宿大塚古墳(西区今宿谷) 〈10～11〉

保存整備のために1977年2月～3月に調査。高祖山を背に、海岸砂丘に沿って形成された今宿平野は、東西6km、南北2kmの耕地の少ない小平野である。平野部の東を画する長垂・叶岳山塊および高祖山の山麓は、低丘陵が八手葉状にのび、それぞれの丘陵を単位とした9群の後期群集墳が分布する。また群集墳と離れた丘陵先端や台地上には、11基の前方後円墳が東西4kmにわたって点在し、これらを総じて今宿古墳群と呼ん

ている。

今宿大塚古墳は、古墳群の東寄りにある平野部に突出する比高3～5mの低位段丘上に築造された前方後円墳である。東南から北西方向にゆるく傾斜する台地の平坦面を基底として、主軸を東西に向けている。

墳丘は二段築成、周囲に楯形の周濠と外堤がめぐり、さらに墳丘南側には外濠が存在する。墳丘は全長64m、後円部径39m、前方部幅43m。高さは後円部が6.5mで1mほど前方部を上まわる。墳丘は、地表を0.5mほど掘り下げて墳形を削り出し、その上面から盛土して築造されている。したがって、基底面は台地の傾斜にそっており、東南部で標高12m、低い北西部で11mをはかる。

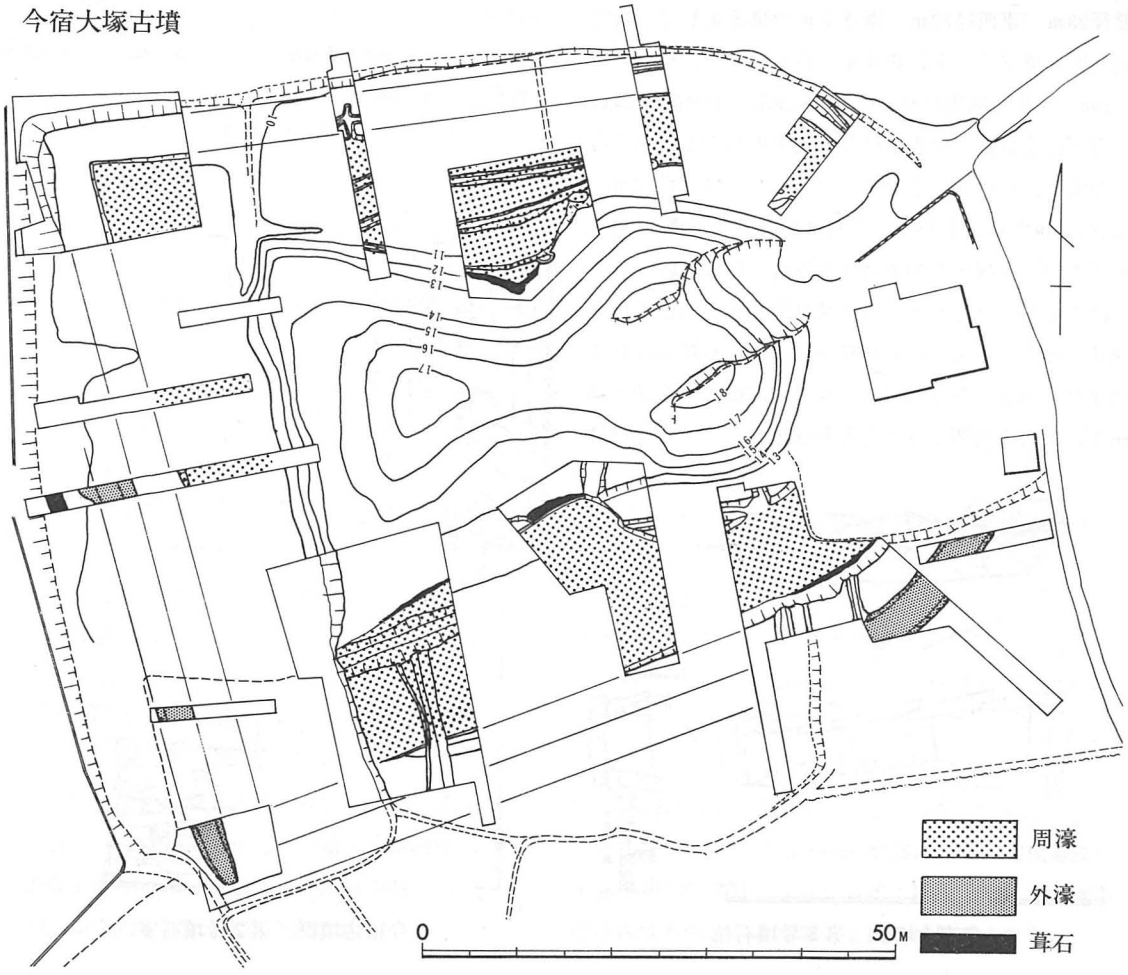
墳丘の外表施設としては葺石があるが、基壇のみで2段目外表にはみとめられない。花崗岩を主体に、玄武岩を混える。周濠は、主軸線上の周濠長81m、外堤長91m、外濠まで含めると約100mの規模になる。

周濠の深さは0.5～1.5mだが台地の傾斜に沿って高低差がある。その比高差は2m以上あって、濠内に水をたたえることはできず、空濠といってよい。周濠外側には、地表を削り出した幅5m弱の外堤が全周する。さらに外堤のまわりには、幅5m、深さ0.3mの小規模な濠がめぐる。これは台地の高い側（南）にのみ作ったもので、北側にはみとめられない。

周濠および外濠から多量の埴輪が出土した。しかし墳丘基壇面、外堤上面に原位置をとどめるものはない。すべて埴質で、器種には円筒のほか、朝顔形、形象（武人像・馬）埴輪がある。その他クビレ部から須恵器が数点、前方部墳頂から朝鮮製陶質土器片が検出されている。

本古墳の埋葬施設は未調査のため明らかではない。しかし、保存されている墳丘・周濠・外堤の規模と整然たる外容は、北部九州屈指のものといえる。築造年代は6世紀前半と推定され、今宿古墳群を形成した首

今宿大塚古墳



長墓の一つであると同時に、北部九州の古墳文化を考えるうえで、隣接する丸隈山古墳とともに重要な位置をしめる。

（柳沢一男）

**11 徳永古墳群**（西区周船寺徳永）

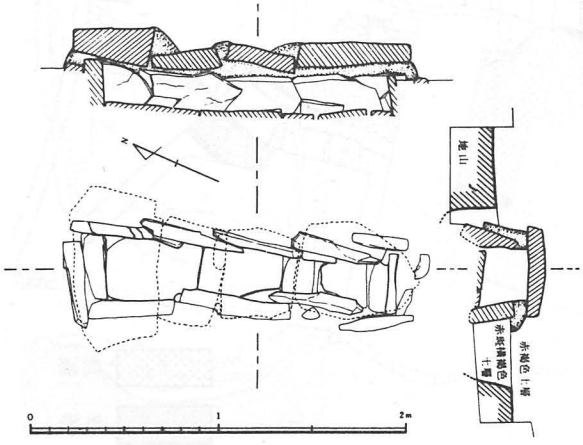
この古墳群は、横穴式石室を内部主体とする（他に1基の竪穴系横口式石室）32基の円墳で構成されている。調査が行なわれたのは古墳群北端にある3基である。調査は1975年10月～翌年1月に実施された。3墳とも墳丘は径10m内外で、1号墳は単室の横穴式石室、2号墳はかなり小規模の横穴式石室、3号墳は石棺系石室であった。1・2号墳は同一丘陵上、3号墳は別の丘陵上にある。いずれも盗掘されていて、当初の副葬品の内容は明らかでないが、須恵器・土師器などの土器類数十個体が、古墳築造時の祭祀また葬送儀礼を示すような形で検出され、その他少数の鉄刀・鉄鏃・刀子・滑石製紡錘車・管玉・小玉などが出土した。須恵器の型式から6世紀後半に比定できる。2号墳も1号墳と同時期で少数の須恵器・土師器などが出土した。3号墳は玄室に土師器坏（つき）が副葬してあり、その他鉄鏃なども検出された。時期は6世紀前半代であろう。他に2号墳付近で十数個の鉄滓が検出された。これらの鉄滓には奈良時代の須恵器がともなっている。

（下條信行）

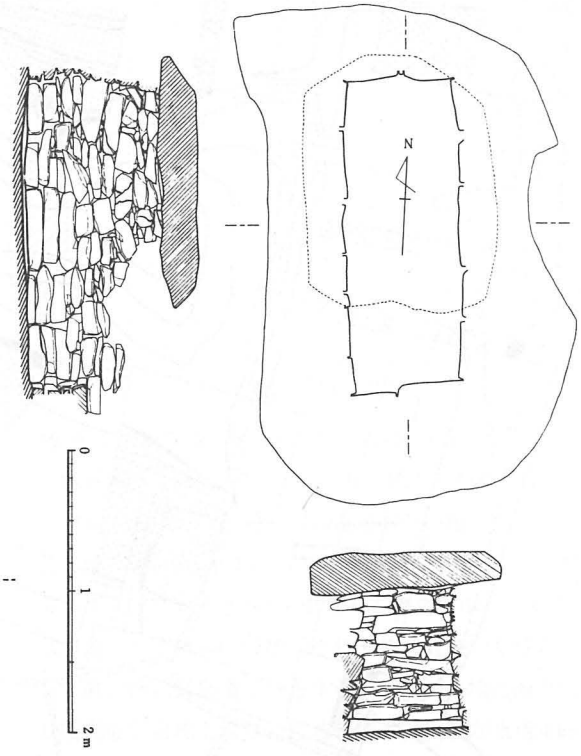
**12 今宿古墳群**（西区大字谷上・イヤゾノ）

1967年9～10月に、円墳3基を調査。　1号墳は南北径23m、東西径30m、高さ7mの墳丘をもつ。横穴式石室は単室で、全長約6m、石室は幅2.3m、奥行2.6m。天井部は失われている。須恵器、土師器、鉄鏃、鉄刀が出土した。須恵器はII式後半のものとIII式の古いもので、6世紀のものであろう。2号墳は径16m、高さ2.5mの墳丘をもつ。石室は長さ2.2mの竪穴式石室である。盗掘のため遺物は少なく、鉄製品破片若干が出土しただけである。3号墳は径7m、高さ1mの墳丘をもち、中央に箱式石棺を設ける。石棺は板石で組まれ、内法（うちのり）は長さ1.5m、幅25～35cm、深さ20～25cmで、石材の内側には赤色顔料を塗っている。遺物はない。2・3号古墳は4世紀後半～5世紀のものとみられる。

〈文献〉福岡県教育委員会「今宿古墳群」福岡県文化財調査報告書第38集 1968




今宿古墳群　第3号墳石棺




今宿古墳群　第2号墳石室

**13 相原古墳群**(西区大字上の原字相原) 〈12〉

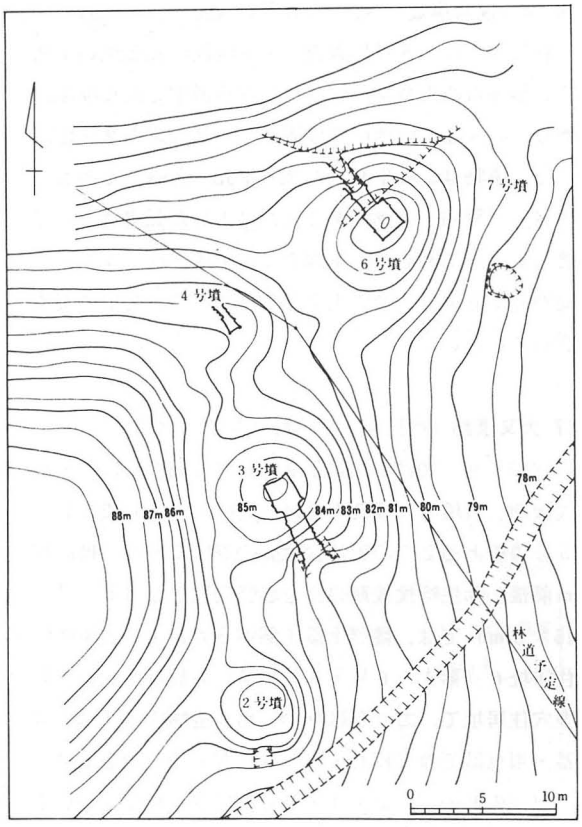
1973年8月～10月に調査。前原町と接する高祖山(416m)の山麓には、11群・300基をこす後期群集墳が分布する。本古墳群はその一つで、山塊東麓の尾根上に33基の小円墳が群集する。調査の対象となった古墳は、林道建設線上にある3・4・6号墳の3基で、標高80mほどの高所に位置する。

〔3号墳〕尾根稜線下のゆるい斜面に作られた小円墳。墳丘径約12m、高さ4m。墳丘の中央下部に南に開口する横穴式石室がある。石室長5.6m、玄室幅1.7m、長2.1m、羨道の前面には東南にのびる墓道がつづく。6世紀末築造。

〔4号墳〕3号墳の北側稜線上の径5mの小円墳。墳丘盛土はすでに削られ痕跡をとどめない。北に開口する石室はきわめて小さく、玄室幅0.7m、長1.7mにすぎないが、横穴式石室の形態を整えている。6世紀末築造。

〔6号墳〕4号墳東側の稜線上にある。墳丘径9.2m、高さ3.65m。その中央下部に北に開口する横穴式石室がある。石室長4.8m、玄室は幅2m、長2.4mで、周壁の強い持ち送りによって穹隆形(きゅうりゅうけい)断面をなし、古式の構築法を残す。6世紀後半築造。以上3基の石室に用いた石材はすべて花崗岩。

出土遺物は石室内が既掘のため少ないが、墓道や墳丘周囲の溝から供献された土器類が検出された。なお3・6号墳では、墳丘の上面に底部を穿孔した須恵器大甕を配置していた。また3号墳の羨道前半部から出土した鉄滓(かなくそ)は、この地域に多い製鉄遺跡との関連で注意すべきである。 (柳沢一男)




相原古墳群　3・4・6号墳地形測量図

〈文献〉福岡市教育委員会「相原古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第28集 1974

**14 今宿小塚、今宿大塚南、今宿高田遺跡**

いずれも湯納遺跡、高崎古墳群、若八幡宮古墳、飯氏馬場遺跡と同じく、今宿バイパス建設にともなって調査された(1974年1～3月調査)。

a 今宿小塚遺跡(西区大字今宿字女原)

古墳の周溝とみられる幅80cmの溝状遺構があり(長さ13mを発掘)、その埋土から須恵器が多数出土した。径30mをこえる円墳が築造されていた可能性が強い。

b 今宿大塚南遺跡(西区大字今宿)

今宿大塚古墳の南側である。柱穴列2列、溝9条が検出された。須恵器・糸切底土師器・青磁破片等が出土。調査面積がせまく、遺構の性格は不明。

c 今宿高田遺跡(西区大字今宿字高田)

今宿大塚古墳と同一丘稜の東斜面にある。幅3.1～2.6mの溝状遺構と、これがその後幅1.6mに縮少された溝が検出された。溝内からは弥生時代後期の土器が出土した。また柱穴状の小ピットもあり、手づくね土器などが出土した。今後本調査が予定されている。

〈文献〉福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」第5集 1977

**15 草場古墳群**(西区大字下山門字草場)

叶岳から北にのびる丘陵先端部にある。宅地造成に先立ち1973年7月～9月に古墳4基を調査した。調査の詳細は不明。本古墳群は全面的に保存された。

**16 斜ヶ浦瓦窯址**（西区下山門斜ヶ浦）

1972年７月～８月に調査。平安時代の瓦を焼いた窯で、福岡市西方長垂山(119ｍ）から派生した丘陵端にあり、斜ヶ浦池の西岸に位置する。登り窯１基を確認した。遺物は、軒平瓦・丸瓦・平瓦・青磁片である。「警」「警固」の銘のある瓦が出土した瓦窯址として著名な遺跡であるが、本調査では主体部は造成工事の範囲外でもあり、池の土手でもあるので、発掘は実施されていない。

なお、文献(1)の報告書には、故高野孤鹿氏の「警および警固の銘のある古瓦」と題する未発表の踏査記録を資料として収録している。かつて故中山平次郎・故玉泉大梁氏および鏡山猛氏らが調査しており、学史的な遺跡である。（三島格）

〈文献〉(1)村岡・松村「草場古墳群・斜ヶ浦瓦窯址」早良鉱業株式会社 1974、(2)中山平次郎「警の一字を有せる古瓦片」『考古学雑誌』５－12 1915

**17 大又遺跡**（西区大字拾六町字高崎）〈13〉

1969年９～10月と1971年９～10月に調査した弥生時代後期、古墳時代後期の遺跡。高崎１・２号墳と３～５号墳のある２つの舌状台地間の谷間にあり、標高17ｍ前後。弥生時代後期の長方形竪穴住居址（第７号、15×３ｍ）では、甕形土器１個体分が出土。古墳時代住居址６（第１～６号・８号）は、方形ないし長方形竪穴住居址で、カマドはない。出土遺物の多くは土師器・須恵器で他に砥石・鉄滓などがある。須恵器はⅡ～Ⅲ期のもので、３・４・５号住居が同時に、ついで１・２・６・８号住居址が同時に営なまれ、年代は６世紀前半～中葉であろう。他に土製模造鏡や手づくね土器などの祭祀遺物を出す古墳時代の方形竪穴状遺構などがある。遺構にともなわない遺物には縄文土器片石匙・近世陶磁器などがある。

〈文献〉福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第１集 1970，第３集 1973

**18 高崎古墳群**（西区大字拾六町字高崎）〈13～14〉

調査期間は、第１次調査が1969年８月～10月、第２次調査が同年12月、第３次調査が1971年８月～10月である。

早良平野の西辺部、叶岳からはり出す丘陵の東北端部に築造された古墳時代後期の古墳群で、６基調査できたがゴルフ場の開設などにより、これ以外にもかなりの古墳が消滅したものと想像される。各古墳については表を参照のこと。

この古墳群は、６世紀後半を主とする古墳群で、とりわけ出土遺物で目立ったのは、高崎２号墳である。須恵器160個体分をはじめ、杏葉・雲珠・辻金具などの馬具類、剣・石突・鉄鏃などの武器類、玉類などの装飾品などであり、他のものに比較してきわだった存在である。

弥生時代においては、早良平野は伊都国と奴国との

高崎古墳群、大又遺跡地形図

(1) 高崎１号墳　(2) 高崎２号墳　(3) 大又遺跡　(4) 高崎６号墳
(5) 高崎４号墳　(6) 高崎３号墳　(7) 高崎５号墳

緩衝地帯として、いわゆる百余国のなかでは目立つ存在とはなり得ないが、やっと古墳時代の後期になり、早良平野の開拓が進み、高崎2号墳の出土遺物に見られるような富裕層が生まれたことを実証したと言えよう。この人々の生活遺跡の一部として、大又遺跡の竪穴住居跡をあげうるが、農・漁業の両面の生活をしていたようだ。この古墳群の他にも隣接した場所に、草場古墳群・広石古墳群など、同様・同程度の古墳の築造が見られるが、高崎2号墳を造り出したような富裕層が、早良平野の唯一の古代寺院、城の原廃寺を建立したものと予想される。 (栗原和彦)

〈文献〉福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1970、第3集 1973

**高崎古墳群古墳一覧**

| 号 | 墳形 | 径(m) | 石室 形式 | 主軸方向 | 全長 | 玄室長 | 玄室幅 | 羨道長 | 羨道幅 | 石材 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 円墳 | | 竪穴系 横口式石室? | N-68°-E | 2.7? | 2.7? | 0.8 | | | 花崗岩 | 須恵器片1 鉄鏃2 | II〜III | |
| 2 | 方墳 | 1辺約15 | 横穴式石室 (両袖 単室) | N-89°-E | 9 | 3.7 | 2.4〜2.5 | 5.3 | 1.2 | 〃 | 須恵器(160個体分)、土師器、人骨 青磁、鉄製品、玉類 | III | 南側に窯状遺構、有蓋足付壺、単鳳透彫リの金銅張環頭出土 |
| 3 | 円墳 | 9 | 横穴式石室 (両袖 単室) | E-32°-S | 9.3 | 2.1 | 2 | 3.7 | 1.6〜2 | 〃 | 須恵器 鉄鏃 | III | |
| 4 | 円墳 | 10 | 横穴式石室 (片袖 単室) | N-52°-W | 6 | 2 | 2〜1.7 | 4 | 1.3 | 〃 | 須恵器 玉類 | IV | |
| 5 | 円墳 | 13 | 横穴式石室 (両袖 単室) | N-37°-E | 7.28〜8.19 | 2.71 | 1.64〜1.79 | 3.4〜5.4 | 0.9〜1.0 | 〃 | 須恵器 土師器、鉄刀 紡錘車 | IIIb〜VI | |
| 6 | 円墳 | 約10 | 竪穴系 横口式石室? | N-56°-E | 2.5? | 2.5? | 1.0? | | | | | | |

**19 宮の前遺跡**(西区大字拾六町字宮の前) **〈15〜16〉**

1969年8月〜10月(福岡県)、同年12月〜翌年1月・1970年8月(福岡市)の3次にわたって、福岡県・市による調査が行なわれた。遺跡は福岡市の西、早良平野の西北部の丘陵の先端に位置し、早良平野と対面している。西側から張り出したS字状の丘陵上に点在する遺跡群で、西から、地形の節目、発掘主体者の相違によって、A〜Fの6地点に分けられた。E地点は福岡県教委、A〜D・Fは福岡市教委の主催による。

遺跡は住居と墳墓からなる。中央のC地点に墳墓があり、他には竪穴住居址がある。谷水田を囲む地形になっており、遺跡下の水田地帯には、弥生前期〜古墳初頭期の住居址、溝、倉庫、建築材を出した湯納遺跡がある。台地上の宮の前遺跡は、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺跡で、湯納遺跡の発展途上に生まれたものである。

C地点は長14.17m、幅11.85mの楕円形状の盛土を持った高塚墳で、伴出の土器より弥生終末期の原始古墳と考えられている。内部主体は箱式石棺で、すでに盗掘を受けていたが、碧玉製管玉・ガラス製小玉が出土した。地山を整形し、墳墓状に造り出した上に浅い盛土を積んだものであるが、裾に不整形の溝が掘られ、その段階で播火がなされ、墳丘形成時の祭祀の痕を知ることができた。この墳丘の裾には、成人(女性)用1・小児用2の石棺があり、突出した個人を有する近

宮の前遺跡地形図

親者集団の墓と考えられ、古墳時代成立前夜の内部的な有力者の折出過程をおさえることができた。周辺の石棺より鉞(やりがんな)、碧玉、管玉2が出土した。

B地点では長7.9×6.1mの竪穴住居が一棟出土したが、床面が焼けており、朱塊・半なま焼の土器・中国殷代の製陶具に類似するきのこ状の土製品（数点）の出土などから、土器製作工房址の可能性が考えられた。D～F地点では約15棟の竪穴住居址が出土した。出土遺物は住居址・包含層から、土器の他に、鎌・鉋・のみ・鉄斧・鋤形鉄器など豊富な鉄製農工具を出土し、その普及の状態を知ることができた。また、滑石製の、大きさと形を異にする錘(すい)が出土し、この時期の漁業生産への傾斜への端緒をつかむことができた。

本遺跡調査の成果は、墳墓出土の土器、包含層出土の土器をもとにして、福岡県西部における弥生～古墳移行期の土器編年を把握できたことで、弥生終末期の土器を宮の前Ⅰ式、土師初頭期のものを宮の前Ⅲ式とし、おおよその編年の見通しをつけた。

また弥生時代の墓制史において、それまでの共同墓地が内部からどのような形の特定墓に昇華するか、その具体例を土器を持った原始古墳として、はじめて公けにすることができた。さらに、これをもとにして、早良平野をはじめ、北部九州の中での在地的有力墳の分布単位、在地性へのある程度の見通しがついた。

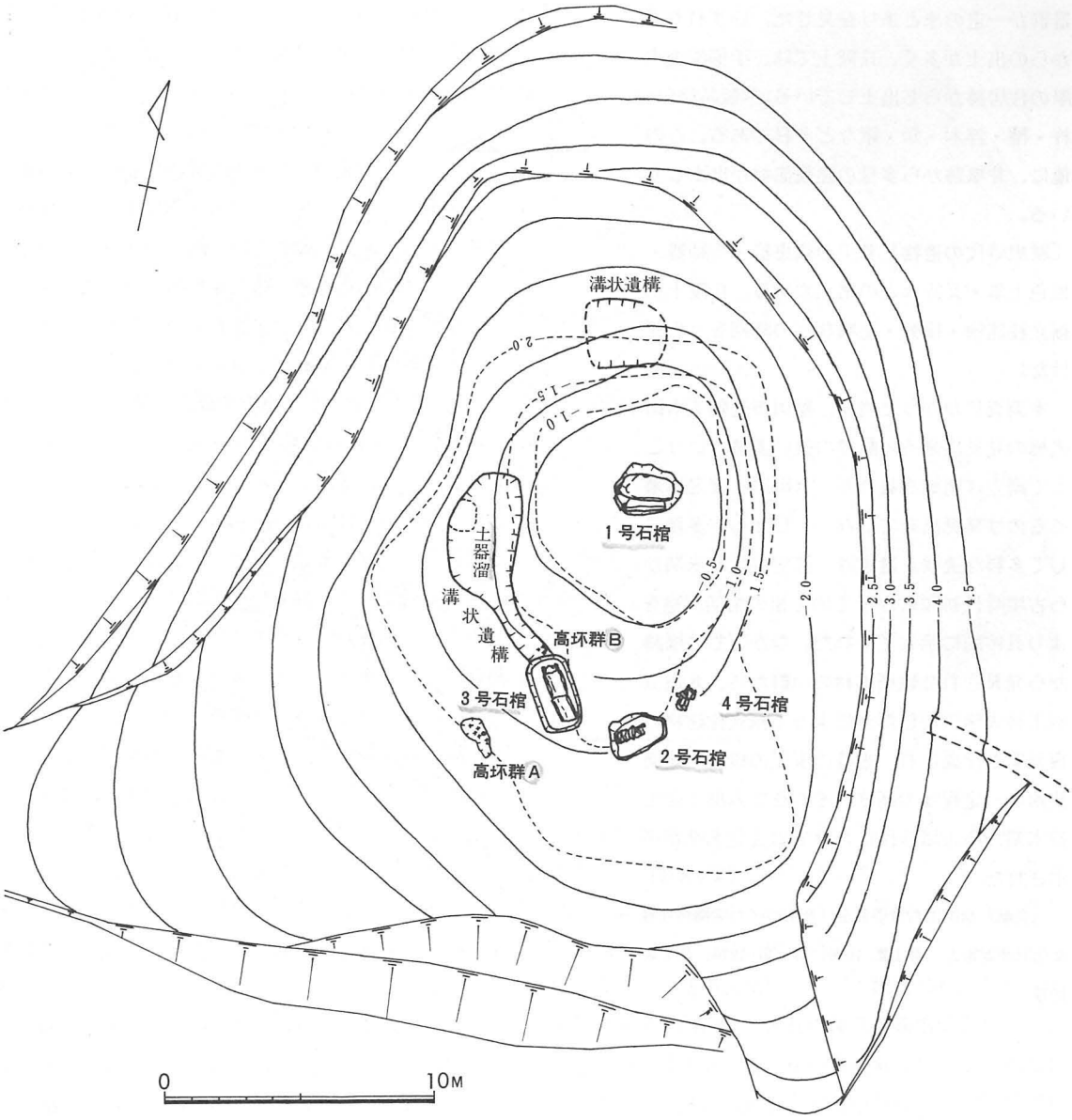
（下條信行）

〈文献〉福岡県教育委員会「宮の前遺跡E地点」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集1970、下條信行・沢皇臣編「宮の前遺跡A～D地点」福岡県労働者住宅生活協同組合1971，福岡市教育委員会「宮の前遺跡F地点」福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集　1971

## 20 湯納遺跡（西区大字拾六町字湯納）〈17〉

予備調査を1969年12月に、本調査を1971年11月～1973年6月に実施した。縄文・弥生・古墳・奈良・平安各時代の遺跡である。早良平野の西辺を流れる十郎川と宮の前遺跡との間の低丘陵部と水田部分にまたがり、丘陵部分に住居跡・掘立柱建物・土壙などがあり、溝群をはさんで十郎川との間にせまい水田跡がある。

遺構は次のとおり。竪穴住居跡（縄文時代？～古墳時代初）8軒分、掘立柱建物（弥生時代末～歴史時代




宮の前遺跡　C地点墳丘および遺構配置図（墳頂0＝36.60m、点線は地山等高線）

初）9軒分、土壙（弥生時代中期～歴史時代）7ヶ所、溝（弥生～歴史時代）12条、井堰跡・杭列・想定される水田跡など。

遺物は次のとおり。

〔縄文時代の遺物〕轟式・阿高式・夜臼式などの土器片が発見されている。遺構としては、ピート層の下で貯蔵穴が2つ（轟式）。竪穴住居跡3軒が夜臼式土器に伴なう可能性を残している。

〔弥生時代の遺物〕前期末から中期前半の土器は大半が小破片。中期中頃の土器がいくらか土壙・溝などから発見されているが、大かたは、後期の土器である。この傾向は木製品・石製品などでも同様である。木製品では、鍬・鋤などの農具類、杓子（しゃくし）・串などの日用具類がある。石製品では、今山製石斧・抉入柱状片刃石斧（えぐりいり）・鑿（のみ）・錘（おもり）・石庖丁などがある。金属器としては青銅製鋤先片などがある。遺構では、丘陵上の土壙・掘立柱建物（1×1間、1×2間のもの）と溝がある。

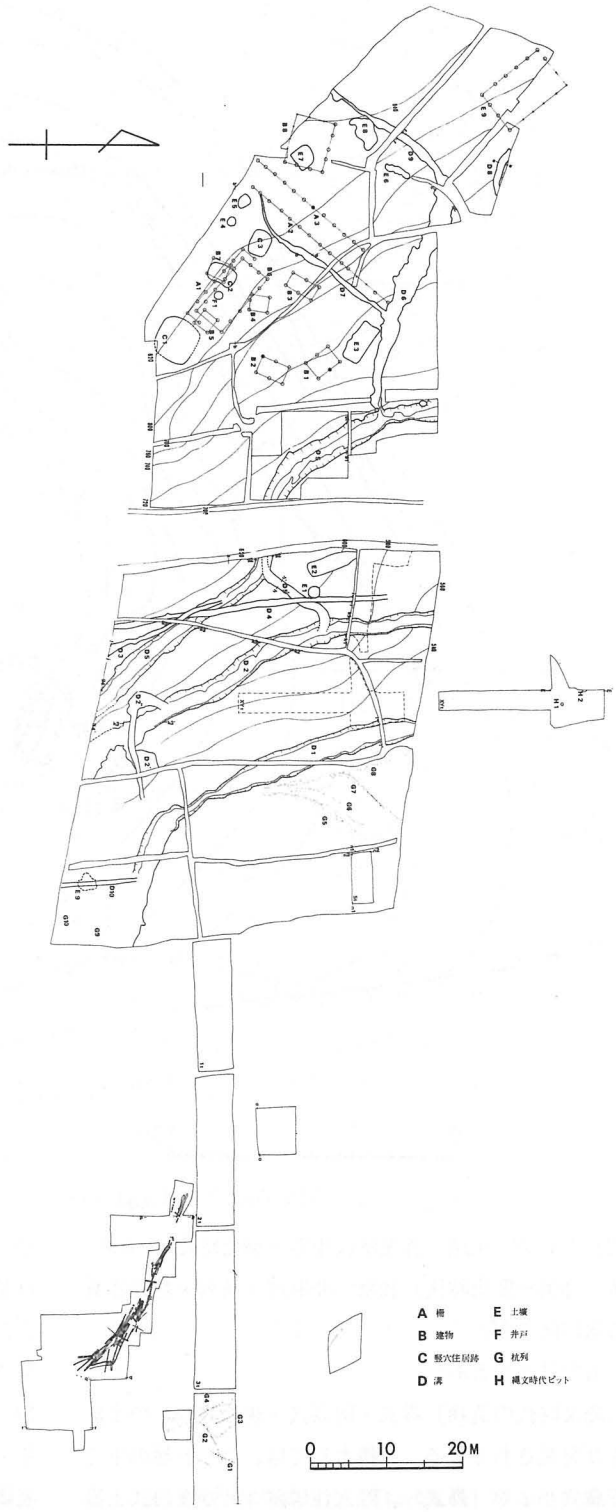
〔古墳時代の遺物〕弥生土器に次いで多く、古式土師

器群が一定のまとまりを見せた。いずれも溝からの出土が多く、丘陵上では、予備調査の際の住居跡からも出土している。木製品は臼・杵・槽・浮木・鋤・鍬など多彩である。この他に、井堰跡から多量の建築部材が出土している。

〔歴史時代の遺物〕若干の須恵器・土師器・黒色土器・瓦片などの出土があり、丘陵上の掘立柱建物・柵列・土壙などの時期をうらずけた。

本調査にかかった当初、福岡市近郊で水田遺構の発見出来る可能性の強い遺跡ということで調査は開始されたが、水田跡と確定出来るものは発見出来ていない。しかし、多量にして多彩な遺構と遺物は、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての先祖の生活実態をより具体的に示してくれた。なかでも井堰跡から発見された建築部材の一群から、九州芸術工科大学沢村仁博士によって掘立柱建物の復元案が作成され、当時の家屋の様相と建築技術の一定程度の高さ、それを生み出す弥生終末期から古墳時代にかけての文化水準が提示された。（栗原和彦）

〈文献〉福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1970、第4集 1976、第5集 1977




湯納遺跡

## 21 広石古墳群（西区拾六町字広石）〈18～21〉

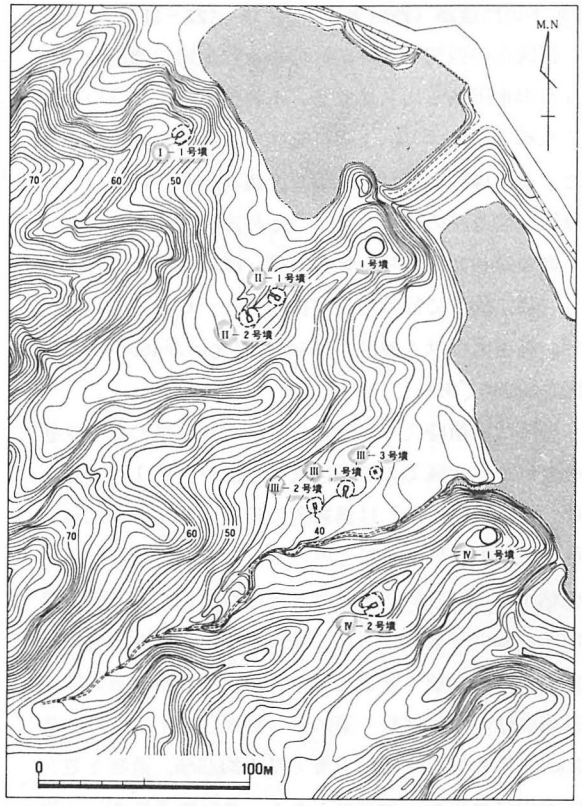
1975年８月～1976年３月に調査。早良平野の西方を画する叶岳～長垂山塊の東麓は、侵食の進んだ丘陵がひろがり、数多くの後期群集墳が営まれている。広石古墳群は、叶岳の南麓にあたり、野方から今宿青木に至る旧道（通称広石越え）に面する。２～３基を一つの単位とした６群・13基の小円墳で形成される。調査の対象となった古墳は４群の７基である。

〔Ⅰ群〕標高55ｍの丘陵先端部に作られた１基を調査した。墳丘の南半は流失しているが、径10ｍほどの小円墳であろう。横穴式石室は南に開口し、前面には長い墓道がつづく。石室長5.8ｍ、玄室は幅２ｍ、長2.4ｍの長方形、天井部はすでにない。玄室内からの副葬遺物の出土は少ないが、羨道部に置かれた約 100点の土器（須恵器・土師器・朝鮮製陶質土器）は、葬送観念を考えるうえで貴重である。６世紀後半築造。

〔Ⅱ群〕丘陵斜面に並列して作られた２基の小円墳からなる。墳丘直径８～９ｍ。ともに北東に開口する横穴式石室をもつ。２号墳の玄室は幅２ｍ・長 2.4ｍの長方形で、穹隆状（きゅうりゅう）の構築法を残す。１号墳は、幅・長さとも1.7ｍの正方形玄室にカーブした羨道がつづく。羨道の前面には長さ５ｍの墓道が作られている。１・２号墳とも石室内既掘のため副葬品の出土は少ないが羨道～玄室にかけて須恵器などが出土している。１号墳は７世紀初めの築造、２号墳は６世紀後半の築造である。

〔Ⅲ群〕谷のなかの小さな微高地上に東西に並んだ３基で構成される。微高地南縁は流水によって削られ、各古墳とも墳丘・石室の一部が失なわれている。１・２号墳は径８～９ｍの小円墳、頂部は崩壊し高さは不明。墳丘中央下部には、南に開口する横穴式石室がある。１号墳石室は、長さ5.6ｍ、玄室は幅1.7ｍ・長さ2.1ｍの長方形。２号墳石室は、玄室幅1.2ｍ・長さ2.2ｍの長方形。３号墳は、幅 0.8ｍの小形の石室のごく一部が残っているにすぎない。既掘のため出土遺物は少ないが、１号墳の石室内外から検出された37個の鉄滓は、古代鉄生産との関係で注目される。１・３号墳は７世紀前後、２号墳は６世紀後半の築造。

〔Ⅳ群〕丘陵上に作られた２基からなる。西側の２号墳を調査した。径10ｍの小円墳で、西に開口する横穴式石室は長さ 5.3ｍ、玄室は幅２ｍ・長さ 2.4ｍの長方形で、もっとも大形の石材を積み上げた石室である。武器（直刀・鉄鏃）、馬具、装身具のほか、多くの土器が出土した。６世紀後半築造。



広石古墳群分布図

調査した７基の古墳は、すべて横穴式石室をもつ径８～10ｍの小円墳で、通有の後期群集墳に等しい。こうした小円墳を有力農民層の家族墓とすれば、世代単位に作られた同一家族墓と考えられる。（柳沢一男）

〈文献〉福岡市教育委員会「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977

## 22 コノリ古墳群（西区大字拾六町字コノリ）

広石古墳群の東にあり、1973年に日大に委託して８基の古墳を調査した。詳細不明。

## ㉓ 下山門遺跡（西区大字下山門）〈22～23〉

福岡市の西部、生ノ松原の砂丘後背地の標高 2.6～5 mの水田地帯に立地する。市営住宅建設に伴い破壊されることとなり、工事に先立って発掘調査を実施した。遺跡は広範囲にわたるが、諸々の条件により、調査範囲は遺跡のごく一部にとどめざるをえなかった。

調査は1972年２月～３月（第一次）、同年５月～６月（第二次）に行った。発掘区をＡ～Ｃの三地区に分け、発掘面積はＡ地区が336m²、Ｂ地区が460m²、Ｃ地区が320m²である。

遺跡は古墳時代～平安時代におよぶ。最も保存状態の良好なＣ地区での層序は次のとおり。第Ⅰ層（表土層、現水田耕作土）は黒褐色の砂質土で厚さ約20cm。第Ⅱ層は酸化鉄沈澱層で厚さ５～８cm。第Ⅲ層は黒褐色粘土層で厚さ約20cm。第Ⅳ層は青灰色シルト層で厚さ約18cm（一部レンズ状に砂層が入る）。第Ⅴ層は暗灰色腐植質粘土層で厚さ約30cm。第Ⅳ層と第Ⅴ層の間には薄い砂層をはさむ。第Ⅵ層は黒褐色粘土層で厚さ約20cm。第Ⅶ層は灰色粘土層で厚さ約25cm。遺物を包含するのは第Ⅲ層～第Ⅴ層である。第Ⅴ層では木器、須恵器、土師器、祭祀遺物、土錘、タコ壺の共伴関係がみられ、第Ⅳ層では越州窯産青磁器、鉄滓、須恵器が出土する。第Ⅲ層は瓦を主に、須恵器、龍泉窯産青磁器を含む。Ａ・Ｂ地区は砂層のため自然攪乱が著しく、層位的把握は困難であったが、Ｃ地区の層序とのおおよその対応は可能であった。

遺構は第Ⅴ層で湿地の汀線を確認した。第Ⅴ層出土の多量の遺物は、この汀線にそって集積したのである。ここで出土した貝に淡水産のタガイがあり、花粉分析でミソハギ科の花粉が多量に検出されていることから、この湿地は沼の一部と考えられる。出土遺物は古墳時代（６世紀）のもので、須恵器、土師器の他に木器（鍬等の木製農具、容器類、刀子や鉄斧の柄、蓆編具のおこり、自在かぎ等）タコ壺、土錘、ミニチュア土器、土製模造品、滑石製模造品等である。

歴史時代の遺構には杭列と製鉄遺構がある。杭は松の丸木杭で、その方向は条里の方向と一致し、条里に伴う杭列とみられる。製鉄遺構は杭列より新しい。鉄滓、フイゴ、炉壁の広がりから４基の炉址が想定される。その他に多量の瓦類が出土し、建造物の存在が想定されるが、確認にはいたらなかった。

発掘の結果をまとめると次のようになる。①古墳時代後期に砂丘後背地に集落が営まれるが、その経済的基盤は漁業を主とする半農・半漁的なものである。②集落内における祭祀行為を示す遺物が出土し（土製・石製模造品）、それらの多くは湿地汀線に投げこまれた状態で出土した。③古墳時代以降の条里に伴うとみられる杭列を確認した。④鉄生産の一部を把握し、その年代をつかむことができた。瓦や越州窯産青磁器の出土から、鉄生産が公的なものであった可能性が考えられる。

（山崎純男）

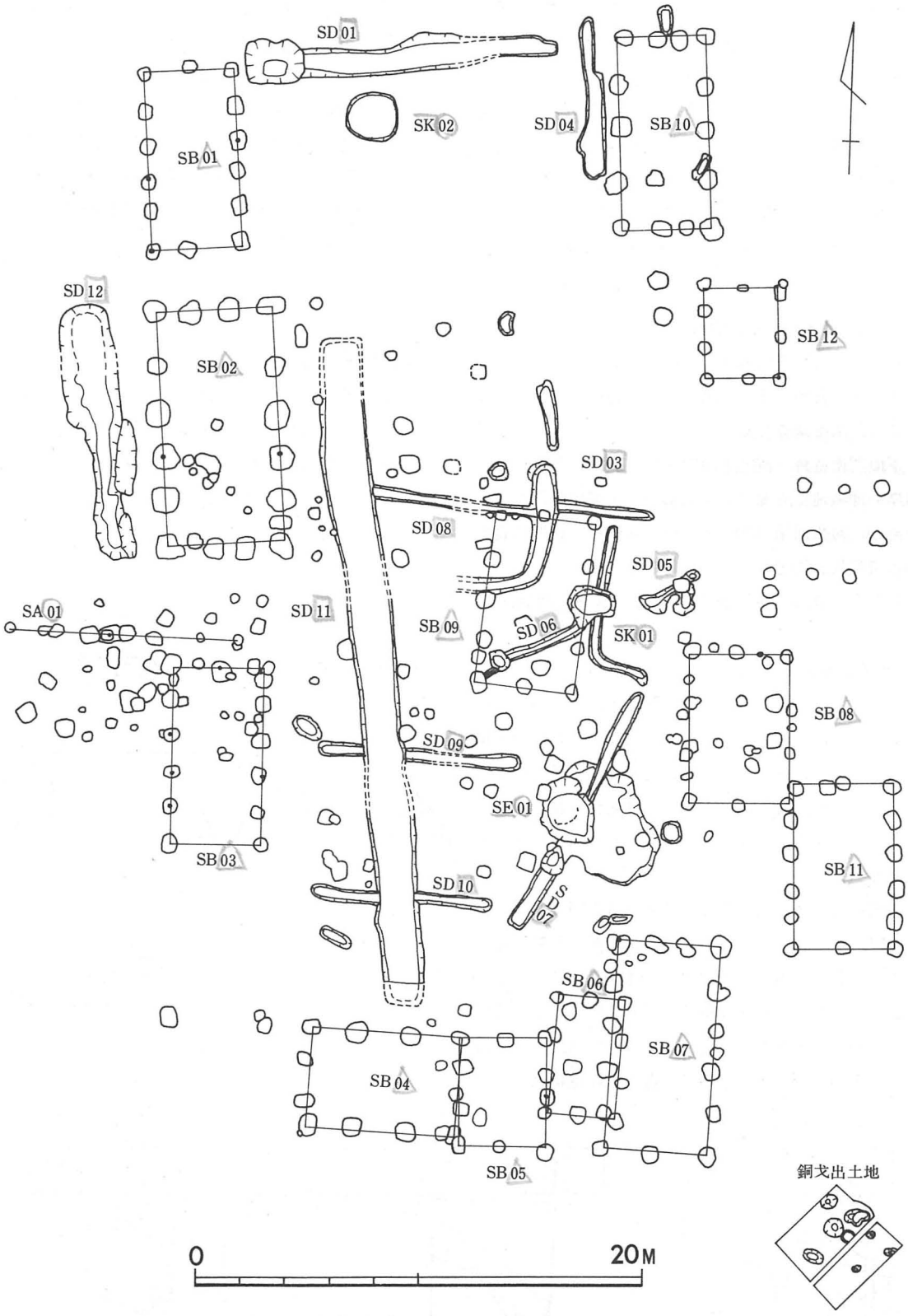
〈文献〉福岡市教育委員会「下山門遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集　1973

## ㉔ 下山門敷町遺跡（西区下山門字敷町）〈24〉

1975年４月～５月に調査。本遺跡は、早良平野の西北、生の松原海岸から１kmほど南に入った沖積地に位置する。十郎川東岸の幅60～ 100m、標高３mの自然堤防上に営なまれた遺跡で、弥生時代中期から平安時代に至る各期の遺構が重複している（なお本遺跡の調査は２次にわたって行なわれ、ここに記述するのは、第２次の敷町地区に限る）。

〔弥生時代〕自然堤防の先端近くに、弥生土器を多量に含む黒色土層がみとめられた。包含層を掘り下げていないので、明確な遺構は検出されてないが、方向が一定しない溝、ピット（竪穴）がある。包含層は径50mあまりに拡がり、深さは一定せず、10～40cmの起伏がある。出土遺物には、弥生土器・石器のほか青銅器がある。弥生土器は、中期中葉以降に限られ、後半期のものが多い。青銅器は中広式銅戈３本で、包含層の南東端で出土した。

〔奈良～平安時代〕弥生時代の包含層上に重複して、建物・井戸・柵・溝などの遺構が検出された。建物はすべて掘立柱で、東西40m、南北60mの範囲に12棟がまとまっている。これらは３期（Ⅰ～Ⅲ期）の立て替えがあり、南半部では重複がいちじるしい。建物の方向はほぼ東西・南北を示し、それより大きくずれるも




下山門敷町遺跡　建築址、製鉄遺構配置図

のはない。桁(けた)行が南北に向く建物が多く(8棟)、東西棟は1棟にすぎない。規模別では5×3間1棟、5×2間4棟と、比較的大きなものが約半数をしめる。各期の建物の配列に一定性はないが、中庭をはさんで東西に南北棟が向い合うようだ。中庭には井戸と、平行する3条の溝、方向不定の溝がある。平行する3条の溝は長7～8m、幅1mあまりで、内からは鉄滓(かなくそ)の塊が出土する。II期以降の建物の柱穴やその周囲から多量の鉄滓、炉壁、フイゴなど製鉄関係の遺物が出土している。すでに炉は失なわれているが、東・西の建物にはさまれた中庭で、砂鉄を原料として洗鉄を採る製錬が行なわれていたことが知られる。

その他の出土遺物には、奈良～平安時代の須恵器・土師器、墨書銘のある須恵器と緑釉陶器3点がある。後二者の特殊性からみて、これらの建物群は製鉄に関係した官衛の一部と推測される。 (柳沢一男)

## 25 下山門南・石丸古川遺跡

日本住宅公団の団地建設計画にともない、事前に埋蔵文化財の有無とその範囲を知る目的で、1976年3月～7月に試掘調査した。

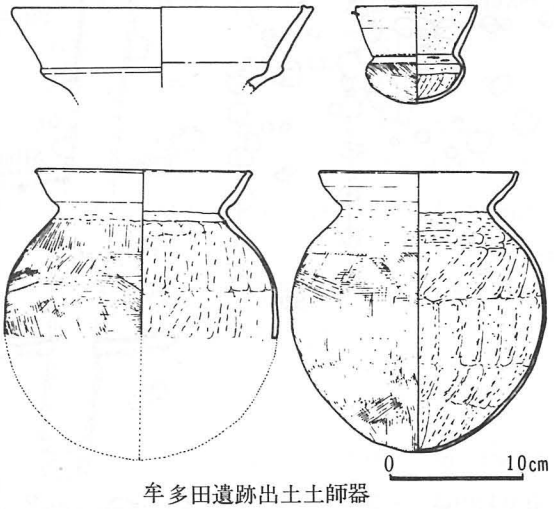
下山門南遺跡(西区下山門字日ノ本)は十郎川中流西岸の沖積地に立地する。大部分が十郎川の氾濫原であるが、対象面積 42000m²の内約4000m²の範囲に良好な古墳時代遺物包含層が検出された。

石丸古川遺跡(西区石丸字古川)は下山門地区とは十郎川をはさんで東南より対峙する。造成予定面積 49000m²の中に2ヶ所にわたり遺跡の存在が確認された。A地点は約2500m²の範囲に弥生時代、古墳時代、奈良時代の遺物包含層と柱穴遺構などが検出され、B地点では弥生時代前期初頭の遺物包含層が検出された。これらの保存措置については、現在、住宅公団と協議中である。 (塩屋勝利)

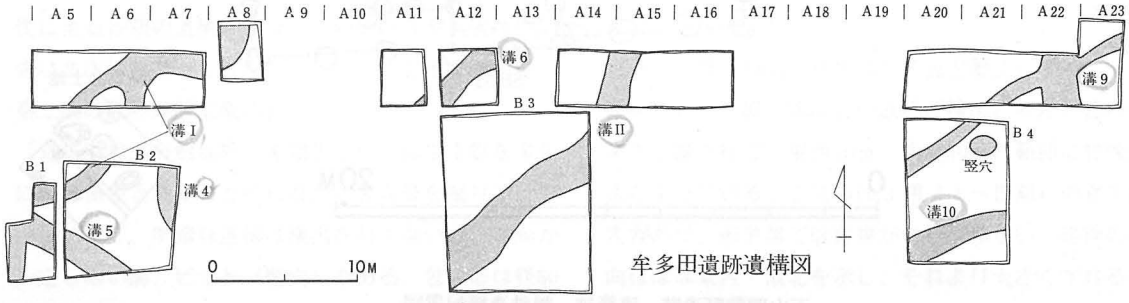
## 26 牟多田遺跡(西区大字野方字牟多田)

1973年6月～8月に調査。遺跡は早良平野西の複合扇状地先端より約 100mはなれた標高7～8mの沖積地にある。遺跡地の層序は、造成のための盛土を除くと、①旧水田土、②鉄分集積層、③褐色砂質土、④砂層であり、溝内には⑤砂層、⑥ピート質黒色土層が堆積する。

遺構は溝と小竪穴である。溝からは土師器と若干の夜臼式土器片が出土し、他に③層と④層でも遺物が出土する。溝の上端は④層内もしくは④層下端にある。溝Iの底は標高6.6～6.0mで、溝内から土師器(完形甕、小型丸底壺など)と夜臼式土器片が出土した。溝5では土師器小片が出土する。溝4では遺物は出土し



牟多田遺跡出土土師器



牟多田遺跡遺構図

ないが、他の溝と同時期だろう。溝6の底は標高 6.3m、溝内で土師器破片出土。溝IIは幅2.0～3.7mで、遺物は出土しない。溝9は南北の溝と東北方向の溝とがまじわり、そこに杭27本が南北方向に打ち込まれている。南北方向の溝底は標高 5.6mである。溝内から土師器が出土した。溝10では遺物は出土していない。溝9のそばに深さ42cmの小竪穴があり、中から土師器片が出土した。これらの溝は、人工溝とみられるもの（溝I・5・6・9）と河道とみられるもの（溝II）およびいずれか不明（溝4・10）にわけられ、出土する土師器により4世紀後半～5世紀はじめとみられる。水田が沖積地に進出する頃の具体的な例であろう。

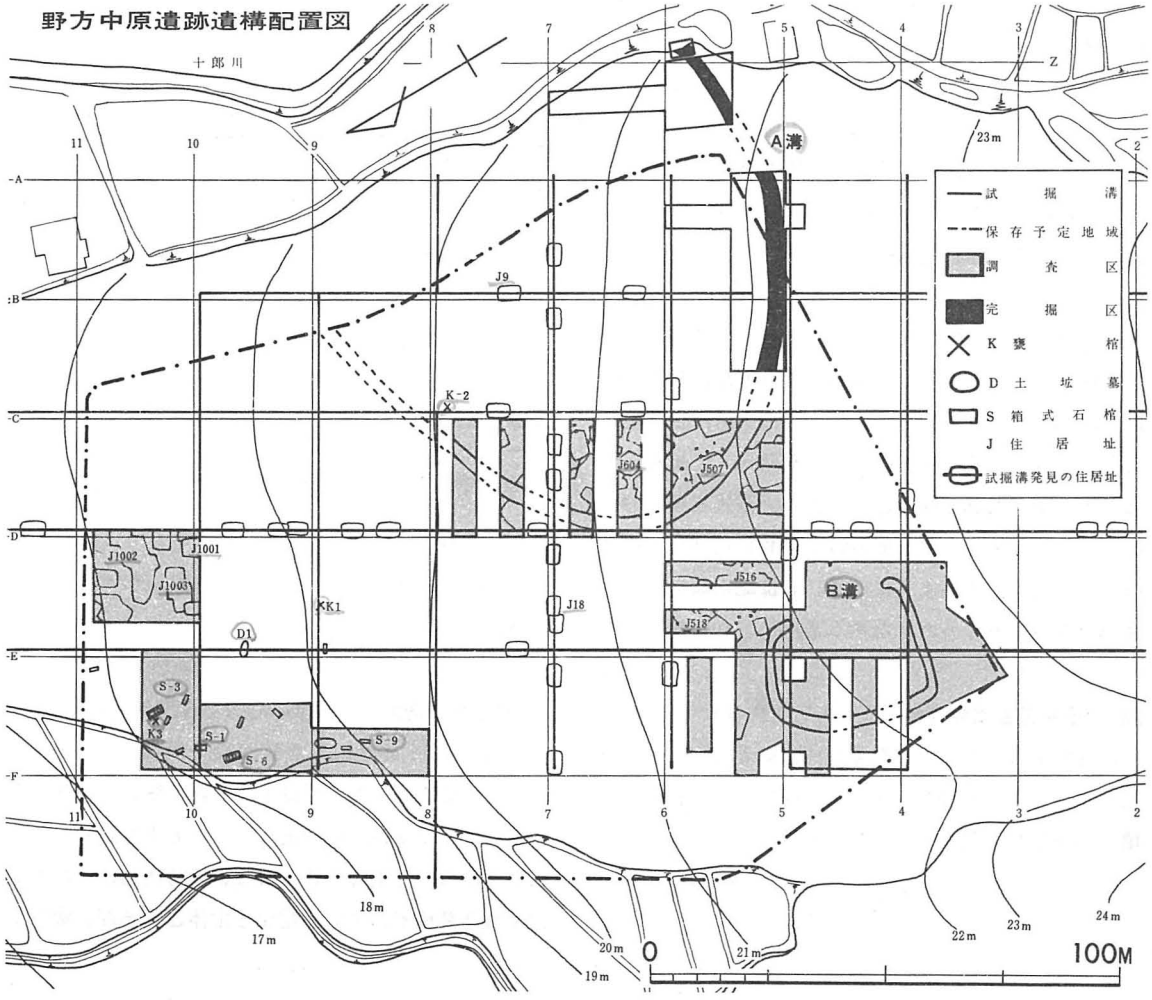
出土遺物は土師器片が2500点でもっとも多い。これらはその形態的特徴から、有田I期ないしこれに多少先行するものと考えられる。この他に須恵器、陶磁器、布目瓦破片や、製鉄関係のフイゴ羽口破片、スラッグ3.75kgが出土。また夜臼式土器片、弥生土器片、投弾形土製品、石庖丁破片等が出土した。これらは遺跡西南の扇状地先端の微高地からの流れ込みであろう。

〈文献〉福岡市教育委員会「牟多田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集　1974

## 27 野方中原遺跡（西区大字野方字中原）〈25～27〉

1973年5月～1974年1月に調査した。弥生時代後期（終末期）～古墳時代前期の遺跡。早良平野の西を限る叶岳の東山麓の東西200m、南北100mの平坦な扇状地（標高17～22m）にあり、東に十郎川が流れている。

〔弥生時代の遺構〕扇状地の中央部から東にかけて径約 100mの環溝（A溝）がある。環溝は楕円形で、東側は十郎川に面した崖面につづき全周していない。溝の断面形は上面幅3.7m、下面幅2.3m、深さ0.87mの逆台形状をなす。溝の中からはこの時期の甕棺・土器・石器・鉄器など多量の遺物が出土した。溝の内側は全



掘していないが、竪穴住居址のほか壺棺があり、弥生終末期の集落であったことがわかる。A溝の西側に20×30mほどの四辺形状の溝（B溝）があるが、全周していない。B溝内の遺物の出土状態と時期はA溝と同じである。B溝内側の遺構は確めていないが、集落に付属する高床倉庫などの施設が想定される。

〔古墳時代の遺構〕弥生時代の溝が埋まったあと、古墳時代前期にはふたたび大きな集落がいとなまれたことが、台地の中央部一帯の 100軒以上の竪穴住居址から確められた。中央部の集落址の他に、扇状地の西北端部で同時期の箱式石棺墓10、甕棺墓1が発掘された。

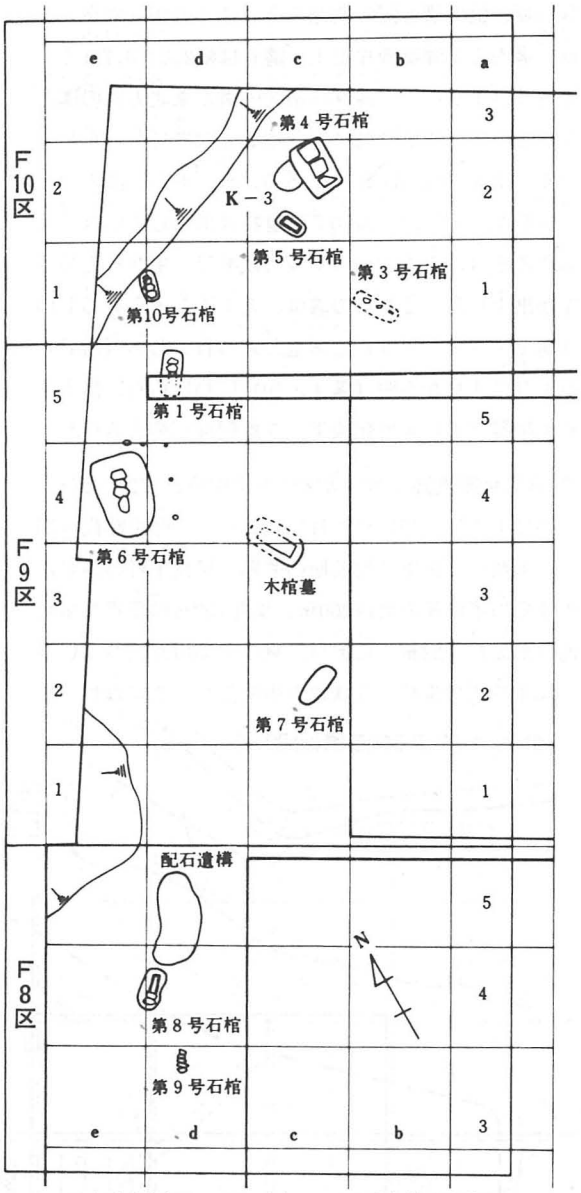
〔弥生時代の遺物〕A溝・B溝：土器（壺・甕・台付甕・鉢・甑（こしき）・器台・ミニチュア土器・甕棺）、石器(石鏃・石庖丁・石斧・石錘・砥石)、鉄器（鋤先・鉄斧・鉄鏃)、自然遺物（A溝内より魚骨・貝類・獣骨)。竪穴住居址：全掘しておらず詳細不明。甕棺：基数は不明（A溝内の壺棺1を発掘）

〔古墳時代の遺物〕竪穴住居址：土器（壺・甕・台付甕・鉢・甑・器台・埦など)、石器（石鏃・砥石など）鉄器（鉄鏃・鉄鎌)、 箱式石棺：第1号石棺（獣帯鏡1、勾玉1、管玉7、素環頭刀子1、鉄刀1)、 第3号石棺（内行花文鏡1、勾玉1、管玉1、ガラス小玉2)、第5号石棺（ガラス小玉11)、第6号石棺（壺2、高杯2、器台1を石棺の周囲に供献)、 第8号石棺（棺外から鉇（やりがんな）)。

以上のように弥生時代終末期の大小2つの溝をもつ集落址の存在が確められ、集落のあり方とともに、溝から出土した豊富な遺物により当時の生活内容を知ることができる。その後、古墳時代前期（4世紀代）になると集落と墓域が区別されており、箱式石棺墓の中には土器を供献したり、舶載鏡を副葬した首長墓的性格のものも存在するようになる。6世紀になるとこの集落は荒廃するようだ。なお本遺跡は、1975年6月国の史跡に指定された。

（柳田純孝）

〈文献〉福岡市教育委員会「野方中原遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集 1974




野方中原遺跡　F8区～F10区遺構配置図

**28 小松ヶ丘古墳群**（西区大字野方字大音）

叶岳の東麓にある。市教委が外部に委託して1970年11月～71年1月と1973年8月の2回にわたり16基の古墳を調査した。未報告で詳細不明。

**29 野方塚原遺跡**（西区大字野方字塚原）〈28〉

市教育委員会文化課が調査会を組織して1975年3月～5月に調査した。早良平野の西、飯盛山・叶岳の山塊の麓の扇状地にある遺跡で、野方中原遺跡のすぐ南にあたる。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて営まれた墓地で、主に石棺墓を主体とするが、甕棺墓

も若干加わっている。遺構は箱式石棺墓13、甕棺墓３、祭祀遺構２、奈良～平安時代にかけての住居址に伴う炉址１を確認した。３号・４号石棺墓では棺外に供献された高杯、壺形土器を確認した。２地点で高杯形土器をそれぞれ３個検出した。棺内副葬品としては１号棺の漢式鏡片１点がある。その他、奈良・平安朝の遺物が多数出土したが、そのうちフイゴ等は製鉄の関係で注意される。また、縄文時代早期の押型文土器数十片も出土した。

本遺跡の調査で提起される問題は、第１に野方中原遺跡との関係から遺跡の立地論および弥生時代後期の社会構造の問題、さらに弥生時代墓制における甕棺墓から石棺墓への変化、棺外に副葬した土器群にみられる石棺墓々域、弥生時代墓制から高塚古墳への移行等等であろう。また、律令時代、当地に「野方の駅」が存在したとあるが、その時代の遺物が多量に検出されたことは、今後その位置を解明する上で貴重である。

（和田むつみ、折尾学）

**30 戸切中原遺跡**（西区大字戸切字中原）

戸切遺跡の東北側、早良平野中の微高地上にある古墳時代の遺跡。1974年11月～12月に市教委が外部に委託して調査。古墳時代住居址が発見されたが、詳細不明。

**31 戸切遺跡**（西区大字戸切）

壱岐南小学校建設にともない消滅した遺跡で、造成工事に先立ち1974年11月～1975年２月に発掘調査を実施した。

遺跡は早良平野の西を限る山麓に形成された低丘陵上に位置するが、削平が著しく現在は水田の下になっている。表土下に丘陵を形成する地山層があり、遺構がかろうじて残っている状態であった。出土遺物は縄文時代～歴史時代にわたるが、検出した遺構は古墳時代～歴史時代のものである。古墳時代の遺構は方形の住居址２、不整竪穴５とそれらを連結する細い溝である。歴史時代の遺構は２間×２間のベタ柱の倉庫と思われる建物２棟を検出した。

出土遺物には縄文時代の石斧・石鏃、弥生土器の石庖丁・扁平片刃石斧、古墳時代の木器・須恵器・土師器・紡錘車・土錘、歴史時代の土師器・青磁器・土馬等がある。

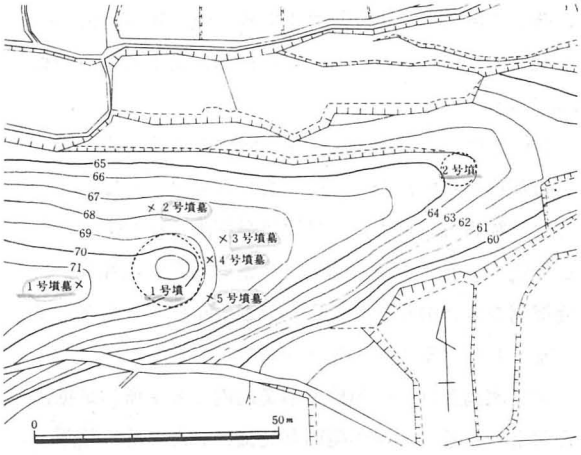
本遺跡は整理中であるが、その意義として次のことがあげられよう。①本遺跡の西側の丘陵には数百基におよぶ群集墳があり、その人々の集落について不明であったが、その一端をつかむことができた。②生産具の出土から同地域の経済基盤を解明することができる③縄文時代遺物の発見は周辺に同時代の遺跡の存在を示す。④本遺跡出土の須恵器はⅠ期～Ⅱ期におよぶものであり、その供給地は今宿の新開窯跡である。

（山崎純男）

**32 金武古墳群**（西区大字金武字浦江谷）〈29〉

1970年８月に調査。早良平野の最奥、室見川左岸の台地上にある。古墳２基と近世墓５基中３基を調査した。

１号墳は直径15m、高さ 2.7mの墳丘中央に横穴式石室がある。石室は２×3.6mの玄室に幅1.3m・長さ２mの羨道がつづく。須恵器片、紡錘車、ガラス玉、珠光青磁が出土。青磁は中世の塚信仰を示すもので、同様の例は他にもある。２号墳は径 7.5m、高さ２mの墳丘をもつ。横穴式石室は下部を残して破壊されており、玄室は2.3×1.7m、羨道は長さ２m・幅0.85m

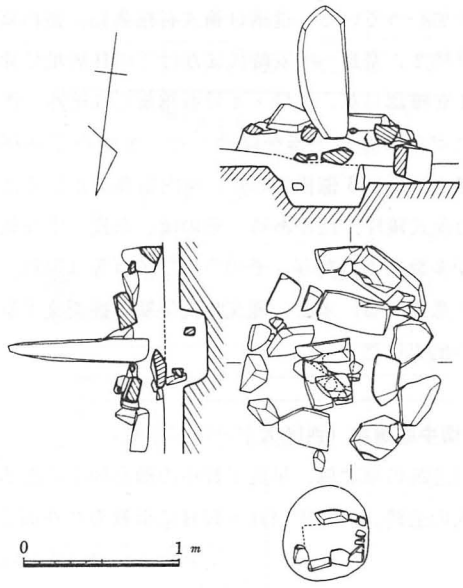



金武古墳群

である。土師器1片のみが出土した。1・2号墳は6世紀後半から末頃のものとみられる。

近世墓3基のうち1基は、長さ 1.3m、幅0.95m、深さ40cmの土壙の上に塊石を積んでいる。土壙から人骨が出土した。他の2基は石を立てそのまわりに塊石をつむ。その下に径60cmほどの掘り込みがある。1基の塊石の中から寛永通宝が出土し、これらの墓は江戸時代のものとみられる。

〈文献〉福岡市教育委員会「金武古墳群発掘調査報告－1・2号墳、近世墳墓の調査－」福岡市埋蔵文化財調査報告第15集 1971




金武古墳群　1号近世墳墓

**33 姪浜新町遺跡**（西区姪浜新町3399）〈29〉

店舗新築工事の基礎工事中に発見された弥生時代の甕棺墓遺跡。工事を一時中止し、1972年3月7日に甕棺墓2基（成人用1、小児用1）を調査した。遺跡は標高約3mの古砂丘上にあるが、現在では人家が密集し、旧状をとどめていない。甕棺墓は、調査した以外に8基以上あったとのことだが、工事中にすべて取り上げられ、正確な数はわからない。

遺物は、甕棺以外に祭祀用ないしは日常雑器類が若干出土したが、遺構にともなうものではない。また、甕棺の棺外副葬の可能性の強い石剣1点がある。遺跡の範囲は人家が密集していて明確にしがたいが、かなり広い。本遺跡は標高3mの古砂丘上にあり、それまで考えられていた弥生時代の海岸線標高5mよりも低く、弥生時代海岸線標高が3m以下にあることを示唆する。また跳ね上り口縁をもつ土器が早良平野にまでひろがっていることが確認された。さらに石剣副葬の甕棺の類例を加えた。（山崎純男）

〈文献〉福岡市教育委員会「姪浜新町遺跡調査報告」『下山門遺跡』所収 1973

**34 有田遺跡**（西区有田）〈29～31〉

有田遺跡は福岡市の西南部、早良平野のほぼ中央部に位置し、室見川と金屑川にはさまれた洪積層の独立丘陵上にある。この丘陵は南北約1km、東西約0.7km、最高位の標高15mで、北半に小田部、南半に有田の集落がある。

1965年秋、有田地区で土地区画整理事業による造成工事が行なわれた際、多くの遺物が発見された。このため、福岡市教育委員会は緊急発掘調査を実施することを決め、九州大学考古学研究室に調査を依頼した。発掘調査は1967年2月から3月と翌年2月から3月に実施された（第1次・第2次調査）。

第1次調査は、区画整理事業地内に8ヶ所の試掘溝を設定し、延 500m²の範囲が発掘された。その結果、13・18・25・27・29・31街区で遺構が検出され、弥生時代前期初頭のV字状溝1とそれにともなう多量の土器や石器、古墳時代前期の竪穴住居址2、古墳時代後期の竪穴住居址1、奈良時代の竪穴住居址1が明らかにされた。

第2次調査では第1次調査の成果をふまえ、①弥生時代前期初頭の家屋ならびに集落構造の究明、②古墳時代の住居址の構造とその変遷ならびに土師器編年の確立、③奈良時代の製鉄工房の構造的解明を主要テーマとして、29・31・27・18・17・16・13街区の7ヶ所延 900m²にわたって発掘が行なわれた。その結果、弥生時代前期初頭のV字状溝（第1次調査の延長部）、弥生時代後期のU字状溝1、古墳時代前期の竪穴住居址4、同時期の溝2、奈良時代炉跡3、奈良時代掘立柱建物1、平安時代の溝1、中世の溝1が新たに検出

された。

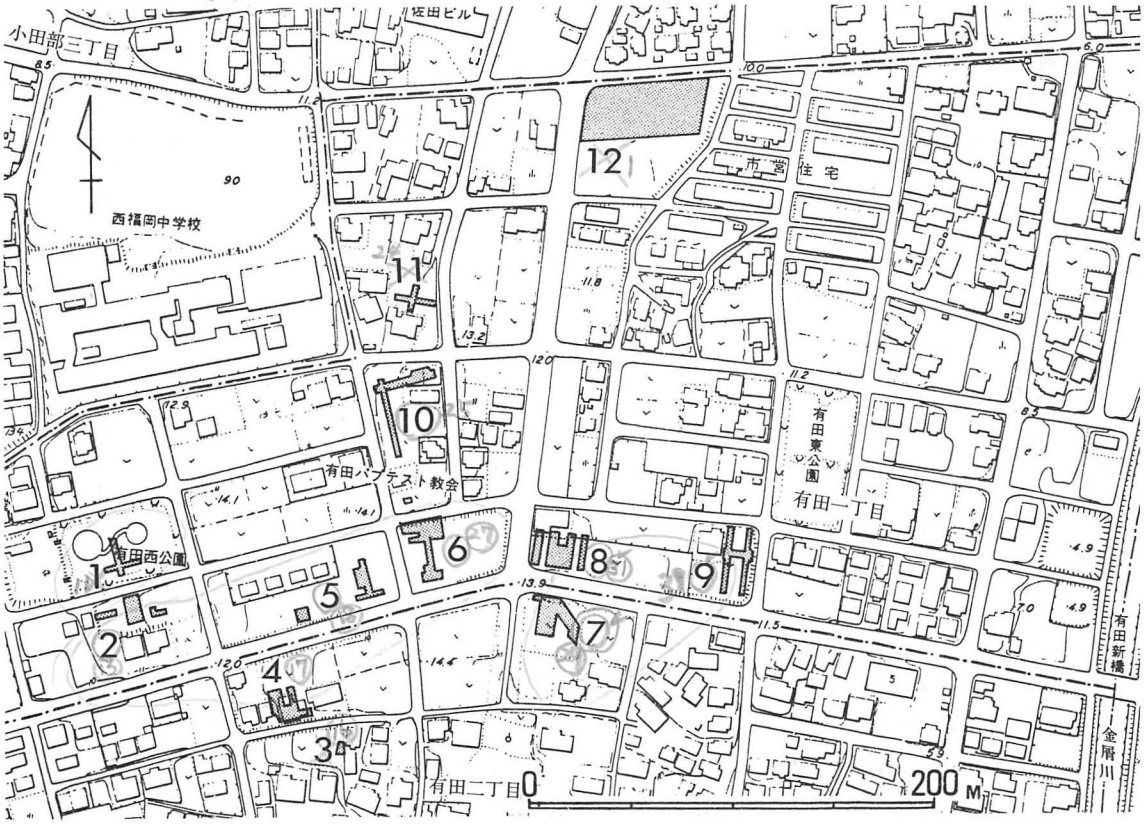
この２次にわたる発掘調査で明らかにされた有田遺跡の意義と重要性は、これまで板付遺跡で示されていた弥生時代前期初頭の集落形態にさらに類例を加えた点、それまで未確立であった北部九州古式土師器編年に一定の資料と方法的視点を与えた点、および古墳時代前期の竪穴住居跡の構造的変遷過程が明らかにされた点など、弥生時代前期初頭から奈良時代までにおよぶ各時期のあり方に豊富な学術的資料をもたらした点にあろう。また、地域研究の点からは、早良平野を1単位として、その歴史地理を解明する方法が調査の柱のひとつになっており、その後の早良平野における考古学的調査の先鞭をつけたのである。

このように、有田遺跡は学術的にきわめて重要かつ豊富な内容の遺跡であるが、ほぼ台地全面に広がるであろう各時代の遺構の内、発掘調査されたのはそれらの断片にすぎない。この２次にわたる調査以後、埋蔵文化財保護の点からは何ら対策はたてられず、区画整理の完成とともに、有田の台地周辺は急激な都市化が進行しつつある。これをこのまま放置するならば、有田遺跡の発掘調査の成果は無きものに等しいといえよう。

（塩屋勝利）

その後、1975年２月～６月に、第１・２次調査地点の北50～ 100ｍの地点を調査した（第３次調査）。有田・小田部の独立中位段丘は、いくつかの開析谷によって台地がくびられるようになっており、特に現在の有田地区・小田部地区の境は台地に深く谷が侵入し、台地の平坦面が最もせまくなる。これらの二つの谷頭に接して第３次調査地点がある。調査地の面積は約1800㎡である。

遺構は、弥生時代前期の隅丸長方形の貯蔵穴と考えられるもの２、弥生時代中期の円形住居址および壁が




**有田遺跡第１次・第２次調査地**（１～11）

2　13街区　古墳時代前期住居址１、奈良時代竪穴住居址１、奈良時代炉址１
4　17街区　古墳時代前期住居址１、溝１
5　18街区　古墳時代前期住居址１、古墳時代溝１、平安時代溝、柱穴列
6　27街区　古墳時代前期住居址２、同後期住居址１、奈良時代堀立柱
7　29街区　弥生時代前期Ｖ字溝
8　31街区　弥生時代後期溝、中世溝
9　31街区　弥生時代前期袋状竪穴２、溝
10　25街区　古墳時代前期住居址１

1（12街区）、　3(16街区)、　11(24街区）は遺構なし。

**第３次調査地**（12）　遺構については本文参照

切られた竪穴群の計７、弥生時代中期後半から後期初頭と考えられる井戸址２、弥生時代後期の住居址１、古墳時代住居址３、奈良時代から平安時代と考えられる掘立の建築址３、平安時代の大溝１と土壙墓１、その他時期不明の住居址２が検出された。弥生時代の井戸址からは多くの祭祀土器とともに、青銅利器の鋳型片や、線刻文様のある石材、井戸施設に関係すると考えられる木材などが出土している。土壙墓には白磁碗と刀子が副葬されていた。

調査は広大な台地の一画を発掘したにすぎないが、調査結果や第１・２次の発掘調査地点に接すること、あるいは今回の調査地の北側が、二つの谷頭の形成によって制約を受けるなどの条件から、有田遺跡の北端の一部を構成する遺構群であることが確認された。さらに今回、先の調査の裏付けとして、集落址および古代の田部郷に関すると考えられる遺構を検出し得た。また井戸址は板付遺跡以外に新たに２例を加えた。地形や時期などから、井戸の出現過程を明らかにする資料となるだろう。井戸（10号土壙）の上部と底からは祭祀土器がまとまって出土しており、井戸の掘削時あるいは廃棄時における祭祀の存在を明らかにした。

有田遺跡が示す考古学的価値は言うまでもないが、第１・２次調査以来、10数年間調査あるいは保存の手が講じられないまま、破壊されてきたことは残念である。今後、有田遺跡の実体をより具体的に把握するためにもあらゆる開発行為のチェックが望まれよう。

（井沢洋一）

〈文献〉九州大学考古学研究室編「有田古代遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第１集 1967、同「有田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第２集 1968、福岡市教育委員会「有田周辺遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集 1977

## ㉟ 原談儀遺跡（西区大字原字田中園、談儀）〈32〉

福岡市教育委員会文化課が調査会(協力－明治大学・東京教育大学・桐朋女子短期大学学生有志）を組織、受託して1975年７月～９月に調査した。この遺跡は、早良平野のほぼ中央部に位置する有田遺跡と、金屑川をはさんで向いあう独立低位丘陵上と、その裾野の金屑川で形成された沖積平野にある。

縄文時代最終末期、弥生時代前期末から中期初頭、古墳時代前期、奈良から平安時代の水田址や、平安時代から鎌倉時代の溝状遺構及び柱穴群を検出した。

丘陵上はすでに水田形成時に削平された所が多く、原始・古代の遺構は残存する柱穴群でしのばれる程度で、鎌倉時代の溝状遺構を確認するにとどまる。沖積部では、縄文時代最終末の夜臼式土器を包含する自然礫層を擂鉢状に掘り込んだ井戸を検出している。おそらく自然湧水源を利用した簡単な施設であろう。また弥生時代前期末から中期初頭の土器や木器を含む杭列が認められる。古墳時代前期、奈良・平安時代の遺物はその上層の杭にともなうが、系統的に把握するには至らなかった。

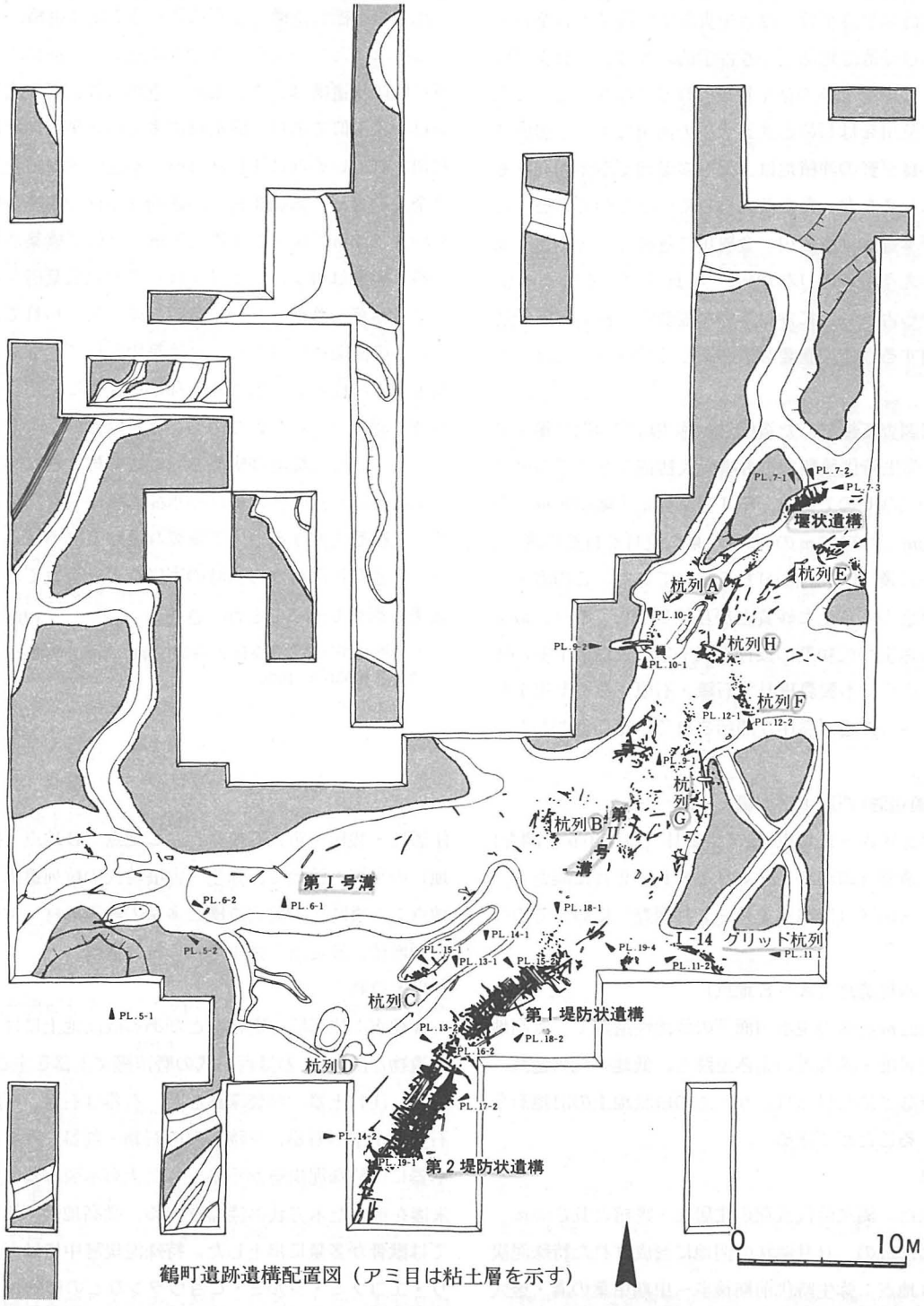
遺物は次のとおり。夜臼式土器片数十片とそれにともなう杵(きね)形木器１。弥生時代前期末～中期初頭の無頸壺と蓋形土器（それぞれ丹塗を多数含む）、有頸壺、甕形土器等。および同時代のフォーク形木器数個、スプーン形木器１、杓子形木器１、桶形木器（一木作り）１、棒状木器１、三又鍬形木器１等が出土している。古墳時代初頭の土器類は流れ込み包含層に見られ、鼓形器台２が目につく。鎌倉時代の溝状遺構内の遺物は糸切り底杯形土器数点と中国龍泉窯系青磁器片数点のみである。

本遺跡調査の意義は低位丘陵上の古代集落址にともなう沖積層の実態を把握する点にある。金屑川をはさんで本遺跡と対する有田遺跡等、低位丘陵上の実態だけでなく、当時の生産水準を知る上で沖積層の調査は重要と考えられる。また本遺跡は、原の独立丘陵の裾に存在するが、調査の結果、周辺にも原始・古代解明の手がかりを得る良好な資料が眠っている事は明白である。今後、行政的に周辺遺跡をどう守るか、我々の課題である。

（松浦宥一郎、和田むつみ、折尾学）

## 36 鶴町遺跡（西区大字免字鶴町） 〈32～33〉

人口増にともない大字免に小学校建設の計画が立てられ、敷地内における埋蔵文化財の有無について調査することになった。まず敷地東西の農業用水路の切りかえ工事の際に土層観察を行なった。それによると敷地内の南側半分が湿地帯の特徴を示しており、ここの排土から木片、弥生時代から古墳時代にかけての土器片などが出土し、水田遺構に関する遺跡の存在が予想された。発掘調査は低湿地のため長期の発掘期間と土




鶴町遺跡遺構配置図（アミ目は粘土層を示す）

壌学や花粉分析学などの自然科学の援助を必要とし、充分な調査体制を整えて開始するのが前提である。しかし、すでに開校が決定していたために、事前の準備が不完全なまま1973年9月より翌年3月まで調査することになった。

本遺跡は早良平野のほぼ中央部に位置する。早良平野における低湿地部での考古学的調査は、それまで例がなく、また遺跡の存在も知られていなかった。これは、室見川をはじめとする大小の河川によって形成された早良平野の沖積地は、低平多湿地で水田開発が充分になしえなかったと考えられていたためである。ところが本遺跡は室見川・金屑川に近接し、その氾濫原ともいえる所にありながら、 早良平野における弥生時代から古墳時代にかけての水稲農耕技術の発展経過を究明するうえで重要な遺跡として期待されたのである。

発掘調査で検出した遺構は、弥生時代前期の第Ⅰ号溝と、弥生時代後期から古墳時代初期にかけての第Ⅱ号溝が主なものである。第Ⅰ号溝は最大幅約8m、全長約30m、深さ1.7mの、西より東に流れる自然の溝で、わずかに護岸的な杭が打ちこまれていた。この溝の土層は黒色の粘質土と砂質土が互層をなしており、最下層から弥生時代初期の板付Ⅰ式土器と夜臼式土器が伴出し、さらに木製農耕具や石鎌・石庖丁なども出土し、当時すでに付近で稲作が開始されていたことがわかった。これは土壌分析によって稲の葉の細胞や花粉が検出されて、裏付けられた。

第Ⅱ号溝は、幅約7m、深さ約1.2m、全長約60mあり、第1号溝を切って南西から北東方向に流れる溝である。この溝の両岸には護岸的な役割りをはたしたと思われる柵状遺構（しがらみ）や堤防状遺構、さらには排水のための樋などが完全に近い形で検出された。特に堤防状遺構は、松山市古照遺跡の堰と構築法や構築材がよく似ており、構築材に多くの建築用部材が再利用されている点は注目される、本遺跡の堤防状遺構は全長約22m、幅約3m、高さ約1.5mの規模を持ち、平均長2.2mの横木と平均長1mの立杭で構築されている。樹種はカシ、シイノキなどの常緑広葉樹が多く、ついで落葉広葉樹、常緑針葉樹の順に用いられている。これらの構築材のほとんどは建築用部材で、なかには高床倉庫の柱として加工されながら建物に使用された形跡を認めがたいものがある。水害などの不時の災害に対して一度に堤防が構築されたとも推定される。

本遺跡は早良平野における水稲農耕の発展段階と、その過程を究明するうえで重要な遺跡であるばかりでなく、建築用部材から当時の家屋などを復原でき木工建築技術をも知ることができる。（力武卓治）

〈文献〉福岡市教育委員会「鶴町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集 1976

## 37 四箇（しか）遺跡（西区大字四箇）〈34～39〉

四箇遺跡A～E地点（1974年2月～1977年6月調査）四箇東遺跡（1976年3～4月と8月～9月に調査）、四箇J－10区（1976年4月～7月調査）にわけてのべる。

1）四箇遺跡（A～E地点）

標高22m前後の現水田面下の低地性遺跡で、微高地上の住居址・溝などの集落遺跡と、低地の杭列遺跡・泥炭層などにわけられ、かつての扇状地上の旧地形を復元することができる。

遺構

A地点：縄文時代後期の住居址・甕棺と長さ60m、最大幅12mの三日月湖状の凹地に形成された特殊泥炭層。B地点：弥生時代前期後半～中期中葉の溝・竪穴住居址・甕棺・箱式石棺など。C地点：B地点（微高地）の東側の低地で、弥生～古墳時代の杭列遺構。D地点：古墳時代の杭列遺構と多量の建築部材・木器などが堆積。E地点：弥生中期の杭列遺構。

出土遺物

A地点：住居址・甕棺などがある微高地上には多量の遺物が出土。土器は西平式の磨消（すりけし）縄文土器を主とし、浅鉢、注口土器、粗製深鉢など。石器は石皿、石錘、石斧、十字形石器、黒曜石製の石鏃・削器・錐など。木器には特殊泥炭層から出土した大形木製容器未製品、朱漆を塗った木刀状の漆器がある。微高地の東側凹地では獣骨が多量に出土した。特殊泥炭層中にはドングリ・エゴノミ・クルミ・ヒョウタンなどの植物種子が

多量に出土している。いずれも縄文後期後半の時期のものである。B地点：土器（甕棺・壺・甕・器台・高杯など）、石器（石鏃・石包丁・磨製石斧・砥石など）。C・D・E地点：低地の杭列遺構中から弥生～古墳時代の木器・建築部材が出土している。主なものは木製農具（平鍬・えぶり・三叉鍬・四叉鍬・杵（きね）、木器（手斧（ちょうな）柄頭・弓・槍状木器・梯子（はしご）・容器）、建築部材（欠き込みを施したり、柄孔（ほぞ）を有するものなど）。

これまで発掘例の少なかった縄文時代の集落遺跡が平野の中の微高地上に発見されたことから、今後、低地性遺跡を重視する必要がある。縄文後期の遺物のほか、特殊泥炭層から出土した漆器は西日本では発見例の少ない貴重なものである。マメ・ヒョウタンなどの植物種子の出土も、縄文農耕との関連で、福岡平野部における弥生時代以前の姿を解明していく上で重要な問題提起となる。弥生前期後半から中期中葉にかけての微高地上の集落遺跡と微高地周囲の杭列遺構との関係は、低地における水田経営のあり方を示すもので、低地深耕に適した木製農具が数多く出土している。杭列遺構は古墳時代前半まで認められるが、その後の条里制遺構と関連づけられるような遺構は発見されていない。

②）四箇東遺跡

四箇遺跡A地点の南約 200 m の水田の下にある縄文時代後期の遺跡。第1次調査地点は、微高地の先端部に立地した遺跡の一部分で、遺跡の主要な部分は南側の微高地上にあろう。北側の第2次調査地点は低地で、微高地に面した旧河道と考えられ、遺物はほとんどない。数個のピットを除くと遺構は検出されなかったが、縄文後期後半の包含層があり、多量の遺物が出土した。

出土遺物は三万田式土器の時期に限定される土器－黒色磨研の精製土器（浅鉢・皿・椀・台付鉢）と粗製深鉢。土製品－土偶（頭部片）と有孔円盤（紡錘車か）。石器－打製石斧・磨製石斧・十字形石器・石鏃・黒曜石製のスクレパーなど。石製品－突起を有する扁平な石製品が1点ある。装身具－垂飾（勾玉状）・玉類。

四箇遺跡A地点に近接して縄文時代後期後半（三万田式土器）の包含層が検出され、同時期の集落址の存在が確められた。周辺の微高地上には同様な遺跡の存在が推定され、縄文後期から弥生時代への発展過程を解明する上で重視すべき地域である。

③）四箇J－10区

四箇遺跡B地点の南西側に近接し、現水田面下の微高地間の旧河道に面した低地に、弥生時代中期の杭列遺構があり、弥生・古墳時代の木器・建築部材を含む流木群が堆積している。杭列遺構はB地点と関連ある弥生時代の水利施設であろう。数点の縄文土器片を除けば弥生時代の土器が大半を占める。壺・甕・高坏・器台などの小片で、古墳時代前期の土器も少量ある。いずれも杭列遺構付近に旧河道の上流から流されて、二次推積したものである。石器（黒曜石製の石核・スクレパーなど数点）、木器（三叉鍬・船型突起を有する四叉鍬の木製農具、網枠・石斧柄・容器・用途不明の木器）、建築部材（上端に欠き込みを有するものと二叉に分かれるものがあり、先端はいずれも尖る）などが出土。このほか多量の杭がある。木器・建築部材は上から流され、弥生・古墳時代の遺物と混在しており、時期を特定することはできない。（柳田純孝）

〈文献〉二宮忠司「四箇遺跡」『ふるさとの自然と歴史』53号 1975、柳田純孝「福岡市西区四箇遺跡の調査」『九州考古学』51 1976、同「福岡市西区四箇周辺における縄文遺跡の調査」『日本考古学協会昭和51年度大会研究発表要旨』1976、福岡市教育委員会「四箇周辺遺跡調査報告(1)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集 1977

**38 山崎古墳群（西区西油山山崎・御堂上・石河原）**

既存の西油山古墳群と区別する意味から「山崎古墳群」の名称を用いる。調査期間は1974年8月から10月まで。遺跡は福岡市の南にそびえる油山の支丘上にあり、厳密には二つの小支丘（山崎、御堂上）と低地にまたがっている。

遺跡は古墳時代を中心としている。しかし石製品の発見されたことから、さかのぼって生活が営まれたようであるが、遺構を確認するにはいたらなかった。また中世に属すると考えられる遺構も存在した。発見された遺構は、横穴式石室墳10（竪穴系横口式石室の系統上にあると思われるもの2基）、古墳時代火葬墓1（伴出遺物は須恵器V型式）、性格不明土壙6、溝状

遺構1（中世と推定される）。遺物は表を参照のこと。

本古墳群の存続期間は須恵器ⅢA型式からⅥ型式までで、ほぼ6世紀中葉頃から7世紀後半頃までと推定される。古墳築造の集中化はⅢA～ⅢB期とⅥ期にあり、Ⅳ期ではもっぱら追葬を行っていたようである。

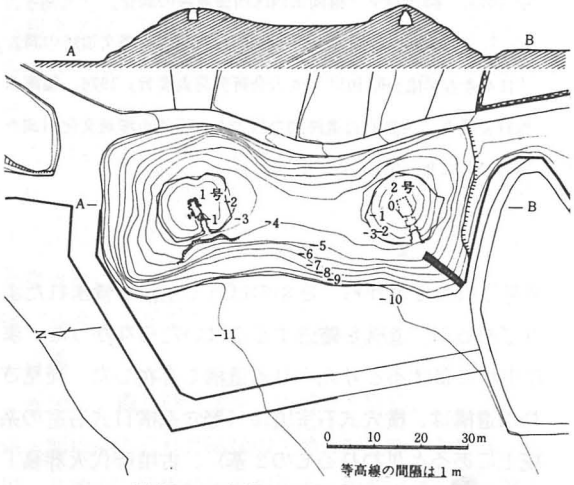
火葬墓は長さ約 1.8m、幅 0.8mの隅丸長方形土壙中に、鉄釘を使用した組合式木棺を収めており、これを焼いていた。本墓は畿内地域を中心に発見されている窯槨（かまどかく）古墳（カマド塚）とはやや趣の異るものであったが、性格的には通じるものと推察される。時期は須恵器Ⅴ型式、ほぼ7世紀初頭を前後しており、カマド塚の推定年代にほぼ一致する。（大川　清）

**山崎古墳群出土遺物一覧表**

| 古墳No. | | 須恵器 | | | | | | | | | | | | 土師器 | | | | | 馬具 | | | 装身具 | 武具 | | | 工具 | 陶磁器 | 石器 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 坏 | 蓋 | 高坏 | 坩 | 埦 | 𤭯 | 平瓶 | 提瓶 | 横瓶 | 壺 | 器台 | 甕 | 高坏 | 皿 | 埦 | 坩 | 甕 | 轡 | 金具 | その他 | | 太刀 | 鏃 | 刀子 | | | | 備考 |
| 1 | 玄室 | 4 | 4 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 ※ | | ※墳裾出土 |
| 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 鉄鋒 |
| 3 | 玄室 | | 2 | | | 2 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | カワラケ1 鉄鋒 |
| 4 | 羨道 | 6 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 砥石1 鉄鋒 |
| 5 | 玄室 | 7 | 10 | | | | 1 | | | | | 2 | 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 | |
| | 周湟 | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 6 | 玄室 | 4 | 3 | 2 | 2 | | 1 | 2 | | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 | 10 | 2 | | 若干 | | |
| | 羨道 | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 | | | | | | | | | |
| | 墓道 | 3 | | | | | | | | | | | 3 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 墳裾 | 6 | 4 | 2 | | | | | | | | | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7 | 墳裾 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| 8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 9 | 玄室 | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| | 墳裾 | 10+ | 12+ | 2 | 4 | | 3 | 1 | 1 | | 2 | | 3 | | 1 | | | | | | | 1 | | | | | 8+ | | |
| 10 | 玄室 | 9+ | 9+ | 3 | 3 | | | 1 | | | | | | | 4 | | | | 1 | 5 | 馬蹄1 | | | 14+ | 2 | 2? | 5+ | 4 | 不明金具3 石鍋1 |
| | 羨道 | 15+ | 14+ | 10+ | 3+ | | 5 | 1 | 2 | | | 6 | 1 | 5 | | 2 | | | | | | | | | | | | 2 | |
| | 墓道 | 14+ | 10+ | | | | | | | | | | 7+ | | | | | | | | | | | | | | | 5 | |
| 木棺基 | | 4 | 6 | | | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | 1 | 3 | | | 釘約35 |

## 39 影塚第1号墳（西区野芥影塚）

1971年10月に調査。油山西麓には、派生した丘陵が浸蝕をうけ独立丘となって点在する。本古墳はその独立丘上にある。この古墳は高さ約2.5m、径15m余の円墳で、西方に開口する横穴式石室。内部は完全に破壊されているが、石室平面形は長方形で、片袖の石室と復元される。主として墳丘から須恵器・土師器・鉄鏃・滑石製紡錘車・鉄滓などが出土した。6世紀末～7世紀初の古墳であろう。（三島　格）




影塚1号古墳・2号古墳

〈文献〉福岡市教育委員会「福岡市影塚第1号墳発掘調査報告－附　影塚第2号墳石室実測図・周辺古墳分布図」福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集 1972

## 40 大谷古墳群（西区梅林字大谷）

1972年2月～5月に第1次、同年7月～10月に第2次調査を実施した。本古墳群は10基の古墳からなるが、そのあり方は散在的である。この10基のうち発掘調査したのは第1号～第7号の計7基で、残る3基は現状のままである。第4号～第7号墳の4基については報告されている。本古墳群は背振山系より派生した油山が大きく北に張り出す北端山麓に位置し、周辺に多くの群集墳がある。

〔第1号墳〕破壊からまぬがれ、石室清掃のみを実施した。単室の両袖形横穴式石室。本古墳群中最も大きな石室をもつ。石室内より鋤先、鉄鏃、須恵器、土師器が出土。

〔第2号墳〕径15m前後の円墳で、単室の両袖形横穴式石室をもつが、羨道の一部を失っている。石室内より須恵器、土師器、鉄滓が出土し、墳丘中から須恵器、土師器、鉄鏃が出土した。

〔第3号墳〕径8m前後の小円墳で、小形の竪穴式石室をもつ。石室内から銅環一対が、墳裾から土師器坏が出土した。

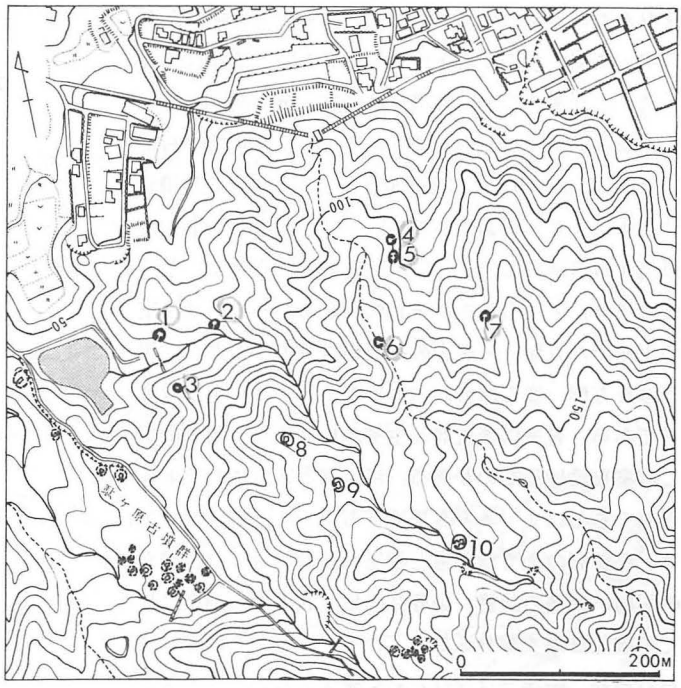
〔第4号墳〕単室の両袖形横穴式石室をもつ小円墳である。墳丘基底面は石組みで特別の配慮がみられる。石室内より土師器、須恵器、スラッグが出土。

〔第5号墳〕複室の両袖形横穴式石室をもつ。石室内より須恵器、土師器、刀子、石室内から前庭部にかけて多量のスラッグが出土。墳丘中からも須恵器、土師器が出土した。

〔第6号墳〕単室の両袖形横穴式石室をもつ。石室より土師器、須恵器、スラッグ、前庭部より多量のスラッグが出土している。

〔第7号墳〕石室の大部分が失われている。須恵器、土師器、スラッグが出土。

以上、いずれも6世紀後半に築造された古墳である。本古墳群を最も特徴づける遺物として、スラッグの供献があげられる。最近、福岡市域、特に早良・今宿で製鉄遺跡が数多く発見され、これらとの関連も含めて今後充分検討を要することであろう。（山崎純男）



大谷古墳群分布図

〈文献〉福岡市教育委員会「大谷古墳群Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第19集　1972

## 41 七隈古墳群（西区大字梅林）〈40〉

本古墳群は福岡大学構内にあり、油山北麓より北へのびる丘陵の先端部に立地する。

1969年春、福岡大学が馬術場、自動車練習場の造成工事を行なっていた際、同大学学生によって古墳が破壊されつつあることが発見され、緊急発掘調査を実施することになった。調査は1969年6月～7月に行われた。また翌年の5月には造成地拡張部分にも古墳1基が確認され、8月～9月に福岡市文化課の指導により福岡大学歴史研究同好会が発掘調査を実施した。

本古墳群は本来8基より構成されていたが、造成工事によって大部分が破壊され、発掘調査されたのは3基にすぎない。第1次調査では、5、6号墳の2基が発掘された。5号墳は盗掘を受け石室の石材がほとんど抜き去られていたが、坏・高坏・鼓（はそう）などの完形の須恵器30点、ガラス小玉32個、鉄鏃などが出土した。

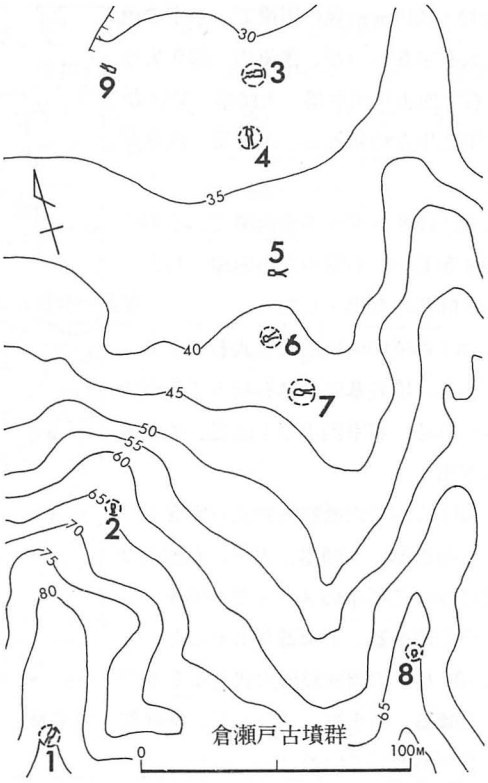
6号墳も著しく破壊を受け、石室は、玄室部が腰石一段のみを残し、羨道部はほぼ石積状態を知り得た。遺物は須恵器、土師器、ガラス小玉などが少量出土した。8号墳も破壊を著しく受けていたが、石室の規模と構造は明らかにされ、須恵器、土師器、鉄鏃、鉄製鋤先、ガラス小玉、鉄滓などが出土した。

これら3基の古墳の中で、5号墳と6号墳は6世紀後半、8号墳は7世紀後半代に位置づけられ、油山北麓に多数分布する後期古墳群の形成、発展、消滅の過程を構造的に知る上で、一定のパターンを最初に示唆したものといえる。（塩屋勝利）

## 42 倉瀬戸古墳群（西区大字片江字倉瀬戸）

1971年11月～12月に古墳9基を調査した。古墳群は油山の北山麓のほぼ南北にのびる尾根とそれらにはさ

まれた谷にある。いずれも横穴式石室をもつ円墳だが、破壊・盗掘のため原状を保つものはない。墳丘は流失したものが多いが、4号墳は直径17.6m・高さ2.7m、7号墳は直径10m・高さ約2mである。各古墳の石室の全長は、①6mをこえるもの(1・3・4・5号墳)、②5m以上6m未満のもの(6・7・9号墳)、③3m以上4m未満のもの(2・8号墳)にわけられる。①・②の場合、主室の長さが全長の⅓を占めるものは主室の平面形が方形、½を占めるものは長方形であり、①では長方形、②では方形のものが多い。③の主室は方形である。石室は羨道部と主室からなるが、両者の間に副室を設けるものがある。羨道部と区別される副室をもつものは3・4・9号墳である。5・6・7号墳は、平面形の上では羨道と副室の区別はないが、壁面の石材、閉塞の状態、副葬品の出土状態から副室としての機能を果す部分をもっている。1号墳も同様とみられるが、破壊がはなはだしく確実でない。2・8号墳は副室がない。各古墳からは須恵器・土師器が出土し、とくに7号墳では主室・副室・羨道、石室横の封



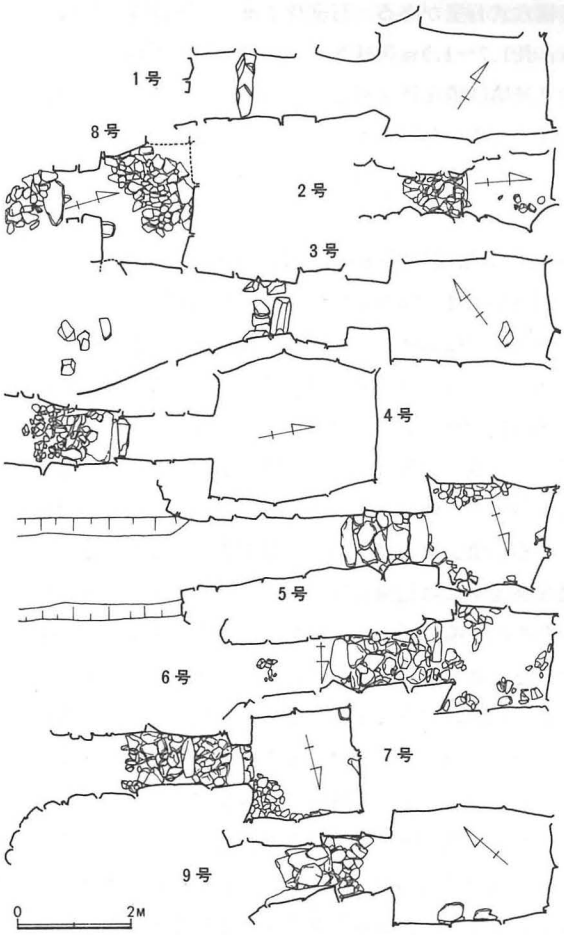

**倉瀬戸古墳群石室一覧表**

| 古墳 | 方位 | 全長 | 主室(後室) 長さ×幅×高さ | 副室(前室) 長さ×幅×高さ | 羨道 長さ×幅×高さ | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1号 | 南 | 630 | 300×190×200 | − | 330×90~120×120 | |
| 2号 | 南 | 355 | 160×140~80×90(+) | − | 195×80~100×70 | 天井なし |
| 3号 | 西 | 660 | 280×190~170×180(+) | 100×130×50(+) | 200×90~160×100(+) | 天井なし |
| 4号 | 南 | 650 | 280×250×140+190~210 | 150×80×90+ | 220×90~120×90+ | 上半部なし<br>主室胴張りあり |
| 5号 | 東 | 650 | 200×180×190(+) | 100×95×150(+) | 250×90~130×100(+) | 天井なし |
| 6号 | 東 | 580 | 180×180×190(+) | 140×80×100(+) | 100×90×110 | 天井なし |
| 7号 | 東 | 560 | 190×190×190(+) | 80×60×100 | 240×130×90~110 | 天井なし |
| 8号 | 南 | 320+ | 160×200×70+ | − | 160×80×60+ | 上半部、羨道破壊 |
| 9号 | 西 | 570 | 280×170~200×170(+) | 100×90~110×120 | 190×70~130×110~130 | 主室上半部なし |

註1)石室幅が一定でない場合は、奥幅～前幅、または奥幅～中央幅～前幅の順で記してある。
2)石室長さ、高さのうち、天井または上半部が失われている場合は、現存高測値に+を付してある。また(+)としたものは天井石はないが現存高がほぼ本来の高さと考えられるものである。
3)測値単位はcmである。

土中から多数出土した。この他に金環2点・銀環3点・銅環1点・土製練玉・鉄製鋤先（以上7号墳）、鉄刀（5号墳）、刀子（5・8号墳）、鉄鏃（5・7号墳）、轡（4・7号墳）が出土し、1・2・4・5・7号墳では鉄滓が出土した。須恵器はⅢA様式が4号墳で出土し、2・8号墳を除く各古墳ではⅣA様式が出土した。2・8号墳ではⅥ様式が出土し、5・7号墳でもⅥ様式が出土している。4・5・7号墳では追葬が行われ、9号墳もその疑いがある。他の古墳では追葬は行われていない。古墳の築造年代は、副葬された須恵器から、2・8号墳が7世紀後半、他は6世紀後半～終末と考えられる。

〈文献〉小田富士雄編「倉瀬戸古墳群」倉瀬戸古墳群調査団 1973



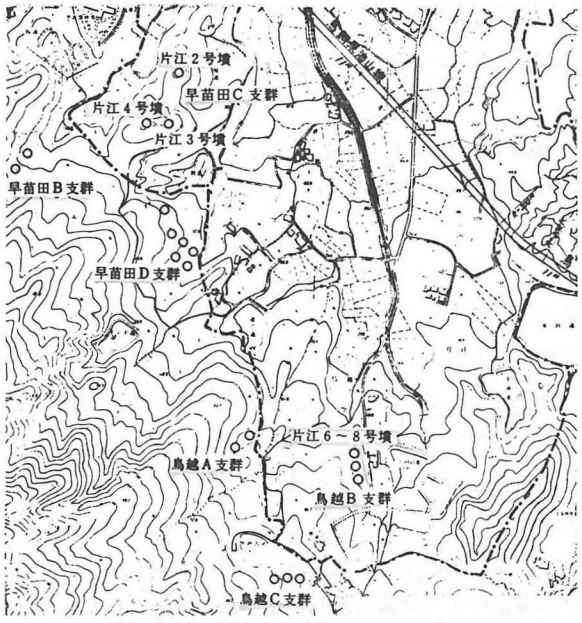
倉瀬戸古墳群　石室平面

## 43 片江古墳群（西区片江　鳥越・早苗田）〈40～41〉

市民の森として親しまれている油山(569m）の山麓一帯は、市内有数の古墳群地帯で、その数 400基を上まわる。山麓の丘陵上や斜面のいたるところに、2～3基から数十基の後期群集墳が散在している。本古墳群名は、片江区画整理事業地内にある古墳群の総称で、1972年6月～11月に調査を行なった6基の古墳は、早苗田と鳥越の二つの古墳群にわたる。前者（2～4号墳)は標高40mほどの起伏の多い低丘陵上に、後者(6～8号墳）はゆるい丘陵斜面に位置する。

〔2～4号墳〕早苗田丘陵の各項部に作られている。地盤が花崗岩の風化したマサのため、その上に作った墳丘は流失しやすい。したがって各古墳は、いずれも墳丘の一部から過半がすでに崩れているが、径10m前後の小円墳と思われる。遺体を埋葬する施設は、花崗岩を積み上げた横穴式石室で、地面を掘り下げた掘り方の中にある。保存状態は悪く、全体を残すものはない。玄室は幅2.1m、長2.8～3mの長方形をなし、比較的大形の石材を用いている。出土遺物は少なく、わずかな土器と副葬された武器の一部（鉄鏃）だけである。6世紀後半～末築造。

〔6～8号墳〕標高35mのゆるい斜面に、3基の古墳が裾を接するように作られている。東西の6・8号墳は、墳丘径10～10.5mの方形に近い小円墳で、裾部に全周しない石列がある。墳丘の中央下部に東に開口す



片江古墳群位置図（縮尺12,500分の1）

る横穴式石室がある。石室長７ｍ、玄室は幅1.7～1.8ｍ、長1.7～1.9ｍをはかり、同形・同大である。中央の７号墳は墳丘径９ｍとやや小さく、周囲に二重の石列がめぐる。石室は南に開口し、前面には東にカーブする墓道が作られている。石室内はいづれも既掘のため副葬遺物は少ないが、墳丘の前面から墓前祭祀等に供献された須恵器を主とする土器類が出土した。６世紀末～７世紀前半築造。　（柳沢一男）

〈文献〉福岡市教育委員会「片江古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第24集 1973

## 44 瀬戸口古墳群（西区東油山字瀬戸口）〈42〉

1974年12月～75年１月に調査。本古墳群は油山の北北東山麓（標高56ｍ）の東斜面にあり、９基の円墳からなる。１基（９号墳）はすでに消滅しており、造成区域内にある７基のうち４基（５～８号墳）は現状保存され、残り３基（１～３号墳）が調査された。１号墳は頂部から前庭部が大きく破壊され、石室は失われている。墳丘は直径約10ｍ・高さ約２ｍと推定され、墳丘盛土中には花崗岩礫が混入されている。石室構築のための土壙内埋土より須恵器、金環、鉄鏃などが出土した。２号墳の墳丘も径10ｍ・高さ２ｍと推定され、頂部から前庭部が破壊されている。石室は一部が残存し、全長4.5ｍ・奥壁幅1.5ｍである。須恵器、鉄刀、鍔（つば）、鍔金具、刀子、鉄鏃、メノウ製勾玉、ガラスやヒスイ製の玉類、飾り鋲金具などが出土した。３号墳の墳丘は完全に失われ、石室もごくわずかしか残っていない。石室は全長３ｍ、玄室は 1.2×１ｍと推定される。遺物はない。これらの古墳は１・２号墳出土須恵器から６世紀末～７世紀末頃とみられる。調査していない古墳のうち４号・８号墳の墳丘は直径20ｍ余、高さ３ｍ余である。５・６・７号墳は崩壊が著しい。

〈文献〉田坂美代子「瀬戸口古墳群」株式会社リコー 1975

瀬戸口古墳群

## 45 京ノ隈遺跡（西区田島三丁目）〈42～43〉

本遺跡はかつて土取り工事中に箱式石棺が出土したが、土取り工事がすすんで完全に消滅したとされていた。1974年にこの地域が宅地造成されることとなり、雑木が伐採され、丘陵頂部に古墳のある疑いが生じた。再度の現地踏査で湖州鏡、白磁器が採集され、経塚等の存在が予想されたので試掘調査を行い、遺構の確認により1974年８月～９月に緊急調査を実施した。

遺跡は金山を中心とする低丘陵から東にのびる一つの丘陵頂部に位置し、現状では周辺部の宅地化により独立丘陵頂部のように見える。眼下には樋井川およびその支流によって開折された狭少な沖積地がひろがる。

調査の結果は、地山整形によって造り出された古墳上にさらに経塚（きょうづか）を構築した重複する遺跡で、それぞれ京ノ隈古墳、京ノ隈経塚とよぶ。

京ノ隈古墳は先の土取り工事で墳丘の約半分を失っているが、北側でくびれ部を確認し、墳形が前方後方形をなすことを確認した。墳丘の大部分は地山を削って二段につくられ、後方部頂部にわずかに盛土がみられる。墳丘の規模は後方部が一辺約19ｍで、現存主軸長23ｍ・高 2.3ｍだが、元来の主軸長は40ｍ前後と思われる。主体部は後方部中央をややはずれて粘土槨（ねんどかく）（割竹式木棺（たけしきもつかん））１基と前方部に箱式石棺１基以上が存在する。割竹式木棺は長さ約６ｍ・幅約 2.5ｍの墓壙（ぼこう）中央部に安置され、まわりを粘土でつつまれている。木棺

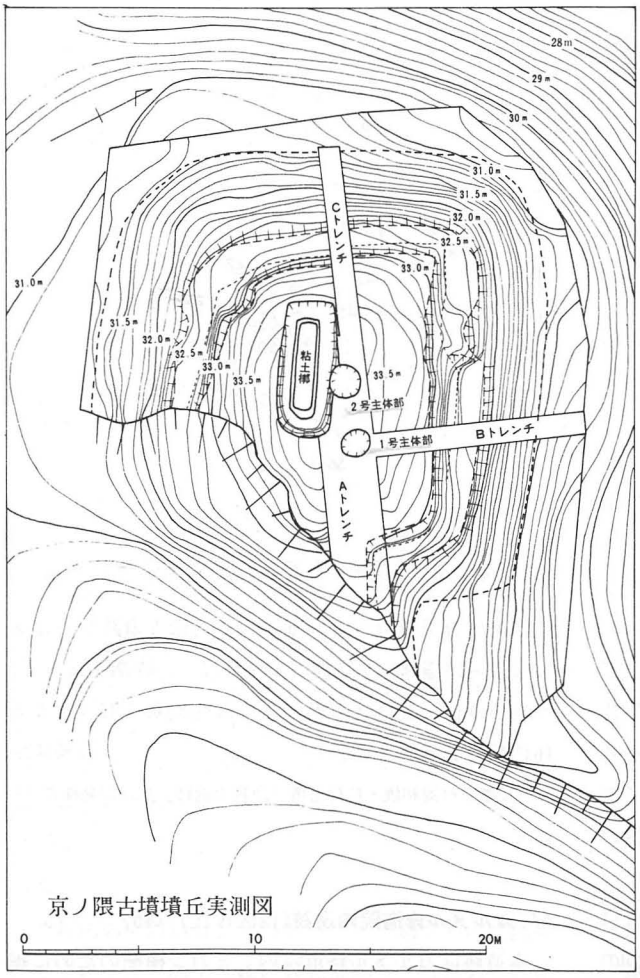
は長さ約4m・幅77cm～59cmで、棺内中央部には赤色顔料が敷かれる。副葬遺物は盗掘、攪乱を受けていないにもかかわらず、鉄剣1、鉇1、鋤先1だけであった。前方部の石棺は調査前に出土したもので、内部に人骨一体が埋葬されていたという。

京ノ隈経塚は古墳上に長径12m・短径10m・高さ1.6mに盛土して外部施設とするもので、そのほぼ中央部に並列して2基の経塚主体部がつくられる。1号主体部は2段の掘り方内に箱式石棺材を利用して小石室をつくり、その中に須恵器大甕と黄釉鉄絵花文大盤を組合わせた外容器を安置し、この中に銅板鋲止め経筒1個があった。石室・外容器内には炭をつめてある。また掘り方の内部には副葬品として、平型合子1、坩形合子3、刀子1、鉄鏃2、毛抜き1、貨幣1、数珠玉多数が投げ込まれた状態で出土した。2号主体部は1段の掘り方内部に、1号主体部同様、小石室を構築し、石室外は礫によって裏ごめがなされる。石室内には石製経筒1個が安置されていた。副葬品として、経筒蓋上や石室裏ごめ石の間から、平型合子1、坩形合子3、小刀3、不明鉄器2、水晶玉1、滑石製品1、数珠玉多数が出土した。

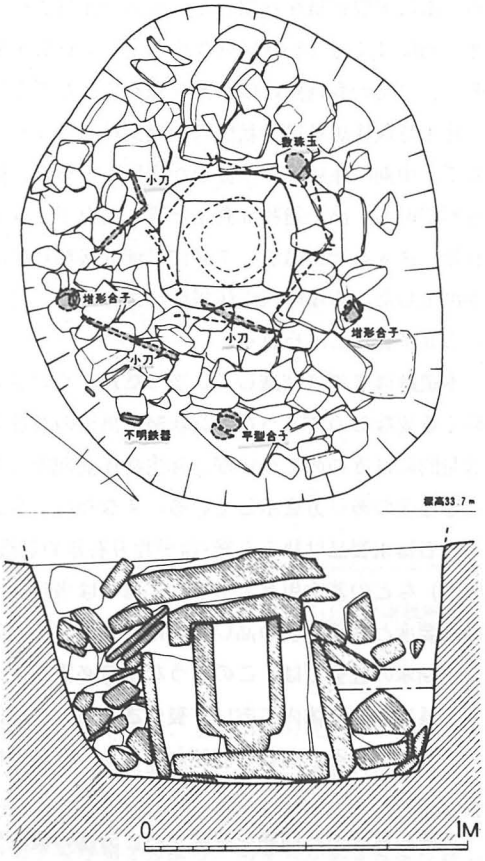
この経塚は、経塚としてのあり方がよく観察できると同時に、他の諸例から築造年代が12世紀前半と考えられ、樋井川流域の平安時代末の動静を知る上に好資料を提供した。京ノ隈古墳はその墳形とともに、内部主体が粘土槨であることは北部九州では珍らしい。その性格が在地的でありながらも、外見上は畿内型古墳の要素をもつことは、この被葬者が樋井川流域を代表する者であり、隣接する早良平野に占地する五島山古墳や藤崎古墳等の在地有力者とは対峙した関係にあり、大和政権の統属過程を知る上に興味ある問題を提起している。

(山崎純男)

〈文献〉山崎純男「京ノ隈遺跡」段谷地所開発株式会社 1976




京ノ隈古墳墳丘実測図




京ノ隈遺跡　経塚2号主体部

## 46 浄泉寺遺跡(西区神松寺字浄泉寺) 〈44～45〉

宅地造成工事によって消滅した遺跡で、造成工事に先立って1972年5月～6月に発掘調査を実施した。遺跡は油山より派生した金山を中心とする低丘陵の東南端に位置し、同じ丘陵上には神松寺遺跡・カルメル修道院内遺跡など同時期の遺跡が存在する。周辺の宅地化により、調査時にはすでに独立丘陵状になっていた。

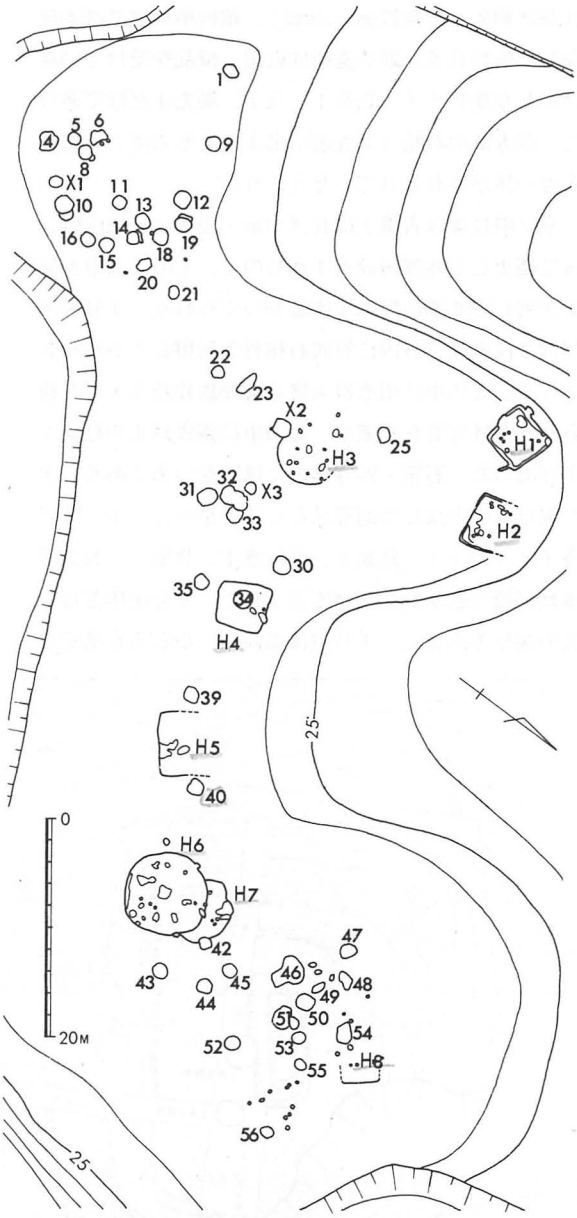
弥生時代前期末～中期初頭にかけての袋状竪穴51、中期～後期の住居址6、古墳時代の住居址2が検出された。本遺跡の主体を占めるのは51基におよぶ袋状竪穴であるが、その形状にはバラエティーにとむ。平面形は、大部分が円形ないし楕円形であるが、一部に方形ないしは隅丸方形のものもある。断面形は床が広がるいわゆる袋状をなすが、これが二段に掘り込まれたものが2つあり、袋状をなさず皿状をなすものもある。これらの袋状竪穴から出土した遺物には、弥生土器、蛤刃石斧、扁平片刃石斧、石剣、砥石などと、石器未製品（石庖丁・抉入石斧・扁平片刃石斧・石剣）がある。またアワビ貝を利用した貝製品が注目される。自然遺物には4基の袋状竪穴から出土した貝殻・獣骨があり、当時の食料残滓の一部を知ることができた。

弥生時代住居址は袋状竪穴の廃棄後につくられたもので、中期の住居址は平面形が円形と方形で、後期は方形である。出土遺物は弥生土器、石庖丁、扁平片刃石斧、抉入石斧、砥石。7号住居址（後期）では鉄鏃が出土した。古墳時代の住居址2は方形で、出土土器から5世紀代とみられる。

本遺跡はすでに消滅してしまったが、その意義は極めて重要なものであった。袋状竪穴出土の石器未製品は量的にはきわめて少いが、弥生時代前期末における石器生産のあり方を示している。すなわち、本遺跡出土の石器未製品は抉入石斧・扁平片刃石斧や収獲具(石庖丁）などの基本用具である。これらは当時の社会では需要度と使用頻度の高い日常用具類である。弥生時代前期末の社会では、このような生産必需品である基本工具は各共同体内において製作されるのが原則であったとみられる。石材の問題ともからみ今後の検討がまたれる。

遺構も興味ある問題を提起する。51基の袋状竪穴は地形および分布上大きく三群にわけられる。同時期の住居址の発見はないが、前述した神松寺遺跡やカルメル修道院内遺跡は本遺跡の袋状竪穴と同時期の墓地で、それらが同一丘陵上にあることは前期末における共同体の構造を示唆する。

（山崎純男）




浄泉寺遺跡 遺構配置図（Hは住居址、他は貯蔵穴）

〈文献〉村岡和雄・松村道博「浄泉寺遺跡」東洋開発株式会社 1974

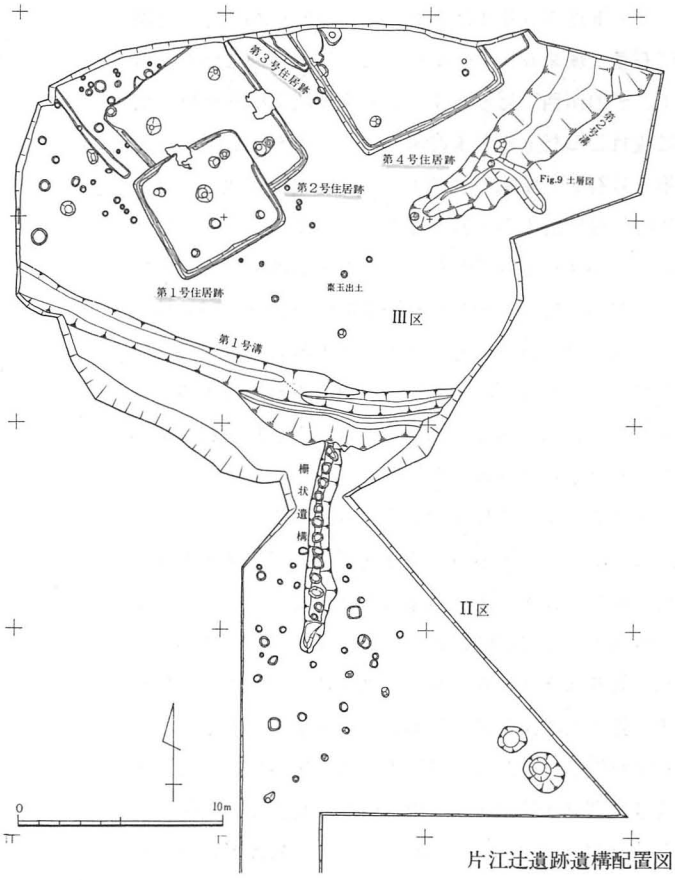
## 47 カルメル修道院内遺跡(西区片江) 〈45〉

本遺跡はカルメル修道院内でミカン植樹のために掘

った穴に甕棺の一部が露出して発見された。1974年1月に最初に発見された甕棺と他の小児用甕棺1基を調査し、その後、修道院の移築に伴ない1976年7月に同遺跡の範囲確認調査を実施した。遺跡の主体をなすものは弥生時代の墓地であるが、埋土中より先土器時代・縄文時代の遺物が若干出土している。遺跡は金山を中心として枝状にのびる低丘陵の基部の南斜面にある。遺構は、甕棺墓3基（うち小児用2基）、木棺墓6基（うち3基は小児用で、1基は木蓋土壙墓の可能性もある。1基は確認のみで未掘）を調査した。遺物は埋土中から先土器時代の尖頭器1点、縄文時代石鏃1点が出土した。弥生時代の遺物は、甕棺に使用された弥生土器6（前期末～中期初）と小児用木棺墓から出土した銅製釧（腕輪）3点がある。墓はその保存状態がよく、木棺墓は木質部が粘土とおきかえられ、その形状をよく確認できた。また銅製釧は、年代が前期末の金海式甕棺より新しくなることはなく、弥生時代の青銅器の中では最も古い。その性格や舶載品であるかどうかなど今後の問題である。本遺跡の立地する丘陵上には、他に同時期の遺跡が数ケ所確認されていて、弥生時代前期末～中期初の社会構成を知る大きな手がかりとなる。

（山崎純男）

〈文献〉山崎純男「福岡市カルメル修道院内遺跡調査報告」『京ノ隈遺跡』所収 1976



片江辻遺跡遺構配置図

**48 片江辻遺跡**（西区大字片江字辻）〈46〉

本遺跡は片江地区の土地区画整理事業にともなって、1975年9月～12月に発掘調査を実施したもので、同区画整理地区における第2次調査である。本遺跡は樋井川の支流である片江川と一本松川との合流地付近に形成された狭少な沖積地に面する丘陵上にある。付近にはカルメル修道院内遺跡、神松寺古墳、浄泉寺遺跡などがある。1929年の県道油山線拡幅工事の際には、本遺跡のすぐ東側で甕棺が出土し、以前から遺跡の存在が知られていた。

発掘調査によって検出した遺構は古墳時代の柵状遺構、2条の溝、4軒の竪穴住居跡。住居跡は発掘区の北側寄りで検出されたもので、第3・4号住居跡は宅地造成によってすでにその大半が削られており、第1・2号住居跡のみが当時の姿をとどめている。これらの平面構造は、第1号住居跡が1辺約5mの正方形で4個の主柱穴があり、北側の壁中央には粘土でかまどが作られている。第2号住居跡は台形ぎみの6.5×7.8mの長方形で、4個の主柱穴とかまどを持つ。第3・4号住居跡はその一部を残すにすぎないが、1・2号住居跡とほぼ同様，方形ないし長方形をしていたものと考えられる。

これらの住居跡はいずれも大形で、第2号住居跡は特に大きく、その床面積は約45m²あり、現代の3DKの一般住宅よりも広く、上屋構造の究明とともにその生活空間についても問題となろう。4軒の住居跡は、第1号と第2号、第3号と第4号が切り合い、重複関係から第1号が第2号より、第4号が第3号より新しく建てられていることが知られたが、各住居跡より出

土する須恵器や土師器などの遺物から考えられる時期は、6世紀後半代である。時間的にきわめて短い間に竪穴住居の建て替えが行なわれたことがわかる。

この住居跡と関連するものと思われる溝や柵状遺構なども含め発掘調査によって得られた知見は、九州地方における古墳時代の住居跡および集落とその社会についての研究にとってきわめて重要であろう。(力武卓治)

〈文献〉福岡市教育委員会「片江辻遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第40集 1977

**49 小笹遺跡(西区大字下長尾字隈)〈47〉**

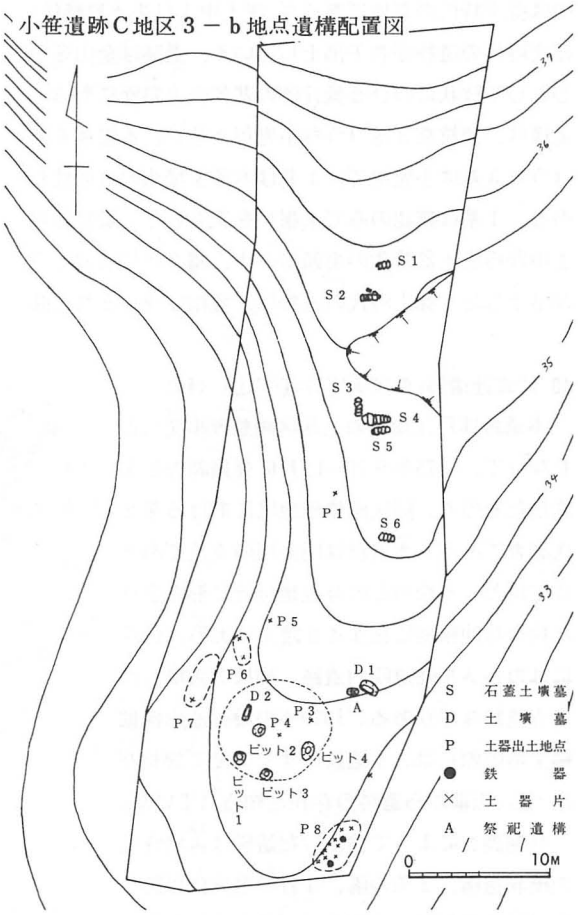
1972年1月に予備調査、同年4～6月に第1次調査、翌年8～10月に第2次調査を行う。遺跡は、鴻巣山から西へのびる丘陵より南へ張り出す尾根上にある。遺構はC区の3－b地点とその南の3－c地点で検出された。

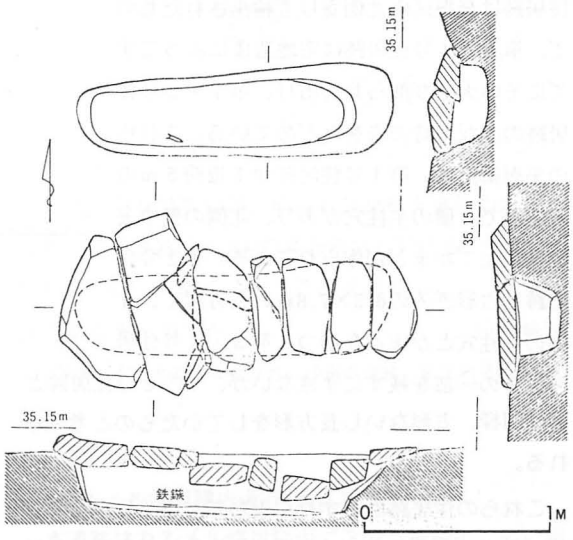
3－b地点(第1次調査)は標高33～36mで、北側に石蓋土壙墓6、その南10mに1号土壙墓と祭祀遺構1、その南西にピット4、2号土壙状遺構があり、他に流れこんだ土器がまとまって出土するところがある。第4号石蓋土壙墓で鉄鏃1点が出土。祭祀遺構では弥生時代後期前半の土器(壺2・器台2・甕11)が出土した。いずれも日常雑器で、丹塗土器は1点も含まれていない。ピット内からも同時期の土器細片が少量出土。他の流れ込み状態で出土した土器も弥生時代後期前半で、これらとともに鉄鏃、用途不明鉄器片各1が出土している。他に土師器も少量出土した。石蓋土壙墓は、出土した鉄鏃、まわりで出土した土器、他の例からみて、弥生時代後期前半とみられる。

この南の3－c地点(第2次調査)では溝2条が発見された。A溝は北から南へのび(長さ6m)、南端で西へまがる(長さ3.5m)。幅1.5～2m、深さ50～80cm。溝壁はほぼ垂直である。溝を埋めつくすような状態で弥生土器、石器、鉄器、ガラス小玉が出土した。L字形にまがる部分には焼土と灰が集中していた。B溝はA溝の南1.2mより南へのび、長さ4mを確認した。幅は上面が1m、溝底で0.5m、断面U字形である。弥生土器が出土した。

出土した弥生土器は壺、甕、高坏、器台、鉢等で、A溝出土の壺、甕には大形品が多く、B溝出土高坏には丹がぬられていた。いずれも弥生時代後期前半である。他にA溝から石庖丁、石錘、砥石、凹石(くぼみいし)、ガラス小玉、鉄刀子が出土した。B溝は墓地に付随する遺構とみられる。A溝の性格ははっきりしない。

小笹遺跡C地区3－b地点遺構配置図




小笹遺跡　第4号石蓋土壙墓

〈文献〉福岡市教育委員会「小笹遺跡調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集 1973、同「小笹遺跡第２次発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第34集 1975

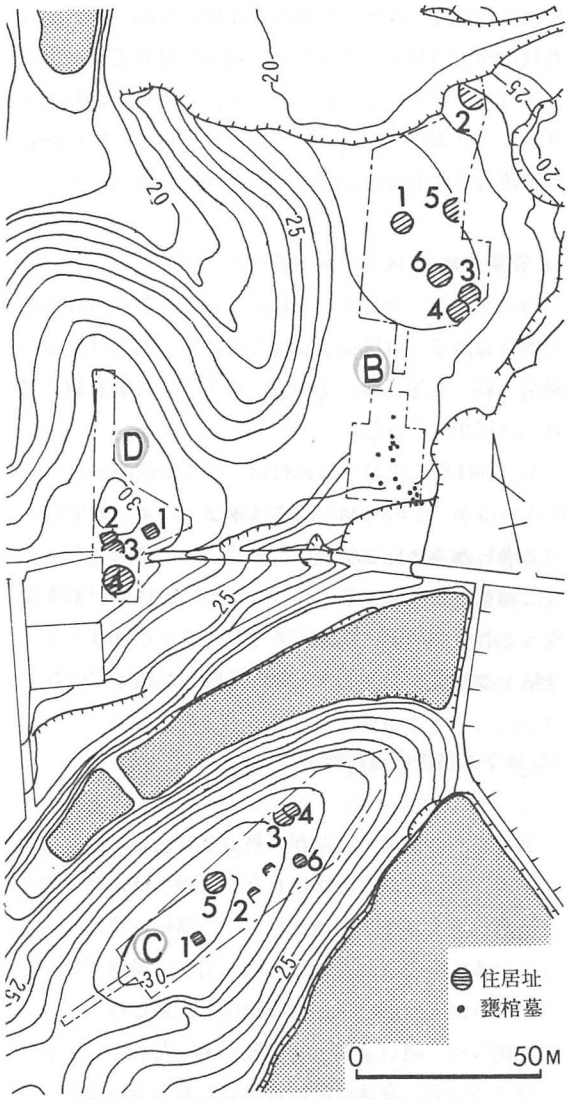
## 50 宝台遺跡(西区大字上長尾) 〈46～47〉

1969年10月～12月に調査した弥生時代・古墳時代・平安時代の遺跡である。遺構は弥生時代中期の住居址14、竪穴遺構１、住居状遺構１、甕棺墓16、祭祀遺構３、土器流れ込み遺構１、埋甕遺構２、その他ピット多数、および平安時代焼壁竪穴７。出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器、石庖丁、磨製石斧、石製紡錘車、砥石、打製石鏃、磨製石剣、石鎌等。

本遺跡は油山山塊から北方の博多湾に向かってのびる低い丘陵群の一つに立地する。この丘陵群は樋井川水系の各支流や支谷によって開析されており、特に遺跡のある上長尾丘陵のほぼ中央部の周囲には、この地域としては比較的広い耕地が得られる。この地域の３つの尾根上に弥生時代中期の遺跡が存在する（それぞれB・C・D地区とよぶ)。B地区には６軒の住居址と甕棺墓地、C地区には５（＋１）軒の住居址と１軒の竪穴遺構、D地区には４軒の住居址が存在した。このうち中期中葉のほぼ同時期の住居址はB地区で５軒、C地区で４（＋１）軒を確認した。D地区は２軒であるが完掘しておらず、B・C地区と同様５軒内外と推定される。また墓地はB地区にのみ存在しているが、これはB地区にまず生活が始まり、その後C・D地区へと集落を拡大したが、墓地そのものは全集落の共同墓地化されたと推定される。

宝台遺跡の調査の成果としては、①弥生時代中期の住居の集合形態を明らかにした点、②弥生時代の集落構造を一層鮮明にした点、③集落と墓地の関係を明らかにした点などの他に、C地区５号住居址のように中期中葉の円形住居址として典型的なものの確認、墓地内における祭祀跡の確認、資料がやや少ないとはいえ、中期中葉～後葉の土器編年に好資料を提供したことなどがあげられる。このように宝台遺跡は、弥生時代中期中葉前後の農耕集落として代表的な遺跡であったといえる。なお遺跡は団地造成のため消滅した。(沢　皇臣)

〈文献〉高倉洋彰編「宝台遺跡－福岡市上長尾所在弥生時代集落遺跡」日本住宅公団　1970



宝台遺跡

## 51 丸尾台遺跡(西区大字堤字原の前) 〈48〉

油山北麓から北へ枝状にのびる標高約30ｍの低丘陵中央部西端に位置する。この丘陵東側には、約300ｍへだてて宝台遺跡がある。本遺跡は採土工事とその後の土砂崩れのため、調査を経ずして壊滅した。遺跡は弥生時代の墓地で、甕棺の破片とこれに副葬されていたらしい鏡片３・鉄小刀１およびこの甕棺の推定出土位置の北方約10ｍで素環頭大刀１が採集された（合口甕棺に副葬されていたという)。甕棺は弥生時代中期終末のものとみられる。鏡のひとつは面径5 ㎝、白銅質漆黒色で、銘文は「光天下大明」の５字が残り、「見日之光天下大明」の銘をもつ内行花文日光鏡である。第２

の鏡片は細片となっているが、推定径5cmで、上の日光鏡と同様のものとみられる。第3の鏡もごくわずかしか残っていないが、前2者と同様の日光鏡であろう。鉄小刀は柄部が失われ、3片に折れている。幅2.4cm。素環頭大刀は全長44.5cm、環頭外径5.2×4.3cmで、大陸からの伝来品とみられる。他例からみて弥生時代後期前半～中頃のものであろう。

〈文献〉中原志外顕・石井忠・下條信行「丸尾台遺跡報告」『宝台遺跡』付録 1970

### 52 笹栗遺跡(西区大字堤字笹栗) 〈48〉

1969年9月～10月に調査した。丘陵裾斜面（谷間）にある遺跡で、遺構は奈良時代製鉄址2基だけだが、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、打製石鏃、鞴口、鉄滓が出土した。

本遺跡は出土土器からみれば、縄文時代晩期から開始されるが、その時期の遺構は確認できず、弥生時代の遺構もみつからなかった。確認された遺構は奈良時代に属する製鉄址2基である。第2号炉址は炉本体は残っておらず、灰原のみであった。第1号址はすさ入り粘土と粘土を用いて作られた基底部が残っていた。これは焚き口を北側にもつ、長さ70cm・幅10cm内外の不整な長方形の炉址と、その焚き口西側の径約40cmの円形炉址からなる。これらの炉址は、その形態や木炭の残存量などから大鍛治と推定される。この第1・2号炉址は出土する土器などから奈良時代のものと考えられ、鉄生産における重要な考古学的資料を提供した。なお遺跡は小学校建設のため消滅した。（沢　皇臣）

〈文献〉福岡市教育委員会「福岡市笹栗古代製鉄遺跡発掘調査報告」福岡市土地開発公社 1969

### 53 地下鉄路線内遺跡調査 〈49～51〉

1 調査に至るまで

最近市内の交通の渋滞が一層はなはだしくなったため、地下鉄の建設が計画された。計画当時、路線内の埋蔵文化財の調査が問題となった。路線内遺跡の重要度を討議する必要がありながら、当初の段階ではなされなかった。次に、調査者の確保が問題となる。財政緊迫化の折、職員定数増は困難であった。この重要な二点について、高速鉄道建設当局と教育委員会との間で十分協議されないまま地下鉄建設は見切り発車された。そのため現状保存にせよ、記録保存にせよ「周知の遺跡」が「不時発見」として処理され、地下鉄建設計画が意に反して大幅な変更をせまられるということになる。この過ちを、開発にたずさわる人も文化財行政を行う人も、市民の利益を守る立場から、充分反省することは将来の行政にとって無意味ではない。

開発と文化財両者の協議がなされる事なく発進した地下鉄建設は、1976年5月福岡城の内堀外壁石塁（石垣）発見で、当然のことながらつまずくことになる。ここで、埋蔵文化財担当職員の定員増がなされ、ようやく調査体制がどうにかととのい、建設工事に遅れを取りながら、文化財の調査も「うさぎとかめのかけっこ」よろしく走り出した。

路線内の遺跡は過去のデーターから、西から西区役所前一帯の藤崎遺跡、修猷館高校前一帯の西新町遺跡、福岡舞鶴城の内堀外壁石塁（石垣）、薬院新川に続く福岡と博多を分けた石垣（県庁前）、平安時代に盛行したといわれる袖ノ湊(貿易港)・宋人百堂・聖福寺等に関係ある祇園町遺跡（旧大丸デパートから博多駅一帯）、筥崎宮前遺跡、西鉄貝塚駅附近の元寇防塁等々がある。調査はこの内10パーセント程度を消化したに過ぎない（1977年5月現在）。途中経過を以下にのべる。

2 遺跡調査の途中経過

a 藤崎遺跡（西区西区役所前）

1)過去のデーター　1912年に川庄喜彦氏宅地内で古墳時代初期の箱式石棺発見。副葬品は鉄製素環頭太刀・三角縁竜虎鏡。1919年に村上研究所敷地内で弥生時代前期の甕棺墓数基と古墳時代初期の方格渦文鏡を副葬した箱式石棺墓を発見。昭和初年には現在の歩道橋付近から弥生時代の甕棺墓群を発見。

2)調査経過　道路拡幅、埋設物移設、地下鉄工事用中間鋼杭構築等に先行して調査。調査対象面積4000m²の内約 400m²の調査で、過去のデーターを裏づけるよ

うに弥生時代の共同墓地がみつかった。甕棺墓30基、石棺墓2基。

b 西新町遺跡（西区西新、修猷館高校前）

1)過去のデーター　戦前には修猷館高校グランド付近から弥生時代の甕棺墓が出土。この地で出土した弥生時代終末の土器は「西新町式土器」とよばれ、広く学界で知られている。1973年にマンション建設工事中、弥生時代の甕棺墓を発見。

2)調査経過　地下鉄工事前の路面電車軌道敷撤去にあわせて調査。弥生時代中期の甕棺墓13（ひとつは同後期、ひとつに南方産ゴホウラ製貝輪2個、ひとつにガラス製小玉を副葬）と弥生時代後期終末期から古墳時代にかけての住居址30軒を発見。対象面積6000㎡の内2000㎡を調査終了。

c 福岡城内濠外壁石塁－石垣（中央区荒戸・大手門・平和台・赤坂）

1)過去のデーター　奈良・平安時代には大宰府鴻臚館（こうろかん）が現城内（平和台球場付近）にあり、大陸からの賓客をもてなしたという。これを裏づけるように、大量の瓦や大陸系の陶磁器が発見されている。万葉にうたわれた「荒津崎」がどこなのか興味をひく。

慶長6年（1601）から黒田如水、長政父子により福岡舞鶴城が築かれる。現「福岡」の地名はここからおこる。城内の石垣は平尾・高宮の古墳の石を使用し、内濠の石は西ノ浦の唐泊より運んだという。濠の深さは外壁部で水面より1間、中央部で3間と伝える。福岡城に外濠は存在しない。恐らく博多湾がそれにかわるものであったろう。

1910年に福博電鉄開通のため内濠を埋める。

2)調査経過　1976年4月、荒戸地区の地下鉄工事がはじまり、5月に内濠外壁石塁にぶつかる。本格的調査は同年12月、高鉄局の要請に応じて始める。荒戸から赤坂まで全線にわたって石垣が確認された。

発見された石垣のうち保存状態の良好なのは、下の橋入口、福岡家庭裁判所前、サントリー福岡支店前、赤坂門バス停前等である。石垣は路線内をジグザグに進む。90度の角をなす部分が保存状態が良く、石垣築造の基準点として入念に築かれたのであろう。この角々が石垣築造工事の工区を示しているかもしれず、重要である。現在、石垣の裏込め調査・岩石鑑定用の岩石標本採集・石垣壁の側面図作成を行っている。鴻臚館に直接関係はないが、平和台から赤坂門にかけての石垣の裏込めから古代瓦・中国製青磁・須恵器・土師器等々が検出されている。

内濠外壁石塁（石垣）の保存については、現在（1977年6月）、高速鉄道局と教育委員会とで、現状保存・移築保存等協議中である。保存することは「城として、濠を除けば歴史的戦略上の意味をなさない」ことからも明らかである。市民の憩いの場である福岡城舞鶴公園全体の中で地下鉄路線内の石垣をみるならば、膠着している石垣保存論争に活路が開けると考えるのだが……。（その後、一部分の現状保存が決まった。）

d 祇園町遺跡（博多区祇園町）

1)過去のデーター　平安時代にはこの地に、当時の貿易港「袖の湊（そでのみなと）」（呉服町付近）に渡来した宋商人が住んでいたと言われる（宋人百堂）。鎌倉時代の建久6年（1195年）に宋人百堂の跡地に栄西禅師が聖福寺を建立。江戸時代から近年まで、この地で多くの大陸系青磁、銀製品、漆器等が発見されている。特に聖福寺境内出土の中国越州窯系磁器、水注は有名。弥生時代の遺物や甕棺墓も当地から博多駅にかけて発見されている。

2)調査経過　1977年3月に試掘。注目されていた通りの結果を得る。最下層に弥生時代から古墳時代にかけての石棺墓、中層に平安から鎌倉時代にかけての中国青磁、上層に近世磁器が見られる。今後の本調査で博多の歴史を語るにふさわしい姿をあらわすであろう。

3 地下鉄遺跡調査の意義と問題点

弥生時代以後の考古学的調査研究はこれまで、農耕を主にした人々の生活の跡をたどることに重点がおかれていた。海洋で生活した人々の生活はさほど重視されていなかったきらいがあり、彼等の生活が語られるにしても、海外交渉を意味する珍品を通してでしかない。こうした点から、今回の調査の重点を漁撈民の生活の把握に置きたい。

原始・古代史は土器をもって語られる。一つの土器型式が時代を決定し、地域文化の領域を想定させる。土器型式の消長を知ることは考古学研究の基礎作業である。この作業がかかえている重要な問題の一つに弥生土器から古墳時代の土師器へのうつりかわりがある。

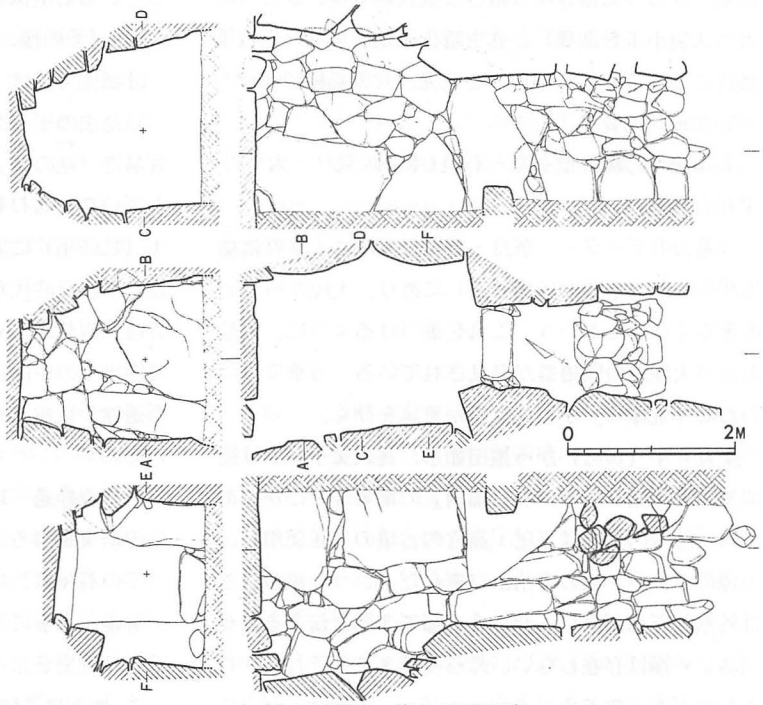
西新町遺跡では、福岡平野の弥生土器から生まれたとは思えない畿内・瀬戸内系の土師器があまりにも多い。海を越えて直接運ばれて来たのか、形だけをまねてこの地で作られたものなのか。この問題を解決する意義は大きく、大和政権の福岡地方に対する支配・影響の過程を探る上でも重要である。幸い西新町遺跡は砂丘上にあって保存状態がよく、問題解決の一級の資料を提供するであろう。

弥生時代以来、郷土博多は海外交渉の長い歴史をもっている。交渉によってもたらされた大陸の文物が、いつ、どのような人々に、いかにしてもたらされたのか、興味はつきない。この問題を解明する上で、地下鉄路線内遺跡群を忘れることはできない。古代中国製の銅鏡を出す藤崎遺跡や、中国商人の居留地宋人百堂の存在を予想しうる祇園町遺跡はこの問題に答えるであろう。

古代博多の砂丘上に、文化の伝導者海洋民の生活が眠っている。この砂丘を地下鉄は掘り進む。現代人の騒々しさに彼らが心地良い眠りからさめ、われわれに海の歴史を雄弁に語りかけることを期待する。

(折尾　学、浜石哲也、池崎譲二、山崎龍男)

〈文献〉中山平次郎「古代支那鏡沿革」『考古学雑誌』9―3 1919、永倉松男・鏡山猛「筑前藤崎に於ける弥生式遺跡」『考古学』第2巻 1931、森本六爾「筑前藤崎遺跡の弥生式土器」『考古学』第2巻 1931、鏡山猛・永倉松男「筑前福岡市発見の甕棺」『考古学』第2巻 1931、橋口達也「福岡市犬飼（博多駅地下）出土の土器」『宮の前遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集所収 1971、岡崎敬「福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について」『九州文化史研究所紀要13』 1968

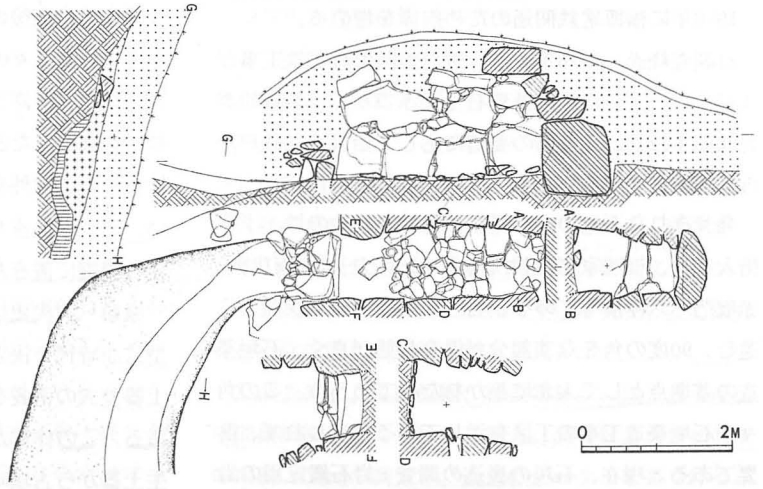



大牟田古墳群　第2号墳石室

## 54 大牟田古墳群

（南区柏原字大牟田）　〈48〉

1969年10月～1970年5月に調査。遺跡は油山から派生する低丘陵尾根と鞍部と谷斜面にある。発掘調査で縄文時代の包含層、古墳時代の円墳43と製鉄址1を検出した。出土した遺物は縄文時代の土器・抉状耳飾（けっしょう）などと、古墳時代の須恵器・土師器・馬具・刀剣・鉄鏃および装身具の金環・銀環・玉類・銅釧などである。




大牟田古墳群　第9号墳石室

調査の結果、油山丘陵における群集墳のほぼ一支群の全貌を明らかにしえた。出土の須恵器は、Ⅲb型式からⅤ型式におよび、Ⅳ型式が最も多い。したがって、大牟田古墳群の形成は6世紀後半より始まり8世紀まで継続したとみられる。また、出土遺物の分析により後期古墳の石室の編年が可能になろう。

石室は大部分が花崗岩使用の横穴式石室であり、平面形より⒜両袖⒝片袖⒞無袖に分類出来る。また複式墳（1基）、竪穴状の小石室などもみられ、福岡平野の後期古墳期における石室のバリエーションを明らかにしえた。古墳のまとまりをみると、古墳群を構成する小さな単位として2～5基の古墳が立地条件を同じくし、墓道を共有するらしいことが考えられる。なお、7号墳(須恵器Ⅳ型式出土)の盛土下からは、タタラ炉が検出され、製鉄遺構について確実な年代を与えた。　（島津義昭）

〈文献〉 福岡市教育委員会「大牟田15・43号墳発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第14集 1971

大牟田古墳群
（42号墳は調査区外未調査）

## 55 老司古墳(南区老司字大谷)　〈52～53〉

1965年8月～69年8月に2回の予備調査と3次にわたる発掘調査が断続的に行なわれた。この古墳は那珂川中流左岸の花崗岩丘陵につくられた前方後円墳で、ここから那珂川に沿って安徳方面につらなる前方後円墳群の最先端に位置する。東は、須玖にかけて那珂川によってつくられた沖積地帯がひらけている。西北200mには、三角縁三神三獣鏡(さんかくぶちさんしんさんじゅうきょう)を出した卯内尺(うないじゃく)古墳(円墳、粘土槨(ねんどかく))があり、本古墳の1世代前の人の墓と考えられ、那珂川沿岸古墳群の中心地帯の1つになっている。

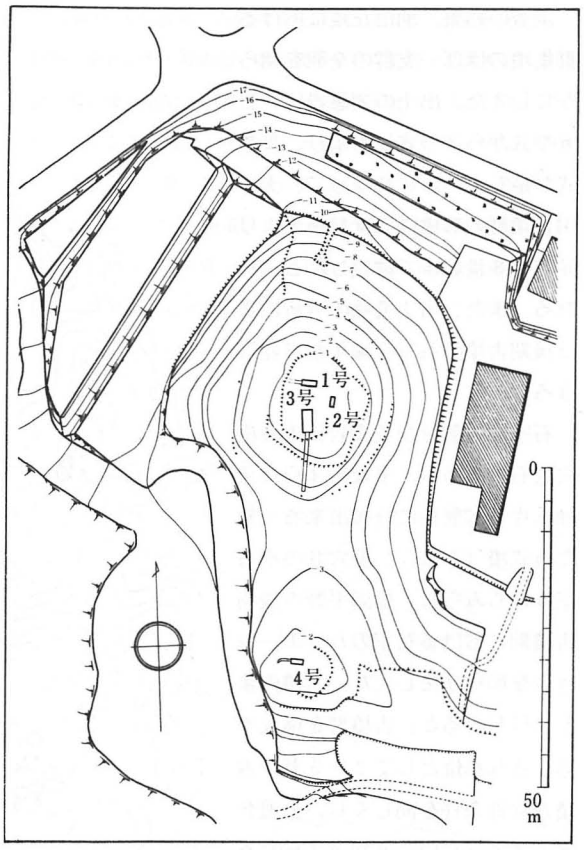
老司古墳は南北に主軸をもつ全長約90mの前方後円墳で、前方部は後円部より約2mひくい。後円部には円周にそって埴輪(はにわ)がならんでいる。その多くは壺形埴輪で、東西・南北の主軸と交わるところには円筒埴輪がおかれている。葺石(ふきいし)もある。後円部に3基（1・2・

3号)、前方部に1基（4号）計4基の竪穴式石室がある。主体は最大の3号石室で、南小口には上・下降用の石棚があり、ここには前方部からつづく掘割の墓道が続いていた。この墓道は他の3基の石室にも小なりといえどもつくられ、閉塞も斜めに石を置くだけで、追葬が可能で、2・4号石室では複数の遺体が確認された。

遺物は1号石室で舶載方格規矩鏡、土師器器台、農工具、武具、装身具、2号石室で仿製変形鏡、三角板革綴短甲、武器、3号石室で国氏作三角縁神獣鏡はじめ7面の鏡、土師器盤、短甲、金環、農工具、武具、櫛、4号石室で土師器器台、農工具が出土した。このような内部主体の構造と副葬の三角縁神獣鏡、短甲などから、本古墳は5世紀初頭から中ばにかけてのものと考えられる。

遺構の上では初期横穴式石室の構造と時期をつかむことができ、地方史的には5世紀の儺国の首長の墳墓をおさえることが可能となった。三角縁神獣鏡は、滋賀県富波山古墳と同笵であることが判明した。(下條信行)

〈文献〉九州大学考古学研究室編「老司古墳調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第5集 1969




老司古墳実測図（号数字は石室番号）

## 56 弥永原遺跡(南区大字警弥郷字原) 〈54〉

1965年3月(第1次)と1966年12月～1967年1月（第2次）に調査。標高24mの台地上にあり、谷をはさんだ東側には曰佐原遺跡がある。第2次調査のA地区には、東西にのびる幅2.5m・深さ1.95mの断面V字形の溝があり、長さ50mを確認した。溝内下部には弥生時代中期の土器片が、上部には後期の土器と土師器片が混在している。B地区には幅3m、長さ82mの溝がある。断面はU字形で、深さ50～130cm。南端は垂直の壁をなして終っている。溝底近くには弥生時代後期の土器が埋没しており、中高位でガラス製勾玉の鋳型1点が弥生時代後期土器とともに出土した。この南数mのところでは、1959年1月に同様の勾玉鋳型1点が出土している。溝の東側には竪穴住居址7軒があった。うちひとつは直径8.8mの円形竪穴で、中心に炉跡があり、柱穴も残っていた。弥生時代中期後半である。他の6軒は方形と長方形で、弥生時代後期のものである。1次調査の1号住居址は3.7×4.5mの長方形で、西北側の三辺には壁下に小溝がまわる。2次調査の2号住居址は7×5.5mで四隅に一段高い部分(ベッド状遺構)がある。この住居址からは内行花文仿製小形鏡1面が出土した。5号と6号住居址にもベッド状遺構がある。他に円形住居址の東北側に土壙2基があり、底に赤色顔料が認められた。また奈良・平安時代とみられる柱穴もある。上記以外の出土遺物には石斧、砥石、石庖丁、石鏃、土製紡錘車、鉄製品、石鍋片、黒曜石々片、弥生土器、土師器、須恵器等がある。

〈文献〉福岡県教育委員会「弥永原遺跡調査概報」福岡県文化財調査報告第32集 1965、三野章編「福岡市弥永原遺跡調査概要」福岡市住宅供給公社・福岡市教育委員会 1967

## 57 山陽新幹線路線内遺跡　〈54～58〉

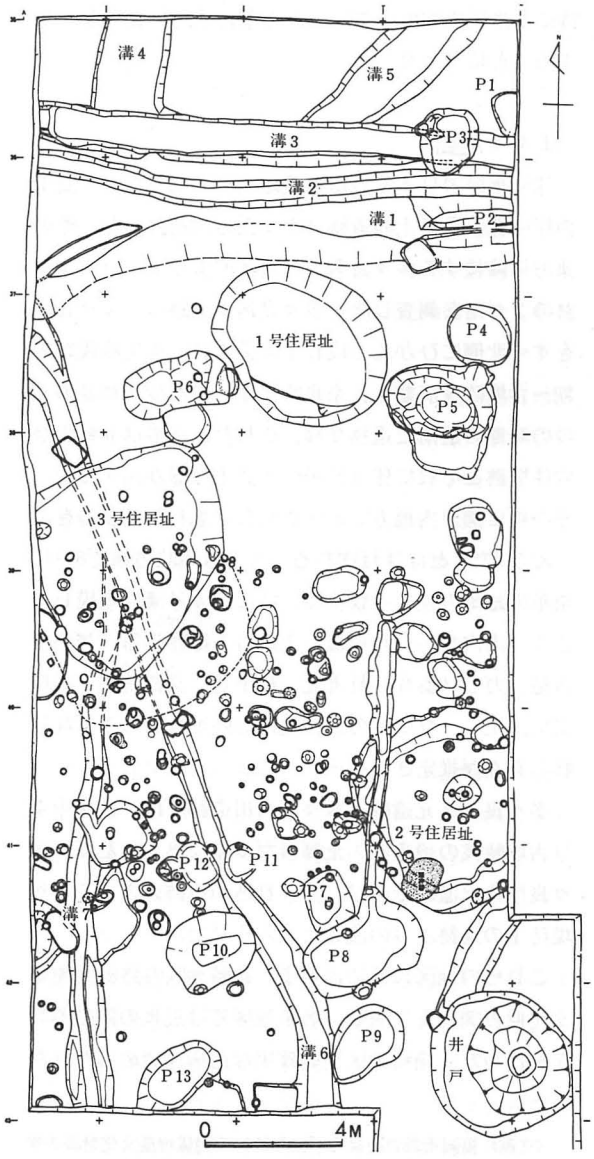
1969年12月に山陽新幹線の路線が決定された。このため福岡県教育委員会は、1970年度に路線内埋蔵文化財の分布調査を実施し、その結果にもとづき国鉄当局と協議を行ない、新幹線路線内埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施することになった。福岡市域分については福岡市教育委員会が担当し、1971年度より3カ年にわたって発掘調査が実施された。

### a 弥永地区（南区弥永町1丁目－A地点、4丁目－B地点、5丁目－C地点）

1972年3月～7月に発掘調査した。遺跡は那珂川上流の東岸近くの沖積地にある。A地点およびB地点は弥生時代遺物包含層を主とする遺跡であるが、B地点からは弥生時代中期前半のピットや溝状の遺構が検出された。両地点ともに砂層中に多量の遺物を包含し、弥生時代前期後半～中期中頃までの土器、石器が漸移的な量的変化を見せて認められた。しかし、住居跡などの遺構は検出されず、二次的な遺物の堆積を示すものである。

### b 五十川地区（南区大字五十川高木1丁目－B地点、同2丁目－A地点）

1971年9月～1972年2月に発掘した。B地点は那珂川中流右岸の東方 180mの沖積地にある。耕作土および埋土の下は砂層となり、その中に弥生土器、須恵器、石器などが混在し、那珂川の氾濫原であることを示していた。A地点はB地点南方 200mの低位河岸段丘上にあり、那珂川のすぐ東側である。検出された遺構は住居跡3軒、井戸1基、溝7条をはじめ大小のピット群があり、遺物は須恵器、土師器、瓦器、黒色土器、瓦質土器、古瓦、宋・元代の中国製陶磁器、宋銭、常滑焼などの国産陶器、石鍋などの滑石製品が豊富多量に出土し、遺跡が古代末～中世の集落遺跡の一部であることが判明した。



山陽新幹線路線内　五十川高木遺跡A地点

### c 津屋地区（東区大字津屋）

次の多々良地区の調査と併行して1972年11月下旬から翌73年5月下旬まで発掘を実施し、4カ所の遺跡を発掘した。津屋井田遺跡では、弥生時代終末期の土器

を伴う木製農耕具を検出した。津屋方才田遺跡では、条里地割の方向に走る杭列を認め、出土土器により7世紀前後の年代が推定される。津屋楠田遺跡でも条里制遺構と考えられる杭列が検出され、津屋道田遺跡では古代須恵川の氾濫原の範囲が推定された。津屋地区の調査は、多々良平野における弥生時代終末以降の、特に条里制研究の上ではじめて考古学的な資料をあたえることになった。

### ⓓ 多々良地区

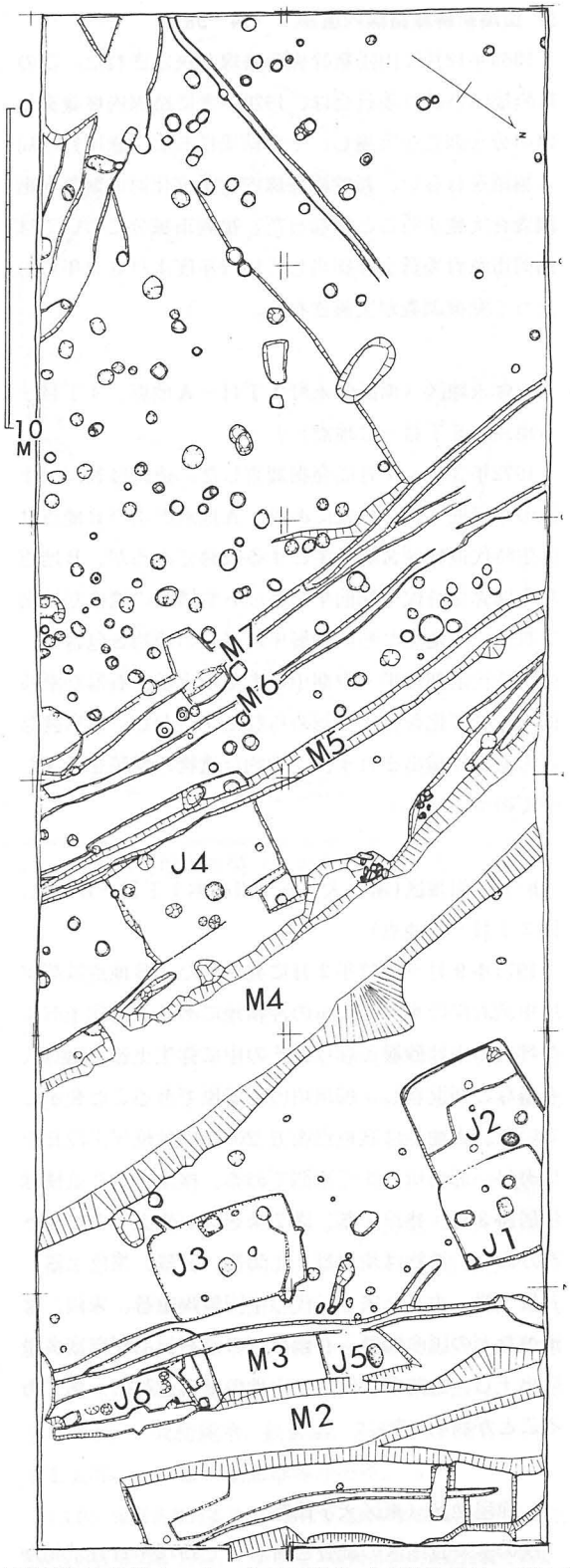
津屋地区より多々良川上流地域にあたり、多々良川西岸の低位段丘上の遺跡（多々良込田遺跡）と、その東方に隣接する多々良蔵ノ元遺跡および多々良古川遺跡の3カ所を調査した。多々良込田遺跡は、多々良川をすぐ北側にひかえる段丘上に営まれ、弥生時代終末期～古墳時代前期と、奈良時代末～平安時代初期の二つの時期の遺構と遺物が検出された。前者は6軒の竪穴住居跡とそれに伴う各種の古式土師器が出土した。その中に瀬戸内地方で製作されたと思われる土器を混じえていたことは注目される。後者は溝状遺構であり、条里の地割方位に一致する。特に第4号溝は規模も大きく、溝内からは須恵器、土師器、緑釉陶器（りょくゆう）、越州窯青磁、ガラス器片、軒丸瓦、軒平瓦、文様塼（せん）などを豊富に出土し、発掘区の近接地に寺院址などの重要な建物の存在が推定される。

多々良蔵ノ元遺跡と多々良古川遺跡では、砂層中より古墳時代の須恵器、土師器が多量に出土したが、多々良川の氾濫原であり、多々良込田遺跡をのせる自然堤防上の遺跡よりの流入と考えられた。

これらの地区以外に、名子、箱崎地区の路線内埋蔵文化財の調査を実施し、名子地区では近世の陶磁器類を検出した。箱崎地区では確実な遺構は認められなかった。

（塩屋勝利）

〈文献〉福岡市教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集 1975




山陽新幹線路線内　多々良込田遺跡（Jは住居址、Mは溝）

**58 福岡城跡** （中央区）

高等裁判所庁舎改築にともない、1963年10月～11月、1964年４月の２次にわたり福岡県教育委員会、文化財保護委員会（現文化庁）が調査した。その結果、築城前の旧地形は本丸と高等裁判所地域に丘があり、その間は幅 200mの谷であったことが明らかになった。築城の時、この谷は本丸部分と高裁部分の丘の土で埋められたとみられる。またバレーコートから野球場の部分に奈良時代の遺物包含層がある。出土遺構は、黒田藩重臣屋敷に関連する石築の側溝や石列、礎石、柱穴などである。出土遺物は、奈良時代、平安時代、江戸時代の瓦、中国陶磁器などである。奈良・平安時代の遺物は鴻臚館（こうろかん）に関係あろう。

〈文献〉福岡県教育委員会「史跡福岡城跡発掘調査概報」1964

**59 菰牟田（こもむた）遺跡**（博多区大字那珂字菰牟田）

1974年10月に調査。遺跡の時代は弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代である。この遺跡は福岡平野のほぼ中央を博多湾に向って北流する那珂川と御笠川にはさまれた低地の中央に位置する（標高約７m）。

遺跡のほぼ中央部に人頭大および拳大の円礫・角礫による集石遺構が出土した。これは全長約 7.5m・幅 2.7mの不整形な長楕円形をなす。時期については古墳時代末から平安時代までの幅が考えられる。その性格についてはいくつかの可能性を指摘できるが、資料がきわめて断片的なため明確には判断しかねる。南側から直径67cm・深さ55cmの小竪穴が１個検出されたが、時期・性格等を示す遺物は全くない。本遺跡出土の遺物は、集石遺構から須恵器、土師器（土師質土器）、土鍋、甑（こしき）、陶器、磁器、平瓦などが少量出土し、他の地点から弥生土器（中期後半～後期初頭）と若干の石器が出土しているのみで、全体的に遺物は少なく断片的である。

調査を実施した地点は北および南側の微高地にはさまれた凹地にあたっているために、弥生時代および古墳・奈良・平安時代の出土遺物の大半は小破片で、しかも磨滅を受けており、二次的な堆積と考えられる。北と南の微高地に弥生時代の遺跡（散布地）がしられており、そこから流れ込んだものであろう。（橘　昌信）

**60 板付遺跡**（博多区板付２～５丁目）〈59～64〉

板付遺跡は御笠川と諸岡川にはさまれた低丘陵と、その東西に広がる沖積地帯にまたがる弥生時代全般にわたる集落遺跡である。すでに1867年（慶応３年）に銅矛５本の出土が伝えられ（通津寺過去帳）、その後1916年に小字田端において甕棺墓とそれにともなうと考えられる細形銅剣４本・細形銅矛各３本が出土し、中山平次郎博士によって紹介されている。

本格的な調査は戦後に行われた。中原志外顕氏の調査活動を契機として、縄文時代から弥生時代への移行のあり方を追求するために、日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会の調査が1951～1954年に行われた。その後、1968～1969年には日本考古学協会農業史部会、1969年に福岡市教育委員会、1970年に福岡県教育委員会の調査等が行われた。1971年に至り、丘陵西側の沖積地に市営住宅が建設されることになり、福岡市教育委員会が調査を行った（1971～74年）。この調査で弥生時代前期にさかのぼる生産遺構などが発見された。1973年、遺跡の保存整備のために板付遺跡調査事務所が発足し、板付遺跡内と、周辺の調査を毎年行っている。遺跡の主要部分は1976年６月に国の史跡指定を受けた。

出土する遺構・遺物は先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・歴史時代の各時代のものである。各地点・各調査ごとの出土遺構は次のとおりである。

〔板付丘陵上〕（日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会1951～54年、福岡市教育委員会1969年、福岡県教育委員会1970年調査分）弥生時代：環溝、弦状溝、竪穴貯蔵穴32、甕棺墓１、井戸址７、その他。

〔板付北小学校〕弥生時代：竪穴貯蔵穴 108、甕棺墓63、木棺墓24、土壙墓27。古墳時代：住居址１、竪穴８、歴史時代：井戸址２。

〔G-5ａ地点〕弥生時代：竪穴遺構７、甕棺墓43、木

棺墓13、土壙墓11、井戸址１。歴史時代：竪穴２、井戸址１、木棺墓（江戸時代）３、甕棺墓（江戸時代)2。

〔板付南台地〕弥生時代：竪穴貯蔵穴４、竪穴２、木棺墓１、溝１、古墳時代：竪穴２、歴史時代：溝１

〔G・H-5, H-5地点〕竪穴13、溝４、杭列、樋状遺構。

〔県道関係調査分〕弥生時代：竪穴貯蔵穴16、竪穴２、住居址１、土壙墓１、井戸址１、古墳時代：土壙２、歴史時代：竪穴１、井戸址２、土壙2。

〔西側水田地区〕弥生時代：杭列、矢板列、畦状遺構、堰状遺構、溝。

出土遺物はおびただしい量である。時代ごとに列挙する。

先土器時代：石器。

縄文時代：縄文土器（押型文・無文尖底土器、前期土器片)、石器。

弥生時代：弥生土器（夜臼式を念む）、朝鮮系無文土器、石庖丁、石鎌、磨製石斧、抉入石斧、扁平片刃石斧、方柱状片刃石斧、環状石斧、磨製石鏃、磨製石剣、打製石鏃、石槍、石匙、石錐、掻器、削器、剥片石器、穿孔用石器、石錘、土錘、紡錘車、銅矛鋳型，土製投弾、各種土製品、管玉、勾玉、砥石、磨石、石皿、フォーク状木器、二又鍬、三又鍬、鋤、石斧柄未製品、田下駄状木製品、網枠、木製椀、槌、脚付容器、杵、糸巻状木器、銅鏃、鉄斧、植物遺体・種子、炭化米。

古墳時代以降：土師器、須恵器、土玉、鹿角製刀子柄、瓦器、青磁、白磁、瓦、石鍋、その他。

板付遺跡は先土器時代のナイフ形石器、細石核等の発見があるが、包含層は削平されていると思われる。

縄文時代は、西側水田下部から早期の尖底押型文土器、尖底無文土器、前期の曽畑式土器、石器等が発見されているが、遺構は確認されていない。

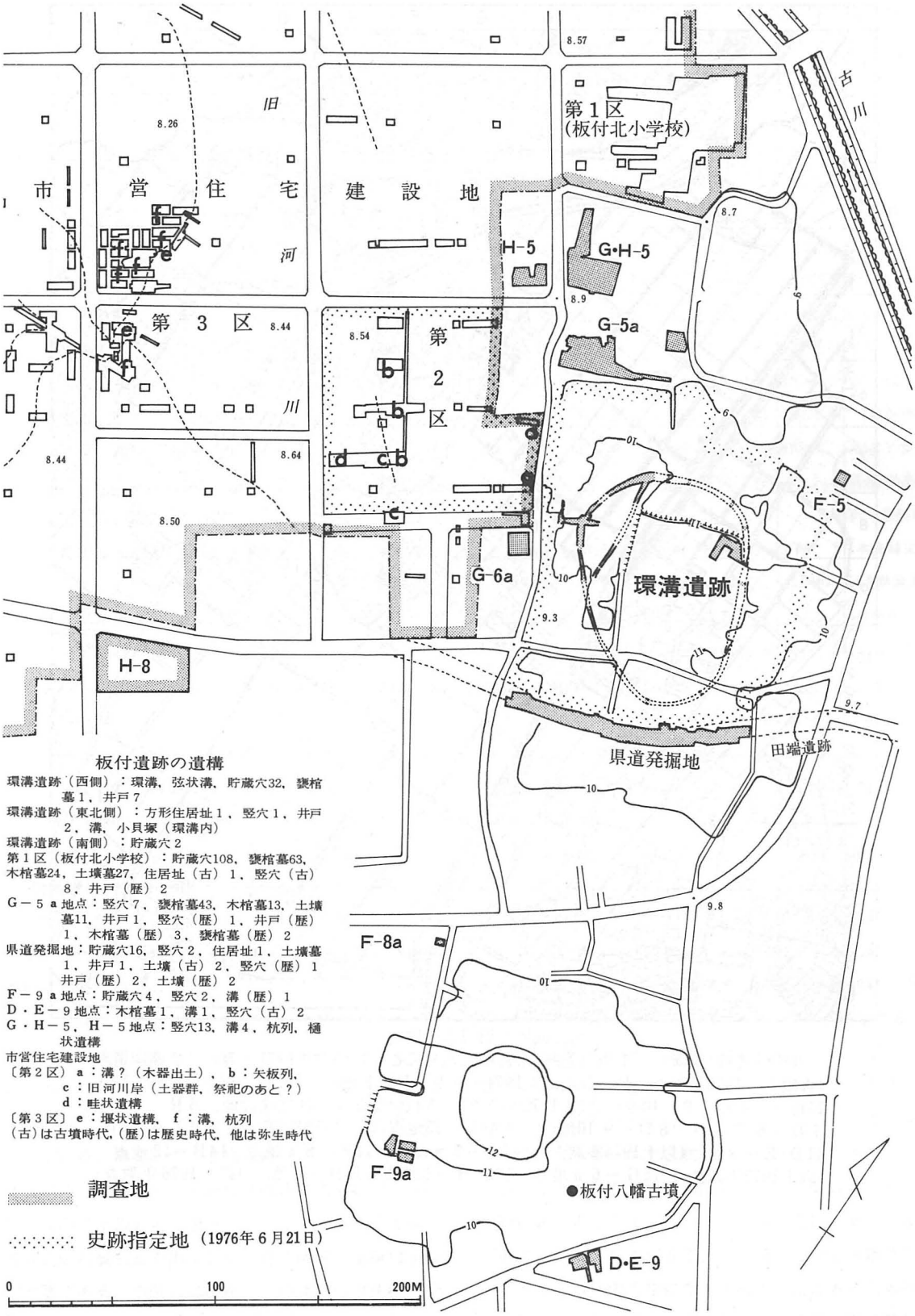
その後、縄文時代晩期終末から弥生時代初頭にかけて、人々がこの地に定着し始める。この当時の板付ムラの人々が、どこから来たどのような人々であったかわからないが、丘陵上に住居を営み、東西にひろがる湿地帯で稲作農耕を行い始めたことはまちがいない。弥生時代前期には、丘陵上に現在の通津寺を取り囲むように南北約 120m、東西約85mの卵形の溝が堀られている。現在までに住居址は発見されていないが、この環構内に住居を営み、環溝内外に貯蔵穴と思われる竪穴遺構を配置していた。水田地域には確実な水田址は発見されていないが、前期に属する層から、矢板列や堰状遺構等が発見されている。板付丘陵内ではすでに前期前葉から、環溝の北方約 180mにあたる現板付北小学校敷地内にも竪穴貯蔵穴がみられる。前期末には、竪穴貯蔵穴および土壙墓、木棺墓、甕棺墓を中心とする墓地は、板付南台地にまでひろがっている。これらの墓地の内、田端遺跡のみ銅剣・銅矛類を持ち、他は何らの副葬品をも持たないことから、板付ムラにおいては、すでに前期末より優位性をもつ集団と、そうでない集団の墓地の分化が認められる。

中期に至ると、丘陵上では環溝はほぼ埋没して痕跡を残す程度となり、住居も環溝内にこだわらずに営まれた。たとえば1976年の県道改良新設に伴う調査で、環溝南西約50mの地点より、中期初頭の円形住居址が発見された。また竪穴貯蔵穴は中期初頭を下限としてほとんど消滅してしまい、高床式貯蔵庫への移行が推定されている。

墓地は前期末と同じ地域に存在するが、甕棺墓、特に小児棺が多くなり、副葬品は特たない。このことから、板付ムラ内では前期末に優位にたった集団も、他のムラ（たとえば須玖岡本など）に従属していったものとみられる。これらの墓地もほとんど中期後葉でとだえてしまうが、丘陵西端際の客土層中には後期の甕棺破片も混在しており、丘陵のどこかには後期の墓地が存在したことは確実であろう。

西側水田部には、杭列や溝、堰状遺構等が存在し、また西側台地際には木器等を多量に含む溝や、樋状遺構などが発見されている。これらの遺構は、前期のそれよりもひろがりを持ち、ある意味での生産力拡大を意味するものであろう。もっとも、この弥生時代に農耕のみが生産の手段ではなかったことは、前期における環溝内の貝塚の存在、打製石鏃の出土、中期の木製網枠や、土錘、石錘の存在、Ｈ－５地点の中期後葉の溝、県道Ａ４区の同時期の井戸址の中から出土したイノシシの歯の存在などからもうなづける。

中期後葉には西側水田部に旧諸岡川と思われる河川跡があり、その岸辺から丹塗り土器を含む多くの土器が出土した。これらは流れて磨滅した痕跡はなく、完形品の多いことから、一種の祭祀に関係するものと思



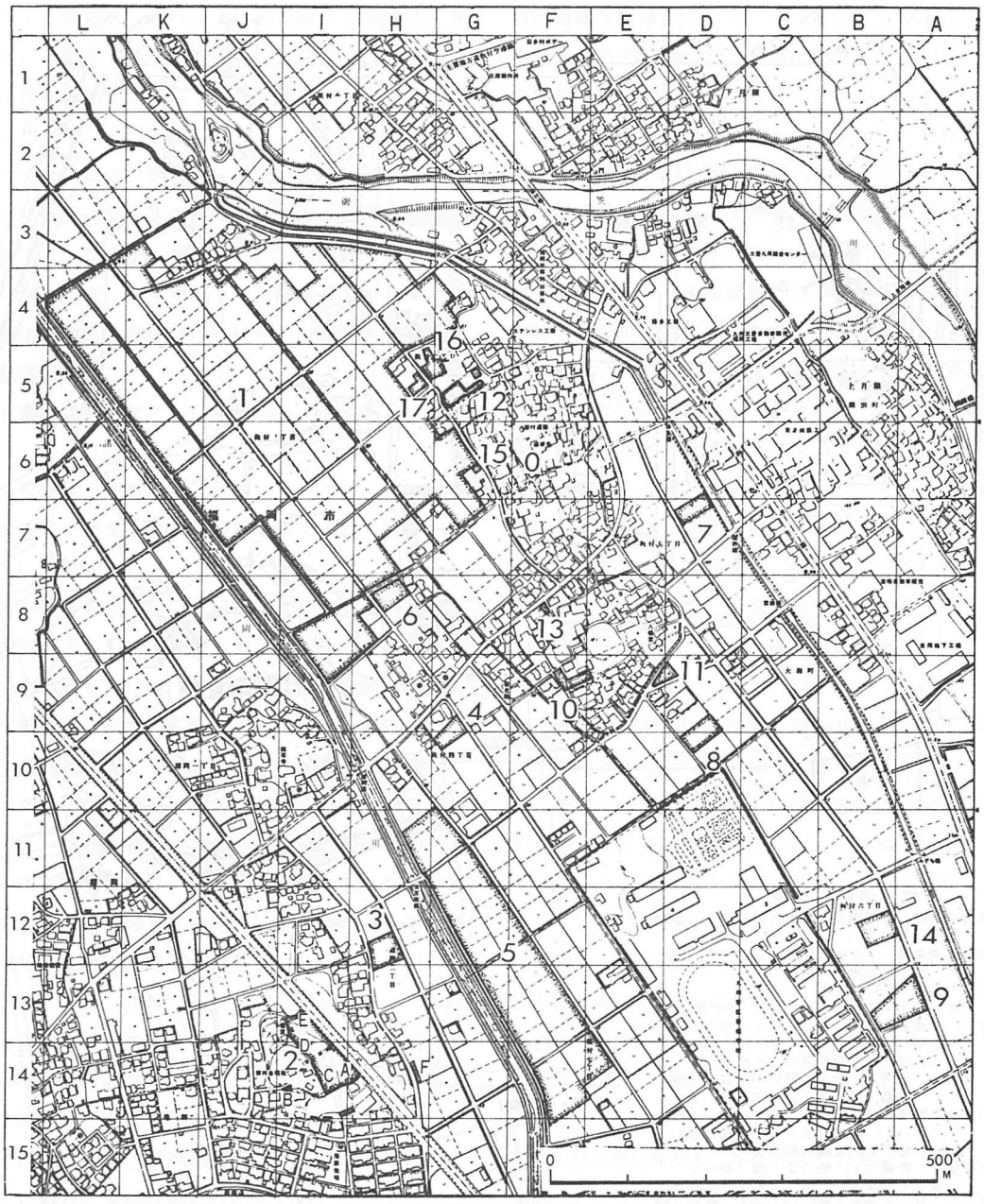

板付遺跡の遺構

環溝遺跡（西側）：環溝，弦状溝，貯蔵穴32，甕棺墓1，井戸7
環溝遺跡（東北側）：方形住居址1，竪穴1，井戸2，溝，小貝塚（環溝内）
環溝遺跡（南側）：貯蔵穴2
第1区（板付北小学校）：貯蔵穴108，甕棺墓63，木棺墓24，土壙墓27，住居址（古）1，竪穴（古）8，井戸（歴）2
G－5a地点：竪穴7，甕棺墓43，木棺墓13，土壙墓11，井戸1，竪穴（歴）1，井戸（歴）1，木棺墓（歴）3，甕棺墓（歴）2
県道発掘地：貯蔵穴16，竪穴2，住居址1，土壙墓1，井戸1，土壙（古）2，竪穴（歴）1 井戸（歴）2，土壙（歴）2
F－9a地点：貯蔵穴4，竪穴2，溝（歴）1
D・E－9地点：木棺墓1，溝1，竪穴（古）2
G・H－5，H－5地点：竪穴13，溝4，杭列，樋状遺構
市営住宅建設地
〔第2区〕a：溝？（木器出土），b：矢板列，c：旧河川岸（土器群，祭祀のあと？）d：畦状遺構
〔第3区〕e：堰状遺構，f：溝，杭列
（古）は古墳時代，（歴）は歴史時代，他は弥生時代

調査地

史跡指定地（1976年6月21日）

板付遺跡




板付遺跡と周辺調査地点

0板付遺跡(環溝)、 1板付遺跡(市営住宅建設にともなう調査1971～74)、 2諸岡遺跡(A地点：1973年調査、B～D地点：1974年調査、E・F地点：1975年調査)、 3H—12・13地点、 4G—9・10地点(以上1972年調査)、5板付第2市営住宅建設地、 6H—8地点 7D—6・7地点、 8D—9・10地点、 9A・B—13地点(以上1973年調査)、10F—9a地点、11D・E—9地点(以上1974年調査)、12G—5a地点、13F—8a地点、14B—12地点(以上1975年調査)、15G—6a地点、16G・H—5地点、17H—5地点 (以上1976年調査)

われる。これを河川もしくは水に対する祭祀と考えると、丘陵上に存在する井戸址と、そこから出土する遺物も問題となる。弥生時代の井戸址は現在まで9個発見され、いずれも底近くで丹塗り磨研壺や小形壺が出土する。これらの中には明らかに打欠かれたもの、穿孔されたものがあり、井戸すなわち水に対する祭祀に関係あると考えられる。この井戸址のすべてが中期後葉で、旧河川跡の祭祀と同時期である。またこの中期後葉は丹塗り土器が多量に出土する時期でもある。丘陵西際の客土層は丘陵上のどこからか持って来た土で埋めたものであり、この層中に丹塗り土器が甕棺片とともに出土していることは、同時期に甕棺に対する祭祀もあったことを示している。

丘陵上では後期の遺構は発見されていない。しかし先述の銅矛5本の出土、客土層中からの銅矛の鋳型の出土などから、集落は存続していることが知られる。水田部では、後期の畦状遺構がある。これは旧諸岡川が埋没した後に作られたもので、杭列とその間に敷かれた草、ワラ類などから成る。この畦状遺構内からは銅鏃、木器などが発見されており、また杭列に使用されていた杭の中には住居の柱を割って作られたものもある。

古墳時代の遺構は、板付北小学校の住居址1軒と、台地と沖積層の境にある竪穴遺構、南側台地のD・E－9地点での同様な竪穴遺構、県道A4区の竪穴などにすぎない。また南側台地上には板付八幡古墳があり石室の一部が露出している。以下歴史時代に至るまで若干ながら遺構も存在するが、まとまりをもたないためにここでは省略する。

以上、板付遺跡は弥生時代全般を中心とする生活、生産両面を明らかにし得る遺跡であり、特に稲作農耕の始まりという点で弥生時代最古のムラの一つである。

なお、板付周辺遺跡調査として、H-12・13地点、G－9・10地点（以上1972年）、板付第2市営住宅建設地、H-8地点、D-6・7地点、D-9・10地点、A・B-13地点（以上1973年）を調査したが、遺構はなく、若干の流れ込み遺物が出土しただけである。またB-12a地点（1975年調査）には杭列、土器・流木群、溝がある。杭列・流木群は弥生時代末～古墳時代、溝は7世紀前後とみられる。西側の警察学校台地上と関連があろうか。

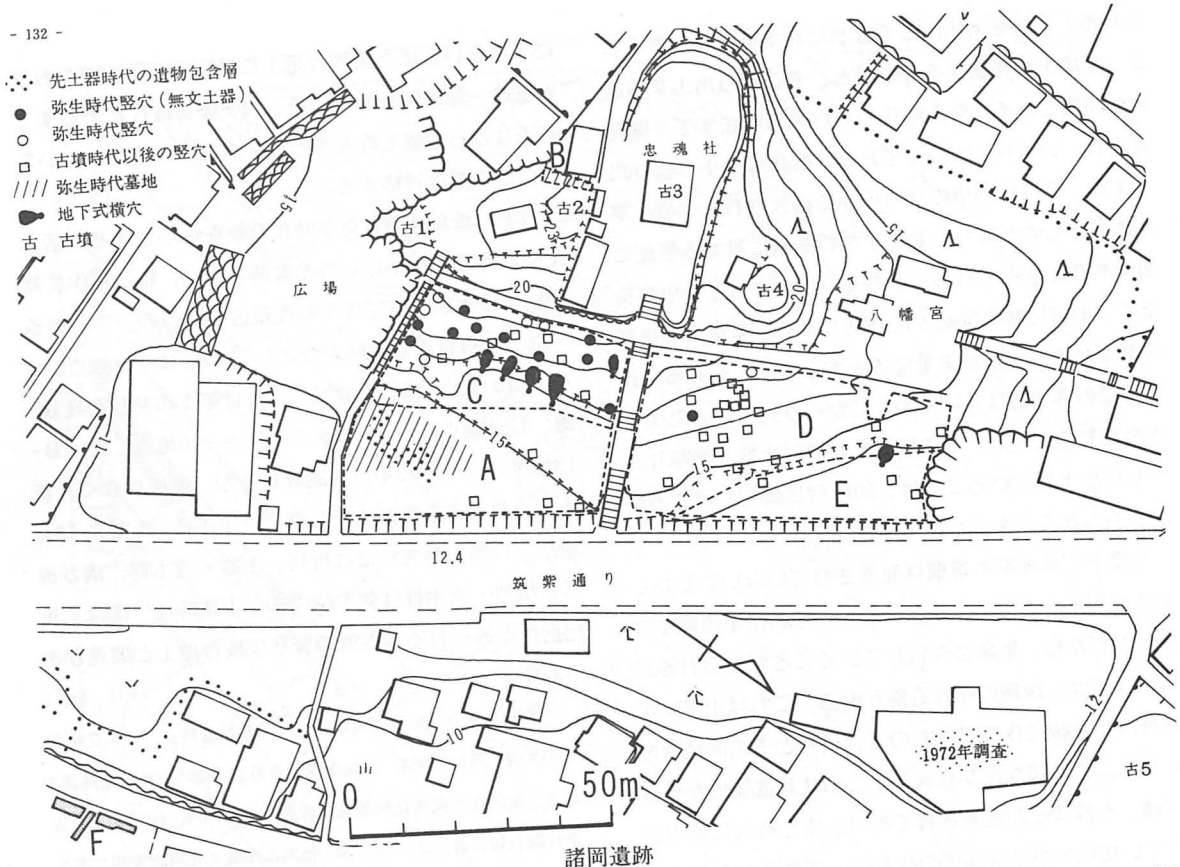
（沢　皇臣）

〈文献〉森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』所収 1961，福岡市教育委員会「福岡市板付遺跡調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第8集 1970，同「板付周辺遺跡調査報告書」(2)、(3)、(4) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集 1975，第36集 1976，第38集 1977，同「板付—市営住宅建設にともなう発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集1976，同「板付—県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第39集 1977

**61 諸岡遺跡**（博多区諸岡）〈65～66〉

1972～75年に4回の調査が行われた。先土器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代にわたる遺跡である。遺跡は諸岡川左岸にある南北約200m、東西約170m、標高23mの独立丘陵にある。

各時代の遺構と遺物は以下のとおりである。先土器時代の石器（ナイフ形石器、台形石器、削器、細石核、石核、剥片等）は丘陵を構成する上部ローム層中に含まれている。縄文時代の遺構はないが、丘陵上で押型文土器片が採集され、また丘陵東南側の沖積層（F区）には夜臼式土器の包含層があり、多くの夜臼式土器、黒曜石製打製石器が出土した。弥生時代の遺構は小竪穴と墓である。小竪穴は20あり、いずれも弥生時代前期末とみられる。そのうち11では朝鮮系無文土器約50個体分が板付II式土器とともに出土した。弥生文化と深い関係にあった朝鮮無文土器文化の土器が大量に出土した意義は大きい。墓はA区とB区で、弥生時代中期前葉～後期の甕棺墓61基（成人棺33基、小児棺28基）と中～後期の土壙墓3基が調査された。ゴホウラ製貝輪がA区43号甕棺墓で1個、B区2号甕棺墓で8個出土した。弥生時代の墓は、現在忠魂社のある丘陵頂部から南側の広場（削平されている）にも存在するとみられ、かって忠魂社建設の際にゴホウラ製貝輪8個と細形銅剣1点が出土している。丘陵上には5基の円墳がある。いずれも未調査で、3号墳は完全に破壊されている。これらの古墳に立てられていたとみられる円筒埴輪片がD区で数点出土した。古墳時代～歴史時代

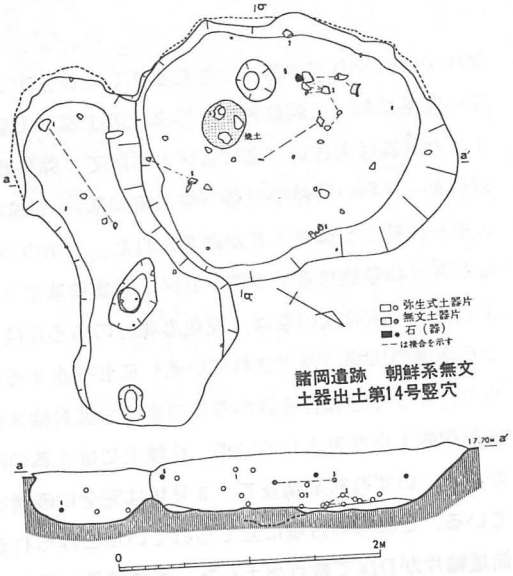



諸岡遺跡

の遺構は小竪穴31と溝12がA・C・D・E区にある。歴史時代の遺構は地下式横穴7（C・D・E区と1972年調査地）と柱穴である。これらの遺構では土師器、瓦器、青磁、鉄器片、老司式瓦片等が出土した。地下式横穴は、最近類例が北部九州で増えつつあり、12世紀後半～13世紀のものとみられる。

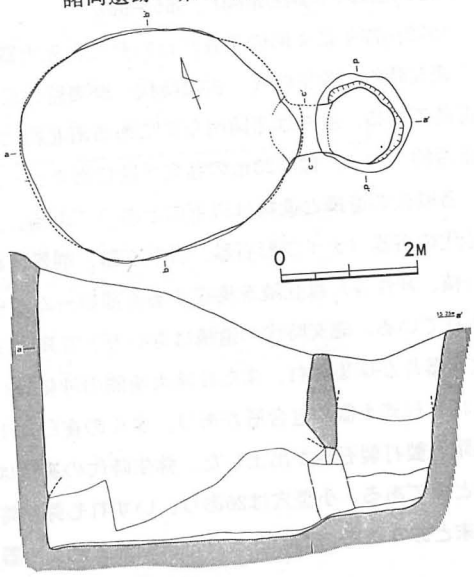
（横山邦継）

〈文献〉福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書」(1)、(2)、(3)福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集 1974、第31集 1975、第36集 1976




諸岡遺跡　朝鮮系無文土器出土第14号竪穴

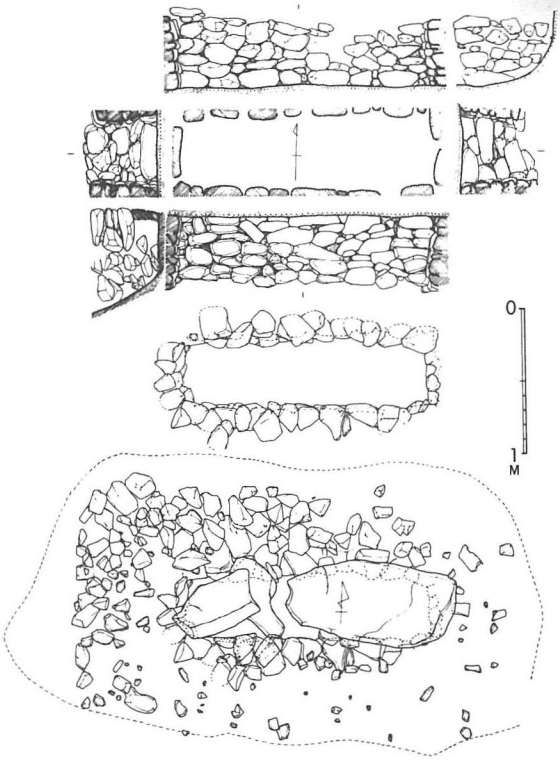
諸岡遺跡　第3号地下式横穴



**62 持田ヶ浦古墳群**(博多区大字金隈字持田ヶ浦)

月隈丘陵の西斜面にあり、1970年7月に2基を調査した。1号墳は破壊が甚しい。直径15mの円墳と推定される。横穴式石室は玄室長 2.8m・奥壁幅2.23mで花崗岩石材を用いている。須恵器片、金環1、留金具1が玄室で出土した。1号墳の北西30mにある2号墳は東西径18m・高さ2mの円墳で、埋葬施設は2つある。そのひとつは完全に破壊され、石材も持ち去られている。もうひとつは竪穴式石室で、3.5×1.9mの土壙内に長さ170cm・幅50cm・高さ55cmの石室を扁平な花崗岩、結晶片岩、礫の小口積で作る。石室と土壙の間には小礫をつめ、天井には玄武岩、花崗岩、結晶片岩の板石をかぶせ、その上に約1mの封土がある。側壁に朱が付着している。盗掘を受けており、遺物はない。1号墳は6世紀後半、2号墳は5世紀後半とみられる。

〈文献〉福岡市教育委員会「持田ヶ浦古墳群1・2号調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第16集 1971



持田ヶ浦2号墳竪穴式石室

**63 金隈遺跡**(博多区大字金隈字日焼) **〈67～68〉**

個人宅造用進入道路建設時に甕棺12基を発見し、1968年4月に予備調査を行う。1969年5月～6月に第1次調査を実施し、甕棺墓 108基（前年度分も含める)，土壙墓16基、石棺墓2基、支石墓？2基を発見。そこで、記録保存を前提にして進めて来た調査を現状保存の資料を得る調査に転換し、1970年7月～8月に第2次調査を実施した。翌年9月に国の史跡に指定された。

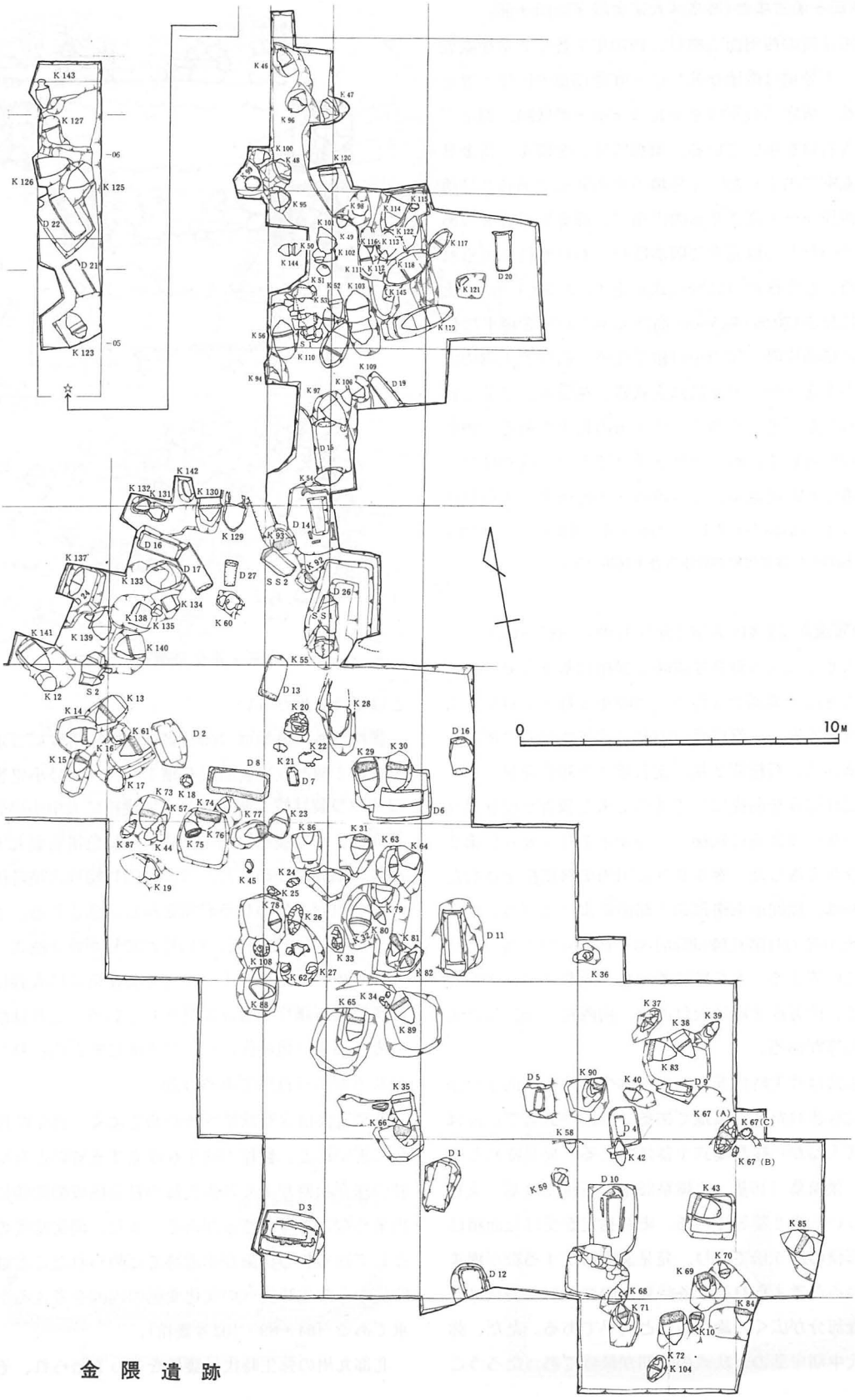
遺跡は、福岡市東南部の三郡山系よりのびる、四王寺山塊山麓の月隈丘陵(標高100～150m)の南面、標高30mに位置する。本丘陵に並行して流れる御笠川をはさんで、西方約2kmに板付遺跡、南西約3kmに須玖岡本遺跡等がある。

本遺跡は弥生時代前期末から弥生時代後期前半にかけて営なまれた共同墓地である。土器型式名でいえば、金海式土器から桜馬場式土器にわたる。発見された遺構は、甕棺墓 146基、土壙墓25基、石棺墓2基、支石墓らしいもの2基等である。史跡指定を受けた面積は調査面積の約5倍であり、発見遺構に倍する数が埋まっていると考えられる。各時期別の埋葬形態や数は、未調査部分が広く、論じること尚早である。ただ、弥生時代中期中葉の須玖式の時期が最盛であったろうことは疑う余地がない。

甕棺以外の遺物は 103号甕棺の成年男性にゴホウラ製貝輪2個と頁岩製磨製石鏃1個、 104号小児甕棺にゴホウラ製貝輪1個、27号小児甕棺に大中小の壺形土器3個、30号甕棺（熟年女性）に緑色滑石製丸玉垂飾品等の副葬品があった。 103号の貝輪は古墳時代の鍬形石の祖形と思われる形状をなし注意される。土器の編年は103号が金海式(きんかい)、146号と27号が城ノ越式(じょうこし)、30号が汲田式(くんでん)に比定できよう。97号甕棺墓には人骨に密着して磨製石鏃片2個が発見されている。これは副葬品と考えるより他の作用により人体にもたらされた物とした方がより自然であろうか。

金隈遺跡は保存状態がきわめてよく、弥生時代の形状に近いこと、甕棺の編年を確立する資料となり、人骨の保存状態がよく各世代毎の社会構成の問題に接近出来るなど多くの意義がある。また、縄文時代の風習として知られる抜歯(ばっし)が本遺跡で認められたことは縄文時代から弥生時代への文化変動の内因を考える上で貴重である（64・89・102号甕棺)。

北部九州の弥生時代は甕棺をもって語られ、それも


K 143
K 127
K 126
K 125
D 22
D 21
K 123
-06
-05
K 46
K 47
K 96
K 100
K 48
K 120
K 95
K 98
K 114
K 115
K 101
K 49
K 116
K 113
K 122
K 117
K 50
K 102
K 144
K 111
K 112
K 118
D 20
K 51
K 52
K 103
K 145
K 121
K 53
K 119
K 56
S 1
K 110
K 94
K 109
K 106
D 19
K 97
D 15
K 54
K 142
K 132
K 131
K 130
K 129
D 14
K 93
K 137
D 16
D 17
K 133
D 27
S S 2
K 92
D 26
K 134
K 138
K 135
K 60
S S 1
K 141
K 139
K 140
K 55
K 12
S 2
K 13
D 13
K 14
K 20
K 28
K 61
D 2
K 16
K 22
K 29
K 30
D 16
K 15
D 8
K 21
D 7
K 17
K 73
K 18
K 57
K 74
K 77
K 23
D 6
K 87
K 44
K 76
K 75
K 86
K 31
K 63
K 64
K 45
K 19
K 24
K 25
K 78
K 26
K 79
K 80
K 81
D 11
K 33
K 108
K 62
K 27
K 82
K 36
K 88
K 65
K 34
K 89
K 37
K 38
K 39
K 83
K 90
K 40
D 9
D 5
K 35
K 66
K 67 (A)
K 67 (C)
K 58
D 4
K 42
K 67 (B)
D 1
K 59
D 10
K 43
K 85
D 3
K 70
K 69
D 12
K 68
K 71
K 84
K 10
K 72
K 104
0
10M

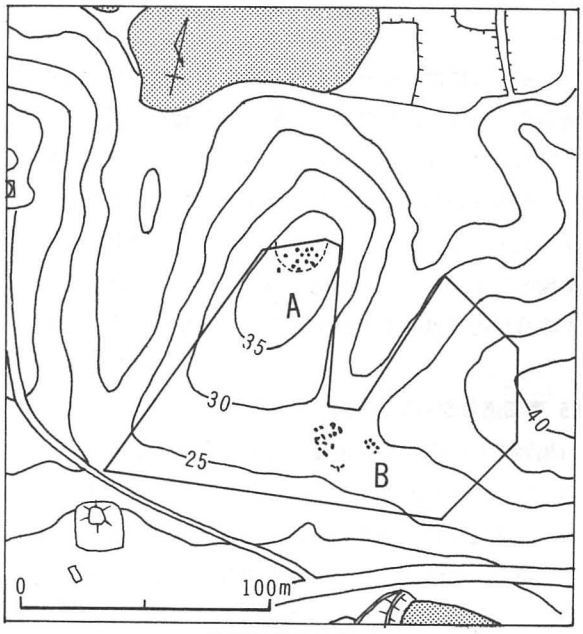
金 隈 遺 跡

豪華にしてきらびやかな副葬青銅器をもって知られている。しかし、それはあくまでも全体的に見ればごく一部の特殊な現象である。金隈遺跡は甕棺の形状、副葬品の類からしてもごく一般的な墓地である。珍品尊重の世の風潮に抗して、本遺跡が「国の史跡」に指定された意味は大きい。史跡公園としての整備をもって市民に公開される日の近からんことを願う。（折尾学）

〈文献〉福岡市教育委員会「金隈遺跡第１次調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第７集 1970,「金隈遺跡第２次調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第17集 1971, 橋口達也・折尾学「小児骨に伴つたゴホウラ製貝輪―福岡市金隈出土 146号甕棺の調査―」『九州考古学』47 1973

金隈遺跡出土人骨の死亡年令

| | 年令 1 | 6 | 12 | 20 | 40 | 60 | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 乳児 | 幼児 | 小児 | 若年 | 成年 | 熟年 | 老年 | |
| 男　性 | | | | | 13 | 7 | | 20 |
| 女　性 | | | | | 6 | 11 | 2 | 19 |
| 不　明 | 1 | 15 | 2 | | 5 | | | 23 |
| 計 | 1 | 15 | 2 | | 24 | 18 | 2 | 62 |

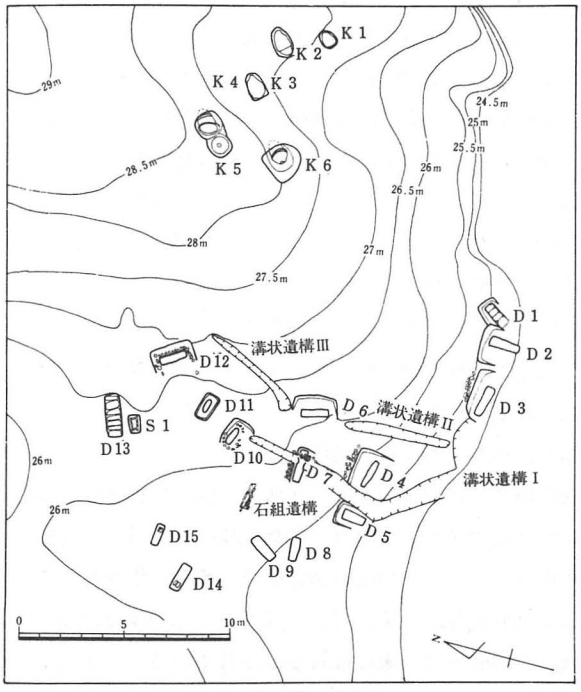


宝満尾遺跡地形図

## 64 宝満尾遺跡（博多区大字下月隈字宝満尾）〈69～70〉

遺跡は月隈丘陵西側斜面の、南北をせまい谷水田にはさまれた丘陵頂部および南斜面に位置する。発掘調査は1972年７月～11月に実施した。遺跡は２地区に分かれる。丘陵頂部（Ａ地区）には半壊した円墳１基とその墳丘下に袋状竪穴11基、石蓋土壙墓１基があった。その南東のＢ地区では弥生時代の甕棺墓６基、石蓋土壙墓２基、石棺墓１基、土壙墓13基、溝状遺構等からなる弥生時代墓地を検出した。

古墳は現状で径10m、高さ１mの小墳丘をもっていたが、調査の結果、すでに半壊していることが判明した。墳丘の復原径は20m前後と推定される。内部主体は横穴式石室と考えられるが、すでに石材は抜きとられ、南側壁腰石の一部と床面を残すのみであった。床面は全面に石が敷かれている。奥壁にそって割石を立て70cm× 215mの範囲の屍床を形成していた。副葬遺物は比較的当初の姿をよくとどめていた。屍床から直刀１、不明鉄器１、玉類（勾玉１、丸玉２、小玉41）が出土し、屍床外に直刀１、鉄鏃10余本が出土した。玉はひもに通した状態が明瞭であるが、首にかけたのではなく胸の付近に置いた状態であった。ほかに墳丘内から土師器２個体、墳丘下よりＵ字形鋤先１点が出土した。



Ｂ地点遺構分布図

墳丘下の石蓋土壙墓は、古墳の築造によって一部破壊されているが元来は小墳丘を有していたとみられる。小児用と考えられ、内部から、勾玉２・管玉17の玉類が出土した。墳丘の下や周辺で検出した袋状竪穴は２

基を除いて方形をなし、うち2基には踏み台状の出入口の施設が認められ、3基には柱穴があって元来は屋根等の施設があったことがわかる。遺物はきわめて少く、石鏃1・スクレーパー1・土器片が出土している。

B地区の甕棺墓群は、1基の木蓋単棺を除き、合せ口の甕棺で、すべて成人用である。これら中期後半の甕棺墓を取り囲むように後期前半の墓地が形成されている。これは大きく2群に分けられる（1群13基、2群3基)。1群は石組遺構を中心に、小児墓3基、成人墓10基からなり、それぞれに墓標的な配石・置石がみられる。2群は3基の成人墓よりなるが、元来は1群とかわらない墓が存在したと考えられる。副葬遺物は4号土壙墓で前漢鏡（明光鏡）1、13号土壙墓棺外で素環頭刀子1、15号土壙墓でガラス小玉540個、6号土壙墓付近で鉄斧1が出土した。さらに周辺からは祭祀用と考えられる土器が出土している。

宝満尾遺跡の各遺構の年代は、A地区の袋状竪穴が弥生時代前期、石蓋土壙墓が4世紀、古墳が6世紀前半と考えられ、B地区の弥生時代墓地は、弥生時代中期後半～後期前半である。A地区の袋状竪穴群は、1つの最小単位を示すものと理解される。B地区の弥生時代墓地は副葬品の多彩なこととともに、後期前半における典型的な墓地のありかたを示している。A地区の古墳は群集墳形成以前とみられ、特に近くの持田ヶ浦古墳群との関係で注目される。B地区出土の前漢鏡は楽浪古墳出土の「居摂元年」銘の鏡や洛陽西郊漢墓3031号墳出土鏡に酷似し、その製作年代が王莽の新(A.D.8～25年）を前後する年代のものである。(山崎純男)

〈文献〉福岡市教育委員会「宝満尾遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集 1974

## 65 席田遺跡群(博多区席田) 〈71〉

福岡市が計画した席田総合運動公園の建設にともない、1975年より調査を行っている（現在も継続中)。

月隈丘陵一帯には金隈遺跡、宝満尾遺跡、持田ヶ浦古墳群などの遺跡があるが、皮肉なことに、西区にくらべて大開発が少ないために遺跡の調査例が少なく、学問的には未開拓な地域である。その一方では小規模の開発によって未調査のまま破壊される遺跡の多い地域でもある。席田総合運動公園建設予定地は約75万m²の面積をもち、第二次大戦後、米軍の弾薬庫として長い間接収されていたなどの理由から、月隈丘陵の著しい地形の変貌の中にあって、ほとんど旧状をとどめている地域といえる。それゆえ、遺跡の消滅とひきかえに、これまで空白であった御笠川東岸地域の考古学的資料を豊富に提供し得るものと考えられる。

貝花尾遺跡（1970年8月～71年2月に調査）は、南北に伸びる月隈丘陵から西方へ分岐した標高40～50m幅約10m前後の丘陵の尾根上と斜面にある。丘陵北斜面の標高20m前後のテラス状部分では全長約60m、幅1m前後の溝が1本検出された。標高50m前後の尾根の中程では、墳丘の低い竪穴系横口式石室墳が検出された（貝花尾1号墳)。石室は長さ約2m・幅約1m・残存高約60mで、床には石がしかれている。石室内には須恵器および土師器の壺形土器各1、直刀1、鉄製U字形鋤先1、鉄鏃23、毛抜き1、刀子3が副葬されていた。

第2次調査では大谷遺跡を調査した（1976年10月～1977年1月）。遺跡は、月隈丘陵から西へ派生した標高50～55mの丘陵尾根上、及び丘陵斜面あるいはこの丘陵から南へのびる標高30～40mの台地上にある。この台地の下方、標高10～20mの位置には上ノ浦池遺跡があるが、これは大谷遺跡に連続するものと考えられる。なお谷ひとつ隔てた東方の屋根上には、かって宝満尾遺跡が存在していた。

丘陵斜面と台地上で弥生時代後期の住居址9～11、土壙1、溝状遺構1、尾根上では2基の古墳を確認した。遺物は、弥生時代後期末の住居址に伴って青銅製鋤先が出土した（これは西新町式土器に伴うものと考えられる)。その他、表土から馬具の一部と思われる鉄製品が出土している。

大谷遺跡の住居址の時期は弥生時代後期前半から末に至るものと考えられるが、谷を隔てた東の丘陵上の宝満尾遺跡では、弥生時代中期から古墳時代に至る墳墓群が検出されており、この内、土壙墓の時期が弥生時代後期前半であるところから、この大谷遺跡の集落址との関連が問題となる。大谷遺跡の立地をみると、御笠川によって形成された平野部からはほど遠く、丘

陵斜面のテラス状張リ出し部分や、標高30m前後の狭長な丘陵上に位置する。しかも、住居址内の遺物の少ない点など、弥生時代後期頃の生産形態あるいは政治的背景を考えた場合、興味ある立地条件を示している。

(井沢洋一)

〈文献〉福岡市教育委員会「席田遺跡群第1次発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第44集 1977

**66 多々良遺跡**(東区多々良字宗原) **〈76〉**

福岡市流通センター建設に伴い、1971年7月～9月に調査した。流通センター敷地内は標高 2.5～3mの水田地帯で、条里制地割が比較的よく残り、地名にも「六ノ坪」等の条里制に関連するものが散見された。さらに、同地は延元元年(1336年) 2月の足利尊氏と菊池武敏との合戦の故地であり、古くは『続筑前風土記』等にも注意され、菊池方の戦死者を葬ったと伝えられる小塚も現存していた。

調査の主眼は、条里制遺構の検出と小塚におき、地理、地質、花粉分析、文献等の検討もあわせて実施した。小塚の周辺に中世村落の遺構を検出し、また弥生～古墳時代の遺物が散布する地域も存在したが、明確な包含層等は明らかにできなかった。

遺構として、条里制に伴うと考えられる溝があり、小塚では小祠の礎石とみられる石組みを検出したが、その時期は地表に露出していたレンガが積み礎石の前身であったことが知られるだけで、条里制の溝と同様、正確なことは明らかにできなかった。中世村落には溝状遺構、円形竪穴、円形・方形の小竪穴、集石ピット土壙墓?、製鉄遺構、柱穴群がある。各遺構は同一時期のものではなく少くとも二時期にまたがると考えられる。発掘調査では東西25m、南北32mの範囲に遺構を確認したが、その範囲はさらに広がり 100m四方になろう。条里制遺構、中世村落については期間、予算等の制約で残念ながら完掘にいたらなかった。村落遺構は、溝(方形にめぐる)にかこまれた内部に各遺構が存在し、溝にはさまれた道路状のものも確認した。

遺物は主に中世村落遺構より出土したもので、土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、土堝、青磁、白磁、製鉄関連遺物(フイゴ羽口、スラッグ)、土錘、木製品(椀)、砥石、石堝、滑石製容器、鉄製品(釘・刀子・鋤先等)、瓦、馬歯、古銭があり、中でも青白磁の出土は相当数にのぼる。

中世村落の年代は出土した古銭(淳化元宝 北宋990年)よりさかのぼらず、出土した遺物から平安時代末～鎌倉時代と考えられる。出土遺物は各種多量で、当時の生活実態をよく伝えている。製鉄関連遺物は、当地の地名である多々良と符合し、興味深い。

調査は充分な成果をあげることはできなかったが、それまで明らかでなかった水田地帯の遺跡のありかたなど、以後の調査の指針をえたことは現在に生かされていよう。

(山崎純男)

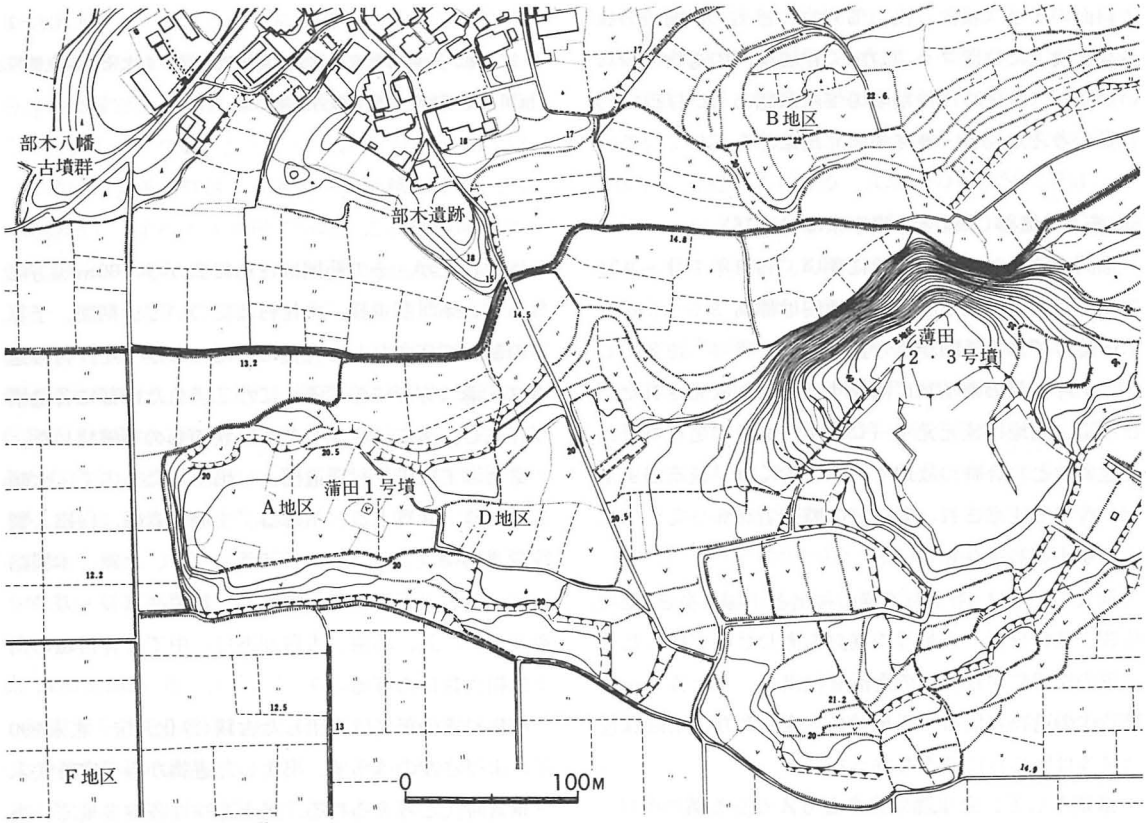
〈文献〉福岡市教育委員会「多々良遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第20集 1972

**67 蒲田遺跡**(東区蒲田字北熊) **〈72～74〉**

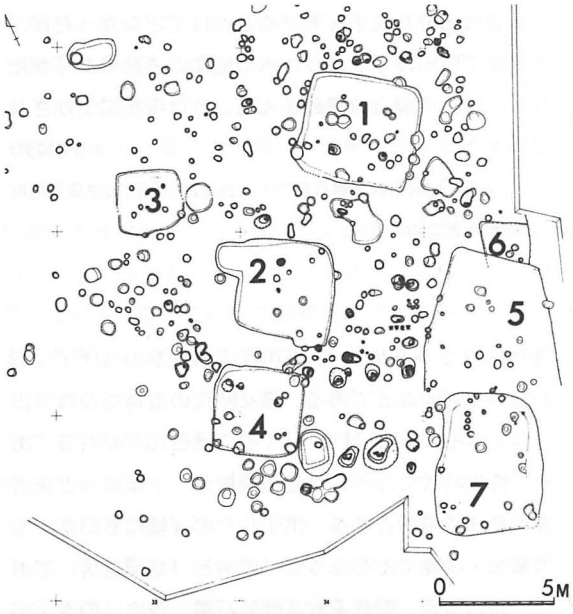
蒲田遺跡は久原川と多々良川にはさまれた沖積平野の中の低い舌状台地上にある。東西約 700m、南北約 300m、標高20～40mの丘陵の周辺には、北西に湯ケ浦古墳群、北に前方後方墳を含む部木八幡古墳群、東に蒲田水ヶ元、和田部木原遺跡等がある。発掘調査は1972年4月～翌年8月まで、台地上のA・B・D・E地区と沖積地のF地区との5カ所で行った。

本遺跡では先土器時代終末期、縄文時代早期末から前期、弥生時代前期から中期、古墳時代、近世にかけての遺構・遺物が多数出土した。先土器時代終末期の遺物は約 2,000点あり、その代表的なものはナイフ形石器や細石刃などである。縄文時代の遺物もかなり出土しているが、土器は少なく、そのほとんどが石器である。弥生時代になると台地は甕棺墓・土壙墓など死者を埋葬する場所となる。出土したのは甕棺墓23基・土壙墓26・埋葬にともなう祭りのあと(祭祀遺構)であり、筒形器台、朝鮮系有茎磨製石鏃、丹塗リの壺・高杯・甕形土器などの遺物が多数出土している。

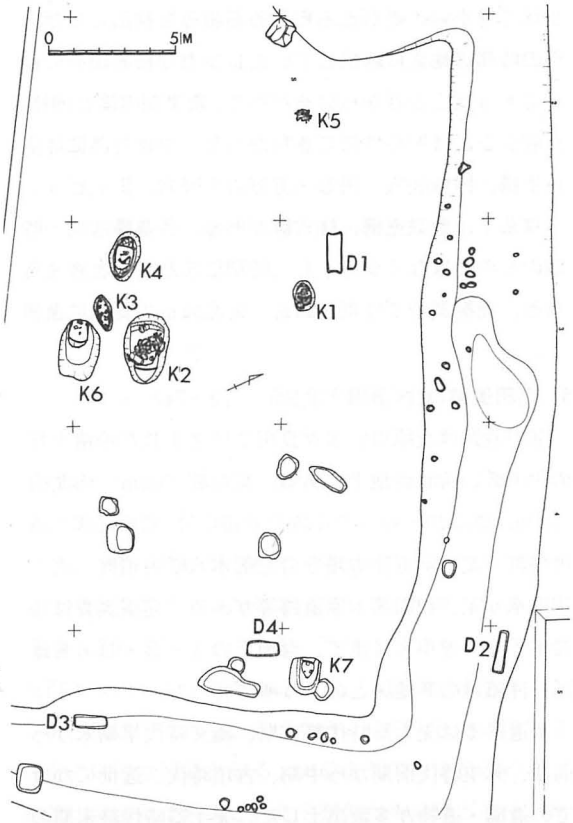
古墳時代の遺構は、円墳3基、住居址7軒で、これらから須恵器・土師器などが多数出土した。その中に




蒲田遺跡




蒲田遺跡　D地区住居址（No.は住居番号）




蒲田遺跡　A地区第1地点の遺構

は甑(こしき)の完形品や手ずくね土器もみられる。これらの古墳や住居址は5世紀末から6世紀の頃のものとみられる。近世の遺構には、敷石・溝・集石遺構がある。これらの遺構にともなって中国製陶磁器や宋銭（12世紀はじめ頃の崇寧重宝）、朝鮮製の高麗天目の瓶が出土した。

このようにいろいろな時代の遺構・遺物が検出された蒲田遺跡の意義は次の5点にまとめられる。①福岡市において数少ない先土器時代の包含層を3ヵ所で確認した。②縄文時代の多数の石鏃等が出土し、縄文時代の石器製作技術を把握できた。③弥生時代の同時期の墓地が2ヵ所で検出された。④古墳と住居址の関係の把握。⑤多数の近世の中国・朝鮮製磁器の出土と敷石遺構との関連性。

（二宮忠司）

〈文献〉福岡市教育委員会「蒲田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集 1975

**68 蒲田水ヶ元遺跡**（東区大字蒲田字水ヶ元）**〈75～76〉**

多々良川に合流し博多湾に注ぐ久原川と宇美川にはさまれて低丘陵が多々良平野につき出している。遺跡はこの丘陵の西端、平野に接するところにある。

予備調査を1975年11～12月に、本調査を1976年1～5月に実施した。調査には熊本大学、東京教育大学、桐朋女子短期大学学生有志20数名が協力した。この遺跡は先土器時代（包含地）、縄文時代後期（貯蔵穴？群）、弥生時代中期（集落の痕跡あり、甕棺を主体とする共同墓地）、弥生時代後期～古墳時代前期（集落、墓地－方・円形周溝墓、箱式石棺墓の痕跡あり）の各時代にわたる。

遺構は下記のとおり

第Ⅰ地点：住居址5（弥生時代中期1、弥生時代後期1、古墳時代前期2、奈良時代1）、高床式倉庫(2×1間) 2棟。

第Ⅱ地点：住居址29（弥生時代後期～古墳時代前期）環濠を伴う高床式倉庫1、箱式石棺の痕跡1（但し棺材のみ)。

第Ⅲ地点：方形周溝墓1、円形周溝墓1（いずれも弥生時代後期と思われる)。

第Ⅳ地点：住居址5（弥生時代後期～古墳時代4、カマドのつく奈良時代住居址1）、2×2間の高床倉庫1（奈良時代～平安時代）、甕棺墓33基（弥生時代中期）とそれにともなう祭祀遺構1。

遺物は下記のとおり。

先土器時代：ナイフ形石器1。

縄文時代：後期の南福寺式土器片数点。

弥生時代：中期甕棺と祭祀遺構を形成する土器70数点。

弥生時代後期～古墳前期：住居址と方・円形周溝墓にともなう土器大量、小柱穴より検出の漢式鏡片1、住居址にともなう青銅製鋤先1。

奈良時代：土器片数十点。

福岡市の東部奥地、多々良平野に面した粕屋地方のこの低丘陵の原始・古代史上の問題に対して、蒲田遺跡や久山町，篠栗町にまたがる和田部木原遺跡の調査は、この一帯が学術上極めて高い価値をもつことをしめした。本遺跡の調査は、粕屋地方の原始・古代史を語る上での重要な資料をさらに追加した。とりわけ、本遺跡の調査によって、和田部木原遺跡の奈良・平安時代の大倉庫群が突如として出現したものでなく、弥生時代からの稲作農耕の発達を前提にしていることが明らかになったといってよい。

（折尾　学）

**69 和田部木原遺跡**（粕屋郡篠栗町和田部木原）**〈77〉**

福岡市が計画した工業団地造成にともない、1974年10月～1975年3月に調査。福岡市東郊、篠栗町の北西部に所在する本遺跡は、九州縦貫自動車道蒲田インターチェンジの東2㎞の台地上にある。標高30m、水田面との比高5～8m、東西 400m・南北 100mの舌状台地のほぼ中央部に、弥生時代中期および奈良時代の各種の遺構が集中している。

〔弥生時代〕台地中央部の東から南縁にかけて、弧状に4棟の竪穴住穴址が分布し、住居址群から離れて、台地中央部に13基の土壙が点在する。住居址は方形1（1辺3～4m)、円形3（径5～7m）で、床面には柱穴・炉址がある。住居址内からは中期末の弥生土器、

石包丁、砥石、石剣などが出土した。13基の土壙は大小さまざまで形状も一定でない。そのうち、幅0.6m・長さ2mの長方形の3基は土壙墓と考えられる。いずれも住居址と同時期の弥生土器を出土する。したがって、4棟の住居址と土壙は、同一期に営なまれたムラの一端をしめすものであろう。

〔奈良時代〕台地中央部の東西 100m・南北70mの範囲に、建物址40棟と多数の土壙が集中する。建物址は地表に円または方形の穴を掘り、その中に柱を建てる掘立柱建物で、土間あるいは低い高床の構造が想定される。各建物の柱間は1.5～2.4mと短く、大規模なものではない。建物の規模別では、5×4間1,5×3間1,5×2間 2,4×2間 3,3×3間 3,3×2間 20,2×2間10で,そのうちに総柱の倉庫と思われる建物址が、3×2間のものに3棟、2×2間のものに7棟含まれる。各建物の桁(けた)方向は、ほぼ南北および東西を向くものと、総じて東にふれる一群に分れる。建物群の中央部には、桁行5間、4間の東西棟が、その両端には3間の南北棟が重複している。さらにその東西には、総柱の倉庫群が密集しており、各建物の規模と性格によって配置の企画性がみとめられる。検出された40棟の建物は、重複関係と方位、さらに柱穴から出土した土器によって大きく4時期（Ⅰ～Ⅳ期）の建物群に区分できる。創建期（第Ⅰ期）は7世紀末～8世紀初頭に、最後の建て替え(第Ⅳ期)は8世紀後半に行なわれ、9世紀頃まで存続した。各期とも主要な建物、雑舎・倉庫など10棟前後で構成される建物群である。

こうした奈良時代に属する建物群が、どのような性格か他に比すべき資料はない。しかし、同時期の北部九州での農民層の村落が竪穴住居にとどまっている以上、それとは異なった有力な階層の住居（館）と推定しなければならない。

(柳沢一男)

〈文献〉 福岡市教育委員会文化課「和田部木原遺跡現地説明会資料Ⅰ」 1975年3月2日

## 70 名子道(なごどう)遺跡(東区大字土井字名子道)

1970年11月に調査。福岡市の東北方、江辻山の尾根に立地する。

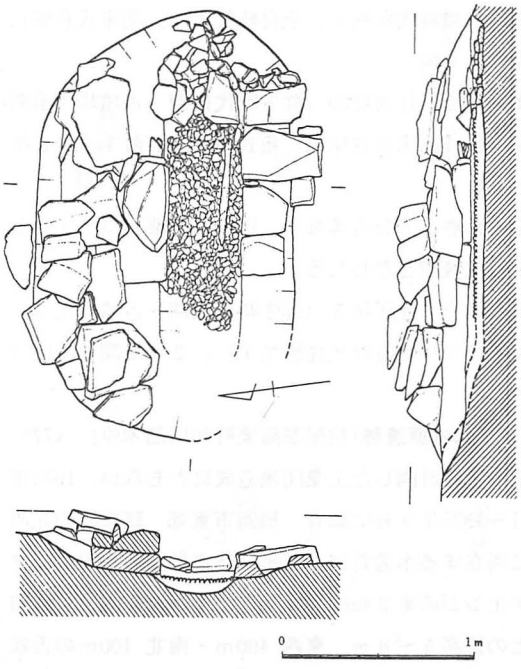
第1号古墳は高さ約1m、直径約16.5m（復原径）の円墳で、内部主体は長さ1.1m・幅0.4mの小形竪穴式石室。構築も簡単で5箇の腰石の上にさらに同大の石を積む。床には河原石を敷きその上に粘土を敷く。天井部は破壊されて明らかでないが、石室外側のひかえ積みが被覆していたのであろう。石材は緑色片岩。

第2号古墳は緑色片岩を使用した巨大な組合式箱式石棺で長さ（内法）1.83m・幅43cm・深さ40cmを測る。棺蓋は棺身にくらべさらに巨大重厚。棺床は板石を敷く。外部施設として、棺蓋上位に同石材の被覆と棺身をめぐる環状列石をもつ。

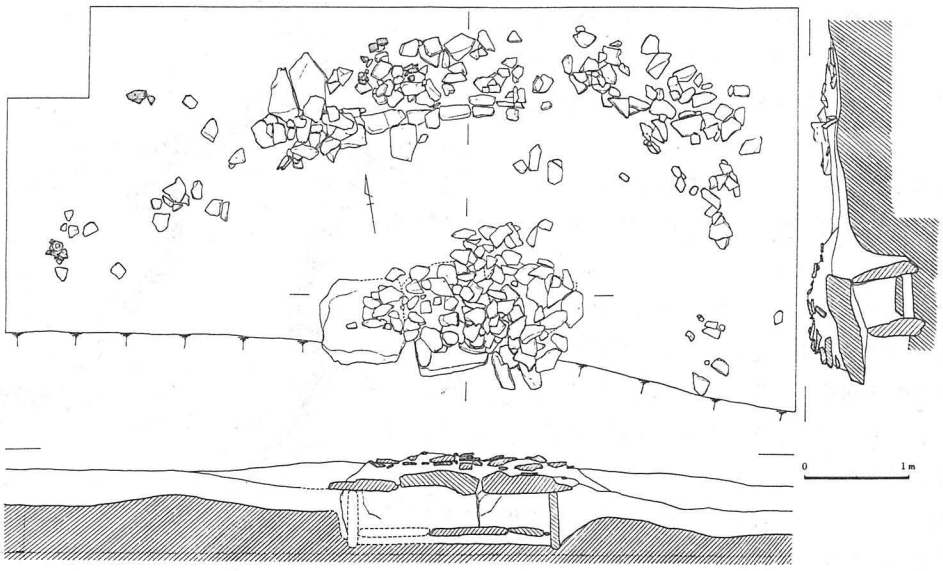
出土遺物は第1号で鉄剣・勾玉・管玉・小玉、第2号で高杯など。第1号の遺物は剣と玉類の組合せで、剣は鹿角製刀装具を着装している点が注目される。5世紀のものである。第2号は、高く封土を盛る厚葬の思想でなく、墓壙を掘った土を再び被覆する程度で、外部施設の棺上積石と環状列石に主点がある。伴出の供献用土器から弥生末期ごろと考えられ、当代の墓制を知る上でも、重要な遺構である。

(三島　格)

〈文献〉田坂・弓場・藤田・三島「名子道遺跡―福岡市大字土井字名子道所在古式墳墓の調査―」岡崎工業株式会社 1972




名子道遺跡　第1号墓




名子道遺跡　第２号墓

**71 天神森古墳**(東区大字蒲田字天神)　**〈77〉**

猪狩川下流東岸の森江山が南にはり出す先端部にある。この古墳の存在はまったく知られていなかった。1970年４月～８月に、ここに新道を通す工事が行われ、古墳主体部は未調査のまま破壊された。この工事中に鏡２面が出土した。その後この鏡は当資料館の蔵品となった。

古墳の形状は幅６ｍの新道に切られ、また地形の変更や雑木のため明らかでない。内部主体の位置・構造・形式も不明である。粘土槨(ねんどかく)や石棺とみられる棺材も出土しなかったとのことで、木棺直葬の可能性も想定される。鏡２面には朱が付着し、同一の棺内に納められていたと思われる。その他の遺物は全くないが、工事中のことで取り落したのであろう。

鏡のひとつは面径22.6cmの三角縁天王日月三神三獣(さんかくぶちてんおうじつげつさんしんさんじゅう)鏡である。この鏡の同笵鏡（同一の鋳型で作られた鏡）は、京都府椿井大塚山古墳で１面、大分県宇佐市赤塚古墳で１面、福岡県苅田町石塚山古墳で２面、筑紫野市武蔵の原口古墳で１面出土している。これらの古墳はいずれも北部九州にあらわれた最古の畿内型古墳で前方後円墳である。したがって天神森古墳も前方後円形の可能性が強い。出土鏡からみて、古墳成立期の有力古墳のひとつである。

他の鏡は面径 9.9cmの盤龍(ばんりゅう)鏡である。鈕座をまわって独角の獣が配されている。盤龍鏡は上記の椿井大塚山古墳、赤塚古墳、大阪府黄金塚、福岡市藤崎などのように、三角縁神獣鏡をともなって古式の古墳に出土する例が多い。

〈文献〉下條信行「考古学・粕屋平野―新発見の鋳型と鏡の紹介をかねて―」福岡市立歴史資料館研究報告第１集 1977

**72 湯ヶ浦古墳群**(東区)

城ノ越山南麓にある古墳群。市教委が外部に委託して1974年10月～11月に古墳４基を調査。詳細不明。

**73 和白遺跡**(東区上和白、下和白)　**〈78～79〉**

1970年４月～11月に調査された縄文時代～平安時代の遺跡である。上和白と下和白の山麓部に包含層があり、丘陵斜面に古墳がある。遺構は縄文時代の土壙１（上和白）、古墳時代の円墳12（下和白３、上和白９）、住居址１、製鉄遺構２、平安時代の土壙墓２（以上上和白）などである。

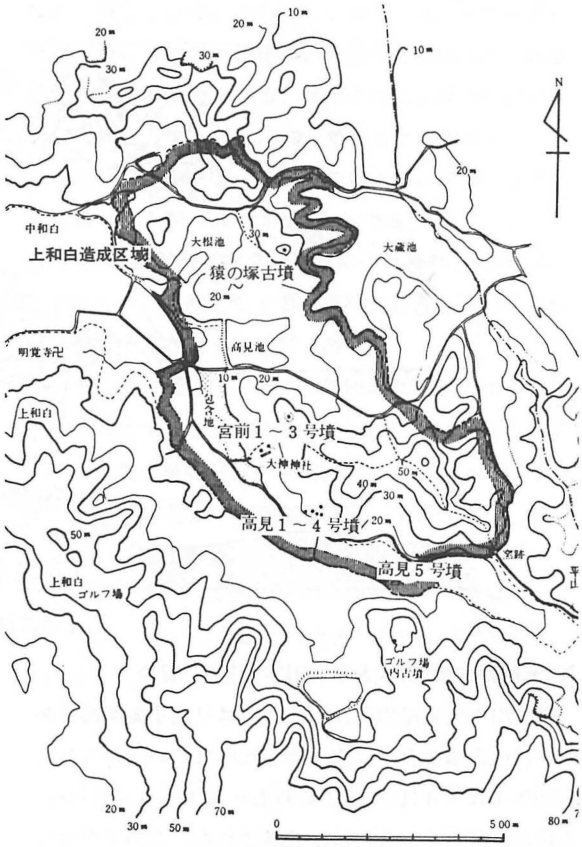
出土遺物には先土器時代の尖頭器１（下和白）、縄文時代の削器・石鏃・石斧、弥生時代中期の土器・石斧・石錘（下和白）などがある。

下和白の飛山１～３号墳のうち、３号墳はすでに壊

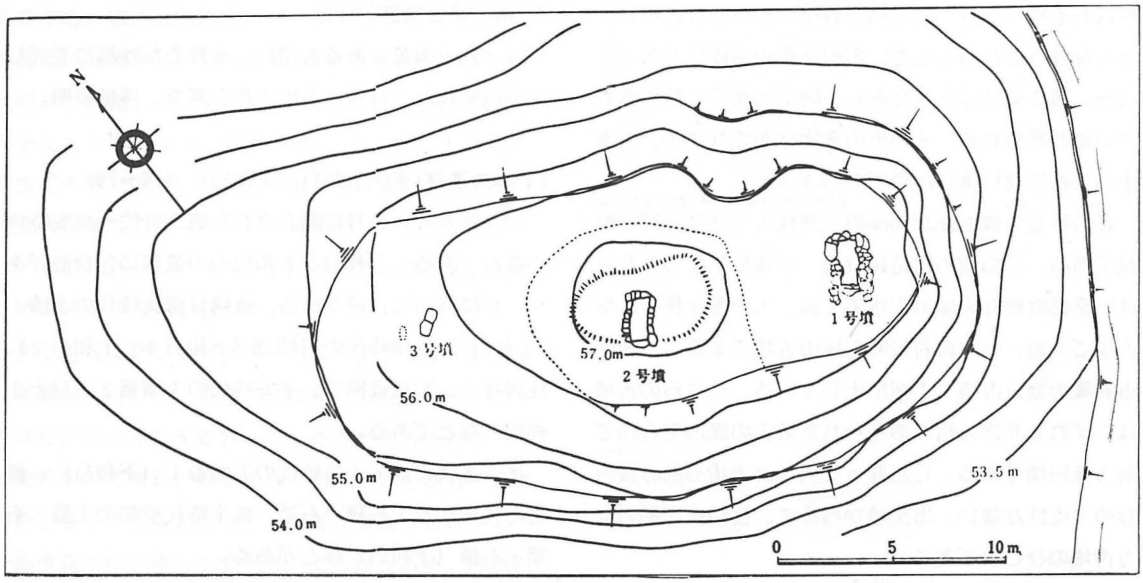
滅しているが、2号墳は竪穴式小石室をもつ（鉄鏃1出土）。1号墳は竪穴系横口式石室をもち、須恵器、鉄剣1、直刀1、刀子1、勾玉・丸玉・小玉、滑石製模造品が出土し、5世紀後半～6世紀初頭と推定される。

上和白には高見1～5号墳、猿（えん）の塚古墳、宮前1～3号墳があり、いずれも横穴式石室をもつ、各古墳から須恵器が出土し、土師器は高見5号、猿の塚、宮前1～3号墳で出土する。その他の遺物は高見1号墳で鉄鏃・馬具・刀子・金環・玉類、同2号墳で直刀・刀子・鉄鏃・馬具・銀環・玉類、同3号墳で金環、同4号墳で金環と棗玉、同5号墳で鉄斧・鉄鏃・金環・玉類、猿の塚古墳で馬具・刀子・鉋・金環・銀環・玉類、宮前1号墳で鉄刀・鉄鏃・留金具・鉄斧・金環・玉類が出土した。古墳の築造年代は、猿の塚が6世紀後半、宮前2号と高見2号が6世紀末、その他が7世紀前半と推定される。

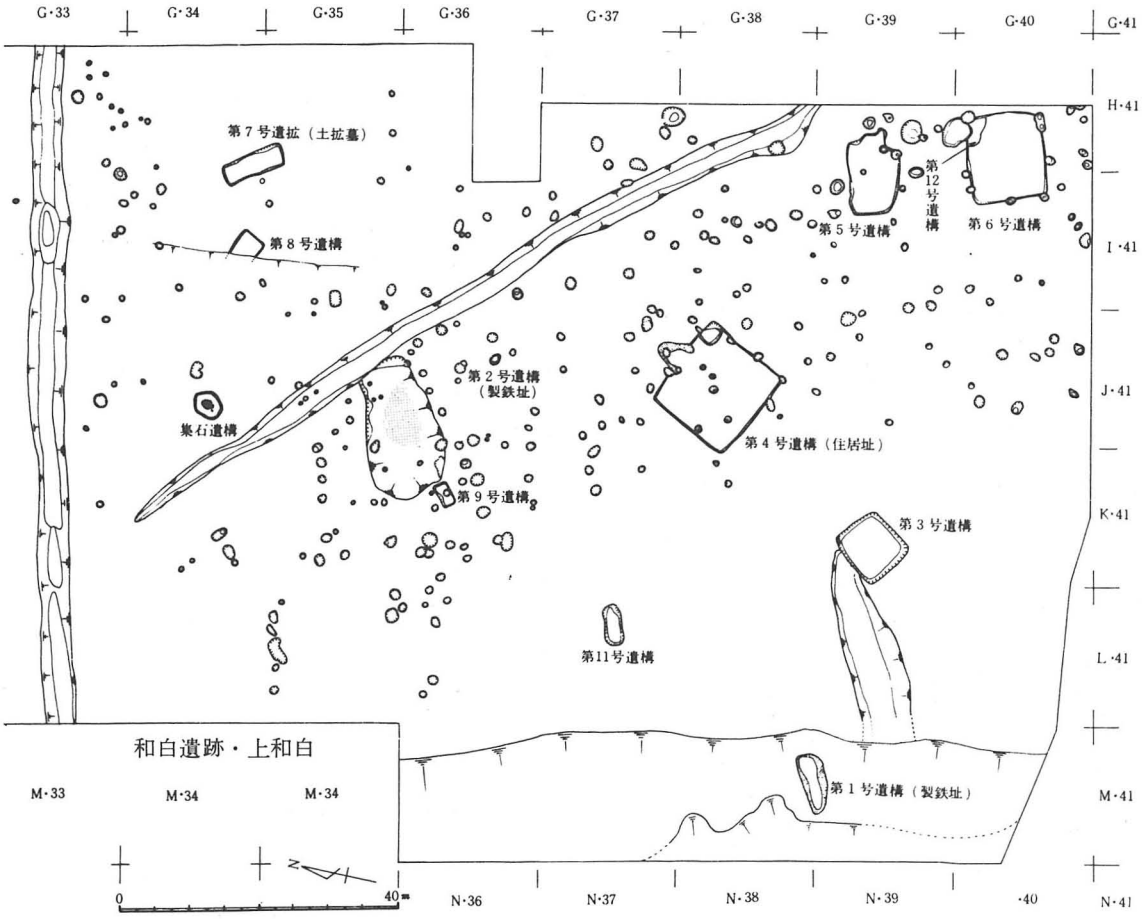
古墳時代住居址はカマドをもつ方形竪穴住居で須恵器と土師器が出土する。製鉄遺構は2つあり、るつぼ・ふいご羽口・鉄滓・須恵器・土師器が出土し、古墳時代末～奈良時代とみられる。中世の遺構には土壙墓があり、7号土壙墓では同安窯青磁碗と土師皿3・鉄刀1が出土し、10号土壙墓では越州窯系白磁碗が出土した。他に龍泉窯系青磁碗が出土した。これらは平安時代のものと考えられる。




和白遺跡　上和白地区地形図




下和白　飛山古墳群地形測量図




和白遺跡では竪穴式小石室や横口式石室をもつ古い古墳が調査され、さらに製鉄遺構によって古代の製鉄資料が得られた。中国磁器を副葬する土壙墓も重要である。

(柳田純孝)

〈文献〉福岡市教育委員会「和白遺跡群発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集 1971

## 74 金印公園予定地

「漢委奴国王」と刻んだ金印が発見されたのは1784年（天明4年）のことである。この年2月23日、農夫甚兵衛が田の溝を修築中に大石の下から金印が出土した。金印はのち藩主黒田家の所蔵となり、現在東京国立博物館に保管されている。これが、『後漢書』東夷伝に、後漢の光武帝が建武中元2年(西暦57年)に奉賀朝貢した倭奴国に与えたと記されている金印である。「奴国」は現在の福岡平野にあった弥生時代の小国家である。

金印の出土地は、中山平次郎博士により、現在「金印碑」の建っている付近（その東側ないし海側）と推定されている。ここに「金印公園」が設けられることになり、出土地周辺の調査として、1973年8月に「金印碑」北側の斜面で発掘が行われた。ここではかって自然の沢だったとみられる溝が発見され、中から弥生土器、須恵器、土師器、白磁等の破片が出土した。人工の遺構は見出されていない。これとあわせ、志賀島の考古学的な一般調査も行われた。

〈文献〉金印遺跡調査団「志賀島―漢委奴国王金印と志賀島の考古学的研究―」1975

# 緊急調査遺跡一覧

1963（昭和38）年度から1976（昭和51）年度までに緊急調査された遺跡を年度ごとにまとめたものです。2年度以上にわたり調査された場合は、各年度ごとに遺跡名をあげます。

調査原因らんのうち、原因者名は自治体、公社等、公的なもののみを記します。調査者らんの県教委、市教委は、それぞれ福岡県教育委員会文化課、福岡市教育委員会文化課の略です。

調査後の処置らんでは、保存整備のための調査の場合と、2年度以上にわたり調査された遺跡で最終年度でない場合には――を付します。

報告書らんの◎印は調査報告書が、○印は調査概報が刊行されていることを、未は報告書や概報が未刊行を示します（報告書名は遺跡概要の各遺跡の項の末尾に記す）。

| 調査年度 | No. | 遺跡 | 調査原因（原因者） | 調査者 | 調査後の処置 | 報告書の有無 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 昭和38 1963 | 58 | 福岡城跡 | 高等裁判所庁舎改築 | 県教委 文化財保護委員会 | ―― | ○ | 1957（昭和32）年8月29日 国史跡指定 |
| 昭和39 1964 | 56 | 弥永原遺跡 | 保存対策 | 県教委 九大考古学研究室 | ―― | ○ | 第1次調査 |
| 昭和40 1965 | 55 | 老司古墳 | 整地工事（福岡少年院） | 県教委 九大考古学研究室 | ―― | ― | 予備調査 |
| 昭和41 1966 | 34 | 有田遺跡 | 土地区画整理 | 市教委，九大考古学研究室 | ―― | ○ | 第1次調査 |
| | 55 | 老司古墳 | 保存整備 | 県教委，九大考古学研究室 | ―― | ― | 第1次調査 |
| | 56 | 弥永原遺跡 | 宅地造成（福岡市住宅供給公社） | 三野章、添田正治 | 壊滅 | ○ | 第2次調査 |
| 昭和42 1967 | 2 | 元寇防塁 | 保存整備 | 市教委 | ―― | ○ | 1931（昭和6）年3月30日 国史跡指定 生の松原地区 |
| | 12 | 今宿古墳群 | 宅地造成 | 県教委 | 壊滅 | ◎ | |
| | 34 | 有田遺跡 | 土地区画整理 | 市教委，九大考古学研究室 | 壊滅 | ◎ | 第2次調査 |
| | 55 | 老司古墳 | 保存整備 | 県教委，九大考古学研究室 | ―― | ― | 第2次調査 |
| 昭和43 1968 | | 遺跡分布調査（西部地域） | | 市教委 | 福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第1集<br>福岡市埋蔵文化財調査報告書第6集 1969 | | |
| | 2 | 元寇防塁 | 保存整備 | 市教委 | ―― | ○ | 1931（昭和6）年3月30日 国史跡指定 今津地区 |
| | 3 | 今山遺跡 | 保存整備 | 市教委 | 保存 | ◎ | 第4遺跡 |
| | 8 | 丸隈山古墳 | 保存整備 | 市教委 | ―― | ◎ | 1928（昭和3）年2月7日 国史跡指定 |
| | 55 | 老司古墳 | 保存整備 | 市教委，九大考古学研究室 | 保存 | ○ | 第3次調査 |
| | 63 | 金隈遺跡 | 宅地進入道路建設 | 市教委 | ―― | ― | 予備調査 |
| 昭和44 1969 | | 遺跡分布調査（中部地域） | | 市教委 | 福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第2集<br>福岡市埋蔵文化財調査報告書第9集 1970 | | |
| | 2 | 元寇防塁 | 保存整備 | 市教委 | ―― | ○ | 1931（昭和6）年3月30日 国史跡指定 西新地区 |

| 調査年度 | No. | 遺　　跡 | 調査原因（原因者） | 調査者 | 調査後の処置 | 報告書の有無 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 昭和44<br>1969 | 5 | 今宿松原遺跡 | 水道管埋設 | 市教委 | 壊　滅 | 未 | 立会遺物採集 |
| | 17 | 大又遺跡 | 今宿バイパス建設（日本道路公団） | 県教委 | 壊　滅 | ◎ | 1次調査 |
| | 18 | 高崎古墳群 | 今宿バイパス建設（日本道路公団） | 県教委 | 壊　滅 | ◎ | 1次・2次調査 |
| | 19 | 宮の前遺跡 | 今宿バイパス建設（日本道路公団） | 県教委 | 壊　滅 | ◎ | E地点 |
| | | | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | A～D地点 |
| | 20 | 湯納遺跡 | 今宿バイパス建設（日本道路公団） | 県教委 | ――― | ― | 予備調査 |
| | 41 | 七隈古墳群 | グラウンド造成 | 市教委 | 壊　滅 | 未 | 1次調査 |
| | 50 | 宝台遺跡 | 団地造成（宝台団地）（日本住宅公団） | 市教委<br>調査団 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 52 | 笹栗遺跡 | 堤小学校用地造成（福岡市土地開発公社） | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 54 | 大牟田古墳群 | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | 未 | |
| | 60 | 板付遺跡 | 墓地移転 | 市教委 | 保　存 | ◎ | |
| | 63 | 金隈遺跡 | 宅地進入道路建設 | 市教委 | ――― | ○ | 第1次調査 |
| 昭和45<br>1970 | | 遺跡分布調査（東部地域） | | 市教委 | 福岡市埋蔵文化財遺跡地名表　総集編<br>福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集　1971 | | |
| | 6 | 飯氏鏡原遺跡 | 今宿バイパス建設（日本道路公団） | 県教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 7 | 飯氏馬場遺跡 | 今宿バイパス建設（日本道路公団 | 県教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 9 | 若八幡宮古墳 | 今宿バイパス建設（日本道路公団） | 県教委 | 保　存 | ◎ | |
| | 19 | 宮の前遺跡 | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | F地点 |
| | 28 | 小松ヶ丘古墳群 | 宅地造成 | 鈴木重治他 | 壊　滅 | 未 | |
| | 32 | 金武古墳群 | 宅地造成 | 九大考古学研究室 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 40 | 大谷古墳群 | 宅地造成 | 市教委 | 破壊予定 | ◎ | 1次 |
| | 41 | 七隈古墳群 | グランド造成 | 市教委 | 壊　滅 | 未 | |
| | 54 | 大牟田古墳群 | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | 15・43号墳 |
| | 60 | 板付遺跡 | 県道拡幅のための範囲確認 | 県教委 | ――― | 未 | 505号線 |
| | 62 | 持田ヶ浦古墳群 | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 63 | 金隈遺跡 | 保存のための確認調査 | 市教委 | 保　存 | ○ | 第2次調査<br>1972（昭和47）年5月17日国史跡指定 |
| | 70 | 名子道遺跡 | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 73 | 和白遺跡 | 宅地造成（福岡市住宅供給公社） | 市教委 | 一部保存（古墳3基）他は破壊 | ◎ | |

| 調査年度 | No. | 遺　　跡 | 調査原因（原因者） | 調査者 | 調査後の処置 | 報告書の有無 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 昭和46 1971 | 17 | 大又遺跡 | 今宿バイパス建設（日本道路公団） | 県教委 | 壊　滅 | ◎ | 第２次調査 |
| | 18 | 高崎古墳群 | 今宿バイパス建設（日本道路公団） | 県教委 | 壊　滅 | ◎ | 第３次調査 |
| | 20 | 湯納遺跡 | 今宿バイパス建設（日本道路公団） | 県教委 | ―― | ― | 1973年６月まで継　続 |
| | 23 | 下山門遺跡 | 市営住宅建設（下山門団地）（福岡市建築局） | 市教委 | ―― | ― | 1972年６月まで継　続 |
| | 33 | 姪浜新町遺跡 | 店舗建設基礎工事 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | 工事立会い遺物採集 |
| | 39 | 影塚第１号墳 | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 40 | 大谷古墳群 | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | 未 | 第２次調査 |
| | 42 | 倉瀬戸古墳群 | 宅地造成 | 倉瀬戸遺跡調査団 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 57 | 山陽新幹線路線内遺跡 | 山陽新幹線建設（日本国有鉄道） | 市教委 | 壊　滅 | ― | 1973年度まで継続 五十川高木，弥永遺跡 |
| | 60 | 板付遺跡 | 市営住宅建設（板付団地）（福岡市住宅供給公社） | 市教委 | ―― | ― | 1974年３月まで継　続 |
| | 66 | 多々良遺跡 | 流通センター建設（福岡市都市開発局） | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| 昭和47 1972 | 16 | 斜ヶ浦瓦窯址 | 宅地造成 | 市教委 | 煙出部を破壊 | ○ | 大部分は現状保存 |
| | 20 | 湯納遺跡 | 今宿バイパス建設（日本道路公団） | 県教委 | 壊　滅 | ― | 前年度より継続 1973年6月まで継続 |
| | 23 | 下山門遺跡 | 市営住宅建設（下山門団地）（福岡市建築局） | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 43 | 片江古墳群 | 土地区画整理 | 市教委 | 6～8号墳は保存、他は壊滅 | ◎ | |
| | 49 | 小笹遺跡 | 団地建設（小笹団地）（日本住宅公団） | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | 第１次 |
| | 57 | 山陽新幹線路線内遺跡 | 山陽新幹線建設（日本国有鉄道） | 市教委 | 壊　滅 | ― | 前年度より継続 1973年度まで 弥永遺跡 津屋、多々良地区 |
| | 60 | 板付遺跡 | 市営住宅建設（板付団地）（福岡市住宅供給公社） | 市教委 | ―― | ― | 前年度より継続 1974年3月まで継続 |
| | 61 | 諸岡遺跡 | ドライブイン建設 | 市教委 | 壊　滅 | 未 | １次調査 |
| | 64 | 宝満尾遺跡 | 席田中学校建設（福岡市教育委員会） | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 67 | 蒲田遺跡 | 九州縦貫道インターチェンジ建設（日本道路公団） | 市教委 | 壊　滅 | ― | 1973年まで継続 |
| 昭和48 1973 | 3 | 今山遺跡 | 保存整備基礎資料収集 | 市教委 | 保存予定 | 未 | 第４遺跡 |
| | 13 | 相原古墳群 | 林道建設（福岡市農林水産局） | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 14 | 今宿小塚・大塚南・高田遺跡 | 今宿バイパス建設（日本道路公団） | 県教委 | 継続調査 | ○ | |

| 調査年度 | No. | 遺　　跡 | 調査原因（原因者） | 調査者 | 調査後の処置 | 報告書の有無 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 昭和48 1973 | 15 | 草場古墳群 | 宅地造成 | 市教委 | 保　存 | 未 | |
| | 20 | 湯納遺跡 | 今宿バイパス建設（日本道路公団） | 県教委 | 壊　滅 | ◎ | 前年度より継続 |
| | 22 | コノリ古墳群 | 宅地造成 | 日大、竹石健二 | 壊　滅 | 未 | |
| | 26 | 牟多田遺跡 | 壱岐中学校建設（福岡市教育委員会） | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 27 | 野方中原遺跡 | 宅地造成 | 市教委 | 保　存 | ○ | 1975（昭和50）年6月27日 国史跡指定 |
| | 28 | 小松ヶ丘古墳群 | 宅地造成 | 鈴木重治 | 壊　滅 | 未 | |
| | 36 | 鶴町遺跡 | 賀茂小学校建設（福岡市教育委員会） | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 46 | 浄泉寺遺跡 | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 47 | カルメル修道院内遺跡 | ミカン畑開墾 | 市教委 | 保　存 | ◎ | |
| | 49 | 小笹遺跡 | 団地造成（小笹団地）（日本住宅公団） | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | 第2次調査 |
| | 57 | 山陽新幹線路線内遺跡 | 山陽新幹線建設（日本国有鉄道） | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | 前年度より継続 津屋、多々良地区 |
| | 60 | 板付遺跡 | 市営住宅（福岡市住宅供給公社）板付北小学校建設（福岡市教育委員会） | 市教委 | 第2区保存他は壊滅 | ◎ | 1976（昭和51）年6月21日 国史跡指定 |
| | 60 | 板付周辺調査 | 市営住宅建設（福岡市住宅供給公社） | 市教委 | 遺跡なし | ◎ | 板付第2市営住宅建設地 |
| | | | 宅地等造成 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | H-8、D-6・7、D-9・10 A・B-13 地点 |
| | 61 | 諸岡遺跡 | 店舗建設 | 市教委 | 壊滅の予定（放置） | ◎ | A区 |
| | 67 | 蒲田遺跡 | 九州縦貫道インターチェンジ（日本道路公団） | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | 前年度より継続 |
| | 74 | 金印公園 | 金印公園造成（福岡市経済局観光課） | 九大考古学研究室 | 公　園 | ◎ | |
| 昭和49 1974 | 29 | 野方塚原遺跡 | 宅地造成 | 野方塚原遺跡調査団 | 壊　滅 | 未 | |
| | 30 | 戸切中原遺跡 | 宅地造成 | 日大、竹石健二 | 壊　滅 | 未 | |
| | 31 | 戸切遺跡 | 壱岐南小学校建設（福岡市教育委員会） | 市教委 | 壊　滅 | 未 | |
| | 34 | 有田遺跡 | アパート建設 | 市教委 | ―― | ― | 第3次調査 1975年度まで継続 |
| | 37 | 四箇遺跡 | 団地建設（四箇団地）（日本住宅公団） | 市教委 | ―― | ― | A～E区 1977年度まで継続 |
| | 38 | 山崎古墳群 | 宅地造成 | 大川清 | 壊　滅 | 未 | |
| | 44 | 瀬戸口古墳群 | レストラン建設 | 田坂美代子ら | 壊　滅 | ◎ | |
| | 45 | 京ノ隈遺跡 | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |

| 調査年度 | No. | 遺　　跡 | 調査原因（原因者） | 調査者 | 調査後の処置 | 報告書の有無 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 59 | 菰牟田遺跡 | 倉庫建設 | 別府大学 | 壊　滅 | 未 | |
| | 60 | 板付周辺調査 | 宅地等造成 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | F-9a、D・E-9地点 |
| | 61 | 諸岡遺跡 | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | B・C・D区 |
| | 69 | 和田部木原遺跡 | 工場団地建設（福岡市土地開発公社） | 市教委 | 一部保存 | 未 | |
| | 72 | 湯ヶ浦古墳群 | 宅地造成 | 日大、竹石建二 | 壊　滅 | 未 | |
| 昭和50 1975 | 11 | 徳永古墳群 | 宅地造成 | 九大考古学研究室 | 壊　滅 | 未 | |
| | 21 | 広石古墳群 | 西陵高校建設（福岡市教育委員会） | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 24 | 下山門敷町遺跡 | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | 未 | |
| | 25 | 下山門南・石丸古川遺跡 | 団地建設（日本住宅公団） | 市教委 | 協議中 | — | 試掘 |
| | 34 | 有田遺跡 | アパート建設 | 市教委 | 壊　滅 | ○ | 第３次調査 前年度より継続 |
| | 35 | 原談儀遺跡 | 店舗建設 | 市教委 | 壊　滅 | 未 | |
| | 37 | 四箇遺跡 | 団地建設（日本住宅公団）<br>児童公園（福岡市都市計画局） | 市教委 | ———<br>壊　滅 | 未 | A～E区 前年度より継続，1977年6月まで継続<br>四箇東 |
| | 48 | 片江辻遺跡 | 土地区画整理 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | |
| | 60 | 板付遺跡 | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | G-5 a、F-8 a、B-12地点 |
| | 61 | 諸岡遺跡 | 宅地造成 | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | E区、F区 |
| | 65 | 席田遺跡群 | 運動公園建設（福岡市都市計画局） | 市教委 | ——— | ○ | 現在継続中 |
| | 68 | 蒲田水ヶ元遺跡 | 工場建設 | 市教委 | ——— | — | 予備調査 |
| 昭和51 1976 | 1 | 小葎遺跡 | 病院建設 | 市教委 | 壊　滅 | 未 | |
| | 4 | 今宿横浜遺跡 | サイクリング道路建設（福岡市都市計画局） | 市教委 | ——— | 未 | |
| | 10 | 今宿大塚古墳 | 保存整備 | 市教委 | ——— | 未 | 1967（昭和42）年12月15日 国史跡指定 |
| | 37 | 四箇遺跡 | 団地建設（日本住宅公団）<br>集会場（福岡市民政局） | 市教委 | 一部保存<br>壊　滅 | 未<br>◎ | A～E区<br>J-10区 |
| | 47 | カルメル修道院内遺跡 | 建物移転 | 市教委 | 保　存 | 未 | 第２次調査 |
| | 53 | 地下鉄路線内遺跡 | 地下鉄建設（福岡市高速鉄道建設局） | 市教委 | ——— | — | 現在継続中 |
| | 60 | 板付遺跡 | 宅地造成等<br>県道移転（福岡市土木局） | 市教委 | 壊　滅 | ◎ | G-6a、G・H-5、H-5地点 |
| | 65 | 席田遺跡群 | 運動公園建設（福岡市都市計画局） | 市教委 | ——— | — | 現在継続中 |
| | 68 | 蒲田水ヶ元遺跡 | 工場建設 | 市教委 | 壊　滅 | 未 | |

# 展示品目録

展示品を遺跡ごとにあげます。①展示品番号　②品名　③数量　④時代　⑤出土位置　⑥所蔵もしくは保管者名の順とします。古墳および古墳出土品は④を省略します。また、⑤を略したものもあります。⑥については、所属もしくは保管者名のないものは福岡市教育委員会文化課あるいは福岡市立歴史資料館の保管・所蔵品です。

展示品番号は写真図録の番号と同じです。図録に掲載していない展示品もあります。

**1 小葎遺跡**

1－1　線刻画のある弥生土器　1　弥生時代後期

1－2　石　錘　20　弥生時代後期

**3 今山遺跡**

3－1　太形蛤刃石斧未成品　4　弥生時代前期末～中期

**4 今宿横浜遺跡**

4－1　細形銅剣　1　弥生時代前期末　土壙墓

4－2　ヒスイ製勾玉　1　弥生時代前期末　土壙墓

**5 今宿松原遺跡**

5－1　甕　棺　1組　弥生時代前期（伯玄式）

**7 飯氏馬場遺跡**

7－1　内行花文仿製鏡　1　弥生時代後期　第3号石棺墓　福岡県教育委員会

**8 丸隈山古墳**

8－1　石室模型　1

8－2　仿製六獣鏡（模造品）　1

8－3　仿製二神二獣鏡（模造品）　1

**9 若八幡宮古墳**

9－1　三角縁二神二獣鏡　1

9－2　環頭大刀　2

9－3　鉄　剣　1

9－4　鉄刀子　1

9－5　鉄　鏃　11

9－6　鉄　斧　1

9－7　鉈　1

9－8　管　玉　10

9-1～8は福岡県教育委員会

**10 今宿大塚古墳**

10-1　円筒埴輪　1

10-2　形象埴輪（武人）　1

10-3　形象埴輪（馬）　1

**13 相原古墳群**

13-1　装身具　13（耳環1　管玉1　丸玉9　ガラス玉2）　3号墳

13-2　鉄刀子　1　4号墳

13-3　須恵器　3（高坏1　甕1　長頸壺1）　3号墳

13-4　須恵器　4（坏蓋3　有蓋高坏1）　6号墳

13-5　土師器（高坏）　1　6号墳

13-6　須恵器（器台）　1　6号墳

**17 大又遺跡**

17-1　土製模造鏡　5　古墳時代　九州歴史資料館

**18 高崎古墳群**

18-1　有蓋脚付埦（須恵器）　1

18-2　有蓋足付壺（須恵器）　1

18-3　有蓋脚付坩（須恵器）　1

18-4　有蓋脚付壺（須恵器）　1

18-5　長頸台付壺（須恵器）　1

18-6　須恵器　16（坏・坏蓋4　高坏3　甕2　壺1

堤瓶2　平瓶2　瑞2）

18-7 馬　具　12（杏葉4　辻金具6　轡2）

18-8 鉄　矛　1

18-9 金銅張環頭　1

18-10 耳　環　4

18-1～10は2号墳

九州歴史資料館

**19 宮の前遺跡**

19-1 鉄製鉈　1　弥生時代終末　C地点3号石棺

19-2 鉄　鎌　1　弥生時代終末　D地点

19-3 鉄製鍬先1　弥生時代終末　C地点墳丘

19-4 石　錘　3　弥生時代後期～古墳時代

B地点，D地点

19-5 高　杯　1　弥生時代終末　C地点高杯群A

19-6 異形土製品　3　B地点1号竪穴

19-7 土師器　4（甕3　鉢1）

古墳時代初頭(宮の前Ⅲ式)　D地点4号竪穴

19-8 管　玉　2　弥生時代終末　C地点2号石棺

19-9 玉　3連（管玉1　ガラス小玉2）

弥生時代終末　C地点1号石棺

**20 湯納遺跡**

20-1 青銅鋤先　3　弥生時代後期

20-2 木製臼　1　古墳時代

福岡県教育委員会

**21 広石古墳群**

21-1 耳　環　4　I-1号墳

21-2 玉　12（勾玉1　切子玉2　管玉1　メノウ丸玉2　ガラス丸玉4　土製練玉1　臼玉1）I-1号墳

21-3 鉄　鏃　6　I-1号墳

21-4 須恵器　11（杯2　杯蓋2　壺2　台付壺2　壺1　平瓶1　堤瓶1）I-1号墳

21-5 陶質土器（壺）2　I-1号墳

21-6 須恵器4（杯1　杯蓋1　長頸壺1　平瓶1）

II-1号墳

21-7 鉄製釧　1　II-2号墳

21-8 耳　環　1　II-2号墳

21-9 玉　3（ガラス丸玉　ガラス小玉　管玉）

II-2号墳

21-10 鉄　鏃　4　II-2号墳

21-11 鉄鋤先　1　II-2号墳

21-12 須恵器　4（坏1　坏蓋1　高坏1　堤瓶1）

II-2号墳

21-13 土師器　2（坩1　高杯1）　II-2号墳

21-14 須恵器（小形甕）1　III-3号墳

21-15 耳　環　5　IV-2号墳

21-16 玉　1　IV-2号墳

21-17 鉄　鏃　1　IV-2号墳

21-18 鐔　1　IV-2号墳

21-19 轡　1　IV-2号墳

21-20 須恵器　7（台付長頸壺2　無蓋高杯2　有蓋高杯1　堤瓶1　瑞1）IV-2号墳

**23 下山門遺跡**

23-1 台座状磁器　1　平安時代

23-2 青磁・白磁（破片）10　平安時代

23-3 ミニチュア土器　5　古墳時代

23-4 土製模造鏡　2　古墳時代

23-5 紡錘車　8　古墳時代

23-6 滑石製模造品　15　古墳時代

23-7 滑石製玉　2　古墳時代

23-8 木製容器　1　古墳時代

23-9 木製刀子柄（模造品）1　古墳時代

23-10 木製蓆編具　2　古墳時代

23-11 ふいご（破片）3　平安時代

**24 下山門敷町遺跡**

24-1 銅　戈　3　弥生時代

24-2 緑釉陶器（破片）3　奈良時代

24-3 墨書のある須恵器（破片）4　奈良時代

**27 野方中原遺跡**

27-1 弥生土器　14（甕3　壺2　無頸壺2　鉢1　有孔鉢2　注口鉢1　高杯2　器台1）

27-2 青銅鋤先　1　弥生時代後期　A溝

27-3 鉄製鋤先　2　弥生時代後期　B溝

27-4 鉄　斧　2　弥生時代後期　E-4区

27-5 鉄　鎌　1　弥生時代後期　1001号住居址
27-6 獣帯鏡(破片) 1　古墳時代初頭　1号石棺墓
27-7 内行花文鏡　1　古墳時代初頭　3号石棺墓
27-8 玉　8（勾玉1　管玉7）
古墳時代初頭　1号石棺墓
27-9 玉　4（勾玉1 管玉1 ガラス小玉2）
古墳時代初頭　3号石棺墓
27-10 玉　11（ガラス小玉）
古墳時代初頭　5号石棺墓
27-11 土師器　（壺2　甕2　鉢2　高坏1　椀2
鼓形器台1　器台1）　古墳時代初頭
27-12 須恵器（坏蓋）　2
古墳時代（5世紀）　1002号住居址

**29 野方塚原遺跡**

29-1 舶載鏡　1　弥生時代後期末
29-2 弥生土器（高杯）　1　弥生時代後期末

**32 金武古墳群**

32-1 青磁碗（珠光青磁）1
平安時代　1号墳　墓道上表土

**33 姪浜新町遺跡**

33-1 磨製石剣　1　弥生時代中期後半～後期前半

**34 有田遺跡**

34-1 夜臼式土器（深鉢）1　弥生時代前期はじめ
29街区V字状溝　九州大学考古学研究室
34-2 打製石鏃　1　弥生時代前期
34-3 磨製石鏃　2　弥生時代前期　29街区V字溝
弥生時代　Y6住居址
34-4 磨製石剣　1　弥生時代
34-5 柱状片刃石斧　1　弥生時代　10号土壙
34-6 抉入片刃石斧未成品　3　弥生時代
34-7 扁平石斧　2　弥生時代　溝
34-8 石庖丁　1　弥生時代
34-9 石　鎌　1　弥生時代　溝
34-10 石　錘　1　弥生時代
34-11 青銅器鋳型1　弥生時代　井戸
34-12 弥生土器（有孔土器）3　弥生時代　井戸
34-13 弥生土器（丹塗磨研壺）2　弥生時代　井戸
34-14 線刻礫　2　弥生時代　井戸
34-15 石　錘　1　古墳時代　2号住居址
34-16 土師器(壺) 1（瀬戸内系）　古墳時代
34-17 白磁碗　1　平安時代　土壙墓
34-18 刀　子　1　平安時代　土壙墓
34-19 貨　幣　1　平安時代
34-4 ～19は第3次調査出土品

**35 原談儀遺跡**

35-1 木製三又鍬　1　弥生時代　中期はじめ
35-2 木製ひしゃく　1　弥生時代　中期はじめ

**36 鶴町遺跡**

36-1 木製狭鍬　1　弥生時代
36-2 木製二又鍬　1　弥生時代
36-3 木製容器（模造品）1　弥生時代
36-4 木製斧柄（模造品）1　弥生時代

**37 四箇遺跡**

37-1 漆　器　1　縄文時代　A地点泥炭層
37-2 木製斧柄　1　弥生時代　C地点
37-3 木製弓　1　弥生時代　C地点
37-4 槍状木製品　1　弥生時代　C地点
37-5 木製杵　1　弥生時代　C地点
37-6 木製三又鍬　1　古墳時代　C地点
37-7 木製三又鍬　1　古墳時代　C地点
37-8 木製鍬　1　古墳時代　C地点
37-9 縄文土器　1　縄文時代後期　A地点泥炭層
37-10 縄文土器　1　縄文時代後期　A地点泥炭層
37-11 縄文土器　1　縄文時代後期　A地点
37-12 縄文土器　1　縄文時代後期　A地点
37-13 縄文土器　1　縄文時代後期　A地点
37-14 縄文土器　1　縄文時代後期　A地点
37-15 縄文土器　1　縄文時代後期　A地点
37-16 縄文土器　1　縄文時代後期　A地点
37-17 縄文土器　1　縄文時代後期　四箇東
37-18 縄文土器　1　縄文時代後期　四箇東
37-19 縄文土器　1　縄文時代後期　四箇東
37-20 縄文土器　1　縄文時代後期　四箇東

37-21 縄文土器　1　四箇東
37-22 縄文土器　1　四箇東
37-23 すり石　1　縄文時代
37-24 石　皿　1　縄文時代　A地点
37-25 凹　石　1　縄文時代　四箇東
37-26 打製石鏃　9　縄文時代　A地点
37-27 つまみ形石器 6　縄文時代　A地点，四箇東
37-28 彫　器　3　縄文時代　四箇東
37-29 削　器　4　縄文時代　四箇東
37-30 尖頭状石器　4　縄文時代　A地点
37-31 石　錐　1　縄文時代　四箇東
37-32 剝　片　12　縄文時代　A地点
37-33 石　錘　5　縄文時代　A地点　四箇東
37-34 土　錘　1　縄文時代　四箇東
37-35 十字形石器　3　縄文時代　A地点
37-36 磨製石器（用途不明）2　縄文時代
A地点，四箇東
37-37 磨製石斧　7　縄文時代　A地点，四箇東
37-38 打製石斧　4　縄文時代　四箇東
37-39 有孔円盤　7　縄文時代　四箇東
37-40　玉　3　縄文時代　四箇東
37-41 土偶（破片）2　縄文時代　四箇東

**43 片江古墳群**

43-1　6 ～ 8号墳模型　1
43-2 鉄　鏃　6　3号墳
43-3 刀　子　1　3号墳
43-4 耳　環　4　6号墳
43-5　玉　8（切子玉1　管玉2　平玉1
丸玉3　なつめ玉1）　6号墳
43-6 刀　子　1　6号墳
43-7 鉄　鏃　1　6号墳
43-8 耳　環　2　7号墳
43-9 土　玉　1　7号墳
43-10 馬　具　2（尾錠1　鐙金具1）　8号墳
43-11 鉄　鏃　3　8号墳
43-12 鉄製鋤先　1　8号墳

**44 瀬戸口古墳群**

44-1 玉　4（勾玉1　ガラス玉2　ヒスイ玉1）
44-2 飾り鋲金具　1
44-3　鍔　1
44-4 刀　子　1　すべて2号墳

**45 京ノ隈遺跡**

45-1 直　刀　古墳時代　古墳粘土槨
45-2 鉄製鉈　古墳時代　古墳粘土槨
45-3 鉄製鋤先　古墳時代　古墳粘土槨
45-4 経塚1号主体部模型　1
45-5 青銅製経筒　1
45-6 平形合子　1
45-7 坩形合子　3
45-8 刀　子　1
45-9 鉄　鏃　2
45-10 毛抜き　1
45-11 不明鉄製品　1
45-12 貨　幣　1
45-5 ～12は平安時代(12世紀)　経塚1号主体部
45-13 平形合子　1
45-14 坩形合子　3
45-15 鉄小刀　3
45-16 数珠玉　2
45-17 水晶玉　1
45-18 滑石製品　1
45-13 ～18は平安時代(12世紀)　経塚2号主体部
45-19 湖州六稜鏡(？)　1　表採

**46 浄泉寺遺跡**

46-1 石庖丁　1　弥生時代　5号住居址
46-2 石庖丁未製品　1　弥生時代　30号竪穴
46-3 抉入片刃石斧　1　弥生時代
46-4 抉入片刃石斧未成品1　弥生時代　52号竪穴
46-5 扁平片刃石斧　2　弥生時代　16号竪穴
46-6 蛤刃石斧（破片）1　弥生時代
46-7 紡錘車　1　弥生時代　9号竪穴
46-8 磨製石剣　1　弥生時代　X2号竪穴
46-9 磨製石剣未成品　2　弥生時代　40号竪穴

**47 カルメル修道院内遺跡**

47-1 銅　釧　3　弥生時代前期

**49 小笹遺跡**

49-1 鉄　鏃　2　弥生時代後期
包含層と第4号石蓋土壙墓

**50 宝台遺跡**

50-1 遺跡模型　1
50-2 C区5号竪穴住居址復元模型　1
50-3 弥生土器　4（ブランデーグラス形1　甕1　高杯2）
弥生時代中期（宝台Ⅰ式）　B地点祭祀遺構

**51 丸尾台遺跡**

51-1 日光鏡　1　弥生時代中期後半～後期　甕棺墓
51-2 鉄小刀　1　弥生時代中期後半～後期　甕棺墓
51-3 素環頭大刀　1　弥生時代後期　甕棺墓

**53 地下鉄路線内遺跡**

53-1 貝　輪　3　弥生時代中期
西新町遺跡C地区10号甕棺墓
53-2 玉　1　弥生時代中期
西新町遺跡C地区1号甕棺墓
53-3 弥生土器（丹塗磨研）1　弥生時代中期
藤崎遺跡　13号甕棺
53-4 タコ壺　4　古墳時代　西新町遺跡
53-5 瓦　5　江戸時代　福岡城内濠外側石垣

**55 老司古墳**

55-1 方格規矩鏡　1　古墳時代　1号石棺
55-2 「君宜高官」内行花文鏡1　古墳時代　3号石棺
55-3 内行花文鏡　1　古墳時代　3号石棺
55-4 玉（勾玉・管玉）4連　古墳時代
1号石棺　3号石棺
九州大学考古学研究室

**56 弥永原遺跡**

56-1 仿製内行花文鏡　1　弥生時代後期
2号竪穴住居址
56-2 太形蛤刃石斧　1　弥生時代　A地区
56-3 石庖丁　1　弥生時代　B地区
56-4 ガラス勾玉鋳型2（模造品）　弥生時代

**57 山陽新幹線路線内遺跡**

〈弥永遺跡〉
57-1 弥生土器（高坏）1　弥生時代前期
57-2 石庖丁　1　弥生時代前～中期
57-3 石　鎌　1　弥生時代前～中期
57-4 蛤刃石斧　2　弥生時代前～中期
57-5 柱状片刃石斧　2　弥生時代前期
57-6 紡錘車　6　弥生時代
57-7 磨製石剣　5　弥生時代
〈五十川高木遺跡〉
57-8 柱状片刃石斧　1　弥生時代　B地点
57-9 土師器　3（高台付坏1　坏2）　1号住居址
57-10 土師器　5（皿2　坏3）　3号住居址
57-11 土師器（皿）　2　包含層，ピット6
57-12 陶質土器（鉢）1　包含層
57-13 黒色土器　1　1号住居址
57-14 石　鍋　1　井戸
57-15 青磁碗　1　4号ピット
57-16 白磁碗　2　包含層
57-17 貨　幣　8
元豊通宝（北宋1078－1085年）3，景徳元宝（北宋1004－1007年）1，咸平元宝（北宋998－1003年）1，紹聖通宝(？)・淳熙通宝(？)・不明各1枚　3号住居址床面
57-9～57-17は12世紀～13世紀
〈津屋井田遺跡〉
57-18 木製平鍬　1　弥生時代終末
〈多々良込田遺跡〉
57-19 土師器　1　古墳時代前期　6号住居址
57-20 土師器(盤)1　奈良時代末～平安時代　4号溝
57-21 須恵器　6（盤1　蓋1　坏4）
奈良時代末～平安時代　4号溝
57-22 瓦　6（軒丸瓦3　軒平瓦3）
鴻臚館式　長者原式　4号溝
57-23 塼　1　奈良時代末～平安時代　4号溝
57-24 緑釉陶器（破片）　奈良時代　4号溝
〈多々良蔵ノ元遺跡〉
57-25 土師器（盌）1　古墳時代初頭
57-26 タコ壺　1　古墳時代初頭

**60 板付遺跡**

60-1 縄文土器 1 縄文時代早期 第3区
60-2 夜臼式土器（小形壺）1 弥生時代初頭 環溝内東北部攪乱層
60-3 弥生土器 6（甕2 壺3 鉢1）弥生時代前期（板付Ⅰ式・Ⅱ式）第1区，県道，G-6 a地点，F-5地点
60-4 弥生土器 6（甕1 壺2 小形壺1 無頸壺1 蓋1） 弥生時代中期（宝台Ⅱ式相当）第2区旧河川岸辺砂層
60-5 籾圧痕土器 5 弥生時代前期
60-6 石庖丁 6
60-7 石庖丁未成品 4
60-8 石 鎌 5
60-9 太形蛤刃石斧 4
60-10 石 斧 2
60-11 扁平片刃石斧 2
60-12 抉入片刃石斧 3
60-13 柱状片刃石斧 2 60-6～13は弥生時代前～中期
60-14 環状石斧 1 弥生時代後期？ 第2区
60-15 穿孔用石器 2 弥生時代前期～中期 第1区
60-16 磨製石剣 3 弥生時代前期
60-17 磨製石鏃 8 弥生時代前～中期
60-18 打製石鏃 5 弥生時代前期
60-19 石槍状打製石器 1 弥生時代前期
60-20 石 錘 2 弥生時代前期 第1区
60-21 土 錘 3 弥生時代 G・H-5，H-5地点
60-22 投 弾 8 弥生時代前期
60-23 紡錘車 6 弥生時代
60-23' 土製さじ 2 弥生時代前期
60-24 砥 石 1 弥生時代 環溝内北東部
60-25 青銅器鋳型 2 弥生時代後期 第2区
60-26 鉄 斧 1 弥生時代中期後半～後期 第2区
60-27 玉 3 弥生時代
60-28 銅 鏃 1 弥生時代後期
60-29 弥生土器（桃実形）1 弥生時代中期後半～後期初頭 第2区
60-30 炭化米 弥生時代中期初頭 県道11号竪穴
60-31 木製鋤 1 弥生時代中期 H-5地点1号溝
60-32 木製三又鋤（模造品）1 弥生時代中期 第2区
60-33 木製二又鍬（模造品）1 弥生時代後期 第2区
60-34 木製容器 1 弥生時代中期 H-5地点
60-35 木製網枠（模造品）1 弥生時代中期 第2区
60-36 槌状木製品 1 弥生時代中期 H-5地点
60-37 木製斧柄（模造品）1 弥生時代中期 第2区
60-38 鹿角製刀子柄 1 古墳時代 第1区
60-39 櫛 1 江戸時代 G-5a地点
60-40 寛永通宝 10 江戸時代 G-5a地点
60-41 灯明皿 4 江戸時代 G-5a地点

**61 諸岡遺跡**

61-1 先土器時代石器 10（ナイフ形石器4 台形石器2 剥片2 石核2）
61-2 夜臼式土器（深鉢）1 F区
61-3 朝鮮系無文土器（甕）4 弥生時代前期後半 3号・17号・7a号・40号竪穴
61-4 玉 1 弥生時代前期後半 6号竪穴
61-5 扁平片刃石斧 弥生時代 攪乱層
61-6 貝輪 9 弥生時代中期 A区43号甕棺墓，B区2号甕棺墓
61-7 鉄斧 1 古墳時代 38号竪穴
61-8 滑石製模造鏡 1 古墳時代 大形竪穴状遺構
61-9 青磁碗 2 平安時代 A区小竪穴

**63 金隈遺跡**

63-1 遺跡模型 1
63-2 弥生土器（壺）3 弥生時代中期 27号甕棺墓副葬
63-3 石 剣 6 弥生時代前期末～中期 55，97,103号甕棺墓，石蓋土壙墓，表採
63-4 貝 輪 2 弥生時代前期末 103号甕棺墓
63-5 玉 1 弥生時代中期 30号甕棺墓

**64 宝満尾遺跡**

64-1 B区遺跡模型 1
64-2 抉入石斧 2 弥生時代 B区
64-3 内行花文明光鏡 1 弥生時代後期 4号土壙墓

64-4 ガラス小玉 540 弥生時代後期 B区15号土壙墓
64-5 素環頭刀子 1 弥生時代後期 B区13号石蓋土壙墓
64-6 鉄斧 1 弥生時代後期 B区6号土壙墓付近
64-7 玉（勾玉2 管玉19） 古墳時代 A区石蓋土壙墓
64-8 鉄製鋤先 1 古墳時代 古墳石室
64-9 玉（勾玉1 小玉43） 古墳時代 古墳石室

**65 席田遺跡群**

65-1 須恵器壺 1
65-2 土師器壺 1
65-3 直 刀 1
65-4 鉄刀子 1
65-5 鉄 鏃 10
65-6 鉄製毛抜き 1
65-1～6は貝花尾1号墳
65-7 須恵器 5（高杯1 壺1 杯蓋1 平瓶1 瑞1） 貝花尾2号墳

**66 多々良遺跡**

66-1 青磁・白磁（破片） 10 平安時代

**67 蒲田遺跡**

67-1 先土器時代石器 40（細石核4 細石刃14 石核3 剥片7 ナイフ形石器5 台形石器5 彫器2） A・B・D・E区
67-2 打製石鏃 31 縄文時代早期末～中期 A・B・D・E区
67-3 石 斧 2 D・F区
67-4 扁平片刃石斧 1 E区
57-5 石庖丁 1 弥生時代 A区
67-6 磨製石鏃 2 A区2号土壙墓
67-7 紡錘車 1 蒲田2号墳盛土
67-8 筒形器台 1 弥生時代中期 A区溝状遺構
67-9 須恵器（杯蓋）2 古墳時代 D区2号住居址
67-10 土師器（埦）1 古墳時代 D区2号住居址
67-11 ミニチュア土器3 古墳時代 D区2号住居址
67-12 土師器（甑）1 古墳時代 D区6号住居址
67-13 高麗天目（破片） 2 歴史時代 D区

**68 蒲田水ヶ元遺跡**

68-1 縄文土器片 5 縄文時代後期（南福寺式）
68-2 土器片利用有孔円盤 1 縄文時代後期
68-3 方格規矩鏡片 1 弥生時代後期末
68-4 弥生土器（器台） 2 弥生時代後期
68-5 ガラス小玉 4 弥生時代後期末15号住居址
68-6 ガラス小玉 1 弥生時代後期末36号住居址

**69 和田部木原遺跡**

69-1 磨製石剣 1 弥生時代中期

**71 天神森古墳**

71-1 三角縁神獣鏡 1
71-2 盤龍鏡 1

**73 和白遺跡**

73-1 先土器時代石器（尖頭器） 1 下和白
73-2 石 斧 1 縄文時代 下和白
73-3 石 匙 1 縄文時代 下和白
73-4 玉 4連 飛山1号墳
73-5 滑石製模造品 4 飛山1号墳
73-6 鉄製刀子 1 飛山1号墳
73-7 鉄 鏃 1 飛山1号墳
73-8 須恵器（脚台付子持壺）1 高見2号墳
73-9 勾 玉 1 高見5号墳
73-10 杏 葉 1 猿ノ塚古墳
73-11 鉄 鏃 6 猿ノ塚古墳
73-12 金 環 3 猿ノ塚古墳
73-13 切子玉 1 宮前1号墳
73-14 青磁碗 1 第7号遺構
73-15 青磁碗 1 第10号遺構
73-16 青磁碗 1 高見2号墳

6 特設展開催にあたり、次の各機関、各氏の協力を得ました。

福岡県教育委員会文化課
九州歴史資料館
九州大学文学部考古学研究室
福岡市教育委員会文化課

森貞次郎（九州産業大学教授）
岡崎　敬（九州大学教授）
藤井　功（福岡県教育委員会文化課課長）
横田義章（九州歴史資料館）

○図録遺跡概要・展示パネル原稿執筆
栗原和彦（福岡県教育委員会文化課）
柳田康雄（　〃　）
島津義昭（熊本県教育委員会文化課）
大川　清（国士館大学教授）
橘　昌信（別府大学文学部助教授）
下條信行（九州大学文学部助手）
三島　格（福岡市教育委員会文化財専門調査員）
柳田純孝（福岡市教育委員会文化課）
塩屋勝利（　〃　）
折尾　学（　〃　）
山崎純男（　〃　）
柳沢一男（　〃　）
沢　皇臣（　〃　）
二宮忠司（　〃　）
山口譲治（　〃　）
横山邦継（　〃　）
力武卓治（　〃　）
井沢洋一（　〃　）
浜石哲也（　〃　）
池崎譲二（　〃　）
山崎龍男（　〃　）
和田むつみ
松浦宥一郎

○展示品写真撮影
林崎伊男（九州大学文学部技官）
表紙写真
石丸　洋（九州歴史資料館）
若八幡宮古墳出土鏡（9-1）、高崎2号墳出土品（18-1～10）
柳田純孝（福岡市教育委員会文化課）
四箇遺跡出土縄文土器、木器（37-1～22）
沢　皇臣（福岡市教育委員会文化課）
板付遺跡出土木器（60-31、34、36）
宮島成昭
広石古墳群出土土器（21-4、6、12、13、14、20）
福岡県教育委員会提供
若八幡宮古墳出土鉄鏃（9-5）、直刀・環頭大刀（9-2・3）
他は福岡市立歴史資料館撮影（後藤）

○遺跡写真提供
福岡県教育委員会文化課
若八幡宮古墳、高崎古墳群、大又遺跡、湯納遺跡・遺構写真
福岡市教育委員会文化課
上記以外の遺跡・遺構写真

○挿図トレース
岩崎二郎（九州大学大学院生）

○表紙デザイン
山田英史

本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1，2.5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭和52九複、第171号および第230号

**福岡平野の歴史**
**－緊急発掘された遺跡と遺物　原始時代～江戸時代－**
福岡市立歴史資料館図録第2集（特設展図録）
編集・発行　福岡市立歴史資料館 ©
〒810　福岡市中央区天神1丁目15番30号
Tel 741－5488
印刷　西日本新聞印刷

禁 無断転載・複製

図録編集　後藤　直

3084

# 緊急調査された遺跡

1 小葎遺跡
2 元寇防塁
a 今津地区
b 生の松原地区
c 西新地区
3 今山遺跡
4 今宿横浜遺跡
5 今宿松原遺跡
6 飯氏鏡原遺跡
7 飯氏馬場遺跡
8 丸隈山古墳
9 若八幡宮古墳
10 今宿大塚古墳
11 徳永古墳群
12 今宿古墳群
13 相原古墳群
14a 今宿小塚遺跡
b 今宿大塚南遺跡
c 今宿高田遺跡
15 草場古墳群
16 斜ヶ浦瓦窯址
17 大又遺跡

18 高崎古墳群
19 宮の前遺跡
20 湯納遺跡
29 野方塚原遺跡
30 戸切中原遺跡

# 分布図

66 多々良遺跡
67 蒲田遺跡
68 蒲田水ヶ元遺跡
69 和田部木原遺跡
70 名子道遺跡
71 天神森古墳
72 湯ヶ浦古墳群
73 和白遺跡
a 下和白地区
b 上和白地区
74 金印公園

56 弥永原遺跡
57 山陽新幹線路線内遺跡
a 弥永
b 五十川高木
c 津屋地区
d 多々良地区
e 名子地区
58 福岡城
59 菰牟田遺跡
60 板付遺跡
61 諸岡遺跡
62 持田ヶ浦古墳群
63 金隈遺跡
64 宝満尾遺跡
65 席田遺跡群

50 宝台遺跡
51 丸尾台遺跡
52 笹栗遺跡